
想いの続き

山口多聞

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

想いの続き

【Nコード】

N7790C

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

ハヤテのごとく！の世界から20年後。ハヤテとナギの子供たちである勇人と紫の物語。父親に似て多くの女子の心を掴む勇人。そんな彼が苦悩した末に選ぶのは・・・想いの行方の続編です。

旅立ち

「勇人！早く早く！」

青色の髪をツインテールに結んだ少女が、金髪の少年を呼ぶ。

「そんなに慌てるなよ、紫。」

金髪の、勇人と呼ばれた少年が、紫と呼んだ少女に追いつく。

「だって今日から白皇に入るんだよ、早く行きたいじゃん。」

少女が嬉しそうに答える。

二人の名前は三千院勇人と三千院紫。かの大富豪、三千院家の子供である。母親は現当主の三千院ナギ、父親はそのナギの執事を務めているハヤテだ。

二人は今日揃って、両親の母校であった白皇学院高等部に入学する。

そんな二人に、一人の少女が声を掛けた。

「おはようございます。勇人君、紫さん。」

「「おはよう真理奈。」」

二人の従姉妹である姫神真理奈だ。母親は三千院家のメイドをしているマリア。父親はハヤテの兄である姫神勝だ。彼女は勇人、紫

とは同い年である。つまり彼女も今年から高校生。その彼女も白皇学院の制服を着ている。

「さあ、真理奈も揃ったし、行こう。」

紫の掛け声とともに、3人は歩き始めた。

その3人を見つめる2人の人物がいた。

「3人とも行ったな。」

「ええ。」

「あの3人は一体どんな学園生活を送るんだろうな、ハヤテ？」

「さあ？僕にはわかりませんよ、ナギさん。けど、とにかく僕みたいなデンジャラスな学園生活にはなって欲しくないですよ。」

もうお分かりと思うが、勇人、紫の父親であるハヤテと母親のナギだ。

「けど、私が思うに多分ハヤテと同じことで悩むと思うな。」

ナギのその言葉に、ハヤテが疑問を持つ。

「僕と同じ事？」

「女性関係。」

その言葉に、ハヤテは苦笑しながら頷いた。

「確かに。」

「なんでもマリアが言うには真理奈は勇人が好きらしいぞ。」

息子の悩みの種になりそうな事だが、逆にナギはそれを見て楽しんでるような。まあ、人が他人の恋愛関係に興味を持つのと同じ心理だろう。

「そう言えば、こないだヒナギクさんと会ったときには、櫻ちゃんうぐくさも好きだと言っていましたよ。」

櫻は、かの有名な白皇の最強生徒会長であつた桂ヒナギクの娘だ。

「へえ、じゃああの二人による勇人争奪戦が起きるのかな？」

ナギが冗談のつもりで言うが、ハヤテには冗談とは思えなかった。

「それはそうと、紫はどうかかな？」

今度は娘に話題が移った。

「紫の方はどうでしょうね？あ、けど一哉君や白瀬君なんかお似合いだと思いますよ。」

一哉は一樹と咲夜の子供。白瀬は歩と宗谷の子供だ。二人ともそれなりに紫と付き合いがある。

「うむ。二人の恋模様は目が離せんな。」

「そうですね。けど、僕達はあくまで観客です。ここからの物語はあの子達が主役です。」

「そうだな。・・・がんばれよ、二人とも。」

二人の愛する子供たちに、心からエールを送るナギであった。

そして物語は始まる。

旅立ち（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

登校

勇人、紫、真理奈の3人は白皇学院までの道のりを歩いていく。かつてのナギやハヤテは自転車や車を使っていたが、彼らは別にそのような物を必要とはしなかった。3人ともそれだけ時間に余裕を持って出かけていたからだ。

この3人が歩いている姿は、かつてのハヤテ、ナギ、マリアが歩いているように見える。しかし、3人とも親の形質をそのまま受け継いでいるわけではない。

例えば勇人は、顔こそハヤテそっくりだが、髪の色はハヤテのような青色ではなく、母親のナギと同じ金髪だ。

同様に紫は顔はナギそっくりだが、髪の色は父親譲りの青色である。

真理奈の場合は外見は殆どマリアと同じ、瓜二つと言っても良い。ただし、瞳の色がマリアと違っていている。

そしてそれぞれ性格はというと、それはおいおいわかっていくだろう。

また、これは本人たちとはあまり関係ないが制服も違う。紫はかつてのナギと同じタイプの制服を着ているが、真理奈は上がセーラーで下がズボンのタイプの制服を着ている。これはハヤテ達が卒業して数年後に制定された物だ。

また、同様に勇人もネクタイとブレザーから、隠しボタンタイプの

新制服を着ている。

さて、3人とも何事もなく白皇学院に着いたわけだが、その直前に真理奈がある行動を取っている。

「あのさ真理奈、なんでそんな眼鏡をかけるの？」

勇人がこれまでに何度もした質問を今日もする。

実は彼女、2年程前から学校に行くときは眼鏡をするようになった。もちろん伊達眼鏡である。彼女は視力2.0なのだ。だから何故眼鏡をかけるのか勇人には全く理解できなかった。しかも、その眼鏡が可愛さの欠片もないものだから、余計変である。強いて言うなら、コミック8巻でマリアが白皇に潜入した時の物と似ている。

「いいじゃないですか、私の勝手です。」

彼女はそう言ってそれ以上何も言わない。これもいつもの事だ。

しかし、紫にはわかっていた。

（真理奈は勇人以外の人に素顔を見せたくないんだよ。）

女子の気持ちに気付きにくいのはハヤテと同じようだ。

そんな3人組に声がかかる。

「おはよう。勇人君に紫ちゃん。それに真理奈ちゃん。」

3人が振り返ると、見知った人物が立っていた。

「「「おはようございます。ヒナギクさん。」」」

桂ヒナギクだった。彼女は今、葛葉から理事長職を引き継いで、白皇学院で働いている。ちなみに、結婚して性が変わっていないのは、選択性夫婦別姓が認められているからだ。

その彼女、ピシッとスーツ姿で決めている。30代後半だというのに、その美しさは衰えというものを知らないらしい。もっとも、何故か勇人達の周りの大人はあまり外見的に歳を取っていない。

閑話休題。

「君達今日からうちの生徒だったわね。がんばってね。」

「「「はい、よろしくお願いします。」」」

と、そこでヒナギクがあることを思い出した。

「そうそう。櫻も飛び級してあなたたちの同級生になるから、よろしく頼むわよ。じゃあ、私行くから。」

そう言っで、ヒナギクは行ってしまった。

「けど櫻は何でたった一年だけの飛び級なんかしたんだろう?」

またも勇人が疑問を口にした。

桂櫻は勇人たちより1年年下である。今回勇人たちの学年に飛び級しても、たった1年分だけの飛び級である。わざわざそんなこと

する必要があるとは勇人には考えられなかった。

しかし、その話題を出すと明らかに真理奈は不快な顔をし、紫は呆れ顔になった。

「勇人君、紫さん。クラス分けが出ているはずですから、早く行きませんか？」

話題を変えるように真理奈が言った。

「あ、そうだね。じゃあ行こうか。」

真理奈の意見に、勇人は考えるのをやめた。そうすると、途端に真理奈の表情が良くなった。もともと、勇人は全く気付いていなかったが。それを見て、紫は呆れるを通り越して苦笑してしまった。

「紫も早く。」

「うん。全く、勇人もお父さんみたいにならなきゃいいけど。」

紫は誰にも聞こえない声で、そう呟いていた。

登校（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

クラス分け

3人がクラス分けの掲示板の前に来た時には、すでに同じような学生たちで溢れかえっていた。

「これじゃ見えませんね。」

「だね。」

なんとか見える場所がないか探す3人。

そんな3人に後ろから声かけられる。

「おはよう。」

3人が振り返ると、先ほど話題に上った人物、桂櫻がいた。

母親であるヒナギクそっくりの顔立ちだが、髪はロングでなくショート。また、余分な話だが、体の発育も良い。

「おはよう櫻。」

「おはようございます櫻さん。」

何気ないあいさつのようだが、紫はわかっていた。真理奈と櫻の二人の瞳が笑っていないことを。そして二人の視線が空中で火花を散らしているのを。

（やばい!!）

紫がちよつと視線をずらすと、ちょうど掲示板の人が少し減ったところであつた。これを使わないことは無い。

「勇人、掲示板見えるようになったみたいだから行こう!!」

「!.....」

紫は有無言わず、勇人を連れ出した。

これは、紫が真理奈と櫻の性格をしつかり心得ていたからだ。

実は真理奈と櫻は二人だけで会う分には良き先輩、良き後輩であり仲が良い。しかし、勇人の前や、勇人が話題に上ると途端に険悪な空気となる。それがエスカレートすると血を見る必要があるかもしれない。

それを早めに防ぐのは、関係者の中で暗黙の了解になっていた。

そう言うわけで、この時も二人の喧嘩は勇人がいなくなったため、うやむやの内に終わることとなる、

一方、紫と勇人はそのまま掲示板の前にやってきた。

「私たちのクラスどこ?」

「綾崎だから、上の方にあるはずだぞ。」

二人は、公には三千院ではなく、綾崎の性を使っている。これは万が一に備えてハヤテとナギがそうするよう言ったのだ。

高等部1年生のクラスは30人学級が6クラスである。つまりAからFまでだ。

二人はそれを一つずつ見ていく。

そして、まもなく勇人が見つけた。

「あ、あつた。B組だ。紫も同じだ。」

勇人に言われ、紫もB組の欄をみる。確かに、綾崎勇人と綾崎紫の名前が並んでいる。

作者注 実際は双子が一緒のクラスになる確率は低いです。

自分たちの名前を確認した二人は、今度は同じクラスの人間がどんな人物がいるかを探す。

そして、紫は櫻と真理奈の二人が同じクラスであることに愕然とした。

（二人とも私たちと同じクラスか……………苦労しそう。）

紫は自分の学生生活は前途多難であると確信した。

一方、その苦労の火種になるであろう勇人は、ある名前に注目していた。

「瀬川美沙……………か。」

勇人はハヤテ達の卒業アルバムを何度か見せてもらっている。そして、彼は同級生の中に瀬川泉という笑顔が良く似合う女子がいたのを覚えている。

確かその人物は白皇卒業後短期大学に進学し、そのあと結婚したが、相手は子供が生まれて直ぐに事故で他界し、今は母子家庭であるという話を、ハヤテとナギが話しているのを勇人は聞いたばかりであった。

（まさか？）

そういう直感というのは、結構当たることが多い。

案の定後ろから声が掛けられた。

「君は綾崎勇人君かな？」

勇人が声のした方に顔を向けると、そこにはあの瀬川泉そっくりの女子が立っていた。髪形は少し違うが、その笑顔はまぎれもなく、あのアルバムで見た瀬川泉だ。

「君は、もしかして瀬川美沙さん？」

「うん。確か同じクラスだったよね。よろしくね、勇人君。」

美沙が手を差し出してきた。直ぐに勇人も自分の手を差し出して握手する。

「あ、よろしく。」

しかし、この行動がまずかった。なぜなら、ちょうどそこに頭を冷やした真理奈と櫻がやってきたからだ。

そして勇人が美沙と握手しているシーンを目の当たりにして、二人の目が点になる。

「「な！！」」

（勇人君が女子と手を繋いでる！！）

（勇人君が、知らない女の子と！！）

どこをどうしたらそう考えられるかわからないが、何故か二人とも握手しているのを手を繋いでいると勘違いした。行動としては同じだが、意味が全然違う。

そして、二人からは怒りの炎とも言えるダークサイドが広がる。

その様子に回りにいた人間は1m下がる。

そして、その時まで掲示板を見ていた紫もそれに気付いた。

（げ！！黒真理奈と黒櫻が出現している。勇人何かやらかしたわね！！）

慌てて移動しようとするが、人が多くて思うように進めない。

（まずい。まずい！！）

クラス分け（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、瀬川泉の娘美沙の名前は美希と理沙を合わせた名前です。

朝の教室へ

勇人は美沙と手を離れたところで、ようやく黒真理奈と黒櫻の存在に気付いた。

（げ！！二人にダークサイドが！！まさかこの娘と握手したのを見て怒ったか？）

勇人は二人がどうして怒ったかまで見抜いていた。父親であるハヤテではあまり考えられなかったことだ。

実は、勇人はハヤテほど女心に疎いわけではない。子供のころから母親のナギやヒナギク、マリアらに、父親の天然ジゴロぶりはそれこそ耳にタコが出来るほど聞いてきた。また、父親のハヤテからも「女の子の気持ちを読み取るよう努力しなさい」とこれまた何度も注意を受けた。そういうわけで、彼はそれなりに（ハヤテよりは）乙女心をわかることが出来る。

では何故真理奈の眼鏡のことや、櫻の飛び級のことを疑問にしたりしたか？これはただ単に予感的にわかるが、確信がもてないから本人や紫の前で言ってみただけの話だ。

まあ、女の子はストレートにそんなことを好きな男の子の前で言うわけ無いという、根本的な考えが抜けていたのは、やはりハヤテの血を継いでいる由縁かもしれない。

それはともかくとして、勇人は二人の怒りの炎を消火する必要があった。でないと、彼にとって不幸な結果となる。

「ちょ、ちょっと二人とも落ち着いて！！僕とこの娘が握手したのが、そんなに気にいらなかったの！？」

握手という単語を勇人が言うと、途端に二人の周りのダークサイドが消え去り、二人の乙女は元に戻った。

「なんだ。握手だったの。良かった。」

「心配して損しました。」

二人がいつもどおりに戻って、勇人もひとまず安心である。ちなみに、勇人はちゃんと握手と言った。これも、ナギやハヤテからよく言葉不足で誤解したという昔話を思い出した結果である。

一方、その勇人にとって寿命の縮まる駆け引きを、美沙は何がなんだかわからない様子で見っていた。

ただ、一応。

（この二人の娘は勇人君が好きなのかな？）

とは思っていた。さすが女の子。

「で、勇人君。その娘は誰よ？」

櫻が聞いてきた。

「あ、この人は瀬川美沙さんって言って、同じクラスの人。で、お母さんは母さんと父さんの同級生だった瀬川泉さんだよね？」

まだ確認は取っていなかったので、最後は疑問形であったが、それは大丈夫だったようだ。

美沙は先ほどと同じように笑顔で言う。

「そう。で、勇人君。そっちの可愛い二人は誰かな？」

その言葉に、勇人は美沙に二人を紹介する。

「この二人は僕の友達の姫神真理奈と桂櫻。」

「よろしく。」

「よろしくね。真理奈ちゃん。櫻ちゃん。」

そして勇人の時と同じように、真理奈と櫻も美沙と握手した。

そこへ、紫がやってきた。

「ようやくついた。て、よかった、二人とも元に戻ってる。」

黒い乙女が消え去って、彼女も一安心である。

「紫、紹介するよ。同じクラスの瀬川美沙さん。美沙さん、僕の双子の妹の紫です。」

勇人が互いを紹介する。

「はじめまして、瀬川美沙よ、紫ちゃん。」

「私は綾崎紫。よろしく。」

この二人もまた握手した。

と、そこで真理奈が腕時計を見て言った。

「さ、みなさん。そろそろ教室へ行かないと。」

そう言われ、勇人も時計をしてみる。時刻は8時20分。白皇学院の朝のホームルームが始まるのは8時30分だ。ギリギリではないが、余裕もそんなにない。

というわけで、全員教室へ移動する。

8時25分。教室に入った。既に8割がたの生徒が揃っていた。

5人は張り出されていた自分たちの席に着く。4月の最初の席は大抵あいいうえお順だ。というわけで、あ行のハヤテは窓側の一番前、その後ろに紫がついた以外はそれぞれバラバラだ。

と、ここで勇人はある事に気付いた。

（そういえば、担任の名前見てなかったな。それに、サ行より下の名前も。）

美沙と話しているうちにすっかり忘れてしまっていた。

まあ名前がわかって、どんな人物かは教師については来るまでわからないのでどうしようもない。しかし、生徒の名前は紫が見ているかもしれない。そう思って、勇人は紫に聞いてみる事にした。

ついでに教師のことも聞いておく。

「なあ紫。他に誰か顔見知りいたか？それと教師の名前は誰だった？」

「いや。見てない。あと教師の名前は見ている暇が無かった。」

「どうやら、顔見知りでそろったのは真理奈と櫻だけのようだ。（美沙は初対面で除く）」

「まあそうそう偶然が重なることもないか。」

しかし、最後の最後に待っていたものがあつた。

2分後、教師が入ってきた。40台前後と見える女性教師だ。そして、その顔を勇人や紫は知っていた。

「今日から皆の担任になった桂雪路よ！！一年間よろしくね！！」

相変わらずハイテンションの教師に、姪の櫻、そして顔見知りである他の3人も苦笑いした。

朝の教室へ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

この作品では、様々なオリジナルキャラクターが出てきます。もちろん、歳をとってはいますが、原作のキャラクターも登場します。

もしかしたら原作のイメージを壊してしまうかもしれませんが、ご容赦ください。

担任

学校初日のこの日は、主にオリエンテーションなので、授業は無い。そのため、勇人達は一日中雪路と一緒にいることとなった。

「まさか雪路伯母さんが私たちの担任とは思わなかったわ。」

休み時間、雪路に向かって櫻が発した第一声がこれである。

「櫻、そんなつれない態度取らないでよ。」

冷たい態度を取る姪に、雪路が笑いながら言う。

「けど日本史が現代史専攻にしちゃえば、顔合わせなくてもいいけど。」

紫が言う。

この時代、教育要綱の改定で、歴史の必須は日本史、世界史、現代史の3つの内の一つだけになっている。この内雪路の担当は世界史だから、それさえ取らなければ朝と帰り以外顔を合わせず済む。

この言葉を、馬鹿にする発言と雪路は受け取ったらしい。

「うるさい！うるさい！先生を馬鹿にするな！！」

まったくこの先生は、といわんばかりの呆れ顔になる5人。ちなみに、今ここにいるのは勇人、紫、真理奈、櫻、美沙に雪路の6人。

初対面である美沙も呆れ顔である。

「ねえ勇人君。本当にこの先生、お母さんが言ってたような困った人だね。」

「でしょ。」

コソコソ二人で話す。それを、雪路は目敏く見つける。

「そこ！何かしら！？」

「「いいえ、何も！」」

（（地獄耳だな。））

心の中で呟く二人。

（そういえば昔、突然自分の話を聞きつけ草むらから現れたとか父さんが言っていたな・・・）

父親から聞いた昔話を思い出す勇人。

一方、雪路は急に態度を変えた。4人が警戒態勢を取る。

「まあそれはそうとして。あんた達、私に・・・・・・・・」「お金なら貸しません。」「」

きつぱりと言う4人。

「何よ！顔見知りなんだから良いじゃない！！」

（（（生徒から金借りるその神経がまず間違っている！！）（（（

4人とも心の中でそう思った。

「とにかく貸せません！！」

再度強く言う勇人。しかし。

「ねえそんな事言わずにさ、一万で良いからさ。」

なおも食い下がる雪路。

しつこいので、櫻は強権を発動した。

「伯母さん。お母さんに言うわよ！」

「う！！」

さすがにこう言われては雪路も引き下がるしかない。ヒナギクは理事長であるから、雪路の給料を簡単に減俸にできる。そして彼女は雪路が他人からお金を借りる事には容赦しない。特に、それが生徒（姪や知り合いの子供）相手ならなおさらだ。

お金が借りられないと悟った雪路は完全に諦め、さっきまでの元気は完全になくなっていた。

20年前と全く変わっていない雪路であった。

そんなこんなで、一日は終わり。勇人と紫の2人はすぐに下校せ

ず、部活動を見てまわる事にした。この二人だけなのは、櫻は中学以来剣道部であり、真理奈はすでに弓道部に入ることを決めていて既に部活動に行ってしまったからだ。また、美沙は帰宅部、ようは部活動をする気なしなので直ぐに帰ってしまった。

2人は学院内移動用の路面電車に乗り込んだ。

その車内で、またも顔なじみの人物と会う。

「あれ、澄香ちゃんに光くん。」

「「勇人（様）に紫！」」^{さん}

橘ワタルと伊澄の子供である澄香と光だった。

光と澄香は年子で、光が中学3年生、澄香が2年生である。

「あそうか、二人とも白皇だったんだ。」

慌てて思い出す勇人。

「お二人にこんな所でお会いするとは思いませんでした。」

母親と同じ口調で喋る澄香。ただし、そのスピードは伊澄の2倍くらい速い。つまり、常人レベルである。

実は、伊澄と違って澄香はおっとりとしていないし、方向音痴でもない。外見は母親よりも祖母の初穂に近い。

「けど二人しているってことは、また澄香が光のお守りしてるん

だな？」

紫が少し意地悪に言う。

「うるさい！！」

顔を赤くして光が怒る。

お守りとは？実は口調や性格はワタル似ではあるが、光は母親の形質を引いて方向音痴である。そのため、妹の澄香に関わらず、誰かに案内してもらわないと直ぐに迷う。だから、よく澄香がついていてやる。

「俺だつて好きでこうしてもらつてるわけじゃない！！地図があればいける！！」

そう、光は地図さえあればいける。第一、電波技術が進んだこの時代である、腕時計型電話にはGPSによるナビゲーションシステムがついていて、どんな方向音痴でも確実に目的地に着ける。だが、彼はそうはいかないのだ。

「父さんが。」

父親のワタルは結構厳しい。

「自力で家位には帰って来い！」

の一言で、中々ナビ付きの電話は買ってくれない。そのワタルは、三千院家や鷺ノ宮家の援助もあって、着々と橘グループを再建しつつあり、今は世界中を飛び回っている。

「もうその話はやめてくれ。で、二人はどこにいくのさ?」

光が話題を変えた。

「部活動を見に行くんだ。」

勇人が言う。

「だったら、俺の書道部に!!」

「いいえ、私の漫画研究部に!!」

二人が勧誘を始めた。

ちなみに、何故光が書道部かというと、彼は実は父親と違ってあまりアニメや漫画に興味を持っていない。子供のころから父親に見せられ過ぎたのが、嫌いになった要因らしい。そのため、母親から習った書道や茶道の方が好きなのである。

一方の澄香は別にワタルが見せたわけでもないのにアニメや漫画が大好きだ。将来は声優になりたいと繰り返し言っている。

「まあ考えておくよ。」

二人の熱心な勧誘に閉口する勇人。すると、ちょうど良く電車は電停に止まった。

「じゃあ僕達はこれで。」

そして紫を連れて降りた。

「まったく、あの二人は。」

「まあまあそう言わず。行こうよ勇人。」

「ああ。」

担任（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

下校

部活を一通り見終わると、勇人と紫の二人は下校した。

だが、二人はなんだかんだ言って良家の子供である。かつてナギが幾度も命を狙われていたように二人も何度か命を狙われている。

この日も、影から彼らを狙う怪しい影が。

その暗殺者は、二人の通学路沿いにあるアパートからライフル銃を使って待ち構えていた。

「来た!!」

ターゲットの二人が歩いてきた。ライフルのスコープを覗き込む暗殺者。

「相手は所詮高校生。鉛弾を撃ち込めばそれで決まりよ。」

任務は楽勝と思っていた。

「子供を撃つのはちょっと気が引けるが、仕事だからな。」

暗殺者は引き金に手を掛ける。

だが、次の瞬間スコープが割れ、さらに銃にも凄まじい衝撃が走る。暗殺者もその衝撃で後ろに倒れる。

「うわ!!」

何かなんだかわからないうちに、暗殺は失敗していた。

「まったく、馬鹿なことをやる大人が多くて困るよ。」

勇人が手の上で石を持ちながら言った。

「けど勇人また腕上げたね。」

紫が言う。勇人はゆうに50mは離れている場所のライフルを一瞬の内に見つけ、そして石を投げて破壊していた。さすがハヤテの息子だけある。

そして紫にとっては、驚くに値しない、もはや見慣れた光景だ。

そんなこんなで二人は三千院家に帰ってきた。

「「ただいま。」」

「おかえりなさい。二人とも。」

そう言って。メイド姿のマリアが二人を出迎える。

真理奈の母親のマリアも今や40の声を聞こうとしている。なのに、外見はどう見ても17歳当時のままだ。多分真理奈と並んだら姉妹と間違われてもおかしくない。

もつとも、そのように歳と外見が不相応なのは何もマリアだけではないが。

「真理奈はまだ部活かしら？」

「はい。」

マリアの質問に二人揃って答える。

今まで毎日3人は一緒に帰って来ていた。中学まで勇人も紫も一応部活には所属していた。勇人は野球部、紫は陸上部であった。

二人はハヤテの血を継いでいるのか運動は得意だ。ただし、常人のレベルから見れば出来すぎている。

何せ勇人は中3でハンドボール投げの記録が45mだったし、紫は同じ歳で50mを5秒で走っていた。

紫は母親のナギに外見はそっくりだが、上記の様に運動は大得意だ。これはハヤテが小さいころから外で遊ばせていたのが影響している。ちなみに、同時期にナギは二人に12時間ぶつ通しでアニメを見せようとしてハヤテとマリア、そしてハヤテの兄の勝から猛反発を受けた。

実際、小さい子供にテレビを見せすぎは危険なので真似してはい

けない。

ところで、マリアは今も三千院家で働いているわけではないが、屋敷に住んでいるわけではない。しかし、三千院家の敷地内に住んでいる。

実は、マリアはナギに勧められて、空いていた別館に家族で住んでいる。もっとも、食事は2家族と一緒に食べると言うように、屋敷と言うよりは部屋感覚である。

そういうわけであるから、同い年である勇人、紫、真理奈は兄弟の様な感覚で育ってきた。そして、それが真理奈に「私は勇人君のことを一番知っている！！」という自負心を持たせているわけであるが、それはまあ別の話だ。

話を元に戻す。

「夕食まではまだ時間があるので、取りあえず部屋に戻って荷物を置いて勉強でもしていて下さい。」

マリアに言われ、二人は自分の部屋に戻る。

さて、母親のナギは中学生の歳で高校レベルの勉強が出来ていたが、この二人はというと、やはり良くてできる。もちろん、三千院家の子供として、小さいころからそれなりの教育を施されてはいるが、それを省いても良くてできる。ただし、ナギが万能であったのに対し、二人には弱点があった。

まず勇人は数学が苦手であった。ただし、あくまでナギや紫と比較したらの話で、普通から見れば良くてできる。ただどんなに本人が

努力しても伸び悩んでいる。これはもしかしたらハヤテの不幸体質を少しばかり含んでいるかもしれない。

一方の紫は美術がだめであつた。これは高校に進級すればもはや成績には響かないが、ただし本人は相当に気にしている。母親のナギが漫画を描くのが好きであつたから、自分はどうして出来ないと思つてしまつらしい。この紫の弱点にはハヤテもナギも頭を捻つた。だが、その反動かはわからないが、文章力はすごい。現に国語の授業で簡単な童話を作る事があつたが、その時はクラス全員が感動するほどの作品を書き上げている。

二人は部屋に入つたが、紫は鞆を置き替えると、直ぐに部屋から出た。そして隣の勇人の部屋の扉をノックした。

下校（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

お互いの想い

紫がノックすると、すぐに勇人が返事をした。

「どうぞ。」

紫は部屋の中へ入る。

「勇人。」

「何紫？勉強を聞きに来た。なんて事はないはずだよな。」

「もちろんだ。実は勇人に聞きたいことがあったんだ。」

「え！聞きたいこと？なんで帰る途中に言わないんだよ？」

帰ってくる途中の二人は他愛の無い雑談ばかりしていた。何かを聞くチャンスはいくらでもあった。

「二人だけで他人に聞かれないことだよ。勇人、単刀直入に聞きたい。」

「！？」

「お前。真理奈か櫻かどっちが好きだ？」

紫はいきなりとんでもないことを聞いてきた。

「はあ！！なんでそんなこと聞くんだよ！？」

「お前のためだ。勇人は知ってるんでしょ、二人がお前を好きなのと?」

凶星である。あの僅かな時間で見抜くとはさすがに妹だけある。

「へえ。やるじゃん。ああ、そうだよ。二人が僕のことを好きだったことは前々から感じていた。」

さらりと言う勇人。

「だったらなんで二人に言わないんだ? 勇人だって二人のこと嫌いじゃないだろ?」

紫としては、早く勇人に決めてもらって、二人の争いを止めてもらいたい。そういう気持ちもあった。

「あのね。そう簡単に決められるわけ無いじゃないか! 安易にどうこうできる事柄じゃないぞ!! どっかに決めればどっかを泣かすことになるし。だいたいそれは僕の問題だ。妹にそこまで介入される筋合い無いぞ!!」

確かにプライベートな事柄であるから、あまり他人にいじられたくはない。

「私は勇人のために言っているんだぞ。いつまでも優柔不断な態度を取っていると、お父さんみたいなことになるぞ!!」

二人は昔から両親の昔話を結構聞いている。その中で、両親が結婚することを決めた事件のことも聞いていた。ナギが暗殺者に狙わ

れ、ハヤテがそれを庇って、三途の川を渡りそうになるくらいの重傷を負った事件である。

その事件の原因とも言えたのが、両親が互いの気持ちをしっかり理解していなかったことである。

「父さんのことならわかってるよ。・・・正直、二人ともかわいくて、それなりに性格も良くて、好きになれない要素なんかないよ。けどさ、自分自身そこまで好きってわけじゃないし。友達としては好きだけど、異性として好きってわけじゃないし。そんないい加減な気持ちで好きだなんて言えるか？」

「・・・じゃあ勇人は特定の女子で好きっていう人はいないんだ。」

「まあ端的に言うとなんかそうなるかな。」

「わかった。私はこれ以上この問題には首を突っ込まない。けど、二人のどちらかにするなら早く決めてくれ、このままの状況が続くと私が持たない。」

その言葉に、勇人は苦笑する。

「確かにそうかもな。」

「けど勇人、笑っていられるのも今の内だぞ。お前を好きな女は二人以外にもいるんだぞ。」

この言葉には勇人も驚いた。

「え！？そうだったけ？」

その言葉に、紫は少し呆れる。

「お前鋭いか、鈍感がよくわからないな。」

「うるさい。」

実際、勇人は鈍感ではない。ただし、紫ほど鋭くも無い。何回か相手と会わないとその心は理解できないのが勇人なのだ。

「まあがんばれよ。」

その言葉に、少しばかり勇人は苛立ちを覚える。このままでは紫のペースだ。何か反撃しなければ。

「そういえばお前はとうなんだよ？一哉に光。それに白瀬との仲はどうなんだよ？」

「な！！！」

その途端紫の顔が真っ赤になる。

「え！？いや、その。そりゃあみんないやつだけど、まだそんな誰かと付きあう気は・・・。」

「何だよ！僕と同じじゃないか！」

「うるさい……！」

そしてしばし二人とも沈黙。

だが、しばらくすると二人とも笑い出した。

「フフフ・・・」

「ハハハ・・・」

そして笑い終わると、お互いを正面から見据える。

「まあお互いがんばろうぜ。」

「ああ。」

二人がお互いの恋愛事情を励ましあったちょうどその時。

「勇人君。夕食のお時間です。」

マリアが呼びに来た。

お互いの想い（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

乙女たちの想い

「ねえねえお母さん。今日ね、綾崎勇人君と会ったよ。」

夕食の席で、瀬川美沙は母親である瀬川泉に向かって言った。

「そう言えば勇人君は確か美沙ちゃんと同い年だったね。」

かつての友達と同じように、娘にもちゃんをつける泉。

短大卒業後結婚した彼女は、ナギが二人を生んだ同じ年に美沙を生んだが、その直後夫が事故で急死するという不幸が起きた。

しかしそれにもめげることなく、彼女は一人で美沙を育てていた。ちなみにそんな彼女の職業は絵本作家である。

高校のころと変わることの無い笑顔。昔の事を思い出し、その笑顔がより明るいものになる。

「で、勇人君はどんな子だった？」

泉が聞く。泉は以前三千院家を尋ねたときに勇人と会ってはいる。もつともそれは10ウン年も前のことだ。母子家庭になって以降は、娘を育てるのに必死で、中々会う機会がなかった。同窓会にも出れないほどであった。生活に余裕が出来たのはごく最近の事だ。

「お母さんのアルバムで見たハヤテっていう人にそっくりだったよ。ただ髪の色は青じゃなくて金だったけど。」

そう言われ、勇人のことを少し思い出す。

「そつえばそうだった気がする。で、性格はどうだった？」

「うーん。初めて会ったばかりでまだそんなにわからないけど、やさしそうだったよ。もしかしたらお母さんみたいに好きになっちゃうかも。」

その言葉に、泉はアドバイスを与える。

「好きになったら早く言ったほうが良いよ。じゃないと取られちゃうぞ。」

「確かに、なんか周りに女の子多かったような。」

その言葉に、泉は苦笑し、心の中でこう思った。

（さすがハヤ太君の息子だね。けど美沙ちゃんが本当に好きになったら応援してあげないといけないな。）

その様子に、美沙は疑問に思った。

「お母さんどうしたの？」

あわてて我に帰る泉。

「あ！ごめん。で、他に何かあった？」

「うん。それから……」

この日の瀬川家の食卓は、笑い声が絶えなかった。

ちょうど同じころ、桂家では。

「櫻、そういえば勇人君がどうして飛び級したかって聞いてたわよ。」

家族3人で夕食を取っている最中、ヒナギクが朝のことを思い出して言った。

「え！？勇人君が？」

「そう。彼もハヤテ君みたいに鈍感そうだからね。そういうこと聞いてきてもおかしくないけど。」

そういうヒナギクはもちろん娘の魂胆はしっかりとわかっている。

「ま、彼がハヤテ君みたいだったら、櫻、積極的にいかないと誰かに取られちゃうわよ。」

大胆な事をいうヒナギク。その顔は薄ら笑いしている。

「うー!!」

母親からの冷やかしに、言葉が詰まる櫻。

「ヒナギクさん。そんなこと言っちゃ可哀想ですよ。櫻が困ってますよ。」

その様子を見ていた父親の健二が助け舟を出した。

「健二君。私は事実を言っただけですよ。恋愛だって自分の力でなんとかしないといけないのよ。じゃないと、私みたいに逃げられちゃうわ。」

ヒナギクは櫻に自分が味わった初恋の苦い経験をして欲しくないという気持ちがあった。

「お母さんありがとう。けど、真理奈さんは手ごわいな。それに、他にも勇人君を好きそうな人もいるし。」

真理奈は櫻最大の恋のライバルである。また、彼女は美沙や澄香のことも警戒していた。

「それに、勇人君がどう思っているかも重要ですよ。」

健二が言う。彼は今は三千院家執事補兼SP隊長をやっている。つまり、ハヤテはもちろんそれなりに勇人とも会っている。

「どういう意味よ健二君？」

「そのままです。もしかしたら勇人君もハヤテさんと同じかもしれませんよ。まだ誰とも付き合う気がないかもしれません。彼の場合、相手のことを思いやるタイプですし。」

さすがに男だけある。それなりにわかっている。

「だったらなおさらよ！！がんばらなくちゃ。」

強硬姿勢を崩さないヒナギクに、健二はさとう言つ。

「ヒナギクさん。無理に圧力をかけると逆効果になるかもしれません。男の恋心も意外と複雑なんです。けど、僕だって父親ですから、櫻の恋が実るよう祈ってはいますよ。まあそういうわけですから、櫻。」

「はい？」

「お父さんもお母さんも応援していますから。悔いのないようにやりなさい。恋を成就させるのは、僕達ではなく櫻なんですから。」

健二からの精一杯の励ましの言葉である。

「うん。ありがとう、お母さん。お父さん。」

こうして桂家の夜は更けていく。

乙女たちの想い（後書き）

御意見・御評価・御批判、お待ちしております。

来客

勇者達が白皇学院に入学してから一ヶ月経ったゴールデンウィーク。

この日、三千院家を訪ねて来た家族があった。

「ナギ、ハヤテ！遊びに来たで！！」

ハヤテキャラで関西弁を喋る女性は数えるほどしかない。咲夜だ。その咲夜が夫の一樹と、3人の子供を連れて遊びに来ていた。その5人をハヤテが出迎える。

「お待ちしていました。咲夜さんに一樹君。それに、一哉君に桜花ちゃんに夕貴ちゃんも。」

「おお、ハヤテ。久しぶり。」

「お久しぶりですハヤテさん。」

型通りの挨拶をする3人。

一樹は咲夜と付き合いだした後、めでたく愛沢家に婿入りし、今は愛沢一樹を名乗っている。息子の一哉は中学3年生で白皇学院中等部、二人の娘は桜花が小等部1年生、夕貴が幼稚園の年中である。

「ところでナギは？それに伊澄にワタルはまだ着いとらんのか？」

咲夜が聞く。

「伊澄さんとワタル君は昼過ぎに来るそうです。ナギさんは今、厨房でマリアさんを手伝っています。」

「あいつの料理食われるんかい？胃薬が必要になるな。」

咲夜が軽く笑いながら冗談を言う。もちろん、ハヤテもそれに笑って答える。

「大丈夫ですよ。20年前じゃありませんし。」

その言葉に、一樹を含む3人が笑う。

ちなみに、現在ナギは料理は出来ないことは無い。さすがにマリアやハヤテほどではないが、二人からしっかり学んだこともあり、それなりに出来るようにはなった。

「ハヤテさん。勇人と紫は？」

今度は一哉が聞いてきた。

「ああ、あの二人なら……………」

同時刻、裏庭

「疾風の如く!!」

勇人が父親の必殺技、疾風の如くに挑んでいた。しかし。

「うーん。だめだ、どうしても上手くいかないや・・・」

勇人はまだこの技を取得してはいなかった。

傍らにいた紫がそれを見て言う。

「そう簡単に来るわけ無いだろ。お父さんだって完成させるのに1年掛かったって言ってたし。」

「まあそうだけど。」

勇人は一応そう言うが、やはり出来ないのは少し悔しいようだ。ところで、執事でもない勇人が何故必殺技を見につけようとしているかというと、これは単に父親に追いつきたいという向上心からだ。

ちなみに、紫も必殺技を練習中であるが、詳しいことはまた追々紹介することとなるだろう。

そんな二人のところへ、一哉達がやって来た。

「勇人!!紫!!」

「「勇人兄ちゃん!!」」

「おお、一哉に桜花に夕貴。」

「三人ともいらっしやい。」

二人は練習を止め、三人の方に向かう。

すると、桜花と夕貴が勇人の元に駆け寄った。

「勇人兄ちゃん！ゲームしようよ！」

「ええ！外で遊ぼうよ！！」

自分の希望を一気に言い始めた。これでは勇人も困ってしまう。ちなみに、二人は関西弁ではなく標準語で喋る。

「わあ！二人ともそんないつぺんに言わないで！！」

二人にとって勇人は頼りがいのあるお兄さんなのだ。ちなみに、勇人も面倒見が良いので、小さい子供から頼られるのは嫌いではない。

勇人がそうあるのに対し、桜花と夕貴はあまり一哉をお兄さん扱いしていない。兄弟であるというのも一因だが、他に頼れる兄（勇人）が存在しているからかもしれない。

一方、その頼られていない兄である一哉は紫と話をしていた。

「ははは、勇人は頼りにされて良いな。」

一哉が呟くように言う。彼は普通すぎる人間であつた父親の形質をかなり引いている。容姿なんかそのままだ。ただし、眼鏡は掛け

ていないが。

「何言ってるのだ。お前だって結構頼りがいがあると思うぞ。」

紫が慰めのつもりで言う。

「そ、そうかな……」

紫から優しい言葉を掛けられ、一哉の頬が少し赤くなる。

その様子を他の3人はしっかりと見ていた。

「一哉って本当にわかりやすいね。かっこわる。」

「だから便り無いんだって。救いようが無いね。」

ボロクソに言いまくる桜花と夕貴。

ここまで来ると、勇人は少しばかり同情してしまう。

（一哉のやつここまで言われてるなんて、かわいそうに。けど、紫のやつちゃんと一哉のことわかっているのかな？）

そんなことを考えていると、二人の少女が勇人の服の袖を引っ張る。

「一哉なんかどうでもいいや。ねえ遊ぼうよ！」

「そうそう！」

「はいはい。」

結局、勇人は二人の少女の子守りをする事になった。

この二人の特徴は、はっきり言って母親似である。ただし、妹の夕貴は眼鏡をかけているし、髪形は二人とも母親とは違う。性格も、二人も漫才にはあまり興味は無い。姉の桜花はゲーム大好き、如何にも最近の子供である。対照的に、夕貴はゲームよりも外で遊ぶタイプだ。

ただし、愛沢兄弟も只者ではない。それについてはまたの機会に触れる事にする。

来客（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしております。

複雑な事情

ハヤテとナギは咲夜と一樹の二人とお喋りを楽しんでいた。

「……んでハヤテはな、うちにメイド服を着せようとしたんや。」

「何言ってるんですか!!」

「ハヤテ、お前ってやつは!」

「ハヤテさんは意外と……」

「意外と何ですか一樹君!!それにナギさん。決して僕はやましいつもりで言っただけではありません!!」

昔話に花が咲く。

「それにしても伊澄とワタルは少し遅いんとちゃうか?」

咲夜がふとそんなことを言った。

時刻は昼すぎである。

「そういえばそうですね。」

「大方迷ってるんじゃないか?」

「まさか、ワタル君だってついてるんだし。」

ハヤテがそう言った時。

ドスン！！

何かが落下したような音が聞こえて来た。

「なんや？」

「何かが落ちたようですね。小説部屋の方からしたみたいです。」

小説部屋というのは、本好きな紫の為に、ゲーム部屋のうちの一つを潰して新たに作った書庫だ。もつとも、実際の所は小説だけでなく、未だに漫画を買い続けているナギの漫画も置いてあるが。

「僕心配なので見てきます。」

「あ、うちも行く！」

「私も！」

「僕も！」

こうして4人とも小説部屋へと向かった。

その途中で、ゲーム部屋でゲームをしていた勇人たちが合流してきた。

「父さん！何か小説部屋で音がしたけど？」

「ああ。今から見に行く所だ。」

さらにその途中で、台所から音を聞きつけたマリアに真理奈、も合流して、殆ど全ての人間で見に行くこととなった。

小説部屋に着くと、ハヤテが扉を開けた。

開けると、全員がその光景に啞然とした。

「「「「「なんだこりや！！？」「」「」「」

彼らの目に入ってきた光景とは。本棚全てが倒れ、中の本が辺り一面に広がり、床が本の海状態になっている様子だった。

「何が起きたんだ？」

まるで地震の後の光景でも見ているようである。

全員が開いた口が塞がらない状況下で、一哉が気付いた。

「声がする。」

「「「「「え！！」「」「」

彼の言葉に、他の人間も耳をこらす。すると、確かに人のうめき声みたいな物が微かに聞こえる。

「こつちだ！！」

一哉が音のした方向に向かう。

本の海を書き分けながら進むと、手が本の間から出ているのが見えた。

「大丈夫ですか？」

ハヤテがその手を本の中から引つ張り出した。すると、ワタルが出てきた。

「ワタル君！！」

「お前一体何をやっているのだ？何で本の中に埋もれていたのだ？」
追いついたナギが聞いてみる。

「いや、それがな……………」

ワタルの言う所によると、今日橘家から三千院家に移動する際、息子の光が先日鷲ノ宮家の書庫で読んできたテレポートに似た新しい術を使つて見ることにした。

ここで付け加えておくが、実は伊澄の妖術を引き継いだのは娘ではなく息子の光である。これには当初は母の伊澄達も面食らったらしいが、銀華の「使える人間なら男だろうとかまわん！！」ということ、彼は伊澄から色々な術を習っているわけである。

だが今回は自分で見つけてきた術であつた。ただ今までは一度も失敗が無かつたから、ワタルたちも任せたらしいのだが、どうやら何か不都合があつたらしく、当初予想していた庭ではなく小説部屋に飛んでしまい、しかもエネルギーの負荷があつたのか、本棚が一

斉に倒れたらしい。

とにかく、残った伊澄に光も本の海から救助された。

ところが、澄香が中々見つからない。

「おかしいな？」

そしてそれから20分後、ようやく部屋の隅で、本の中に埋もれた澄香を勇人が発見した。

「大丈夫？澄香ちゃん？」

勇人はやさしく彼女を本の中から助け出した。

「あ、はい。ありがとうございます。」

「怪我はない？」

「はい。御迷惑をおかけしてすみません。」

澄香はぺこっと頭を下げた。

「なに言ってるの。困った時はお互い様でしょ。」

勇人が笑って答える。

すると、それを見て澄香はほんのりと頬を赤らめてしまった。

「は、はい。」

この時幸運だったのは、それを真理奈が見ていなかったことだ。もし見ていたりしたら、血を見ないまでも、厄介な事になっていただろう。

一方で妹の紫は。

（勇人のやつ、厄介な病気を伝染させているぞ！！）

と、心の中で叫んでいた。

複雑な事情（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしております。

真夜中のゲーム

「眠れないな。」

夜勇人はベッドの中で呟いた。

光や澄香も加わり、昼間は全員で楽しく遊んでいたのだが、何故か寝付けない。恐らくその原因となっているのは紫のあの一言だろう。

「お前澄香の気まで引いているぞ。」

勇人としては澄香をただ助けただけなのに、澄香まで自分に恋愛感情を抱かせるとは思っていなかった。

「まずいな。」

（真理奈に櫻、さらには澄香まで自分に好意を持つなんて……
・これじゃ本当に父さんの二の舞だよ。）

これで美沙も気が有ると知ったらノイローゼになってしまうかもしれない。

「だめだ！こんなこと考えていたら本当に眠れなくなっちゃったよ……
・……ちよつと外を歩いてこよう。」

そう言つとベッドから抜け出し、部屋の外へと出る勇人。

既に時間は午前2時を回っている。廊下の電気は消され、あたり

はシーンと静まりかえっている。

「夜の屋敷って結構不気味だな。」

普段は見ることの無い屋敷の様子。人氣も消え、真っ暗になった廊下を歩いていく勇人。

歩いていくと、何か恐怖のような、それとも違う幻想的な感じになる。

適当に歩き回っていたが、気付くと部屋から随分と離れた場所にいた。

「そろそろ戻った方がいいかな……ん？」

勇人は少し先にある扉から明かりが漏れているのに気付いた。

「誰だろう？」

勇人はその明かりが点いている部屋に向かって歩いていく。

この時期、この時間まで起きている人間は三千院家にはいない。

かつて夜更かししていたナギも、結婚後は滅多にそんなことはない。

扉の前まで来て、勇人はその部屋が何であるかわかった。

「ビリヤード部屋!？」

勇人はそつと部屋の中を覗く。すると、一人の少女がキューを持って立っていた。それを見て、勇人は扉を開けた。

「真理奈！何やってるんだ！？」

そこにいたのは真理奈だった。彼女は驚いて勇人を見る。

「え！勇人君！！あなたこそ何やっているんですか？」

「いや、ちよつと寝付けなくて。散歩でもしようと思って。お前もそうなのか？」

「まあ、そんな所です。眠れないなら勇人君もどうです、一緒にやりませんか？」

真理奈が勇人にすすめる。勇人には特に断る理由は無い。

「じゃあ、僕もやらしてもらおうか。」

勇人は近くにあったキューをとる。

二人は早速ビリヤードを始める。

ちなみに、真理奈は母親譲りでとても上手い。ただし、彼女の場合は電子系のゲームは苦手だが。

一方の勇人も、そんな人たちに囲まれて育っているからそれなりに上手い。第一、真理奈とはまるで兄弟のように育ってきたのだから、それなりに彼女の癖もわかる。

二人はそれぞれ一進一退にゲームを進めていく。

しかし、二人とも何も言わず、時間が進むにつれて何かぎこちない、気まずい空気になっていく。

（何かしゃべらなきゃ。）

二人ともそう考え始めた。そして、先に口を開いたのは。

「あの、勇人君？」

真理奈だった。

「え！な、何？」

「勇人君は女の子に興味ないんですか？」

「え！！」

いきなりそんな質問を受けるとは思ってもいなかった勇人は、沈黙してしまった。

（え！え！真理奈がそんな質問するなんて・・・）

そんな事言われてしまうと、目の前の真理奈を意識せずにはいられない。深夜3時。目の前にはピチピチの女の子。しかも、寝巻き姿。勇人の心に動揺が起こらないはずが無い。

一方、言った真理奈の方も少し狼狽していた。

（わ、私一体何言ってるんでしょう？な、なんでそんな質問を！！）

二人の間に、さらに気まずい空気が流れていく。

「ご、ごめんなさい。変な質問をして、じゃあ質問を変えます。・・・勇人君には、好きな女子はいないんですか？」

質問を変えたものの、それもまた勇人にとっては困った問題であった。

（えー！！さっきよりはいいけど、そんな直球で言われても！！）

勇人はどう答えていいものか、迷う。真理奈が自分を好きなことを知っている。しかし、今自分には好きな人はいないと言ったら、彼女を傷つけるのではないかと。

（正直に言うべきか？・・・・・・・・それとも誤魔化すか？・・・・・・・・）

迷う勇人。しかし、ここで優柔不断な態度を取ってはいけないうち思った。じゃないと、本当にハヤテの二の舞になりかねない。変に誤魔化して、誤解を受けるようなことはあってはならない。

勇人は腹を決めた。

「正直に答えるけど・・・・・・・・その、僕には今・・・・・・・・特定の好きな人はいない。」

真夜中のゲーム（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしております。

厄介な朝

勇人の言葉に、真理奈は複雑な表情をした。

「そうですか……」

「ごめん、真理奈。」

彼女を悲しませてしまった事に謝る勇人。だが、彼女はいつもの笑顔に表情を戻す。

「いえ、謝る必要なんてありません。確かに少し残念です。けど、誰か他の人が好きだとか、無理して好きって言ってもらうよりは良かったと思います。それに、特定の好きな人がいないということは、まだ私にも望みが残されているってことですし。」

彼女の前向きな心に、勇人は救われる思いがした。

「そう。真理奈がそういうなら。」

「ええ。さ、ゲームの続きをしましょう。」

「ああ。」

こうして、二人のビリヤードは夜が開けるまで続いた。

「勇人、一体どうしたんだ！？すごいクマが出来ているぞ！！寝不足？」

朝食時、勇人と顔を合わせた紫が驚きの声を上げた。徹夜でのビリヤードをしたのが祟って、勇人の目の下には真っ黒なクマが出来ていた。

「別に、ちよつと夜更かししただけだ。何でも無いでもない。」

取りあえずそう言っておく勇人。ここで自分の恋愛事情に敏感な紫に、深夜真理奈と二人つきりになったことがばれたらあまりいい結果にならないことは目に見えていた。ましてや、紫だけならともかく今屋敷には澄香もいるし、愛沢兄弟もいる。どこから話が外部へ漏れるかわかったものではない。

「そうか。ならいいが。」

なんとかごまかせたようなので、一安心する勇人。

しかし、彼の安心はほんの数分後には再び不安へと代わる。

それは、台所での手伝いを終えた真理奈がマリアとともに食堂へ現れた事で起こった。

ちなみに、真理奈が母のマリアを手伝うときはマリアと同じメイド服を着用するため、並んで立つとマリアの分身が立っているように見える。

しかし、今日は二人一緒に立つても明らかに違いがわかった。なぜなら真理奈も勇人同様目の下にクマが出来ていたからだ。

「おい真理奈、どうしたんだそのクマ？」

真理奈を見た父親の勝が声を荒げて聞く。一人娘に何かあったら大変である。しかし、真理奈は努めて冷静にいつもどおり言う。

「なんでもありませんよ、お父さん。」

真理奈も勇人と同じ答えをするが、さすがに一人娘の父親の追及はそんなことでは収まらない。

「なんでもないわけないだろ！！眠れないなら何か理由があるだろ！！何があつたんだ！！？」

（やばいな・・・このまま火の粉が飛んでこない内に伯父さんを何とかしないと・・・）

と勇人は考えていたが、結局火の粉は彼の方に飛び火してしまう。

原因は紫のこの一言。

「真理奈も寝不足なのか？」

この言葉に、勝が過敏に反応した。

「真理奈も！？そう言えば勇人もクマこさえていたな？」

（あ！嫌な予感・・・）

次の瞬間、勝が勇人に掴みかかった。

「おい、勇人！！昨日の夜何があつたか知っているか？」

勝の目はマジであった。下手な解答をしようものなら命の保障はなさそうである。

「いえ、・・・・・・・・その・・・・・・・・」

言葉に詰まる勇人。事実を包み隠さず言つべきなのだろうが、衆人環視のこの状況ではいえない。しかしそれは勝の猜疑心を大きくするだけであった。

「何でそこで詰まるんだ!!」

ブンブンと勇人の体を振る勝。さすがに見かねたハヤテと一樹が勝を止めに入る。

「やめてください兄さん!!」

「ちょっと落ち着いて!!」

この騒動によって朝の食堂は騒然とした空気に包まれてしまった。このままでは勝が本気で勇人を絞め殺しそうである。

そして、見かねた真理奈が言った。

「お、お父さん!!勇人君は何もしていません!!私たちは二人でビリヤードしていただけです!!」

「「「!?!?!?!」」」

その言葉に親たちは啞然とし、紫や一哉たちは驚きの眼差しで二

人を見つめ、桜花と夕貴は意味がわからずキョトンとしていた。そして勇人は目の前が真っ暗になる思いだった。

その後、結局二人とも昨夜のことを全部話し騒動は治まった訳であるが、朝食はなんとなくこないものになってしまった。この空気は終日続き、ゴールデンウィークの家族同士の顔合わせは、何かもやもやした物を残したまま終わった。

そして、勇人の予想も悪い方向で当たってしまった。

真理奈と二人っきりで深夜ビリヤードをしていた話は、次の登校日には櫻やなぜか美沙にまで伝わっていたのだ。

ただ彼にとって幸いと言えたのはもとも生真面目な性格だから、真理奈に何かしたという疑いは持たれなかった。ただし、これが櫻や澄香、そして美沙の恋の炎に油を注ぐ事態になってしまったのだった。

厄介な朝（後書き）

ご意見などお待ちしています。

先輩

「はあああ。」

盛大な溜息を吐く勇人。

今は昼休み。生徒たちは思い思いに弁当を食べている時間である。勇人もそうであるが、いつもなら櫻や一哉たちと一緒に教室や中庭のベンチで食べるのであるが、今日は勇人一人だけで、しかも場所も人気の少ない校舎から少し離れた場所で食べている。

「一人で食べる弁当って侘しいな。」

ふとそんな事を呟く勇人。

今まで何人もの人間と楽しく弁当を食べていた彼にとって、たった一人で弁当を食べるのはあまりにも侘しかった。

しかし、何故こんなことになったのか？

事の起こりは4日前、勇人と従姉妹である真理奈が深夜に二人つきりでビリヤードをしていた事に始まる。

別にそれ事態には問題はなかったが、問題となったのはそれが知り合いの多くに知られてしまった事である。

勇人は父親であるハヤテの遺伝子を継いでいるせいか、女子になり人気である。勇人自身はまだ誰かと付き合う気は毛頭ないが、女子の方は意外と本気で彼の事を好きである。

真理奈を始めヒナギクの娘の櫻、泉の娘の美沙、そして伊澄の娘の澄香も彼に恋心を抱いていた。

その彼女らの耳に、どうゆうわけか真理奈との事が休み明けには入ってしまった。そしてそれが彼女らの恋心に火をつけてしまったらしい。

一緒に登下校しようとするのはもちろんのこと、弁当と一緒に食べようと迫ってくる。そしてその時彼女らが目を合わせる度に火花がちり、空気がピリピリした物になる。

さらに、それが男子の怒りを誘発させてしまっていた。まあ一人の男子が何人もの女子から誘われている光景を見て、ひがまない男子は稀であろう。

一日目は何とか紫の手を借りて凌ぎきったが、これが後4回も続いてはたまらない。

結局、紫の「問題の原因であるお前がいなくなるしかない。ほとぼりが冷めるまでどこか人気のないところにいろ。」という言葉を受け入れ、彼は今の状況にあるわけである。

「けどもしかしたらこっちの方が体に毒かも・・・」

一人で食べるのがここまで苦痛とは思わなかった。これが屋敷ならテレビを見るとかの対処法があっただろうが、あいにくと学院内ではそれは無理な話だ。

「何とかしないとな。」

彼の心の中は憂鬱だった。

そんな時、後ろから声を掛けられた。

「おお、勇人じゃないか。こんな所で何しているんだ？」

勇人は声のした方に顔を向ける。

「ああ、朴先輩。」

そこに立っていたのは、生徒会副会長の朴^{パク・デイル}大^{ダイ}一^{イチ}だった。名前の通り韓国系の人間である。

この時代、在日外国人の数はどんどん増えていた。20年前は総人口比1.5%だったのが、今では9%と6倍になり、1割に近づく勢いだった。

白皇学院の生徒にも、張や孫といった中国系の名前や南米系の名前の生徒も多くはないが見受けられ、もはや珍しい存在ではなくなっていた。

朴は2年生で、生徒や教師からの人望も厚く人気である。去年は会計を務めたが、今年は会長に立候補するという大方の予想を裏切って副会長に立候補し当選している。

ちなみに、勇人は結局部活に入らず紫と共に生徒会に入っている。紫が書記で勇人が会計である。朴は勇人に対して4月に仕事を教える以来、信頼できる先輩になっている。

「どうしたんだ勇人、こんな寂しい所でしかも一人で弁当なんか食って。」

「先輩、聞いてくださいよ。実は……」

勇人は今までのことを話した。

話し終わった途端、朴は大笑いし始めた

「アハハハハハ……」

「笑い事じゃないですよ、僕にとっては重要な問題なんですよ!!」

自分の気持ちも知らず笑う先輩に、勇人は怒る。

「いやすまない。しかし、アハハハ……。全く、もてない俺にしてみれば贅沢すぎる悩みじゃないか。」

「けど、今のままが続いたらこっちがもちませんよ。」

「まあそう言うな。綾崎だってお前の事を心配して言ったんだろ。兄思いの良い妹じゃないか。」

勇人は朴が妹と言ったとき一瞬視線を落としたのには気付かなかった。

ちなみに朴は紫を綾崎とファミリーネームで、勇人をファーストネームで呼んで区別している。

「そりゃ、そうかもしれませんが。だけど、他に良い案なんて浮

かびませんし。」

勇人が考え込む。すると、朴が口を開いた。

「だったら、俺と一緒に食べてやろうか？」

「え！？」

朴の突然の提案に、勇人は驚いた。

「良いんですか？僕なんかにつき合わせちゃって。」

「いいよいよ。どうせ一緒に食べる人間なんていないし。信頼できるお前と食べれるなら俺は大歓迎だ。それともなんだ？むさい男の先輩とは嫌か？」

「いいえ、そんなこと決してありません。」

「だったら解決だ。明日からここで一緒にな。」

「は、はい。」

結局、朴に押し切られる形となった。

「ようし。じゃあ俺は行くぞ。……っと言いつた所だった。さつき放送があった。今日の授業後臨時の役員会があるらしいからちゃんと出席しろよ。」

そついい残して、朴は去っていった。

「朴先輩・・・」

先輩（後書き）

初めて外国人を出してみました。

役員会議

勇人が朴と話し合った日の授業後、臨時の役員会が行われた。

文化祭の準備についての話し合いで、役員全員に加えて各クラスの学級委員長や委員会の委員長が勢揃いしている。

ちなみに、さすがにこの人数では生徒会室で行えないため、一番広い教室を使っている。

生徒会長である櫻は目の前の先輩たちに緊張する様子もなく淡々と役員会を進めていく。

母親のヒナギクは1年生で会長に就任し、さらにその手腕から多くの生徒や教員の信頼を掴んだが、血は争えない物で、櫻もまた同様だった。

「では皆さん。各委員会やクラスの第一次案の提出は1週間後です。期日を守っての提出をお願いします。」

その言葉をもって、その日の役員会は終わりとなった。

勇人も書類をもって退室しようとした。しかし、それを呼び止める人間がいた。

「勇人君」

「何、瀬川さん？」

呼び止めたのは美沙だった。

「この提出案書くの手伝ってくれないかな？私こういう文書書くのあんまり慣れてなくて。」

美沙は少し困ったような表情をして言った。

「え、それなら……」

紫に任せれば。と言おうとした所で、勇人は言葉を区切った。

（そういえば紫はこの娘も僕に気があるとか言っていたな。だったらここで断るのも悪い。どうせ今日はこれで終わりだし、手伝うくらいなら。）

「わかった。いいよ。」

そう言つと、途端に表情が明るくなる。

「わーい、ありがとう勇人君。」

（すぐに顔に出る娘だな。まあそれがこの娘の魅力と言えるのかな。）

ふとそんな事を考えてしまう。

「じゃあさっそくお願い。」

と、美沙が勇人の手を引いて連れ出そうとした時。

「待つて!!」

凜とした声が響いた。

「何かな、櫻ちゃん？」

美沙が声を発した少女、櫻の方に振りむいて言う。その声には明らかに不快感が含まれていた。

「勇人君をどこに連れて行く気かしら？勇人君には生徒会の仕事を手伝ってもらいたかったんだけど。」

櫻が言うが、こちらにも少しばかり怒気が含まれているように感じられた。

（あ、やば……………）

勇人の勘は、今の状況がすごくヤバイことを告げていた。このまま行くとろくなことは起きないと。

（誰か助けてくれないかな？）

心の中で思う勇人。

周りにはまだ数人人が残っていた。しかし、櫻は母親譲りで剣道が得意で怒らせると物凄く怖い。そんな彼女に水をさす言葉をする者などいない。また、男子の中にはもともとモテル傾向にある勇人を毛嫌いしている者もいるから、助けようなんて思う人間はこれまたいなかった。

と、そこで勇人は見た。

バチバチ・・・・・・・・

櫻と美沙の視線が空中でぶつかり、火花を散らしているのを。

（マズイ、マズイゾ。爆発2分前だ。止めなきゃ、けどここで不用意なこと言ったら余計こじれるかも、そうなたらこっちが命の危機に瀕するかも・・・・）

美沙はともかく、櫻を怒らせるなど死刑執行書に自らサインするような暴挙だ。そんなことすれば、母親から譲り受けた木刀正宗を振り回して手を付けられなくなるだろう。彼女はものすごく強い。先日も襲ってきた4人組の暴漢を返り討ちにして全滅させ、警察に表彰されたぐらいだ。

どうするべきか決めかねる勇人。そこへ、救いの手を差し伸べた人間がいた。

「二人とも何やってるんだ？」

「朴先輩！！」

やって来たのは朴だった。前話で紹介したが、彼は生徒からの信頼厚く人気も高い。また生徒会役員としてのスキルも高く、櫻も彼の言う意見は滅多に却下しないほどだ。

「まったく、二人して何やっているんだ。まず瀬川委員長。」

「は、はい。」

「仕事を誰かに手伝って欲しいのはわかるが、別に勇人じゃなくても良いだろう。そこまで二人が仲を悪くしてまでこだわる必要あるのか？」

「は、はあ。」

朴に言われ、縮こまる美沙。

「それに生徒会長も。生徒会長だったら他の生徒に甘くしろとはいわないが、寛容でいる必要があるんじゃないのか？そんな風にいがみ合うなんてみっともないとは思わないのか？」

「す、すいません。」

美沙同様に縮こまる櫻。

（すごい！！）

二人を黙らせた朴に感嘆の想いを持つ勇人。

結局、その後朴が櫻の仕事を手伝うと言う案を出した事で、櫻が妥協し勇人は美沙の仕事を手伝う事になった。

役員会議（後書き）

御意見などをお待ちしています。

放課後の教室

「で、その問題の答えはこうなるわけ。」

「あ、本当だ！すごいよ、勇人君のおかげでスラスラと問題が解けるよ。勇人君は教えるの上手だね。」

「そうかな？」

ここは勇人と美沙の教室。そこで、勇人は美沙の宿題の手伝いをしていた。

さて、報告書を書くのに一緒に来たはずの二人が何故勉強をしているのか。

実は、報告書に書くのは文化祭でのクラスの出し物についての第一次案である。となれば、まずクラス全員の意見を聞いてから書くのが妥当である。つまり、この時点で書けることなど高が知れている。

その事を美沙がわかったのは、教室に着いて勇人に指摘されてからであった。

その時、勇人はそのまま生徒会室に戻ろうかと考えたが、美沙が今度は宿題を手伝ってくれと言い出した。

結局、勇人はそれを受け入れた。生徒会の仕事は朴がやってくれているから大丈夫だろうと考えたからだ。それに、美沙と言う人間を知るいいチャンスとも考えたからだ。

そして始めて30分、勇人は美沙がわからなかった問題をスラスラと解いていった。しかも、詳しくわかりやすい解説付きで。

その結果が冒頭の美沙の賞賛である。

もともと、勇人からすればこんなこと朝飯前である。何せ子供のころから英才教育を受けてきて、しかも夕貴や桜花の相手をしてきたから面倒見も良い。

本人にとってそれは、特別な事ではなかった。ただし、本人にとってのは話で、美沙にとってはやっぱりすごいことなのであった。

「本当に勇人君はすごいよ。勇人君と一緒にやると何か勉強が楽しくなってくるよ。」

「どういたしまして。」

（けど、本当に裏表のない、いい娘だな。）

ふとそんな事を考えてしまう勇人。一方の美沙も。

（勇人君って本当に優しいな。皆が夢中になるのもすっごくわかるな。私勝てるかな？）

このようなことを考えていた。

しかし、この時二人は気づいていなかった。自分たちを見つめる視線があることを。

そして、15分後。ささやかな勉強会は終わった。

「ありがとう勇人君。おかげで助かったよ。」

心からのお礼の意味を含ませてか美沙がいつにもまして可愛い笑顔をする。

その表情に、一瞬ドキツとしてしまう勇人。

「いや、別にこれくらいお安い御用だよ。けど瀬川さんはもう少し数1を復習しておいたほうが良いよ。そうすれば大分わかるようになると思うよ。」

「うん。今日はありがとう。また、わからなかったら教えてもらってもいいかな?」

「別にいいよ。時間が空いてる限りならいつでも教えてあげるよ。」

「本当?ありがとう。……それと、瀬川さんなんて他人行儀に呼ぶ必要なんてないよ。美沙って呼び捨てで良いよ。」

美沙が突然そんな事を言った。

「え!じゃあ、今度からそう呼ぶよ。」

勇人はあまり深く考えもせず答えた。彼は親しい女性の殆どをフーストネームで呼んでいたから、そこに深い意味があることをあまり考えなかった。

しかし、言った美沙にしてみれば大きな意味があった。勇人との

距離を縮める事が出来たからだ。

（勇人君に名前で呼んでもらえるんだ。嬉しい。）

「ありがとう、勇人君。」

その時の笑顔は、入学以来勇人が見てきた彼女の笑顔の中でもっとも嬉しそうに見えた。一瞬、勇人はこう思った。

（かわいい。）

紫や真理奈、櫻と言った女子と付き合いってきた勇人であったが、美沙の笑顔や態度は彼女らとは何か違う魅力があるように感じられた。そして、それは勇人の心にかなり強い印象を刻み付けた。

「あ、ああ。」

「じゃあまた明日ね。」

彼女はそう言い残し教室から出て行った。

勇人はその後しばし放心状態にあったが、数分後我に帰り、彼も教室から出た。

放課後の教室（後書き）

ご意見などお待ちしています。キャラなどへの意見もありましたらお寄せください。

過去

美沙とわかれた勇人は一人校門へ向かって歩いていった。

そして校門が見える所まで来たとき、朴が櫻とわかれるのが見えた。どうやら、仕事を終え二人でここまで来たらしかった。

櫻を送り出し、一人彼女を見送るように立っていた朴に勇人は声を掛けた。

「朴先輩!!」

朴も勇人に気付いた。

「お！勇人か。そっちも終わったのか？」

「ええ。櫻と一緒に来たんですか？」

「ああ。こっちも仕事を終えてな。」

そう言つと、彼は櫻の歩いていった方に目を向けた。

その時、勇人は朴の目に何かいつもと違う優しさの様な物を見た気がした。それは勇人の心に引っかけた。

「そういえば、先輩はどうやって帰るんですか？」

勇人は朴がどこに住んでいるかは聞いていなかった。

「ここを左に行って地下鉄の駅まで歩いていくんだけど、それがどうした？」

その方角は櫻の家へ行くほうとは逆だが、勇人の通学路とは同じ方向である。

「だったら、駅までお付き合いしますよ。僕の帰る方と方角も同じですし。」

「おお、悪いな。」

こうして、二人は一緒に歩き始めた。

歩きながら、色々と雑談をする。もともと、その内容の多くは勇人の色恋沙汰について朴が冷やかす物であった。

笑いながら歩いていく二人。

校門から地下鉄の駅まではだいたい普通に歩いて10分ぐらいの距離であった。

勇人は半分ぐらいまで来た時、勇人は心に引っかかっている事を聞いてみる事にした。

「あの、朴先輩？」

「うん！？なんだ？」

「朴先輩は、櫻との間に何かあるんですか？」

そう言うと、朴の表情が少し驚きの物になる。しかし、コンマ数秒後にはいつもどおりの表情に戻っていた。

「何でそんな事聞くんだ？」

「いえ、そのさつき櫻を見送った後の先輩の目が、何かいつもと違うように見えて。まるで、櫻が愛しいように見ていた気がしました。」

その言葉に朴は少し沈黙したが、数秒後再び話し始めた。

「愛しいねえ・・・自分じゃそんなつもりはなかったけど、そうだな、言われてみればそうかもしれないな。・・・実はな、生徒会長を見ていると妹の事を思い出すんだ。あと、お前を見てると弟のことを思い出す。」

「へえ、先輩には妹さんと弟さんがいらっしやるんですか？」

自分とおなじことで、親近感が湧く勇人。しかし、朴が発した言葉は勇人も予想できない物だった。

「厳密にはいただな。」

（え！過去形！？）

その一言で、勇人はあることがわかった。

「亡くなられたんですか？」

「ああ。１０年前にな。妹は５歳、弟は４歳だった。」

朴は少し寂しげに言った。

二人相次いで亡くなったとは、今の日本ではよほどのことだ。

「事故ですか？」

「事故じゃないな・・・実はな、これはまだ白皇の誰にも言っていないが、俺の生まれは清津^{ちよんじん}なんだ。」

「え！？清津って韓国北部の港町でしたよね・・・じゃあ先輩の生まれは崩壊した北朝鮮ですか？あ！！１０年前って、確か北朝鮮が崩壊した年・・・」

今でも時々テレビのドキュメンタリーや現代史の授業で習う事がある。１０年前、北朝鮮が崩壊したとき、大きな混乱が起こった。そのさい、丁度襲った寒波と食糧不足で数十万の人が亡くなったと言われている。

「そうだ。妹と弟はその時の混乱で死んだ。最初はただの風邪だったのに、薬も栄養のある食べ物もなくてな。結局そのまま死んじまったよ。父方の親戚を頼って日本に出発する一週間前のことだった。お兄ちゃん。日本に行けるかな。それが最後の言葉だった。」

勇人には、朴がそんな過去を背負っているようには全く見えなかった。

「先輩がそんな過去を背負っていたなんて。」

「まあ、誰にも行ってないし。それにこっち来てからは自分のこと

で精一杯だったからな。朝鮮人学校が定員一杯で入れなくて、日本の小学校に入った。その途端、日本語が喋れないからいじめのいい的になった。」

「先輩がいじめに！！」

「ああ。おっと、だからって日本人や日本を恨んじやいないぜ。俺がここまで来られたのも、小学校や中学校の先生が励ましてくれたからだ。もしいじめに負けていたら、今の俺はなかっただろうな。いじめた奴を見返してやろうと、必死に勉強して日本語を取得した。それに奨学金を貰って白皇に入る事も出来た。俺は満足さ。おっと、駅に着いたな。」

いつのまにか、地下鉄の駅まで来ていた。

「じゃあな勇人。悪かったな、しけた話しちまって。」

「いえ、聞かせてもらって良かったです。では、また明日。」

勇人はそこで朴と別れ、一人歩き始めた。

「人生色々か・・・それにくらべて僕の人生ってなんなんだろう。」

朴の話聞いて、しばし何一つ不自由なく生きてきた自分の人生について考え直す勇人であった。

招かれざる者

勇人が朴の過去を知った数日後の土曜日、突然それは起こった。

深夜、紫が高熱を出し倒れたのだ。

家族の誰もが最初は単なる風邪と思った。しかし彼女の症状は重く、ハヤテ達家族の懸命の看病にもかかわらず病状は悪くなる一方だった。

そこで、その日の午後三千院グループ傘下の病院から医師が呼ばれ、紫を診察してもらった。

医療器具の発達により、訪問診療でもかなり高精度の治療が出来るようになっていた。

しかし、診察を始めた医師はすぐに怪訝な顔をした。そして、血液検査などすべての診察を終えた時には、その表情はさらに深刻になっていた。

さすがに、心配になったナギが医者に聞いてみた。

「あの先生、紫は大丈夫なんですか？」

すると、医者は言いにくそうに言った。

「それが、言いにくいんですが・・・全く原因がわかりません・・・」

「『え！！？』」

その場にいたハヤテ、ナギ、勇人は呆然とそんな声を上げた。

「全ての検査にも、病原菌やウイルスの類も見つかりませんでした。咳や鼻水と言った風邪の症状も見当たりません。ただ高熱が出ているだけ・・・そうとしか見えません。取り敢えず解熱剤を打っておきました。これで改善が見られないら、病院での精密検査をお勧めします。」

お大事にと言って、その医師は出て行ってしまった。

病気の原因がわからないなんて有り得ない。血液検査をすれば最低でもなんらかの反応が出るはずである。あまりに不可思議な状況に、ナギや勇人は不気味さを感じてしまう。と、同時に紫の病状に大きな不安が出てきた。

そんな中、ハヤテにはある気がかりがあった。最初はあまりに非現実と考えたが、念のために調べてみる必要はあると思った。

ナギが後から部屋に入ってきたマリアと紫を病院へ連れて行くことを話し合っているのを尻目に、ハヤテは携帯を取り出してボタンを押した。

「・・・あ、伊澄さん。ハヤテです。今日空いています？・・・空いてる、だったら直ぐに家に来てください。紫が原因不明の高熱を出しているんです。まさかとは思いますが、念のために見て欲しいんです。こちらから車を差し向けるので、それに乗ってください。では、待ってます。」

「ハヤテ、伊澄を呼ぶって・・・まさかそんなこと!？」

ナギは伊澄の力の事を知っている。その伊澄の専門分野は心霊関係の仕事である。

「一応念のためです。」

とハヤテは言ったが、口には出来ない、確信的な予感がハヤテにはあった。

30分後、伊澄が息子の光を連れてやってきた。光は鷺ノ宮家初めの男子で力を持った者で、その力は伊澄に勝るとも劣らないと銀華は判断していた。

そして、紫を見るなりその表情は険しいものになった。

「伊澄さん？まさか？」

その表情を見れば、ただならぬことであるのが誰にでもわかる。

「ええ。おそらくハヤテ様の予想どおりでしょう。紫さんの体から、強力な邪気を感じます。少なくとも、何かがとりついているのは確かです。」

その言葉に、光を除くその場の全員が呆然となった。

もつとも、伊澄は早速仕事モードに入る。

着物の袖からお札を取り出した。しかし、それを使おうとしない。

「伊澄さん？」

「光、あなたも手伝って、これはかなり強力な力があるわ。」

「わかった。」

一番弟子である光も直ぐにお札を出した。

鷲ノ宮家最強の伊澄が手伝いを求める相手っとは一体？という考えがハヤテ達の頭の中を支配した。

そして、伊澄と光が同時に呪文を唱え、札を紫の体に向かって投げつけた。

「少女を苦しめし悪霊よ、速やかに立ち去れ！！」

すると、紫の体からスーッと光の塊が現れた。

すかさず伊澄が別の札を投げつけた。

「悪霊よ、その正体を現せ！！」

すると、札がその光に触れた途端、それは徐々に人間の形になっていき、最終的に光は消え、人間同様に実体化した。

それを見た全員が声を上げた。

その姿は、ツインテールの金髪、目は少し釣りあがっているが、整った顔立ち。その場にいた誰もが見覚えがあった。

そこにいたのは、まさしく13歳当時のナギそのものであった。

悪夢再び！！

現れたその悪霊の姿に、ハヤテとナギ、伊澄には見に覚えがあった。

「そんな馬鹿な！」

「私のドッペルゲンガ……どうして、除霊したはずじゃ……」

ハヤテとナギがうめく様に言った。

21年前、ナギから分離し大混乱を引き起こし、そしてナギをハヤテに殺させようとしたナギのドッペルゲンガ！。その時は伊澄によつて除霊され、消え去った。なのに、それがまたハヤテ達の目の前に現れた。しかも、娘を苦しめていた悪霊として。

「おい！なんでお前が紫を！！」

ナギが怒りをあらわにして言った。

しかし、ドッペルゲンガは何も答えず、不敵に笑ったと思ったら突然窓から逃げ出した。

「あ！待て！！」

光がその後を追う。

「おい、光！！」

勇人もその後を追った。

ハヤテ達が引き止める間もなく、二人は窓からドッペルゲンガを追って行ってしまった。

「あ、勇人！！光君！！」

ハヤテがそう言った時には手遅れだった。

後に残された3人の内、ナギは紫に近づいた。

「良かった。熱は下がってる。」

苦痛から解放された紫はかわいい寝息を立てながら眠っていた。

「あのドッペルゲンガが体内から消え去りましたから、もう大丈夫です。」

「しかし、どうして今になって現れたんです？確か除霊したはずじゃ？」

伊澄の言葉に、ハヤテが疑問を口にした。

「恐らく、あまりに強い怨念を持ったために完全な除霊が出来なかったのでしょう。そして20年掛けて力を蓄えていたんでしょう。」

「けど、確かあいつは私の良心だろ？どうして怨念なんか持つんだ？」

ナギのもっともな疑問。

「私が思うに・・・あれは良心ではありません。少なくとも良心だけではありません。」

その言葉に、ハヤテとナギは驚愕の表情をする。

「何だつて!!」

21年間、ずっと信じてきた事を否定されるのだから、その衝撃は大きかった。だがよくよく考えてみれば、良い考えの塊のはずの良心が人を殺す事を考える事はおかしい。

「恐らく、あれはナギの心の歪み、つまり悲しみや怒り、不安といった負の感情が意志を持ったものでしょう。時々あるんです、そうしたことが。地縛霊の一種と考えてよいでしょう。ナギは伊豆の不思議な温泉の效能のおかげと言いましたが、恐らくそれも原因の一つでしょう。ただ、最初は勉強したり運動をしたいと言っていました。たから、良心も含まれてはいるでしょうが、もはやその良心は完全に封じ込められてしまっているようです。」

「じゃあ、また除霊しないといけないんですか？」

ハヤテの言葉に、伊澄が首を振る。

「だめです。あまりに負の力が大きすぎます。さらに良心の力まで融合しているでしょうから。例え今回除霊しても、根本的な解決にはなりません。おそらく、また20年もすれば力を蓄えて、三千院家へ復讐するでしょう。今回紫さんにとりついたのも、母親であるナギを苦しめるためでしょう。」

「じゃあどうすれば良いんだ？」

打つ手なしでは困る。

「まず負の力を弱まらせる必要があります。そのために、良心を負の心から分離し、引き出さなければいけません。負の力さえなくなれば良心の塊になりますから。ただ、先ほども言ったとおり、負の力が相当強いですから・・・」

伊澄はそこで黙ってしまった。

「なにしろ、光君や勇人が追っかけています。危険かもしれないので、携帯で呼び戻しましょう。」

そしてハヤテは携帯を取り出した。

一方、追いかけていた光と勇人はドッペルゲンガ-を見失っていた。

「くそ、取り逃がした!!」

光が悔しそうに言う。

「けど、あいつは一体なんなんだ!？」

両親の説明を良く聞いていなかった二人には、正体はまったくわからなかった。

その時、勇人の携帯が鳴った。

「もしもし？・・・父さん？・・・うん。・・・うん・・・わかった。」

電話の内容はドッペルゲンガの正体と、直ぐに戻ってこいという物だった。

「ハヤテさん何だって？」

「実は・・・」

勇人はハヤテからの電話の内容を光に説明した。

「・・・だから一端戻れだって。」

その言葉に、光は不服そうな表情をする。

「ここまで追ってきてみすみす逃がすなんて俺は嫌だぜ。」

「けど、伊澄さんも手を出しかねる相手だろ？光だけで勝てるのか？」

「・・・」

その言葉に、光はしばし押し黙ったが、すぐに顔を上げ勇人に言った。

「ちょっと携帯貸して。」

未知との戦い

光が電話した相手は曾々お婆さんの銀華だ。既に110を越している彼女は、相変わらず他人の血を吸って長生きしている。

「目標は150歳だ!!」

と言って憚らないほど元気である。まあ最近血を吸う間隔が短くなっているから、衰えが見え始めてるとは言える。

そんな人ではあるが、鷲ノ宮家一番の古株で、色々知識を持っていることは確かなのである。

光は彼女に知恵を借りる事にした。

光は一通り今の状況を説明した。

「銀華ばあちゃん、なんかいい知恵ない？」

「そうじゃな・・・まあないことはないが。」

「本当？」

「ああ。ただしだ・・・光もそれなりの覚悟が必要になるぞ。」

「え!？」

「じゃあ伊澄さん、仮にあれを倒すとしたらどうすれば良いんですか？」

勇人への電話を終えたハヤテは伊澄に聞いてみた。

「そうですね・・・取り敢えず、まず負の心と良心を切り離して力を弱めなくてはいけません。そのためには、お札を貼ったり呪文を唱えるだけでは不足です。直接相手に触れて術を使わないと。」

「触れるって？指でか？」

ナギの質問に、伊澄は首を横に振った。

「そんなのでは不足です。あのドッペルゲンガの力は並大抵ではありません。直接羽交い絞めにするか、抱きつくぐらいのことをしないと駄目でしょう。」

相手が動かない人形ならともかく、動き回っているドッペルゲンガに対してそれは難しい事であるのは目に見えていた。

まず見つけ出す事から始めなければいけないのだから。

「けど、相手が三千院家の敷地外に出たらもう探しようがありませんね。」

外に出たらどこへ逃げ出すかわかったものでない。

「私もそれを気にしていました。ですから、まず屋敷の周りにお札

を貼って結界を作らなければいけません。とりあえずそれでこの敷地内に封じ込めれます。」

「だったら健二に頼んでSPを総動員して手伝えよう。」

とりあえず、やるべき事が決まった3人は行動に移る。

と、そこでナギが気付いた。

「そういえば、勇人も光も戻ってこないな。」

「大方自力で追っているんでしょう。あの子は私に似て頑固者ですから。」

さすがに母親だけあって息子のことはよくわかっていた。

「まあ、あの子は探究心が強いですから。銀華おばあさまにでもアドバイスしてもらっているかもしれません。」

「羽交い絞めにするか抱きつくか。まだ見つけてもいないのに、それは難しいよな。」

銀華との電話を終えて光は考え込んでいた。確かに相当な覚悟が必要である。相手がもし羽交い絞めにしたところで反撃にでも出たらこっちが致命傷を負いかねない。まさに決死だ。

「やっぱり伊澄さんの所に戻った方が良くないか？」

勇人が心配そうに言う。勇人としては友人を疑いたくはないが、やはり年の功を信じたくなる。

「うーん。」

彼自身、母親の伊澄が言ったとおり頑固者である。ここで引き下がりはなかった。しかし、自信があまりないのも事実であった。今までは伊澄と行動を一緒にしてきたのだ。単独行動をするのは実は今回が初めてであった。後で「自分自身の若さゆえの過ち」などと言って後悔したくはない。

こうして彼は2分ほど悩んだが、結局勇人の言葉に従う事にした。しかし、この2分が決定的だった。

「わかった・・・って曲者!!」

気配に気付いた光が札を投げた。

すると、木の陰からドッペルゲンガーが飛び出した。

「ち！さすがに伊澄の息子だけあるな。」

彼女（？）そう言って舌打ちした。

「見つけた。もう逃がしはしないぜ!!」

光は新たな札を持ち、身構えた。

しかし、彼女はそれを嘲るような表情で見ている。

「ふん。そんな札くらいでは私は消えない。例えここで消滅してもまた復活するまでだ。」

姿形はナギその物だが、その目は真つ黒に淀んでいた。それを見て、光も勇人も恐怖を覚える。だが、ここで逃がすわけには行かない。

「戦う気だな。・・・よし、相手になってやろう。」

彼女も身構えて戦闘体制に入った。2対1という劣勢に関わらず、その表情には余裕さえ感じられた。一方の二人には先ほど感じた恐怖に加えて、未知の物との戦いに対する怖れもあった。

そんな中で先に仕掛けたのは勇人だった。

「イナズマキック!!」

父親から教わったポピュラーな技をまず繰り出した。

こうして戦いは始まった。

疾風の如く！！

勇人がまずキックで攻撃を掛けた。

しかし、鮮やかに偽ナギはそれを除けた。

「何！？」

勇人の表情が驚愕の物に変わる。

「ふふ。その程度か？」

まるで挑発するように言う偽ナギ。

その隙を突くかのように、今度は光が攻撃を開始した。札をなげ、とにかく偽ナギの力を少しでも弱らせようとする。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ！！」

だが、その攻撃さえも彼女は除けてしまった。

「クソ！！なんて身軽なんだ。」

「しかもすごい洞察力だ。まったく隙がない。」

二人とも悪態をつく。

「ふん。お前らとのお遊びも終わりだ。じゃあな。」

その二人を見ながら、偽ナギは逃げようとする。しかし、直ぐに突然現れた光の壁によって行く手を阻まれた。

「く!!」

少しばかり表情を歪める偽ナギ。

「何だ!？」

その光景を見て、勇人は驚きの表情に、光はしてやったという表情になる。

「さっき勇人が攻撃していたうちに簡易結界を張ったんだ。これで半径100m以内から外に奴は出れない。ただ、時間制限があつて3分しかもたない。それまでになんとかしないと。」

勇人はその言葉に、急いで善後策を考える。3分と言う事は時間の余裕はほとんどない。短時間で相手に致命的な打撃を与える決定打が必要だ。

（さっきの技くらいじゃまた除けられる。だったら、未完成だけどあれを試してみよう。）

「光。ちょっと耳貸して。」

「何？」

勇人は光に小声で「ごそごそ」と自分の考えを言う。

「大丈夫なのか？」

懐疑的な表情をする光。

「こうなったら一か八かだ。他に方法はない。」

「わかった。やってみよう。」

光も同意した。

そして、二人は再び偽ナギへの攻撃を開始した。

「行け!!」

光が札を再び投げつける。もちろん、先ほど同様彼女はそれをも簡単に除けた。

「馬鹿め!! そんな技ではやられないと何度も言っているだろ!!」

しかし、今度は勇人がほぼ同時に攻撃を掛けた。

「同時攻撃か、考えたな、だがそんなことをしようと私には効かない。」

それを見ても、彼女は余裕だった。だが、その油断が致命的だった。

次の瞬間、勇人の体が空に舞い上がった。

「疾風の如く!!」

勇人が繰り出したのは、ハヤテ最強の技である『疾風のごとく』だった。辺りに強烈な風が吹き荒れる。

「何!？」

さぐない勇人が『疾風の如く』を使えるとは予期していなかったようだ。偽ナギはそれでもなんとか除けようとするが、先ほどの様なキックと違い、空中に飛び上がってしかも高速で攻撃を掛ける勇人に対しては通用しなかった。

敵を侮ったツケをここで払う事となった。彼女は勇人の『疾風の如く』をもろに喰らった。

こうして勇人は初めて『疾風の如く』に成功した。

凄まじい衝撃を受けた偽ナギはそのまま地面に叩きつけられた。

その瞬間を光は逃さなかった、立ち上がろうとする彼女に駆け寄り、そのまま羽交い絞めにする。

「は、離せ!!」

必死にもがく偽ナギ。だが、光は離すわけにはいかなかった。

「離すかよ!!」

そして札を複数取り出す光。残った札を全て使う気だった。

「や、やめ・・・」

何故か彼女はそこから先を言わなかった。同時に、彼女の抵抗が少し弱まった。

「よし。悪しき心よ、消え去れ!!」

彼はそう言うと、彼女の体に目一杯の力で札を張り付けた。

その途端、彼の視界は真っ白になった。

「うわ!!」

それは、偽ナギの負のエネルギーが破裂した瞬間だった。20年分掛けて彼女が溜め込んだエネルギーは凄まじい量だった。

光の奔流が彼に襲い掛かり、彼は気を失った。

「光!!」

その光景を見ていた勇人は急いで彼のいたところに駆け寄った。

光の奔流は数秒後には消え去り、元の庭の光景になった。

「光、大丈夫か?・・・て、これは?」

勇人がそこに見たのは、気絶し横たわる光と偽ナギの二人だった。

勇人は負のエネルギーが消えれば、彼女も自然に消滅すると思っていた。だから、彼女の体がまだ存在する事に驚いた。

「一体どうなっているんだ?」

彼が困惑していると。

「勇人!!」

後ろからハヤテの声がした。どうやら今の騒ぎに気付いて来たようだ。その後ろにはナギや伊澄の姿も見える。

「あ! 父さん!!」

疾風の如く!! (後書き)

御意見などをお待ちしています。

さわやかな終結

倒れた二人は直ぐに屋敷へと運ばれた。

そして、30分後まず光が目を覚ました。

「・・・・・・・・う・・・・・・・・」

「光、しっかりしろ!!」

勇人が声を掛けると、彼は目を開いた。

「勇人が・・・・・・・・ここは？」

「屋敷の客間さ。良かった、大したケガもなくで。」

勇人が安堵するように言った。

「あいつは？」

光にはあのドッペルゲンガがどうなったか気になった。

「隣の部屋で眠ってる。」

その言葉に、少しばかり不安になる光。

「大丈夫なのか？それに、一体さつき「大丈夫よ光。」

光が言い切らないうちに、母親の伊澄が部屋に入ってきた。

「あなたのおかげよ。彼女の歪んだ心は綺麗さっぱり消えていたわ。今のあの娘には何の害もないわ。あなたが気絶したのは、歪んだ心のエネルギーが一気に光となって放出されたせいよ。」

伊澄が状況を説明した。

「そうだったのか。」

「ああ、紫もすっかり元気になったし。これでめでたしだよ。」

と、ここで光がある事に気付いた。

「あれ、けどあの娘はどうなるんだ？除霊するのか？」

それに対して伊澄が答える。

「実はあの娘は人間になってしまっていますから。これからナギたちと相談してどうするか決める所です。」

「え！！！」

光にはどうして彼女が人間になっているかわからなかった。今回実体化したのはあくまでお札の力が利いていたからだ。だから一時的に姿が見える状態になっても、札の効力だけで本当の人間になるなんてありえない。

「おそらく、あなたが歪んだ心を消し去った時のエネルギーの一部が、彼女の体に作用して変異してしまったのでしょうか。」

丁度その時、ナギが扉を開けて入ってきた。

「あの娘が目を覚ましたぞ。」

「行こうぜ、光。」

「ああ。」

勇人に促され、光はベッドから起き上がり隣の部屋へ向かった。

部屋には、偽ナギが寝ているベッドの傍らに、既にハヤテと紫がいた。

「ごめんなさい。」

勇人と光が部屋に入るなり、偽ナギ彼らに頭を下げて謝った。

「「え!!」「」

いきなりそんな事言われて驚く二人。

「あ、あの。なんでいきなり謝るの?」

光が恐る恐る聞いてみる。

「だって、私はあなたたちに御迷惑をおかけしました。謝らなければ失礼です。」

その表情はさっきと違い優しい。しかも、心なしか目もさっきとは違う。

あまりの変わり様に二人とも面食らってしまった。

何と答えていいかわからなかったので、二人とも取り敢えず。

「いや、わかればいいんだよ。」

と言っておいた。

しかし、いくら歪んだ心が消えてほとんど良心だけになったとはいえ、ここまで変わるとは、二人とも思ってもいなかった。

「まあそれは良いとして、問題はこれから君をどうするかだね。」

ハヤテが話を切り換えた。しかし、それに対する彼女の返答は簡潔だった。

「私を除霊してください。」

これには、勇人と光以外の面々も驚きを隠せない。

「い、いいのか？今のお前はもう人間なんだぞ？」

ナギが聞く。

「良いんです。歪んだ心に支配されていたとはいえ、私は御迷惑をおかけしました。あなたや紫さんを殺していたかもしれません。それに、本来私はいてはいけない存在です。この世に未練も何もありません、早く私を消してください。」

さすがに良心。非常に謙虚だ。

しかし、そんな人間をむざむざ死なせたくないのが人の情というものだ。

「私はあなたのような心優しい人を消すつもりなんてありません。」

まず伊澄が言った。

「え!？」

「俺も母さんと同意見。別にいいじゃん。もう歪んだ心も消えたいし、人間になっただから。」

光も伊澄に同調した。

「で、でも。例え人間として生きていくにしても、私には行くあてがあるぞ。」

彼女が言い終わらないうちにナギが言った。

「え!？」

「家で暮らせば良い。子供がもう一人増えたって私はかまわないぞ。」

「僕もです。」

「私も。」

「僕も。」

三千院家の全員が賛成に回った。

「あ、でも・・・」

まだ迷う彼女。

「別に良いじゃん。今は人間なんだから。せつかく貰った命なんだから。だったら大事にしなきゃ。」

最後に光が、留めの一言。

だが、結局彼女はうんとは言わなかった。

「少し考えさせてください。」

それが彼女の答えだった。

結局、その日は遅くなったので、光達は三千院家に泊まった。

翌朝

光は起きて着替えると部屋の外へ出た。ちょうど、そこには掃除しているメイドが一人いた。

しかし、彼に記憶にある誰ともその姿は違っていた。

そして、誰かわかった。

「お、お前。」

偽ナギだった。

「おはようございます。・・・やっぱり驚いてますね。これからこの家で暮らしていくんですから、これくらいしなくちゃ。」

「え！？じゃあ。」

「はい。三千院優です。よろしく。」

陰謀！？

三千院家に新たに優が加わったが、それはすなわち白皇学院に通う仲間も増えた事を意味した。

彼女は直ぐに白皇学院の飛び級編入試験（一応ナギの分身だから年齢は13歳。）を受け、全科目正答という極めて優秀な成績で勇人達のクラスに加わった。

そして入った途端から彼女は大人気であった。

ナギと違って表情はいつも柔らかく、しかも性格もそれこそ良心の塊だからすごく良い。加えて体力もある。まさに非の付け所のない才色兼備の美少女だ。

そんな彼女も、朝は勇人達と一緒に登校するのだが、これが勇人への男子の嫉妬を余計に買う結果となった。

まあ美女3人と一緒に登校してきて、しかも女子からもてている人間に対して嫉妬しない方がおかしいかもしれない。

もちろん、勇人の父親譲りの並外れた体力は誰もが知っているから、喧嘩を吹っかけたり、面と向かって文句を言ったりするような奴はいない。せいぜい裏で陰口を叩くぐらいだ。

しかし、その日は違っていた。

事の始まりは一通の電話から始まった。

5月ももうすぐ終わろうとしていたその日、勇人はいつもどおり紫、優、真理奈とともに登校中であつた。

その途中で突然勇人の携帯が鳴つた。

「もしもし?」

こんな朝っぱらから誰だろうと思ひながら出た。

「勇人か。俺だ。」

何か一昔前の詐欺を思い出しそんな言葉だが、声で誰だかわかつた。

「あれ、朴先輩ですか?どうしたんです、こんな朝っぱらから?」

電話の相手は生徒会副会長であり、勇人の良き相談相手である朴だつた。

「訳は後で話す。とにかくお前に言っておく。今日は正門を使うな、裏門から入れ。」

「え!? 裏門ですか?」

勇人には何故そんなことする必要があるのかわからなかつた。裏門から入る事は大きな回り道になるからだ。

「そんなことしたら遅れちゃいますよ。」

「お前の足ならなんとかなるだろ!!!とにかく正門から絶対に入る

な！！いいな！！」

そこで一方的に電話は切れた。

「なんなんだ一体？」

「勇人、どうしたんだ？」

勇人の様子が気になったのか紫が声を掛けてきた。

「うん。朴先輩から、今日は裏門から来いって。」

「え！？なんでそんなことを？」

話を聞いていた真理奈も訝しげに言う。

「さあ。僕にもわからない。けど、朴先輩が言うってことは、何かあるはずだ。悪いみんな、俺は裏門から回るから。」

そう言っただけ勇人は3人とはわかれ、裏門へと回る道を走り出した。

さすがハヤテの体力を継いでいるだけあって、速い。本人は遅れる事を気にしていたが、充分余裕を持って着くことが出来た。

そして、裏門につくと一人の男が待ち構えていた。

「さすがだな勇人。」

先ほど電話してきた朴本人が待っていた。

「先輩。一体どういことです?」

「うん。まあ、取り敢えずこれを見る。学校中の掲示板に張り出されている。」

「え!？」

勇人は朴が差し出した紙を見る。

そして、その表情が驚愕の物になる。

「な、何!?!」

その紙には写真が載っていたが、それは先日勇人が美沙と二人きりで勉強をしているシーンだった。もちろん、顔は直接写っていないが、それでも直ぐにわかる。

「何でこんな物が!?!」

「わからん。今日の朝には出ていた。」

「一体誰が!？」

「それもわからん。ただ大体的見当はつく。画像研究部の連中だ。」

「画像研究部……」

勇人はなるほど思った。

画像研究部というのは、昔あった動画研究部が発展した部活であ

るが、やっていることは面白い動画や写真を集めてくるというように、あまり変わっていない。しかも、人の恥ずかしい映像なんかも撮って来る。

ただ、数年前についてプライバシーの侵害で訴えられて以来動きが慎重になっていた。だから、今回も顔を写さない様にしているのだろう。

しかし、わかる人にはわかるから困る。

「クソ！画像研究部に乗り込んでやる！！」

「慌てるな！まだ画像研究部だとわかった訳ではないぞ。しかもだ。」

「！？」

「取り敢えず授業には出なきゃな。」

結局、勇人が画像研究部に乗り込むのは放課後になった。しかし、それまでは悪夢だった。

一日中侮蔑の視線で見られる事になった。特に、櫻や真理奈の怒りの視線は最悪だった。

彼はひたすらそれに耐えるしかなかった。

陰謀！？（後書き）

御意見などをお待ちしています。

画像研究部の少女

放課後、友人や同級生たちの冷たい視線に耐えきった勇人は、放課後画像研究室の前に立っていた。

「しかし相変わらず変な建物だよな。」

画像研究部はかつての動画研究部から引き継いだ奇抜な建物をそのまま使っている。

「とにかく、入って文句の一つでも言わないと。」

そして勇人は扉を開けた。

「お邪魔します。」

しかし、中には誰もいないようであった。

「誰もいないのか？」

ところが、女子が喋る声は微かだが聞こえてくる。

「奥にでもいるのかな？」

勇人は部屋の奥へと進んでいく。

そして、喋り声は一つの部屋から聞こえてくるのがわかった。

「ここだ。」

部屋のプレートには、編集室と書かれていた。

勇人は扉を2回ノックしてみる。しかし、返事はない。彼は恐る恐る扉を開けた。

扉をあけると目に飛び込んできたのは、一人の女子生徒がパソコンをいじっている所だった。

勇人はその女子に近づく。すると、彼女が独り言を言っているのがわかった。

「フッフ・・・今度はこれをばら撒けば、面白い事に「何が面白いのかな？」」

「!?!」

その女子は一瞬ビクツとしたかと思うと、次の瞬間には振り返って勇人の方に顔を向けていた。

「あ、あなたは綾崎先輩!!」

まるで幽霊でも見るかのような視線で勇人を見つめる少女。

勇人は近くの机の上に置かれていた紙を一枚取った。それは、朝掲示板に張り出された物と同じ紙。

「これはどういうことかな？」

その紙をちらつかせると、少女はあっけなく観念し頭を垂れた。

「すみません!!」

「すみませんって言うならやるなよ。なんでこんなことしたんだ？」

勇人にはだいたいの見当はついていた。

「ええと・・・その・・・面白そうだったから。」

（やっぱり。どうせそんなことだろうと思った。）

「たく。冗談じゃないよ。こっちは大迷惑だったんだからな。」

心底彼はそう思っていた。

「じ、ごめんなさい。」

本心からそう言っているのかはわからないが、とりあえずそれ以上怒るのはやめた。

「けど、よくこんな写真撮ったね？」

「まあ、情報収集は得意ですから。」

得意げに話す少女。

勇人には、その言葉に聞き覚えがあった。

（まさか・・・）

もう一度その少女の顔を見つめてみる。確かに、どことなく見覚えがある。

そこで、勇人は少女に聞いてみた。

「あのさ、君のお母さんってもしかして花菱美希さんじゃない？」

すると、少女はそのまま笑顔で答えた。

「ええ。お母さんは旧姓が花菱で名前は美希ですけど。」

花菱美希。瀬川泉と同じく生徒会3人娘の一人で動画研究部の一員。彼女の事も、勇人はハヤテから聞き、また顔もアルバムを見て知っていた。

ハヤテの話では、彼女は大学で出会った男性と駆け落ちして結婚し、その後の消息は不明であった。まさかこんな近くにその血を引く人間がいるとは。

（これで朝風理沙さんや春風千桜さんの子供にでも出会ったら偶然どころの話じゃないよな。）

ふとそんな事を考える勇人。

「あの、先輩。どうしてお母さんのことを？」

「え！？お母さんから聞いてないの？」

「何にも。お母さん、あんまり昔の事は話したがらなくて。」

勇人はハヤテの話を思い出す。

（そういえば、確か花菱さんは政略結婚を嫌って家を出たって言うてたっけ。）

だったら昔のことはあまり思い出したくないはずだ。勇人もなんとなく、言うのは気が引けた。そこで話題を変える事にした。

「まあ、また話すよ。ところで、他に部員はいないの？ 部室の中はガランとしてたけど。」

「ええ。先輩たち全員卒業しちゃって、新入生も入らなくて、今は私一人だけです。」

「なるほどね。けど、だったら存続の危機だよね。」

普通文科系の部員は3〜5人程度はいなければ結成は認められない。1人ではどうにもならないはずだ。

「そうなんですよ。先生に何とか頼み込んでいるんですけど、来週中に2人集めないと廃部になっちゃいます。だからなんかインパクトがあることをしようと思って。」

なるほど、愉快犯的動機ではなかったのか。

「けどさ、この紙どこが発行したか書いてないよね。宣伝にはならないと思うよ。」

「あ!？」

どうやら彼女、一本抜けている所があるようだ。

「まったく。ここまで来ると逆に哀れに思っよ。」

「うっ……」

勇人はそこで、机の上に結成願いとメンバー表があるのに気付いた。そしてメンバー表を取ると、それに自分の名前を書き込んだ。

「はい。」

「え!？」

驚く少女。

「どうせ今入っている部活なんかないし。幽霊になっちゃうかもしれないけど、取り合えず、これくらいはしてあげるよ。だから、もう馬鹿な事は考えるなよ。」

すると、あまりに嬉しかったのか、少女は勇人の右腕に抱きついてきた。

「先輩、ありがとうございます!！」

もちろん、勇人は仰天してしまった。

「うわ!抱きつくな!」

「あ、ごめんなさい。嬉しくて、つい。」

「ところで、名前まだ聞いてなったね。」

そういうと、少女はにっこり笑って言った。

「川西由希です。中等部の3年生です。よろしく。」

こうして、ビラに関する騒ぎは一応決着した。しかし。

「勇人君!!」

勇人が下校しようとした所、真理奈と櫻が校門で待ち構えていた。しかも、明らかに不機嫌な表情をして。

「うわ! 2人ともどうしたの?」

勇人が聞くと、真理奈が無線機の受信機を取り出した。

勇人が慌てて服を探ると、案の定内ポケットから盗聴器が出てき

た。

（どこからこんな物手に入れたんだ？）

と思いつつ、聞いてみる。

「まさか・・・全部聞いてたの？」

「ええ、もちろんです。」

真理奈は笑って言うが、明らかに怒りの笑顔だ。

「勇人君、抱きついたってどういうこと？」

そういう櫻も怒りの笑顔。おまけに手には木刀正宗が。

（ヤバ！！）

勇人は次の瞬間逃走に入った。

「勘弁してくれ！！」

「「待ちなさい！！」」

結局、この日最後の最後まで女性に関わる問題に振り回され続けた勇人であった。

画像研究部の少女（後書き）

川西由希は体型などは母親似で、髪型は黒のショートカット。性格は情報を集めるのが得意で悪戯好きですが、間の抜けている所があります。そして勉強は得意です。

思い出を辿る道 上

季節は6月になった。制服は夏服になり、梅雨が始まる。そして、中間テストという最初の試練もこの月である。（このシリーズでは白皇は2期制）

ただし、勇人や紫、真理奈そして櫻にしてみれば中間テストを恐れるような要素は何もない。勇人は数学が不得意であるが、あくまで紫と比較しての話で、平均プラス20点ぐらいなら充分取れる。

しかし、そうでない生徒たちには毎日続く雨とともに厄介な問題である。特に、高校生になると単位を取るためにも絶対に見逃せない問題である。

その地獄の週間が終わると、あとは夏休みへ向けて一直線である。

そして、この日はテストの最終日だった。

「やっと終わった!!」

美沙が言った言葉は誰もが思うことであつた。

テスト最終日は金曜日。この後2日間の休日を挟んでテストが帰ってくるのであるが、とにかく一段楽した事には変わりなかった。

「ねえねえ、勇人君？」

美沙は帰る準備をしていた勇人に声を掛ける。

「何？美沙さん？」

その言葉に、真理奈と櫻、そして男子陣の視線が厳しくなる。特に、真理奈と櫻の視線は強烈だ。しかし、勇人はもう慣れていた。というか慣れざる得なかった。

「今日部活来れる？」

「ええと、今日は生徒会は確かなかったから行けるよ。」

「じゃあ後で部室でね。」

そうして美沙は部屋から出て行った。恐らく学食へでも向かったのだろう。一方、勇人も厳しい視線にさらされながらも、なんとか教室を脱出する。

「ふう。」

部屋から出た所で安堵の溜息をつく。

「大変だな。」

柱にもたれかかって待っていた紫が声を掛ける。

「ああ。真理奈と櫻がそれぞれ部活に入ってくれていて助かったよ。」

真理奈と櫻が視線だけで行動を取らないのは、自分のたちの部活へ直ぐに行く必要があるからだ。

「じゃあ私たちも部活に行くか。優は先に言ったよ。」

「わかった。」

2人は部室へと向かって歩き始めた。

前回の話で、勇人は成り行きで画像研究部に入った。その後、結局部員が不足した由希に泣き付かれ、勇人は他の人間も誘う羽目になった。

新たに画像研究部に入ることになったのが、紫と美沙、そして優である。

紫は特にやる事も無くて暇だから、美沙は面白そうだから、優も同様の理由でOKしてくれた。

もともと、画像研究部とは言うが、実際には他に映画研究部もアニメ研究部もあるから、やっていることは昔の映像を見ながらお菓子食べて雑談するぐらいである。

しかし、この日は違っていた。

先に部室で待っていた由希、そして昼食を食べてやってきた美沙も加わった。そこで、唐突に由希が提案した。

「今日は地下室の映像でも見てみますか？」

「『『『地下室』』』」

この部室にそんな物があるとは4人とも知らなかったため、驚き

の声を上げた。

「ええ。なんでも昔ここで爆発事故があったから、新たに作られたらしいですよ。」

そう言った途端、優の表情が少し気まずそうな物になる。

「どうしたんだ優？」

紫が声を掛けるが。

「なんでもないです。」

結局、それ以上追求するのはやめた。

そして5人は地下室へ。

由希が鍵を開け、電気をつけると、そこには棚一杯のDVDやCD、VHSが置かれていた。

「へえ、すごい数あるな。」

勇人が簡単の声を上げた。

「そりゃあ20年分ですから。」

「どこかにお宝映像でもあるかもしれないな。」

そんなことを皆で言いながら、おもしろい映像や音声がないか探し始めた。

すると。

「これは？」

「ゴーゴー生徒会タンケンジャー・・・ドンペリ怪人ユキジン。」

（ユキジンって、絶対に桂先生だよな。あ、そういえばあの人が結婚する前は大酒のみだったって言ってたっけ。）

勇人はそのCDを無視して別の物を探してみる。すると今度は。

「えー！」

そのCDのジャケットには父親のハヤテの姿が。しかも女装して。

それを見て勇人は、タイトルを読む気さえ失せてしまった。

（そう言えば父さん、昔良く女装させられたって言ってたな。まずいな、この写真をあいつら（女性陣）に見せたら僕の貞操も危ないかも。）

彼は気付かないように、そのCDを懐へ入れた。

そして、さっきと同じように棚の中を探し始めた。

およそ30分後、それを見つけたのは紫だった。

「あーおいみんな、おもしろそうそうなDVD見つけたぞー！」

その言葉に、全員紫の基へと集まる。

「「「何!?!」」」

「これだ。」

紫が一枚のDVDを差し出した。

彼女が持っているDVDには、「2007年度卒業記念DVD」と書かれていた。

思い出を辿る道 上（後書き）

御意見などをお待ちしています。

思い出を辿る道 中

地下室で見つけ出したDVDを、5人は早速見てみる事にした。

「この年の先輩たちは一体どんな映像を残したんだろう?。」

由希がDVDデッキにDVDをいれながら興味津々の態度で言う。
それはまた他の4人にも言えることだった。

そして、彼女は再生のスイッチを押した。

すると、テレビの画面に一人の少女が映った。

「美希ちゃん、ちゃんと映ってる?。」

「うん、映ってるぞ。」

その少女が撮影している人間に声を掛けている。そして撮影している方もそれに答えている。すると、美沙が驚きながら言った。

「お母さんだ!。」

そう、画面に映っているのは20年前の瀬川泉その人だった。

そして、美沙と同時に由希も声を上げた。

「美希って……しかもあの声。もしかしてカメラを回してるのはお母さん?。」

勇人はハヤテから話を聞いていたので、多分そうだろうと思った。
そして映像は進んでいく。

「美希！泉！早くこっちに来なさい！！」

2人を呼ぶ声がある。この声には全員聞き覚えがあった。理事長のヒナギクだ。

「あ、ヒナ。」

「ごめんごめん。」

カメラの視点が変わると、複数の人間が映し出された。そして、その人物を見て、今度はハヤテや紫が声を上げた。

「母さんに父さん・・・ヒナギクさんもいる。」

「それに健二さんや伊澄さん・・・ワタルさんもいるぞ。」

20年前の映像なので、皆制服や執事服を着ていて多少今よりも若く見えるが、見間違えるはずも無かった。

もう一人、少女が映っているが、勇人には見覚えがあった。

「あれは確か朝風理沙さん。」

映像には20年前のハヤテの友人達が映し出されていた。

「この年の卒業生は父さんたちだったんだ。」

5人は映像を食い入るように見つめる。

すると、画面の中央に何か金属製の容器が映し出された。

（（（（何だろう？）））））

「今日はこのタイムカプセルを埋めるんですね。」

画面の中のハヤテが言った。どうやら容器はタイムカプセルのようだ。

「この白皇とともに時間を過ごした証としてね。」

ヒナギクが言う。

「20年後にちゃんとここにいる全員で掘り返せると良いね。」

泉が言う。

「20年。父さんたちが白皇卒業して20年だと今年だよな、勇人？」

紫が言った。

「ああ。父さんたちそんなこと言ってなかったよな。もしかして忘れていたのかな？」

勇人と紫がそんな会話をする。その間にも画面は進んでいき、カプセルを埋めるシーンとなった。そして、それが終わると、一人の

少女が映し出された。花菱美希だ。

「このDVDを見ている後輩諸君。もしかしたら私たちはこのタイムカプセルのことを忘れているかもしれない。その時は良かったら私たちに知らせてくれ。」

と、別の少女が画面の中に入る。理沙だ。

「もし見つけてくれたら。お礼として瀬川泉の恥ずかしいシーン満載のDVDをプレゼントするぞ・・・フ。」

彼女が言い終わると、今度は泉が画面に移りこんだ。笑って泣きそうな顔で。

「ふえーん。2人ともひどいよ・・・なんでそんなにいじめるの！本当に泣いちゃうぞー！！」

と、さらにハヤテが映る。

「そうですよ、2人ともそんなに瀬川さんをいじめちゃ可哀想ですよ。」

「美希に理沙。いいかげんにしなさい！！」

今度はヒナギクだ。

「こら、お前たちばかりカメラに映るな！！私も入れろ！！」

さらにナギが乱入した。さらに伊澄やワタルもフレームの中に入ってきて、もう滅茶苦茶である。そして唐突に映像は途切れ、テレ

ビの画面は砂嵐になってしまった。

「「「「「・・・」」」」」

しばし沈黙する5人。

「最後すごいグダグダだったね。」

美沙が言った。

「うん。けど、父さんや母さんたち本当に忘れてるのかな?」

勇人にはそれが気になった。

「じゃあ私たちが掘り出しちゃう?」

紫が提案した。

しかし、優が言った。

「けど、これってお母さんたちのタイムカプセルですよ。私たちが掘り出しちゃうのはまずいんじゃない?」

「優ちゃんの言う事もっともだよね。」

美沙も同調した。

「けど私も掘り出してみたいなあ。」

紫の意見に同調したのは由希である。

「2対2か・・・勇人はどっちが良い？」

意見を聞かれ、一瞬勇人は迷った。

「え！？そうだな・・・まあ確かに掘り出しては見たいけど、やっぱり父さんたちの物だし、父さんたちに言った方が良いと思う。」

結局、この勇人の一言によって、タイムカプセルの事はそれぞれの親に確認を取ってみることとなった。

思い出を辿る道 下（前書き）

キャラが多いという指摘があったので、キャラの紹介を行っています。

オリジナルキャラクター 1

綾崎勇人・・・ハヤテとナギの息子。16歳。白皇学院高等部1年生。妹の紫とは双子で、勇人は兄。顔は父親のハヤテ似だが髪の色は母親のナギと同じで金髪。体重、身長はハヤテと同じ。性格はハヤテから教育されたので、女性への対応の仕方はハヤテより上手い。そして、女子からの人気が高い。

思い出を辿る道 下

「いやあ、タイムカプセルのことすっかり忘れていましたよ。」

ハヤテが笑いながら言った。

「私もすっかり忘れていたよ。」

これはナギのセリフだ。

「けどハヤ太君やナギちゃんに会えて私すごく嬉しいよ。」

娘と並んで笑顔満面にして言うのは瀬川泉だ。

今ここにいるのは三千院（綾崎）親子に瀬川親子、川西親子（旧姓花菱）、橘親子、そして桂親子だ。

「それにしても父さんたち本当に忘れているとは思わなかった。」

勇人が呆れながら言った。

DVDを見たその夜、勇人たちはそれぞれの親にタイムカプセルのことを話したが、ハヤテをはじめとして、親たちは全員そのことをすっかり忘れていた。そこで、ハヤテとナギがそれぞれに連絡をして今日、そのカプセルを埋めた場所に集まっていた。

ちなみに、ここはグラウンドの隅にある松の木の下である。

「まあ全員忙しかったからな。」

そう言うのは美希だ。

「そうだね美希ちゃん。」

泉が同調して言う。

「2人に合うのは・・・確か15、6年ぶりよね。」

ヒナギクが感慨深げに言った。

「お2人とも相当苦労されたそうですね。けど、お元気で何よりです。」

伊澄が言う。既に、2人のことは聞いていた。

「ただ、理沙ちゃんがまだ来てないけどね。」

「朝風さんは、どうしたんでしょうか？」

ハヤテが美希に聞いてみる。

「私にもわからないんだ。何せ10年以上会ってないから。一応手紙を出しておいたが。」

美希は白皇卒業後大学へ、泉は短大に進学した。しかし、理沙だけは家業を継いだ。卒業後は会う機会もめっきり減り、そして泉と美希の結婚後には音信不通となってしまうていた。結婚したものの早くに母子家庭となった泉、駆け落ちし東京から離れていた美希は同窓会に出ることもなく、2人が顔を会わせたのも今日が16年ぶ

りなのだ。

そして、3人娘の1人であつた理沙は今ここにいなかった。ハヤテたちが八方尽くして連絡を試みたが、全くわからなかった。彼女の実家の神社は他の宮司さんが今は管理していて、朝風一家がどこへ行ったのかわからなかった。

「じゃあどうします？朝風さん来てませんが、先に掘り出しちゃいますか？」

「まあ後から渡せば問題ないだろ。」

ハヤテの言葉を後押しするようにワタルが言った。

「そうですね。じゃあ掘り出しますか。勇人、手伝え。」

「わかつてるって。」

2人はシャベルを持ち上げた。

と、その時。

「ひどいな、私を差し置いて先に掘り出すなんて。」

「「え!!」」

その場の全員がその声がした方に顔を向けた。

そこには、白皇の制服を着た女子が立っていた。その姿は、かつての朝風理沙に瓜二つだった。

「そんな・・・」

「理沙ちゃん・・・」

そう口にした美希と泉を始めてとして、全員狐に包まれたような顔をしてしまった。

それを見て、その少女が笑い始めた。

「フフフ・・・ごめんなさい。私そんなにお母さんに似てたかしら？」

「お母さん？じゃあ君は理沙の娘なのか？」

美希が訊ねる。

「ええ。朝風理沙は私の母です。私は娘の中島利恵です。」

姿は理沙と瓜二つだが、口調は全然違う。そのギャップの差に、ハヤテたち彼女を知っている人間は戸惑ってしまう。

「ごめんなさい。驚かせてしまつて。」

違和感が抜けないが、取り敢えず話を先に進めることにした。

「で、なんで娘のあなただけなの？理沙はどうしたの？」

ヒナギクが聞いてみた。

「はい。・・・母は6年前に死にました。」

引き継がれた想い（前書き）

オリジナルキャラ2

綾崎（三千院）紫・・・ハヤテとナギの娘で勇人の妹。容姿はナギそっくりだが髪の色はハヤテ譲りの空色。性格はナギほど自己中心的でなく、また世間一般の常識はしっかりわきまえている。ナギと違って絵が下手だが、本を読むのと書くのが好き。また、体力もハヤテや勇人に及ばないが良い。

引き継がれた想い

「どういうことなの？」

泉が理恵に聞く。その表情は不安の表情をしていた。

（嘘だよ。信じられない。嘘って言って!!）

彼女は心の中でそう思っていた。しかし、理恵は嘘と伝えてくれなかった。

「母は、6年前に家族旅行の帰り道の交通事故で死にました。お父さんもお爺ちゃんも。私だけが助かりました。母が私を抱きしめてくれたおかげで、私は助かりました。」

希望は裏切られた。

「そんな・・・」

泉は夫に先立たれている。これ以上親しい人の死を見たくもなかったのに、突きつけられたのは厳しい現実だった。

「お母さん。大丈夫？」

友の死を知らされ、顔色を悪くした母に、美沙がよりそった。

「うん。大丈夫だよ。」

「そうか。理沙が・・・じゃあ君は今どうしているんだい？制服を

着ているんだから白皇の生徒なのかい？」

今度は美希が聞く。

「今は横浜のおじさんの家に住んでいます。この服は母の遺品の中にあつたものです。今日のことは、以前住んでいた神社の方が、わざわざこつちの住所を探し出して知らせてくれました。昨日連絡が来て。あの、花菱美希さんですか？」

「え！？そうだけど。」

いきなり名前を尋ねられ、少し驚く美希。

「あ、やっぱり。母の大切にしていたアルバムの写真の女の子に似ていたの。じゃあ、そちらは瀬川泉さんですか？」

「そうだよ。で、こつちが娘の美沙ちゃん。」

泉が娘を紹介した。

「よろしくね理恵ちゃん。」

「こちらこそ。」

「私の娘も紹介するよ。由希だ。」

美希も娘を紹介した。

「川西美希。よろしく。」

「よろしく。」

3人はお互いの笑顔で見合った。

その光景は、かつての3人娘を思わせるものがあった。

（あ・・・）

（懐かしい・・・）

美希と泉は何かデジャブみたいな物を感じた。

だが、親友の一人が知らぬ間に消えてしまったことはやはり2人にとって大きな衝撃だった。

泉の口から自然に言葉が出た。

「理恵ちゃん。今度お母さんのお墓を教えてくださいかな？」

泉が聞いた。

「はい。母もそうしてもらえると喜ぶと思います。」

「あのいい所すいませんが、タイムカプセルを掘り出しましょうか。」

ここまで思いつきりハブられていたハヤテの言葉に、5人は現実
に引き戻された。

「あ、そうだったなハヤ太君。」

「ごめんね。」

というわけで、早速ハヤテとワタル、さらには勇人や光たちがシ
ヤベルを使つて地面を掘り始めた。

しかし、意外と深く埋めてしまったのか、中々見つからなかった。

ようやく勇人のシヤベルの先に金属の物体が触つたのは20分後
のことだった。

「あつた!!」

その後、慎重に周りの土を掻き分け、カプセルが完全に掘り出さ
れた。

蓋が外され、それぞれが20年前に入れたものを取り出した。

20年前に埋めたのは、それぞれ思い出の品と手紙である。

埋めた品は様々だった。ハヤテは白皇の生徒手帳。ナギは最初に
作った同人誌。ヒナギクは生徒会長の腕章。ワタルは、DVD。伊
澄は何故かよくわからないがお札。泉は髪飾り。美希は当時情報収
集に使っていた手帳。

そしてそれぞれ手紙を読み、笑ったりした。

そして、最後に主を失った理沙の品は理恵が取り出した。包みに包まれていたのは細長い物だった。

「これ、マイク？」

「それは理沙が部活で使っていた物だ。」

そして、彼女は手紙を開いた。

20年前、理沙が未来の自分に宛てて書いた手紙。

何を書いてあったかは、理恵以外に知る者はいない。ただ、彼女が涙を流したことだけは事実だった。

彼女はお礼を言うと、静かに去っていった。

夏の恋 上（前書き）

オリキャラ3・・・綾崎（三千院）優。小説版で登場したナギのドッペルゲンガー。20年ぶりに登場し、三千院家に復讐を試みるが、伊澄の息子の光によって実体化し、ならびに悪しき心を浄化された。その後、戸籍上次女という形で三千院家に加わっている。姿形、能力はほぼナギと同一だが、良心の塊のためナギほど歪んではない。飛び級編入し、白皇の高等部1年生。

夏の恋 上

タイムカプセルの掘り出しから一ヶ月。もうすぐ夏休みを迎えようとしていた7月の初旬のある日の夕方、勇人は図書室にいた。

その隣には瀬川美沙の姿もあった。

なんで2人がここにいるかというところ、勇人が美沙に勉強を教えたのだ。

ここ最近勇人は部活や生徒会に忙しくなり、フリーの時間は大分減った。そのため、美沙の勉強を教えるのは1週間に1回程度だ。

美沙はこの週1回、勇人と2人きりになれる時間を非常に楽しみにしていた。

こうして勉強を教えてもらうようになっておよそ2ヶ月。その間に美沙はさらに勇人に惹かれていたからだ。

勉強が終わると2人はいつも途中まで一緒に帰るのだが、その間、勇人は何かと美沙に親切にしていた。お菓子を奢ってあげたり、生徒会の相談に乗ったりした。

こうした行為が、美沙の勇人に対する好感度を大いにアップさせていた。

一方の勇人も、美沙に惹かれている自分に気付いた。今まで接して来た誰とも違う、彼女の素直さや、裏表のない所が非常に魅力的に見え、そこに惹かれていたのだ。

そしてこの日、2人は勉強会を終え帰ろうとした。その時それに気付いたのは勇人だった。

「あ、雨が降ってる。」

外を見るとポツポツと雨が降り出していた。

「え！？私今日傘持っていないのに。」

先ほどまで晴れていたのに、雨が降り始めていた。俗に言う夕立である。そんな予期せぬ雨だったため、美沙は傘をこの日持ってきてはいなかった。

「置き傘は？」

「こないだ家に持って帰ったままにしちゃって。」

美沙が憂鬱そうな表情をする。それを察して、勇人が言った。

「だったら僕の傘を使つと良いよ。」

勇人は気軽に言った。彼にしてみれば、人を気遣うのは大切な事だったからだ。これは、父親であるハヤテから、「他人への心配りと、気遣いは常に心がける事。」と何度も教えられていたからだ。

実際、そうした方が自分にとっても良い結果を生む事を勇人は経験則で知っていた。まさに、情けは人のためならずである。（情けは人のためではなく、自分のために掛けるという意味。）

しかし、言われた美沙にとっては驚きである。

「ええ！！だってそれじゃあ勇人君濡れちゃうよ！！」

美沙にしてみれば、雨の中傘もささずに歩くなど論外の話であったのだ。しかし、勇人は普通に言った。

「いいよ。僕はそのまま走って行くから。」

体力に自信のある勇人にとって、雨の中を走っていくことなど朝飯前である。しかし、美沙はそんな事を知らず、彼が必要以上に自分に親切にしているように感じた。

「そんなの悪いよ。だったら、2人で一緒に行こうよ。」

「え！けど、それだと2人で一本の傘を使うことになるよ。濡れるよ、絶対に。」

置き傘は折り畳みであるから小さい。とてもではないが2人をスッポリ覆うことなど出来ない。二人とも多少なりと濡れてしまう。

しかし、美沙は嫌そうな表情をしなかった。

「別にちよつとぐらいなら私はかまわないよ。私のせいで勇人君が全身ずぶ濡れになるよりは良いよ。」

結局、折れたのは勇人だった。これ以上反論すると、逆に失礼になるかもしれないと考えたからだ。

「そこまで言うなら、それでも良いよ。」

そして10分後、夕立の下、小さな傘に入って歩く2人の姿があったが、この時勇人は大いに後悔していた。

（やっぱり断るべきだった。）

小さな傘に入るため、2人はギリギリまで距離を詰めていた。つまり、勇人に寄り添うように美沙が歩いていた。これは相当緊張する状況だ。

この時まで、美沙に対しては、勇人はかなり惹かれる感じはしてきたが、まだ恋愛感情までには達していなかった。しかし、勇人の心のバロメーターは急激に動いている。自然と美沙に対する心遣いの気持ちが大きくなっていく。

そんな状況下でも、傘に隠れる面積が美沙に広くなるようしているのはさすがであった。

一方で、美沙も複雑な気持ちだった。

（こ、こんなに勇人君と接近してるよ。嬉しいけどなんか恥ずかしいよ。）

この時勇人には見えなかったが、美沙の顔は真っ赤だった。

「ごめんね美沙さん。」

突然勇人が謝った。

「え！？なんで謝るの？」

「いやだって、窮屈な思いさせちゃって。」

これは美沙にとって本当に衝撃なことだった。

（勇人君。そこまで気にしてくれるなんて・・・）

「そんな。謝らなきゃいけないのは私だよ。傘を忘れた私がいけないんだよ。」

「いや、でもやっぱり僕が譲るべきだったよ。ごめん。」

勇人にさらに謝られて、美沙の心が熱くなる。

（なんだろう。すごい勇人君にときめく・・・これってやっぱり・・・恋！？）

いつのまにか、雨は止んでいた。夕立後のムシムシと暑いとき。二人の心も熱くなっていた。

夏の恋 上（後書き）

御意見などをお待ちしています。

夏の恋 中（前書き）

オリキャラ4 姫神真理奈・・・ハヤテの兄である勝とマリアの娘。勇人と紫の従姉妹。容姿はマリアと瓜二つで、違いは眼の色。性格もマリアそっくりだが、弓道部に所属していてその腕は全国レベル。時々メイドとしてマリアを手伝っている。勇人が好きな女子の一人。

夏の恋 中

雨はやみ、丁度2人の周りに人影はない。都会には珍しいシーンとした空気が2人を包んでいた。

夕立の後で、すごくムシムシと暑かったが、それにあわせるように美沙の心の中の温度は急激に熱くなっていた。

（なんだろう！？とてもドキドキする・・・これってもしかして・・・私本当に勇人君に恋しているってこと！？）

美沙は勇人と会って以来、彼の事が好きであった。ただし、それはまだ漠然とした物で恋と思えるものではなかった。だが、今回のこんな事を感じるのは今までで初めてだった。

「あ、雨止んだね。」

勇人は傘を置んだ。そして気付いた、美沙が顔を真っ赤にして俯いてしまっているのを。

「美沙さん？大丈夫？」

勇人は彼女の顔を覗き込むように言った。

「ふえ！！」

勇人に声を掛けられ、我に帰る美沙。

「あ！ごめん。大丈夫、なんでもないよ。」

美沙はそう言って誤魔化した。

「本当に？顔が随分赤いみたいだけど、熱でもあるんじゃない？」

相手が多少なりと惹かれていた少女とはいえ、さすがに病気であったら大変である。彼の中で、先ほどの少し浮ついていた気持ちから一転して、彼女を心配する気持ちが大きくなる。

そこで彼はある行動に出た。

彼女のおでこを手で触ったのだ。しかも顔をかなり近づけて。

相手が風邪であるかもしれないなら、誰でもやる行為である。

しかし、この時の美沙の心は平常心を失っていた。

（え！え！！ちょ、ちょっと！？！？）

彼女の心の中の緊張と興奮の針が一気にレッドゾーンに突入した。そして、その針はついに振り切れてしまった。

「うーん・・・熱はないみたいだね。けど調子悪いならどこかで休む？」

「・・・」

美沙は何も言えず固まってしまっていた。

「美沙さん？」

「・・・」

彼が声をかけても何も言わない。そして。

ボタン！という音を上げて彼女は倒れてしまった。

「み、美沙さん！！」

興奮と緊張のあまり、ついに彼女は気絶してしまったのだ。

「ちょ、ちよつと大丈夫！？」

勇人が体を揺さぶってみるが何の反応もない。

「ど、どうしよう？」

目の前で倒れてしまった少女を見つめながら、彼は呟いた。

「うーん・・・」

美沙が目を覚ますと、そこは見慣れない部屋だった。

「じ、ここはどこ？」

彼女は自分の記憶を整理してみる。

（えっと・・・確か勇人君が私のおでこに手を当てて・・・それで私すごく緊張して・・・それで・・・どうしたんだっけ？）

そこから先の記憶は全くない。

「私いったいどうしちゃったんだっけ？」

とりあえず自分が今どういう状況に置かれているか確認する。

やたら広い部屋だ。そこに置かれた大きなベッドの上に今自分はある。まるでホテルのようだ。

美沙はベッドから出る。

そしてその時になって気付いた。今着ている服が制服ではないと。

「え！？」

いつのまに着替えさせられたのか、彼女が着ているのは真新しいパジャマだった。

「一体どういうこと？」

ますます訳がわからなくなってきた。

彼女が少し混乱していた時、部屋の扉が開いた。

入ってきたのはメイド姿の女性だった。

「あら、お目覚めになったんですね。」

「え！？あ、あのここは？」

「心配する必要はありません。三千院家の屋敷です。待ってて下さい。今勇人君を呼んでくるので。」

そう言うのと、メイドは外へと出て行ってしまった。

美沙は今の短い会話から状況を整理する。

（え、ええと。じゃあここは勇人君の家！！？？）

大正解。

そして1分後、今度は扉がノックされた。

「ど、どうぞ。」

扉を開けて入ってきたのは勇人と紫であった。

「勇人君に紫ちゃん！！私一体どうしちゃったの？」

「美沙さんは気絶したんだよ。」

まず勇人が言った。

「そう。そこに私が通り掛って、すぐに屋敷の人に電話してここまで運んでもらったわけ。けど驚いたよ、本屋の帰りみち、歩いていたら勇人が倒れた女の子の側にいたんだから。けどよかったな」と

もなくて。」

「まったくだよ。いきなり倒れて・・・すごい焦ったよ。」

「そうだったんだ・・・迷惑掛けちゃったね。」

「何言ってるの、困った時はお互い様。」

「紫の言つとおりだよ。けどいきなり気絶するなんて・・・さっき診てもらった医者は何ともないって言ってたけど、本当はどうだったの?」

「え!??」

まさかいきなり、あなたのことにドキドキして緊張してしまい倒れましたなんて言えない。

「ええと・・・」

美沙は口ごもってしまった。その目はチラチラと勇人を見る。その顔は先ほどではないが、少し赤い。

それを見た紫は言った。

「勇人、少し部屋から出てろ。」

「え!??なんで?」

「いいから!?!」

紫の気迫に押されて、しゅしゅ彼は部屋から出た。

「まったく、勇人は・・・ごめんね美沙。鈍感な兄で。」

「わかったの？」

「もちろん。勇人のことが好きなんですよ？」

夏の恋 下（前書き）

オリキヤラ5・・・桂櫻。15歳。ヒナギクと三千院家執事である健二の娘。一年だけ飛び級し勇人や紫と同じクラス。髪はヒナギク譲りのピンク色だがショートにしている。才色兼備そのまま、ヒナギクと同じく生徒会長を務めている。そして伯母の雪路には厳しい。勇人を好きな女子の一人。

夏の恋 下

「勇人のことが好きなんですよ?」

凶星だった。

その言葉に、美沙の顔は赤くなった。そして小さく頷いた。

「うん。」

「やっぱりね。まったく、勇人は本当に女たらしね。どうしてこうも女の子にもてるのかしら?」

紫にはそれが不思議でたまらない。彼女にとって確かに勇人は頼りになる人間かもしれないが、そこまで惹かれる人間とは思えないからだ。

「そうかな、勇人君は優しいし、かつこいいからもてるんじゃないの?」

これは美沙の率直な答えである。

「けど父さんほどじゃないけど鈍感だよ?」

紫の言葉に、美沙はクスッと笑った。

「確かにそうかもね。」

美沙自身、それは感じていることだった。彼女自身やライバルで

ある櫻や真理奈の行動に対して、勇人の反応は冷やややかだったからだ。

「けど・・・それでも勇人君のことは好きだよ。」

「美沙は結構一途なんだね。まあ真理奈や櫻もそうだけど・・・けどそれなら早く告白しないと取られちゃうわよ。美沙だって真理奈が勇人に告白した話聞いてるでしょ？」

「うん。」

美沙にしてみれば、早く告白したい気持ちはある。しかし、恥ずかしいのと断られるかもしれない恐怖もまた大きかった。

「もしかして怖いのか？」

「それもある。」

「けど、怖がってたら本当に手遅れになっちゃうよ。後で後悔するより、駄目でも良いからやっておくべきじゃないのかな？」

紫がそう言っても、美沙が簡単に踏ん切りをつけられる筈がない。当事者と傍観者ではまったく立場や状況、なによりも気持ちが大きく違うからだ。

と、そこで紫はそれに気付いた。

「・・・勇人！扉の側にいるんでしょ！？」

それは扉の側に誰かがいる気配。

案の定開いた扉から入ってきたのは、勇人本人だった。

「今までのこと全部聞いてたの？」

「いや。その、それは。」

しどろもどろになりながら答える勇人。答えは明らかだ。

「まったく。だったら事情はわかってるわね。」

そう言っていると彼女は扉の方へ向けて歩き始めた。

「後は勇人が美沙をなんとかしてあげなさい。」

そう言っで、彼女は部屋から出て行ってしまった。後には美沙と勇人が残された。

「ええと・・・勇人君、話聞いてたの？」

美沙が聞くと、勇人は少し視線をずらしたが、答えた。

「うん。・・・ごめん、盗み聞きは良くないと思ったんだけど・・・」

普段なら、そこまでして聞きたくなる事はない。しかし、何故か今回は扉から離れられず、二人の会話を盗み聞きしてしまった。

「そう。・・・盗み聞きは良くないけど・・・じゃあ私の言った事わかつちやっただよね？」

美沙が顔を赤くしながら聞くと、勇人も少し顔を赤らめ、コクンと頷いた。

「「・・・」」

しばしの間二人は黙ってしまった。

（（どういえばいいんだろう？））

だが、いつまでも黙っているわけにはいかない。そして、勇氣を出して言葉を紡いだのは。

「あの、勇人君。」

美沙だった。

「はい？」

「その・・・私・・・聞いたかもしれないけど・・・もう一度言うね？」

「うん。」

「私。勇人君のことが好きになっちゃんだ。」

美沙の顔はもうそれまでに無いほど真っ赤だった。心臓も張り裂けるぐらいに鼓動を早くしていた。

「その・・・友達としては前から好きだったんだけど・・・それ以

上に今は好きなの・・・」

ついに告白した美沙。それは彼女にとって一世一代の告白だった。

一方、言われた勇人の顔も真っ赤だ。しかし、その心の内は、これまでにないほど嬉しかった。

すぐにでも、「僕もです。」と言いたかった。しかし、断った真理奈や櫻のことが頭に浮かび、どう言って良い物が迷う。

（すごく嬉しい・・・けど、素直に受け入れて良いんだろうか？）

このあたり彼らしい。だが、優柔不断に答えを引き伸ばすのも、かえっていけないことと考えた。

本当に自分が好きな人は誰か考えてみる。

そして、彼が出した結論は。

「あの・・・その・・・僕は・・・」

美沙は不安そうな表情で、次の言葉を待った。

「僕は・・・いや、僕も・・・あなたのことが好きです。」

言い終えた勇人の顔も真っ赤だった。

そして、美沙の表情は一気に明るい物となった。だが、勇人でも予想できなかったのは、彼女が次に起こした大胆な行動であった。なんとベッドから起き上がると、彼女は勇人に抱きついてきたのだ。

「ありがとう!!」

「わ!!」

「本当に・・・ありがとう。」

その言葉は、勇人の心にジーンと響いてきた。いつのまにか、勇人は彼女を抱きしめていた。

しばらく抱き合っていた二人だが、しばらくして、勇人が彼女から離れた。

「どうしたの？」

「静かに。」

彼は扉のそばまで行き、勢いよく開けた。すると、紫にハヤテ、ナギにマリアが倒れこんできた。

「あんたら何をやっとする？」

勇人の声には少し怒気が含まれていた。

それを察した女性陣はあっという間に逃げてしまい、後にはハヤテだけが残された。

「あ、そんな薄情な・・・」

一人だけ、置いてかれてしまった。その彼に、息子が迫る。

「父さん!？」

明らかに怒っていた。

「あははは・・・ごめん。ごめん。」

「まったく、なんで父さんまで盗み聞きしてるんだよ。」

「お前が彼女を連れてきたって紫が言うから、どんな娘かと思って瀬川さんの娘さんか。・・・勇人、しっかりやれよ。」

盗み聞きの事は棚上げにして、息子にエールを送るハヤテ。笑顔で言われ、勇人の怒気も自然に消滅してしまった。

なんとか息子の怒りの炎を消せた勇人は二人に促した。

「さ、二人とも。夕食も丁度出来た所なんだ。食堂へ早く来なさい。」

そしてハヤテも先に行ってしまった。これはハヤテなりの気遣いだった。

「まったく父さんも母さんも・・・ま、そういうわけらしいから、行こうか美沙。」

「ふえ!？」

初めて呼び捨てにされた。

「やっぱ嫌だった？」

「うん。嬉しいよ。これからもよろしくね。」

「じゃあ行こうか。」

勇人が彼女の手を取った。

「うん。」

夏の恋 下（後書き）

御意見などをお待ちしています。

夏休みも恋の予感（前書き）

オリキャラ6・・・橘光伊澄たちはなみつるとワタルの息子。中学3年。外見はワタルそっくりだが、アニメなどにはまったく興味はない。書道や茶道に興味を持っている。伊澄と同じ程度の能力を持っている。

夏休みも恋の予感

勇人と美沙が両思いになったのは良かったが、問題も発生した、櫻と真理奈である。

二人ともさすがに勇人と美沙の間を引き離すようなマネをするほど子供ではなかったが、さすがに心理的ダメージは大きかった。

なにせ、付き合いがそれなりに長い自分こそはと思っていたのに、突然表れた美沙に勇人をネコババされた形であつたからしょうがないと言えましょうがない。

しかし二人とも悲しみに打ちひしがれていた時間は極めて短かつた。自らが負けたことは素直に認めるだけの度量が二人にはあつたからだ。

そういうわけで、最終的に2人も勇人と美沙の間を認めている。

そうやって慌しくもあつたが、7月はあつという間に下旬に入り、そのまま夏休みとなつた。

夏休み。それは勇人や紫達にとって待ちわびていた季節である。高1であるからまだ受験を気にしないでいい。宿題も出されるが、元々秀才組の彼らにとっては手間を取られるような物ではない。つまり青春を満喫できるのだ。

さてそんな中、ある決意を固めている人間がいた。

「今度こそ紫さんに告白するぞ!!」

そう決意するのは、久々に登場の愛沢一哉である。

父親からの遺伝かはわからないが、彼は紫のことが好きである。しかし、告白はしていない。というか、恥ずかしくて出来ないと言ったほうが正解である。

しかし、この夏休みこそは絶対に告白すると決めていた。

「けど・・・どうやって告白しよう・・・」

一方で、告白するとは決めていなくても、大きく心が揺れ動いている人物がもう一人いた。

「優・・・」

ポツリとそう呟くのは、伊澄とワタルの息子である光だ。

「なんであいつの顔ばっか頭に浮かぶんだろう・・・もしかしてこれは恋？」

もしかしてではなく、実際に恋である。

彼にとって初恋である。

ちなみに、光は優とかなり付き合いがある。彼女を彼が実体化したということもあるが、彼女は元々ドツペルゲンガ-という存在であつたせいで、霊感が相当強い。だから、光がたまに仕事を手伝ってもらふ事もあつた。

以前の伊澄と咲夜の構図に近い。ただし、優の場合は靈感が強い分、札を操って簡単な術を使うことも出来た。

その上達ぶりは伊澄を唸らせた程である。

「恋か・・・どうすればいいんだろう？」

しかしながら二人とも、どう相手との距離を縮めるかはわかっていなかった。

数日後、レンタルビデオタチバナ新宿店。

気分転換でもしようと、一哉はこの日DVDを借りにやってきた。すると、カウンターには光が座っていた。

「あれ？光が手伝いなんて珍しいじゃん。」

「よう一哉。澄香から急に頼まれてな・・・俺あんまり商売ご得意じゃないのに。」

ワタルに外見は似ているが、商売の才能はあんまりない光。父親の才能は娘の澄香の方が強く引いていた。

この店は橘グループ復活の原点ともいえる店だ。20年経って店は改築し、当時よりも大きくなっているが、週に数回澄香が手伝っている。

今回光はその代わりを頼まれたらしい。本人には商売の才能はないから、あまりやる気のしないことである。

しかし、それはそれで一哉には好都合だった。丁度今は他にお客さんの姿はなかった。

「あのさ光相談していいかな？」

「うん？いいけど、何？」

「実はさ・・・」

一哉は光に、どう告白すれば良い物が相談してみた。

「ふーん。一哉は紫が好きなんだ。けどどうすれば良いって聞かれてもな・・・俺だって自分のことで困っているのに。」

「え！？そうなの？」

一哉が驚いた表情をする、

「なんだよその言葉。なんか俺がまるで恋なんかしないみたいない方だな。」

少し苛つきながら言う光。

「いや別にそんなことは言っていない。で、お前が好きなのは誰なんだよ？」

光は顔を赤くしながら言った。

「優。」

「優・・・ああ、こないだ三千院家に加わった。」

あれから三千院家には行っていなかったが、彼女とは白皇で何回か顔を合わせていた。

「そう。でもさ、女の子を好きになるのなんか初めてだから、どうすれば良いのかと思ってさ。なあ、どう思う？」

これには一哉も困った。聞くつもりが逆に聞かれてしまった。

「そんなこと言われても・・・」

一哉としては、「だったら告白すれば。」と言いたかったが、自分が出来ない手前そんなこと言うのは気が引けた。

光は光で、一哉に「告白する位の勇氣出せよ！！」と言いたかったが、自分が悩んでいる手前言いにくい。

お互いどう答えれば良い物かわからなくなってしまった。

気まずい沈黙を破ったのはある人の言葉だった。

「お二人ともどうしたんです？」

夏休みも恋の予感（後書き）

御意見などをお待ちしています。

恋の仕方（前書き）

オリキャラフ・・・橘澄香たかはなすみかワタルと伊澄の娘。光の妹。外見は伊澄そっくりだが喋るスピードは遅くない。また、魔力のような物は一切持っていない。ワタルとナギの影響でアニメや漫画が大好き。

恋の仕方

二人は声のした方に振り向いた。

「あ！勇氣さん。」

そこにいたのは一人の青年だった。渡辺勇氣である。

このシリーズでは中々出番のなかった貴嶋サキの息子である。

彼女は20年前、知り合った老刑事から一人の部下を紹介された。つまり男を紹介されたわけだ。それが渡辺刑事（想いの続きでのオリキャラ）だ。

最初はまだ橘家で働いている事もあったので、あくまで友達として付き合っていたのだが、その後デートを重ねていくうちに惹かれ、半年経ったころに彼から告白された。大いにサキは悩んだようだが、その後ワタルからの勧めもあり、結婚した。

ちなみに彼女はその後産休を除いて、ちゃんと橘家のメイドとして働いている。さすがに彼女も今は成長した物で、家事などは失敗せずこなせるようになり、橘家のメイド長をしている。

息子の勇氣は今18歳の大学一年生で、子供世代では一番の年長者だ。顔は父親似だが、髪はサキ譲りの濃い緑色だ。

そんな彼が突然目の前に表れた。

「どうしてここに？」

「サキさんに用があるなら、家へ行った方が良いのに。」

「いや、ただビデオを借りに来ただけですよ。」

相手が5歳年下であるにも関わらず敬語を使う勇氣。

「あのさ、勇氣さん。別に敬語で話さなくていいですよ。」

一哉が言う。それに同調して光も言う。

「うん。サキさんの目の前じゃないんだし。」

「けど、一応母から釘を刺されているので。」

勇氣は母親のサキから、橘家や愛沢家、三千院家の人間に対しては敬語を使うように教育されていた。自分が遣える身であるのだから子供にもそれを徹底させているわけだ。

それを勇氣は律儀に守っていた。根が正直なのである。

「じゃあ喋り方は良いや。で、勇氣さんはどうしてここに？サキさんはいないけど。」

光が聞く。

「いや別に母に会いに来たわけではなくて、ただ単にビデオを借りに来ただけです。それにしてもいつもは澄香さんなのに、光君がいるとは珍しいですね。さらに愛沢家の一哉君もいるなんて。こちらも驚きましたよ。お二人ともどうしたんですか？」

「いや、俺は澄香からバイトを代わってくれて言われて。」

「僕はあなたと同じです。ただビデオを借りに来ただけです。」

ところが、勇氣は二人が予想もしていなかったことを言ってきた。

「そうなんですか？さっき二人で随分と深刻そうな顔をしていましたか？」

「「え!？」」

二人とも自分たちが見られていたのには全然気付いていなかった。

「何か悩み事でもあるんですか？さしずめ恋煩いとか？」

ズバリ言い当てた勇氣。

（（当たってるよこの人・・・））

「どうしてそう思うの？」

一哉が恐る恐る聞いてみた。

「いやそういう展開がお約束かと思って・・・図星なんですか？」

この時二人は思った。

（相手はどうせ男だし・・・）

(このさい聞いてみた方が良いかも?)

二人は考えを纏めた。

「ええと、そうです。」

「僕も光と同じです。」

「ははん。つまり二人揃って恋煩いして、お互いどうしたらいいか相談したけど良い案が出なかったってところですか?」

これまた凶星である。

「「そうです。」」

「ふーん。で、二人は一体誰が好きなんですか?」

勇気は二人から事情を聞いた。

「なるほど。つまりお互い好きで仕方がないけど、告白する勇気がないと?」

痛いところを突いてはいるが、当たりである。

二人とも頷いた。

「けど難しい問題ですね。はっきり言って君たち次第なんだから、僕から言えるのは勇気を出して告白するしかない、ぐらいですよ。」

「だよな・・・」

「ですよね・・・」

それが出来れば苦労しないだけに、二人とも落胆の息を漏らす。

「まあ、あとはシュチエーションぐらいでしょうかね？」

「「シュチエーション？」」

二人ともその言葉に強くひかれる。

「そうです。雰囲気とか、場所とか、時間とか。やっぱりしやすい状況つてのは誰でもあると思うんですよ。さしずめ二人つきりになった所とか。・・・けどそういう状況に持っていくまでがまず問題ですよね。」

（（それもそうだ））

心の中で頷く二人。

「すいません。参考にならなくて。」

そしてビデオを借りて勇気は行ってしまった。

そして後に残された二人はというと。

「優と・・・」

「紫さんと・・・」

「二人きりになれるシュチエーションか・・・」

今度はそれで悩み始めた二人。結局、それを解決できないままこの日は二人とも帰る事となった。結局良いアイディアは浮かばず終いだった。

状況が一気に動く事となるのは翌日のことである。

家族旅行 出発編（前書き）

オリキャラ８・・・愛沢一哉。一樹と咲夜の息子。容姿は一樹似。
白皇中等部３年生。紫のことが好きだが、中々告白できない。それをネタに妹たちからバカにされている。

家族旅行 出発編

光と一哉が会った翌日の事。

「一緒に旅行？」

ナギが受話器に向かって言う。そう彼女は丁度電話中。相手は咲夜だ。

「そや。今年はゴールデンウィークに会っただけやから、夏休みに家族全員でどこか行こうや。なんなら伊澄やマリアさんの家族も誘って。」

20年前の中学生当時、お互い毎日のように会っていたが、お互い大人になり忙しくなり、最近は会う機会はめっきり減ってしまった。年に一回か二回だ。そういうわけで、咲夜が各家族合同の旅を提案してきたのだ。

「私は良いが、ハヤテや皆の予定を聞かないとな。」

「そうかい。うちは家族全員一致やで。なんか一哉がえろっ喜んどっただけ。」

「ふーん。」

そしてその日の夕方。

「いいんじゃないですか。たまにはそういうのも。」

三千院家と姫神家が揃う夕食の席上、ナギは電話の件をその場に揃った全員に話した。そして、マリアからは先ほどの返事が返ってきた。

「そうですね。僕も良いと思いますよ。予定ならなんとかなると思いますし。」

ハヤテも賛成した。ちなみに、彼の予定が空くイコールはナギの予定が空くなる。なぜなら彼が執事兼秘書としてナギの予定を管理しているからだ。

「マリア、姫神はどうだろう?」

姫神はあいにくとこの時いなかった。

「勝さんなら多分大丈夫だと思いますけど。」

「そうか。お前たちは?」

ナギは子供たちの方を見た。

「僕はOK」

「私も。」

「私もです。」

「私は・・・弓道部の合宿は7月中ですから、それ以外ならいつでも。」

上から順に勇人、紫、優、そして真理奈の返事である。

「そうか。それなら大丈夫そうだな。なら、咲夜にはそう伝えておこう。」

こうして、三千院家と姫神家の合同家族旅行への参加が決まった。

「ところでナギさん。行き先とかは？」

ハヤテが聞いてきた。

「それはまだ決まっていらないけど。」

「だったら伊豆にしませんか？今年はまだお母様のお墓参りしていませんし。」

「伊豆か・・・」

ナギにとって伊豆は思い出深い地だ。そして彼女の母親である紫子のお墓もそこにある。毎年命日に御参りしていたのだが、ここ数年は途絶えがちになっていた。今年はまだ行っていないかった。

そして伊豆なら、三千院家、愛沢家、そして鷺ノ宮家も別荘を持っていた。そういう面ではホテルを取る必要もなく都合が良い。

「それがいいな。だったら明日咲夜に電話しておこう。」

そしてさらにその翌日。ナギは咲夜に電話をした。

「そういうわけだから、うちとマリアの家族は全員OKだぞ。」

「そうかい。こっちもOKや。あと伊澄さんとも参加するって。なんなら他にも誘ってええんよ。」

「他にもって・・・」

と、ここでナギはあることを思い出した。

（そういえば、勇人には彼女が出来たんだったな。二人の仲をより親密にさせる良い機会かも・・・）

「わかった。子供たちに友達を誘っても良いよう言っておく。それで、日付はいつにする？」

「そやな・・・お盆はどうや？丁度紫子さんも地上に帰ってくる事やし。」

「けど人で混みそうだしな・・・」

20年経って大分直ったが、ナギの人見知りはまだ若干残っていた。

「じゃあ2、3日ずらして8月の17日ぐらいなんかどうや？」

「17日か・・・わかった。」

この後、全員の予定が丁度揃ったため、旅行の日程は8月の17日からの二泊三日となった。

これが、子供たちにとっては楽しく、そして少し怖い思い出を作

ることとなる。

そして旅行に行くメンバーは最終的に、三千院家、姫神家、愛沢家に鷺ノ宮家、そして桂家プラス瀬川美沙となった。合計21人。

ただし、これだけの人数だとさすがに全員一緒に移動する手段は無い。ナギはヘリコプターでの移動を求めたが、さすがに21人全員乗り切れるヘリなどない。あってもそんな物は軍用だ。

そこで、ハヤテはある考えを出した。

「いい機会ですから、子供たちにはそれぞれ公共交通機関を使わせましょう。」

庶民出のハヤテらしい意見である。もっとも、これには子供たちには社会体験をさせるべきという、彼の考えがあった。

結局、この意見がとおり、子供たちは全員公共交通機関で移動となった。ただし、さすがに愛沢家の姉妹はまだ小さいからという理由で親たちと共に移動する事となった。

そして、最終的に以下のように移動する事となった。

勇人・紫・一哉・美沙 特急列車

真理奈・櫻・澄香 特急列車

光・優 高速バス

勇人たちと真理奈達は別々の列車に乗る。お盆ではなかったが、列車が混んでいたために、席が取れなかったからだ。光・優のグループが高速バスで移動する理由も同じだ。

こうして、夏休みの旅が始まる。

家族旅行 旅情編（前書き）

オリキャラ9・・・愛沢桜花。一樹と咲夜の娘。白皇小等部1年生。
顔立ちは母親にだが髪型が違う。また、標準語を喋る。お笑いにも
興味はない。兄である一哉を良く馬鹿にしている。

家族旅行 旅情編

旅行当日。子供たちは東京駅八重洲口に集合していた。

「おはよう。」

口々に挨拶を交わし、最後の一哉が付いたのが列車発車予定の30分前だった。

「よし、これで全員集合だな。」

勇人が人数を確かめた。ちなみに、高速バスに乗る優と光はすでにバス乗り場へと移動したためにいない。

「それじゃあ出発!!」

こうして子供たち御一行様は出発した。その後を追跡する3人の影の存在に気付かぬまま。

勇人を中心とする一行が乗り込むのは、伊豆へと直通する踊り子号だ。

「ええと、僕達は10時丁度発で、真理奈達が10時30分発だね。」

「そうです。」

切符を見て乗る列車を再度確認する。

「じゃあ私たちは先に行くね。」

紫が真理奈に言った。

「はい。伊豆でお会いしましょう。」

勇人達が先に列車に乗り込み、出発した。

続いて30分遅れで、真理奈達も出発した。

さて勇人達が出発する30分前に、既に光と優がのった高速バスは東京駅を出発していた。

高速バスというのは、だいたい2人掛けの座席が2列並んでいるのがオーソドックスな配置であるが、それはこの時代でも変わっていない。そして、光と優は隣同士の席である。そしてバスというのは窮屈な空間であるから、隣の人との距離がかなり近く感じられる。そういうわけで、光も優との距離が殆ど無いように思えて緊張していた。

緊張しているため、発車してから30分。光は終始無言だった。

（ちょっと、近すぎだぜ。）

これが紫や櫻とかだったらここまで緊張はしなかったかもしれないが、相手が好きな子では話が違う。

一方、そんな彼の心境を知らない優は不思議そうな表情で光を見ていた。

「あの？」

「え！？あ！何！？」

「いや、なんか出発してから様子が変ですけど、どこか調子でも悪いんですか？」

「え！？いや、調子なんか悪くないよ。気のせい気のせい。」

取り敢えずそう言って誤魔化した。

「はあ……」

優は何か腑に落ちない表情をしたが、それ以上の追求はしてこなかった。

（危ねえ……）

ばれなかった事にホッとする光。

（けど……今二人つきりなんだから、告白のチャンスかも……けど、他にお客さんもいるし……ああ！？どうすれば良いんだ！？）

「……？」

結局、終始このような状態だったため、彼は告白はおろか会話すらまともに出来なかった。

一方、勇人達というと。

「アハハハ……」

会話に花が咲いていた。

特急列車の席は2人掛けだが、対面に出来るリクライニングシートであるから、4人は向き合ってお菓子を食べながら会話を楽しんでいた。

「けど、勇人君に紫ちゃん。本当に今回はありがとう。旅行に誘ってくれて。」

今回ゲストとして招待された美沙が二人に礼を言う。

「良いつて、良いつて。だって美沙は勇人の彼女なんだから。」

茶化すように言う紫。

思わず美沙が顔を赤くする。

「おい、お前この状況楽しんでるだろ？」

「当たり前じゃん。」

紫が笑いながら答えた。

そこで、逆襲とばかりに美沙が質問する。

「けど紫ちゃんも可愛いから、もしかして実は恋人とかいるんじゃない？」

この言葉に敏感に反応したのは紫はもとより一哉もだった。

（（え！？））

「そんなわけないじゃん！！私にはまだ彼氏なんかいないよー！！」

慌てて否定する紫。

一方、一哉はハラハラした表情をしていた。

それを見た勇人が一哉に援護射撃してやることにした。

「けど、一哉とはどうなんだ？お似合いだと思うけどな？」

「「え！！！」」

二人はお互い顔を見合わせてしまった。

一哉にとっては絶好のチャンスだった。彼は腹を決めた。

「ええと僕は、・・・」

とそこまで行った時である。

「私は別に、嫌いじゃないけど好きという訳でもない。」

（ガーン！！！！）

紫の一撃によって、一哉はこの世の終わりみたいな顔をした。

（（ああ、可哀想に。））

それが一哉を見ていた勇人と美沙の偽らざる感想であった。

こんな感じで、彼らに乗せた踊り子号は一路伊豆へ向かって疾走していた。

と、そんな中で感が鋭い勇人が気付いた。

（誰かに見られている。）

勇人は過去何度も暗殺者に狙われた経験上、感が鋭い。その感が何者かに見られているのを察知した。

「ごめん、ちょっとトイレ。」

そう言って席を立つと、彼はその気配がしたほうへと歩いて行った。何気なく、自然に。

そして、視線が誰の物であるかわかった。デッキに一人の男がこちらを見るように立っていた。

その男の方へと勇人は近づいた。そして、声を掛けた。

「何をやっているんですか？ 勇気さん？」

家族旅行 到着編（前書き）

オリキャラ10・・・愛沢夕貴。一樹と咲夜の娘。幼稚園の年長。
姉とともに兄である一哉を馬鹿にしている。関西弁ではなく標準語
を喋っている。

家族旅行 到着編

「何をやっているんですか？ 勇気さん。」

勇人がその声をかけた瞬間、その人物はビクツと震えた。そして、変装のつもりだったのか、掛けていた眼鏡と深く被っていた帽子を外した。その下から現れた顔は、サキの息子の勇気であつた。

「なんだ。もうばれちゃったんですか？」

予想外の事態に直面したような表情をする勇気。

「あたりまえですよ。こんなことぐらい気配でわかります。僕をお金持ちの坊やと思つて舐めちゃいけませんよ。」

今まで数々の暗殺者に狙われてきた勇人にとって、勇気のような人間が尾行しているのを察知する事など簡単なことである。

「まったく、相変わらずすごいですね君は。」

「それにしても、どうして僕達を見張っていたりしたんです？ 父さんか誰かに頼まれたんですか？」

勇人のその言葉に、勇気は笑つた。

「いや、君のお父さんたちは関係ないですよ。母さんから君たちのボディガードをするように頼まれたんです。特に光くんと澄香さんは。」

差し金はサキだった。と、ここで勇人はあることに気付いた。

「え？けど光は優と一緒にバスですし、澄香は僕たちの後の列車でここにはいませんよ。」

だが、勇気は表情一つ変えずに言った。

「それなら大丈夫です。あちらには雫と夕子がついていますから。」

その言葉に、勇人は納得した。雫は高校2年生、夕子は中3の勇気の妹たちだ。

「なるほど。3人とも本当にご苦労様です。」

勇人が労いの言葉を掛ける。

「いいえ。それにこれは橘家と鷺ノ宮家のSPのみなさんから要請されていることなんです。目立つ自分たちが出て行くわけにはいかないから、代わりに見守ってくれて。ちょうど大学の夏休みで暇でしたし、手間賃も出るから軽いアルバイトのつもりで引き受けましたよ。」

そう言ってワハハハと笑う勇気だが、そんな軽い気持ちでもしかしたら暗殺者と出会うかもしれない危険な仕事に就いたのかと勇人は言いたくなかったが、口に出す前に飲み込んだ。その意味はいずれわかる。

「ま、とりあえず、僕たちの所に来ませんか？ジュースとお菓子ぐらいは出しますよ？」

勇人は自分たちの席に来るよう促した。しかし、勇気はきつぱりと断った。

「提案ありがとうございます。けど、それじゃあ意味ないんで。また伊豆で会いましょう。」

「そうですか。じゃあ。」

こうして勇人は勇気との会話を終えて席へと戻った。この後、特に列車やバスが遅延するようなことも、そしてナギの時のように暗殺者に狙われる事も、途中で知り合いにバツタリと会う事もなく、子供たち全員が無事に伊豆に到着した。

「伊豆か、久しぶりだな。」

勇人がしみじみと言った。

「そうだね。明日はお婆さんのお墓参りしないかね。」

紫が言う。彼女の言うお婆さんとは、ナギの母親である紫子のことだ。

「さ、別荘へ行こうぜ。」

子供たちが今回泊まるのは、全員三千院家の別荘だ。橘家の光と澄香は本来は鷺ノ宮家の別荘を使っているし、愛沢家の一哉も本来は愛沢家の別荘に泊まる。しかし今回は全員で旅行を楽しむということから全員が一箇所に集まる事となった。ちなみに親たちは夕食時を除いてそれぞれ自分の別荘に泊まる。さらに付け加えると、サキの子供たち3人は鷺ノ宮家の旅館に泊まる。

「じゃあ部屋割りね。」

練馬の本家ほどではないが、この別荘も大きい。そして一年中いつでも使えるようしっかり整理してあるので、子供たちが全員泊まることなど造作も無い事だ。一人一部屋使っても十分お釣りがくるほどの部屋があるのだから。

お嬢様ではない美沙はずっと驚きっぱなしであった。

全員荷物を部屋に置くと、今度は食堂に集合した。ちなみに親たちは庭に椅子を出してお喋りをする。子供たちの邪魔をしないためだ。

そして子供たちはこれから何をするのか話し合うのだ。しかしさすがに人数が多いから意見が割れる。

遺伝なのか真理奈と勇人に優、それに桜花と夕貴の姉妹は温泉の行く事を主張した。

それに対して美沙を除く他のメンバーは海へ泳ぎに行く事を主張した。この内紫など勇人達を「爺臭い」とこき下ろした。

まあどちらともお互いに無理強いするようなことはせず、結局二手にわかれて行動する事となった。

勇人に美沙、真理奈達5人は温泉へ。その他のメンバーは泳ぎに海へ向かう事となった。

ところが、ここで勇人は意外な人物に出会うことになった。それ

は彼が入った温泉旅館で起きた。そこでフロントに立っていた人物を見て、勇人は声を上げた。

「ああ！！朴先輩、ここで何をやってるんですか？

家族旅行 到着編（後書き）

久々の更新です。御意見等をお待ちしています。

家族旅行 温泉編（前書き）

オリキャラ11・・・朴大一。韓国（北朝鮮）から移住した在日韓国人。移住の際弟と妹を失っていて、妹に似ている櫻に惹かれてい
る。白皇高等部2年。生徒会副会長。生徒、教師からも人望が厚い
人物で勇人も頼りにしている。

家族旅行 温泉編

「先輩、何やってるんですか？」

伊豆の温泉旅館に何故朴がいるのか、勇人には全く理解できなかった。

「何って・・・住み込みでアルバイトだよ。奨学金はあくまで貸してもらっているだけで貰えている訳じゃないからな。少しぐらいは自分で稼いで足しにしないと。特に自分で遊ぶ金はな。」

この言葉を聞いて、なんて立派な先輩なんだと感心する勇人。

「そういつお前こそ、どうして伊豆に？」

「家族旅行です。紫は海へ泳ぎに行っていますが。」

「先輩、どうも。」

勇人が質問に答え終わった所で、後ろから美沙がひょっこり顔を出した。

「おお、瀬川委員長も一緒なのか。こんな所までお熱いねお二人さん。」

朴は既に2人が付き合っているのを知っている。その朴の冷やかに顔を赤くする勇人と美沙。一方で、真理奈は少しばかり嫉妬した表情を浮かべ、そして愛沢姉妹は呆れた表情をする。

それら全員の様子を笑いながら朴は見つつ、棚から人数分の桶とタオルを出して用意した。

「大人3人、子供2人で計2000円。浴場は廊下を右へ行った突き当たりにあるから。じゃあ、ごゆっくりどうぞ。」

5人は料金を支払うと（勇人がカードで一括払いした）、浴場へと向かった。

約1時間後。

「いいお湯だったね。」

「そうだね。」

「そうでしたね。」

旅館のラウンジで、マッサージ椅子に座ってくつろぐ勇人、美沙、真理奈の姿があった。3人とも相当リラックスしている。

その姿を、朴が呆れ顔で見ていた。

「お前らな。若い人間がマッサージ椅子でそんなくつろいだ顔をするもんじゃないぜ。口の悪い奴なら、爺臭いとか言うぞ。」

紫と同じ事を言う朴。ついでに心の中では。

（全く、折角のサービスシーン（入浴シーン）をカットするなんて、作者は何を考えているんだ！！）

と悪態をついていた。もちろん、先輩である彼はそんな事を口には出したりはしない。

一方で、くつろぐ3人は朴の言葉などどこ吹く風であった。

「いいじゃないですか別に？」

「気持ち良いんだし。」

「先輩もどうですか？」

と言いつ返されてしまった。

(こいつら・・・)

と少し怒りを覚えながら、彼は少し離れた子供用卓球台で卓球を楽しむ桜花と夕貴を指差した。

「ほら、あんな小さな子供だって元気に卓球やってるんだぞ。お前たちも少しはシャキっとしろ。」

さすがにここまでしつこく言われては3人ともものんきにマッサージ椅子に座ってはいられなかった。

「・・・はい・・・」

やる気のない返事をしながら、とりあえずマッサージ椅子から立ち上がった。

「まったく。」

その時、朴の所へ旅館の館長がやってきた。

「朴君。」

「なんでしょう?。」

「今お客さんも少ないから、折角知り合いも来ていることだし、少し休んでも良いよ。」

「あ、本当ですか?ありがとうございます。」

ちょうど良いタイミングで朴は休みを貰えた。

「ようし、ちょうど良い。勇人、俺と卓球で勝負しろ!!。」

「「え!!!」」

朴の言葉に驚いたのは美沙と真理奈である。二人は勇人が化け物クラスの体力を持っているのを知っている。だから、朴がケガをしないか心配したのだ。

そして、勝負を申し込まれた勇人は、余裕の表情を浮かべている。それだけ自分の体力に自信があつたのだ。

「良いでしょう。けど、ただやるだけじゃつまらないから、何か賭けませんか?。」

勇人の提案に、少し朴は困った表情をした。

「賭けるって言っても、俺に賭ける物なんかないぞ。」

すると待ってましたと言わんばかりに、勇人はニヤツと笑った。

「じゃあこう言うのはどうです？もし僕が勝ったら、先輩が櫻を好きな事を彼女に伝えるってのは？」

その言葉を言った途端、朴は顔を真っ赤にして叫んだ。

「何だって！！ま、待て！！俺はまだ彼女を好きってわけじゃ！！」

必死に否定するが、その表情と顔色から嘘であるか事が丸分かりであった。そしてそんな朴へ向かって勇人が言った。

「大丈夫です。この作品の設定上先輩と櫻とのカップリングは決定済みです。」

「設定って何だ！！」

朴が叫ぶ。他人に櫻が好きな事を言われるなど、屈辱以外の何物でもない。そこで、朴も報復に出た。

「・・・ようし、いいだろう。お前がそっくりなら俺が勝ったら・・・」

そう言うと、朴は勇人を手招きした。

「？」

勇人は朴の側に行く。すると、朴が服の中から何かを出した。そ

れを覗き込んだ途端、勇人の顔色が真っ青になった。

「な、なんですかこれは!？」

朴が勇人に見せたのは、彼が生徒会室を整理中に見つけた一枚の写真だった。そこには、白皇の女子制服に身を包んだ勇人そっくりの男子生徒の姿が映っていた。髪の色からして父親のハヤテだ。その目からは涙が見えている。

「こないだ生徒会室で見つけて、お前に渡そうとずっと持っていたんだが、こんなところで役に立つとはな。もし俺が勝ったらこれを彼女ら（真理奈・美沙）に見せる!」

「ええ!！」

それは勇人にとって恐ろしい事であった。この写真を見たら、おそらく二人は自分にも女装させるだろう。何せ勇人はハヤテそっくりなのだから、いや、他の女子にも飛び火しかねない。それだけは勘弁して欲しい事だった。

こうなったら、なんとしても先輩が見せる事を阻止せねば。

「良いでしょう。」

こうして、男の面子をかけた勝負が始まった。

家族旅行 温泉編（後書き）

御意見などをお待ちしています。

家族旅行・・・卓球編（前書き）

オリキャラ12・・・川西由希。花菱美希の娘で白皇学院中等部の2年生。画像研究部部长で母親ほど黒くはない。外見は母親似だが、髪の色と髪型が違う。

家族旅行・・・卓球編

勇人と朴の男のプライドを賭けた卓球が始まろうとしていた。

「勇人、今回はかりは後輩と思つて手加減はしないからな。そのつもりでいろよ。」

ラケットでビシツと勇人を指す朴。彼にしてみれば一生の汚点となりかねない事項だけに負けられない。一方の勇人も、場合によっては自分の貞操が危ないのだから、今回の勝負に負ける気は毛頭ない。

「そちらこそ。今回は僕も手加減しないので。やめるなら今の内ですよ。」

「ぬかせ!!」

2人の背後にはすさまじい炎が燃え上がっていた。それを見た何も知らない真理奈と美沙は少し引き気味であった。

「ねえ真理奈ちゃん。なんかあの2人、雰囲気がいつもと違うわない? なんか燃えてるよ。」

「ええ、2人とも凄い気迫です。一体何があつたんでしょうか? さつき何か賭けるとか言っていましたけど。」

「わかんないけど、相当ヤバイ物を賭けたんじゃないかな?」

2人がそんな会話をしていると露知らず、勇人と朴は卓球を始めた。

「いきますよ、うおりゃ!!」

最初にボールを打ったのは勇人である。そのボールのスピードとパワーはかなりの物だった。

（ふ、これでまずは1点。）

勇人は余裕の表情で思った。実際、見ていた真理奈と美沙も朴が返せるとは全く考えられなかった。

しかし。

「た!!」

朴は見事にそれを打ち返した。

「何!？」

勇人も慌てて打ち返すが、突然の事だっただけに上手く打ち返せず、ボールはネットに当たって落ちてしまった。朴に1点を先取される格好となった

「あ!!」

勇人の顔がしまったという表情に成る。逆に点を入れた朴の方はしてやったと言わんばかりの表情だ。そして彼は静かに言った。

「勇人、甘いな。お前は自分の体力が並外れていると思っているよ。うだが、その並外れた体力を他の人間が持っているとは予想してい

なかったらしいな。そういう例外な人間っていうのは、案外近くにいるもんなんだぜ。」

勇人の表情が今度は悔しさで一杯になる。自分の浅はかな過信に對して。

「くそ・・・まあいい、まだ1点です。今度は今のように行きませんから、覚悟していてください。」

「ふん、口で言うほど世の中上手くは行かないぜ、返り討ちだ。」

こうして試合再会。今度は2人ともマジで相手をぶっ潰すという気概で戦う。1回1回打つたびに、ボールには凄まじい力と怨念が込められる。

「うおりゃあ!!」

「なんの、喰らえや!!」

この2人の気迫に、真理奈と美沙は完全に引いてしまい、夕貴と桜花に至っては恐ろしさに少し涙目になっていた。それほどまでに2人はマジで勝負をしていた。

2人のマジの卓球勝負はおよそ20分続いたが、ついに朴がマッチポイントとなった。

「はあ、はあ。」

「はあ、はあ。」

2人とも相当体力を消耗したのか、息が切れ始めている。だが、目は未だに本気のままだ。

「やるじゃねえか勇人。だが、次で本当にジ・エンドだ。」

「なんの、逆転勝利こそ勝負の王道ですよ。」

そして最後の勝負が始まった。

「行きますよ!!」

「来い!!」

ボールが卓球台の上を跳び始めた。勇人にとってはもう何がなんでも点を取らせられない一戦である。両者とも中々隙を見せない。ボールは2人の間を行ったり来たりするだけだ。

（先輩、中々隙を見せないな。）

（勇人め、どうしても打たせない気だな。）

時間だけが静かに流れていく。この勝負を見ている4人も固唾を飲んで、成りいきを見守っている。

しかし、このまま続けても埒が開かないのは目に見えていた。

（よし、賭けに出てみるか。）

賭けに出たのは朴であった。突然、サーブを打った。もちろん、勇人はなんなくそれを止めて打ち返した。しかし朴は立て続けにサ

ーブを打った。

「うー!!」

連続の速攻に、勇人は全力で対応するだが、一瞬隙が出来てしまった。朴はその一瞬を見逃しはしなかった。

「もらった!!」

全身全霊をこめて打った1球は、見事勇人のラケットをすり抜けた。

「よっしゃあ!!」

この瞬間、朴の勝ちが決定した。

「ああ……」

勇人はヘナヘナとその場に座り込んでしまった。そんな彼に、朴は近づいて声を掛けた。

「勇人、お前はよくがんばった。それは対戦相手である俺にもよくわかったぞ。お前は精一杯がんばったんだ。」

なんとなく、どこかの3流ドラマのようなセリフを言う朴。そして勇人は素直にそれに感動していた。

「うう、先輩。」

しかし、次の朴の言葉は、彼を現実に戻すのに余りある効果

があつた。

「まあ、約束どおりこの写真はあの娘たちに見せるがな。」

「え!？」

「おーい、君たちに面白い物を見せてやるぞ。」

「え、ちょっと待ってください!!」

しかし時既に遅く、写真は真理奈達の手に渡っていた。

「うわ、可愛い。これ勇人くん?」

素直に感想を述べる美沙。

「いえ、どうやらこれはハヤテおじさんのようですね。髪の色が違いますから。」

「けど、勇人兄ちゃんもこんな感じになるのかな?」

「なるんじゃない?」

真理奈、美沙に加えて夕貴と桜花も加わってまるで品定めをするように話し合う。そして、朴や勇人が予想したとおりの展開へと話は進む。

「だったら勇人兄ちゃんにも着せてみたら? スカート。」

「あ、それいいかも。絶対に似合うよ。勇人くん体細いし。」

「そうですね。というわけで勇人君？」

抜き足差し足で逃げようとしていた勇人に真理奈が声をかける。

「どこへ行く気かな勇人君？」

彼を見つめる4人の表情は完全にSモードだ。勇人は決意した。

「逃げるが勝ち！！さらばじゃ！！」

勇人は全速力で走った。

「「「待ちなさい！！」」」

「勘弁して！！」

こうして、5人の鬼ごっこはスタートしたのであった。ちなみに朴はというと、まるで他人事のようにアルバイトに戻ったのであった。

ちなみに、この鬼ごっこは勇人の勝利で終わった。

家族旅行・・・卓球編（後書き）

今回は勇人と朴の真剣勝負でした。そして勇人には父親同様、女装難に遭って貰いました。次回は海編です。女

家族旅行・・・海岸編（前書き）

オリキャラ１３・・・瀬川美沙。瀬川泉の娘。母親から受け継いだ笑顔がよく似合う少女。父親が早くに亡くなったため母親の泉１人で育てられた。よって、母親の様なお嬢様ではない。また勉強もある程度出来る。勇人の恋心を射止めた。

ちなみに名前は泉が親友から一字ずつ貰って名づけた。

家族旅行・・・海岸編

一方、温泉ではなく海へ出かけた御一行様（紫、優、櫻、澄香、光、一哉）はというと。さっそく水着に着替え、海岸にビーチパラスルを立ててはしゃいでいた。

泳いだり、ボールを膨らませてビーチバレーをしたり、お決まりのスイカ割をしたりして思う存分夏の海を楽しむメンバー。そんな中で、優だけは一応バレーやスイカ割りといった海岸で出来るゲームしかせず、なぜか海にも入ろうとしないで、ジッとパラソルの下で休んでいた。

「なあ優。どうして泳がないんだ？ 気持ちいいぜ？」

光が少し心配になって声を掛けてみた。別に優の気を引きたいとかそういうつもりは一切なく、純粹に心配になって声をかけたのだ。

「いえ・・・私は別に良いです。」

「なんで？」

彼女が元ドッペルゲンガ・とはいえ、泳げない筈がない。光はそう考えていた。すると、優は少し言いにくそうに言った。

「その・・・私・・・実はかなづちなんです・・・」

「へ？ かなづち？」

これには光も少しばかり驚いた。かなづち、つまりは全く泳げな

いという事だ。

「あれ、ナギ小母さんはそんなことなかったよな、どうしてお前がかなづちになるんだ？」

優はなんだかんだ言ってもナギのドツベルゲンガである。性格や目つきこそナギと違うが、能力などはほとんどナギのコピーと言って良い筈である。しかし、ナギはかなづちではない。

「私にもわかりません。ただ、どうしても泳げないんです。だから、海へ入る気は起こらなくて・・・」

口籠ってしまふ優。その表情からは寂しさが窺い知れる。彼女もやはり皆と一緒に海に入りたいようであつた。

どうして優が泳げなくなってしまったかは、彼女を実体化し浄化した光にもわからない。しかし、好きな女の子が海を目の前にして一人寂しそうに座っているのを見過ごすわけにはいかない。そこで

「だったら、俺がしっかり手を繋いでやるよ。それなら何かあつても大丈夫だろ？」

「え！？そんな、そこまでしてもらわなくても・・・」

「いいじゃん。折角海に来たっていうのに、入らないなんて勿体無いじゃん。冷たくて気持ち良いぜ。さあ。」

ここまで光に言われては、優も断る事など出来なかった。

「ええと・・・じゃあ、お言葉に甘えて。」

優は立ち上がると、歩いていき光と一緒に海へ入る。

「うわ、冷たくて気持ち良い。」

優は嬉しそうにそう言った。彼女が喜んでくれたので、光としても嬉しい事である。

「な、言っただろ。」

こうして、優の好感度をアップした光であった。

一方で、そんな彼を浜辺から羨ましげに見つめる一対の眼があった。

「いいな・・・光のやつ・・・」

もう1人の告白できない少年、一哉である。電車内での紫の言葉もあつたせいか、折角海に来ているというのに彼のテンションは限りなく低く、表情は冴えなかった。

そんな彼に近づく1人の影が。

突然、一哉の頬に冷たい物が当たった。

「わー！！・・・て、紫さんか。驚かさないですよ。」

一哉が振り向くと、そこには両手にジュースを持った紫が立っていた。どうやら彼女が手のジュースを一哉の頬に当てたらしい。

「ごめんごめん。ジュース飲む？」

そう言って片方を差し出す紫。

「あ、いただきます。」

一哉はそれを受け取った。

「それにしても、随分と暗い評定しているわね？折角海に来たんだからもつとはじけたらどうなの？」

「す、すいません。」

「別に謝る事じゃないでしょ。」

2人はジュースを飲み始めた。冷たいジュースを飲んで一息つく2人。

しかし、そこで突然紫が言った。

「あの、一哉は私のこと好き？」

その言葉に、一哉は一瞬驚きのあまりジュースを吐きそうになった。

「ええ？あや・・・いああ・・・・・・あほへあ！？」

驚きのあまり言葉になっていない言葉を喋る一哉。その表情は真っ赤である。

「あの、日本語で喋ってくれる?」

「えーあ、ごめんなさい。けど、なんでそんなこと聞くんですか?」

「え!?!いや、その・・・ちょっと気になって。」

そう言う彼女の顔も少し赤みを帯びている。

紫は前々から一哉が自分のことが好きであることには周りからの言葉や、彼女自身彼と会って感じていた。しかし、彼の方から告白する気配がない。今日の列車の中でもただ呆然とするだけで何もしようとしなない。そこで、彼の本音を聞こうとしたのだ。

「え、ええと・・・その・・・」

一哉は答えに窮した。彼女の事は好きである。しかしそのたった一言が何故か言えない。そして。

ボタン!!

彼は倒れ、そこから先の記憶は飛んでしまった。

彼が意識を取り戻したとき、彼の目の前には紫の顔があった。

「あ、気付いた。」

「あの、僕は一体?」

「あなた緊張して倒れたのよ。」

「そうだったんだ・・・で、あれ？」

一哉は気付いた。頭の部分が地面に寝かされている時の物とは違うと。なんだか少し柔らかいような気がする。

（もしかして？）

彼は理解した。今自分は紫に膝枕されているのだと。その瞬間彼は起き上がった。

「うわ!!」

その素早い動きに紫が驚きの声を上げた。

「あの、どうして紫さんが・・・その・・・今みたいなことを？」

「だって、目の前で倒れた人をほっとくなんて出来ないじゃない・・・それに・・・私、あなたのこと・・・その・・・好きだから・・・」

最後の方は消え入りそうな声だったが、確かに一哉には確かに聞こえていた。

そう、実は彼女も一哉に気があったのだ。つまりお互い両想いだったわけだが、単に言い出せなかったのだ。

2人の顔は再び真っ赤である。そして、一哉も口を開いた。

「僕も・・・好きです・・・」

こうして2人は正式にカップルとなった。

ちなみに、このときの様子はバッチリ他のメンバーに見られていたため、後々話の種にされるが、それは別の話だ。2人はただお互いに見詰め合うだけだった。

家族旅行・・・海岸編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

家族旅行・・・肝試し編 上（前書き）

オリキャラ14・・・中島理恵 朝風理沙の娘。中学3年生。家族が6年前に交通事故死しているので、現在は横浜の伯父の家で暮らしている。

家族旅行・・・肝試し編 上

昼間たっぷり温泉と海で遊んだ子供たちも、夕方には別荘に戻り食事をした。すごい大人数での食事となったが、その分賑やかな物となった。

そして、食事を終えて、後片付けも済むと寛ぎの時間となったが、それは親たちの話である。元気一杯の子供たちはというと。夏恒例の行事を行おうとしていた。

郊外にある暗く静かな竹林。そこに子供たち一同が集まっていた。

「というわけで肝試しの始まり始まり。」

そう言うのは、紫である。今回の肝試しは勇人、紫、真理奈ら3人が中心となって計画を練っている。

「で、なんで俺まで出なきゃいけないんだ？」

そう愚痴をこぼすのは、今回ゲストとして呼ばれた朴である。

「俺まだアルバイトの仕事があるんだけど。」

旅館の仕事はむしろ夜のほうが忙しい。なのに、勇人から呼び出されてしまった。

「大丈夫ですよ先輩。その分の補償は三千院家が責任を持って行いますから。」

機嫌悪そうな朴に勇人がサラツと言う。

（このブルジョワどもが・・・金でなんでも解決していい筈ないだろ。）

庶民である朴は心の中で勇人のやった事に怒りを覚えていた。ただ反面。

（まあ折角の好意だし。たまには良いかな。）

とも思っていた。

「けど僕たちまで誘ってもらって悪いですね。」

そう言うのは、サキの息子の勇氣である。今回は妹ともども招待されている。

「いいんですよ。人数は多い方が楽しいですし。」

というわけで、合計13人（愛沢姉妹はいない）での肝試しがスタートした。今回の肝試しは、2人ずつのグループを作ってこの竹林の中を通って奥にある廃寺に置いてある箱に札を入れてくる極めてシンプルな物。ただし、行きと帰りでは道が違っし、最後のグループが箱を回収するので、ズルは出来ないようになっている。

「ところでどうやってグループ決めるの？」

シンプルかつ、とてつもなく重要な質問をしてきたのは美沙である。

「そうだね。本来はくじ引きで全員決めたいけど、折角今日カップルになった人もいるしね。」

そう言つて勇人は自分の事は棚の最上段に上げて、紫と一哉の方に視線をさりげなく向けた。すると、2人は少しばかり顔を赤くして俯いた。

「じゃあ、勇人君に美沙さん。一哉君に紫さんのグループは決定で良いですね?」

「……異議なし!」……」

真理奈の言葉に他のメンバーが同時に答えた。

「じゃあ他の人たちでくじを引いてください。」

真理奈が箱を差し出し、一人一人回つてくじを引いてもらう。

結果、グループは以下のようになった。

櫻・朴、澄香・勇氣、優・光、真理奈・雫・夕子（このグループだけ3人）

櫻と朴が一緒あたりなど、かなり作為的ではあるが、これはあくまで偶然の結果である。ちなみに、出発する順番もこの順番である。

「じゃあグループも決まったし、早速始めよう!」

「肝試しならやめたまえ。」

勇人が景気付けに言った言葉がいきなりどこからか水を指された。

「誰です!？」

声のした方向を見ると、一人の老人が立っていた。

「どなたですか？」

「ワシはしがな老人じゃよ。君たち悪い事は言わない、肝試しだけはやめたまえ。」

「なんでですか？」

そう質問したのは紫である。

「ふむ。なぜなら、悪霊が出るからじゃよ。」

「「「「悪霊?」「」「」」」」

そう言った全員の言葉に、驚きの意味は含まれていない。なぜなら全員伊澄や光のことを知っているから、当然幽霊とか妖怪が実在する存在であることも知っているからだ。

「そうじゃよ。諸君らは太平洋戦争を知っているかな？」

その言葉に何人かは頭に?マークを浮かべた。既に終戦から80年近く経って等しい。証言者の数も激減している御時世である。わからない者が出て仕方がない時代である。

そんな中で真っ先に答えたのは年長者の勇気だ。

「1945年に終わった、日本がアメリカやイギリスと戦った戦争でしょ？」

その言葉に、何人かは何かを思い出した表情をした。

「その通りじゃ。その戦争は1945年8月15日に終わった。日本だけで320万人の人々が犠牲になったが、その終戦は時の昭和天皇の玉音放送で成し遂げられた。しかしじゃ、その放送を止めさせようとした人間がいたんじゃ。いわゆる反乱つてやつじゃな。」

「ええ、それじゃあ戦争が終わらないじゃないですか！！」

何人かがそう言った。

「そうじゃ。当時の軍部には己の面子のために戦争を終わらせて欲しくない人間がいたんじゃ。じゃが結局その終戦妨害工作は失敗に終わった。そして8月15日、この地にその妨害工作を行った将校の数名が逃げ延びて、自決をしたとされている。それ以来、このあたりでは8月15日に前後してその将校の怨念が現れ、人に襲い掛かるという噂がまことしやかに流れている。実際に気絶したり、原因不明の病気になる人間も出ていると聞く。」

その言葉に、ゾーとするメンバー。

「そういうわけじゃから、肝試しはするもんじゃない。じゃがそれでもやりたいというならやるといい、ワシは警告したからな。」

そう言うと、その老人は歩いていってしまった。そして、一同を沈黙が支配した。

「ど、どうしようか？」

恐る恐るそう言ったのは紫だ。

「けど折角ここまで来てやめるのも癪だしな。かといつてももしかしたらさっきのお爺さんのデタラメかもしれないし。」

勇人が強気で言ってみるが、しかし人間やはり怖い物は怖い。そこで、光が提案した。

「だったら俺と優がトップで行こうか？そうすれば嘘か本当かわかるだろ。」

本職がそう言うのなら、これ以上はないほど安心である。というわけで、予定を変更して優と光のグループがトップバッターで出発する事になった。

「じゃあよろしく頼むよ。」

こうして2人は他のメンバーに見送られて出発した。その5分後、次に勇人と美沙が出発した。こうして、残りのグループも順々に出発する。こうして、場合によっては本物に会えるかもしれないドキドキ肝試しはスタートした。

家族旅行・・・肝試し編 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

家族旅行・・・肝試し編 下（前書き）

オリキャラ15・・・渡辺勇氣。貴嶋サキの息子。大学1年生で子供たちの中では一番年長。しかし母親からの指示で勇人たちには敬語を使う。また、サキから極秘任務を託される事がある。

家族旅行・・・肝試し編 下

最初に出発した優と光の2人は、さすがに本職とだけあって充分に警戒していた。あのお爺さんの話が本当かはわからないが、万が一誰かに危険が及ぶ事はあってはならない。

光は常に商売道具ともいえるお札を何枚か持ち歩いている。その内の半分の優に渡して、ひたすら竹林の中の一本道を歩いていく。

最初の半分は何も感じる物もなく、時折後続の誰かが上げる悲鳴が聞こえてきた。これは2人とも後で知る事になるのだが、この悲鳴の発生源は櫻だったそうだ。

しかし状況が一変したのは丁度半分の過ぎた辺りである。2人は辺りに只ならぬ気配を感じた。霊感が強い2人にも直ぐにわかるほど強力だった。

「光君！」

「ああ。」

まず光は携帯電話で後続のメンバーに引き返すよう連絡をする。他のメンバーを巻き込む訳にはいかない。そして念のために母親の伊澄に応援を要請する。

そして、2人は札をいつでも投げられる体制に入る。いつどこから襲われるかわからない。

「こいつは相当強力だぞ！」

「ですね。」

2人が感じる力は徐々に大きくなる。相当な強さだ。そして。

「てやあああ!!」

男の叫び声が響き渡った。

「しまった。後ろか!!」

急いで札を後ろに向かって投げる光。間一髪、相手が彼と優に襲い掛かるのを防ぐ事が出来た。

その男は札の力によって弾き返されその場に倒れた。その姿を見て、2人はさっきの老人の話が真実であったのを悟った。

目の前に倒れた霊は古めかしい軍服を着込み、腰には軍刀を下けている。ご丁寧に額には日の丸と必勝の文字が入った鉢巻を締めている。間違いなく旧日本軍の軍人だ。

「八葉六式、撃破滅却!!」

光が呪文を唱えると、その霊は消失した。しかし、これで一安心とはいかなかった。なぜなら、光と優は10人ほどの軍人の霊に囲まれていたからだ。

「こんなに数が多くちゃ、とても防ぎきれません。」

優が叫んだ。

「とにかく1人でも多く倒すんだ。母さんが来るまで持ちこたえればなんとかなる！」

とは言つものの、こちらの札の残り数も寂しい。

（だが、他に方法はない。）

むしろ彼にとって心配なのは優の事だ。なぜなら彼女は最近見つるから手解きを受けている物の、使える術はごく簡単な物ばかり。こんな強力な霊相手では立ち向かえるかは疑問である。

（俺が守らなくちゃ。）

しかしあまり深く考えている余裕はなかった。軍人の霊は再び奇声を上げると二人に襲い掛かった。幸いといえるのは、10人一遍には襲い掛かってこないことだった。武士道の考えが残っているのか、1対1でしか向かってこない。

光と優は必死に相手に札を投げつけ、そして動きを封じて相手を撃破しようとする。しかし、やはり初心者である優には荷が重かった。札の力で動きを封じ込める事は出来るが、相手を完全撃破することが出来ない。

それどころか、彼女は力加減を間違えているらしい。体力の消耗が激しいのだ。伊澄や光のような慣れた人間ならそう言うことはないのだが。

「はあ、はあ。」

息切れしている優に、光は指示した。

「優、ここは俺にまかせろ！お前は一端下がるんだ。」

といつても、光ももはや青息吐息に等しい状態だった。相手の動きを封じられる札がついに底をついてしまった。後は自身の呪文しかないが、相手が動く物体であるので、とてもかけている余裕はない。

残る敵は2人。

「なんとか、なんとかこいつらを止めれば。」

しかし、相手はこちらの思惑など考えてはくれない。2人の日本軍の亡霊は、1人が光に、1人が優に襲い掛かった。

「くー！」

すでに満足に動けない優は覚悟を決めた。相手が刀を高々と振り上げる。実体ではないから、例え切られても物理的な被害はない。その代わり精神が大ダメージを受ける。酷い場合には死に至るほどの打撃を受ける可能性があった。

「逃げるんだ！」

優に向かって光は叫んだが、もはや彼女は満足に動けない。そして刀は振り下ろされた。

だが、彼女の体に変化はない。

「え？」

目を開けると、自分の楯になるよう立っている光の姿があった。

「光君！！」

「大丈夫、まだやれる。」

しかし、刀で切られた彼の傷は重傷だ。体力が一気にダウンし、立つのがやっとである。

「なんで、なんでこんなことを！？」

「なんでって・・・好きな女の子を守るのに理由が必要かよ？」

「え！？」

「さあ、最後の勝負だ！！」

虚勢を張るが、もはや彼に戦える力はない。

（ここまでかな？）

相手が再び刀を構える。2人に同時に襲い掛かる気だ。その時である。

「八葉六式、撃破滅却！！」

大人の女性の凜とした強い声、それとともに軍人の怨念は跡形もなく吹っ飛んだ。遠距離から、呪文だけの攻撃で、強力な怨念の

塊を倒した。こんな事が出来る人間は1人だけだ。

「母さん。助けに来てくれたんだ。」

光の言葉どおり、まもなく伊澄にワタル、さらにはハヤテとナギが走ってきた。

「大丈夫か2人とも？」

「大丈夫、光？」

ワタルと伊澄が座り込んでいた光に駆け寄った。

「ああ、なんとか。」

「全く、こんなボロボロになるまでやりやがって。母さん（伊澄）が来るまで待とうとか考えなかったのか？」

そう言つと、ワタルは光をおぶった。

一方、優の方はなんとか歩く事が出来るのでナギに肩を貸してもらつて帰ることと成った。

別荘に戻ったあと、2人は先に戻っていた面々に出迎えられた。幸い、2人とも体力は消耗したものの、物理的な傷は負っていないかったから一晩休めば大丈夫ということだった。

そして翌日、他のメンバーが海へ遊びに行く中、2人は念のため別荘で療養となった。

「とんだ旅行になっちまったな。」

皆を見送った光が言った。

「そうですね・・・あの、光君？」

「何？」

「昨日の言葉は本当なの？私が好きだった？」

その言葉を言った優の顔は赤かった。そして、質問された光の顔も赤くなった。

「そ、それは・・・。俺は・・・。」

ヒュー・・・。

その瞬間風が吹いた。この時2人の間でどのような会話がなされたか知る物はいない。この後、家族旅行は何事もなく終わり、一行は東京へと戻った。そして9月の新学期を向かえた。

その最初の日から、光と優が手をつないで下校する姿が見られるようになったという。

家族旅行・・・肝試し編 下（後書き）

御意見・御感想などをお待ちしています。

幕間（前書き）

今回はキャラ紹介をお休みします。

幕間

勇人「どうも、この想いの続きシリーズ主人公の三千院勇人です。」

紫「そしてその妹の三千院紫と。」

優「三千院優です。今回は40話突破記念として、私たちがキャラクターやこの話の流れに付いて説明していきます。」

勇人「それではまず。僕がこの作品の大まかな説明をさせていただきます。この作品は作者山口多聞が書いた前作想いの続きの続編という設定です。原作である「疾風のごとく！」の20年後を舞台に、原作キャラの子供である僕たちの1年間を追った作品です。現在夏休みが終わる所まで進んでいます。」

紫「続いて私紫がメインキャラクターに付いて説明します。基本的に原作キャラは既に成人しているので脇役としてしか出てきません。主人公である子供たちの内、三千院家の子供であるある私たちは父親が綾崎ハヤテ、母親が三千院ナギです。ただし、妹の優は小説版「ハヤテのごとく！」登場のドッペルゲンガーが実体化したキャラクターという位置付けになっています。」

勇人「キャラ個人個人の説明に付いては、毎回前書き部分に載っているのでそちらを御覧下さい。」

優「続いて私優から、三千院家の人間以外のキャラクターについて説明していきます。基本的に、このシリーズでは原作キャラのほんどの人が結婚している設定を取っています。そしてそのカップルには子供が存在する設定ともなっています。まず愛沢咲夜さんは、西

沢一樹さんと結婚しています。そして子供たちは長男の一哉君。長女の夕貴ちゃんに、次女の桜花ちゃんの5人家族です。」

紫「そして橘ワタルさんは鷺ノ宮伊澄さんと結婚しています。子供は長男の光君に長女の澄香さんの4人家族です。また、かつてはワタルさんのメイドだったサキさんも結婚していて今は長男の勇氣さんに、長女の雫さん。次女の夕子さんの5人家族です。」

優「あとメイドのマリアさんもオリジナルキャラクターの姫神勝さんと結婚していて、長女の真理奈さんを含めて3人家族です。」

勇人「それにしてもここまでだけで既に新キャラが僕たち含めて14人もいるんだね。」

優「読者からわかりにくいと言われるのも頷けます。」

紫「では続けて参りましょう。原作では人気ナンバーワンの桂ヒナギクさんは、想いの行方シリーズオリジナルキャラの大畑健二さんと結婚しています。子供は長女の櫻ちゃんの3人家族です。42話以降からは彼女をカップル成就させるストーリーへとなる予定です。」

勇人「やっぱりあのキャラとくつつくのかな？」

優「でしょうね。続けて生徒会3人娘さんについて。まず瀬川泉さんは旦那さんを早く亡くされているため、家族は長女の美沙さんだけです。そしてこの美沙さんは・・・」

勇人「ああ優ストップ。それじゃあ読者の楽しみが減るから。」

紫「いいじゃないそれくらい。勇人は神経質なんだから。気を取り

直して続いては朝風理沙さんについて。彼女は6年前に交通事故死していることになっていて、子供の中嶋理恵さんは親戚に引き取られた設定です。」

優「かわいそうですね。」

勇人「作者も意外性を狙って書いたみたいだけど、確かに死なせちゃうのはまずかったと僕も思うよ。・・・それで、後花菱美希さんは長女の川西由希さんとの3大家族ですね。」

紫「そして最後にこのシリーズの生徒会キャラクターの朴大一さんがいます。この人も櫻と同じく今後大きな役割を果たすキャラです。」

優「ここまで紹介したメンバー以外にも、西沢歩さんや春風千桜さん、そして行方が気になるクラウドさんやシスターといったキャラも今後登場するかもしれませんのでご期待を。」

勇人「続いてはここまでの流れに付いて。このお話は僕と紫が白皇学院高等部に進学した所から始まっています。前期は様々なキャラクターとの出会いや人物関係、そして僕の恋が成就するまでが焦点となっていました。」

紫「夏休みは、私と優のちょっと甘く、ちょっとスリリングな恋の話が中心となって進みました。」

優「次回からはいよいよ9月。白皇学院第2幕のスタートです。」

「???」学院際という大きな行事を前にして、どんな恋が起きるのか?そしてどんな新キャラが出てくるのか。」

???「僕のお母さんも出るかもしれないので、ぜひ読んでください。」

勇人・紫・優「」「誰?」「」

???「それは今後のお楽しみです。とにかく、最後の締めを言います。」

5人「」「」「」今後もしっかりお願いします!。「」「」「」

編入生（前書き）

オリキャラ16・・・渡辺雫。サキの娘で白皇学院高等部2年生。
詳細は不明・

編入生

夏休みが終わり、月日は9月を迎えた。白皇学院に再び生徒たちが通学する日々が戻ってきた。残暑はまだまだ厳しいが、冷暖房完備の白皇学院の教室は過ごしやすい環境に保たれていた。

その教室に、生徒が全員揃い朝のチャイムが鳴る。

「おはよう。」

扉を開けてこのクラスの担任である雪路が入ってきたが、どうも様子がおかしい。テンションが限りなく低い。顔色も少し悪い。そして頭を抱えている。

もっとも、そのことを心配する生徒はこのクラスには皆無だった。なぜならどうしてそうなっているのかはおおよそ検討が付くからだ。

「先生また二日酔いみたいだね。」

紫が前の勇人に小さな声で言う。

「もう恒例行事になってるよな。」

さらに優も話の輪に加わる。

「あの人には学習能力があるんでしょうか？」

そんな3人に釣られるように、真理奈と櫻、さらに美沙もひそひそと喋る。

「全くこりずに毎回やりますよね。」

「多分伯母さんのあの酒好きは永遠に直らないわよ。」

「お母さんから聞いていたけど、まさかここまでとは思わなかったよ。」

櫻はもう怒るのを通り越して完全に呆れ返っていた。

そんな自分たちの教師をズタボロに酷評する彼らに、雪路がピシッと指さす。

「そこ！お喋り禁止よ！！それと、先生をバカにするな！！て、う！！」

その雪路の言葉には、全く覇氣がない。そして声を荒げたせいか、彼女は再び頭を抱えた。

「あれじゃあ京ノ助おじさんも大変だろう。」

櫻がボソッと呟いた。

実は、雪路はああ見えても既婚である。夫はかつての幼馴染であり同僚の薫京ノ助だ。彼は現在白皇学院教頭である。

雪路と彼が結婚したのは、ハヤテたちに遅れる事半年後で、ちょうど雪路が酒の飲みすぎで体を壊していた時期である。酒が飲めない分、彼女にも心の余裕があったようだ。

もつとも、禁酒の時期が過ぎてからは再び大酒飲みに戻り、京ノ助を大いに悩ましている。結婚式の時には、ヒナギクが「またハチヤメチャなことやりだしたら、遠慮なく離婚してください。」とまで言ったが、そのとおりになってしまった。それでも離婚しないのだから、彼も一途である。

閑話休題。

「ええと、夏休みが開けたわけだけど、今日からこのクラスに留学生が来ます。」

その雪路の言葉にクラスがざわめく。

「先生、男ですか？女ですか？」

1人の生徒が質問した。

「男の子よ。それもすごくかっこいいわよ。」

その言葉に、勇人と紫は苦笑いをした。雪路は転校生や編入生を紹介する際必要以上に持ち上げる癖をしているからだ。

「それじゃあ入って貰おうかしら。留学生のサエキ・シャフルナース君よ。」

雪路に促されて入ってきたのは、優しい顔をした男子であった。どっちかというと女顔である。中々の美少年だ。

「今日からお世話になります。サエキ・シャフルナースです。」

それは明瞭な日本語だった。それを聞いて生徒の全員が面食らった。

「じゃあサエキ君の席は、姫神さんの後ろの席が空いているからそこに座ってね。」

彼は隣と前の席に真理奈に挨拶をすると、雪路に指示された席に座った。

その後、最初の休み時間になると彼の席の周りには人ばかりが出来た。

「どこの出身？」

「どうして日本に来たの？」

「なんで日本語がそんなに上手いの？」

彼は矢継ぎ早に出される質問に対して答えていたが、1人の生徒が言った質問に表情を暗くした。

「なんでサエキっていう名なの？」

この質問には彼は答えようとしなかった。生徒たちも雰囲気を感じてか直ぐに質問を変えた。

一方、勇人たちいつものメンバーは教室に入ってきたある人物と話をしていた。

「勇人、紫、真理奈、櫻、久しぶり!!」

そう元気良く声をかけてきたのは、薫家長女の未来だ。彼女は3日前に留学先のオーストラリアから帰ったばかりだった。本来は勇人たちよりも1年上級であつたが、留学したために1年生に編入された。

ちなみに外見は雪路似だが、性格は母親と父親を反面教師にしたせいか、いたって真面目である。

「やあ未来、久しぶり。オーストラリアはどうだった？」

「すつごく楽しかったよ。ただこつちとは気候が逆なのはちょっとこまつたけどね。ところで、その娘は？」

未来が美沙に付いて聞いてきた。

「始めまして、私は瀬川美沙。よろしくね未来ちゃん。」

「よろしく。じゃああなたが勇人のガールフレンドなんだ。」

その言葉に、美沙は顔を赤くし、勇人は驚く。

「なんで知ってるの？」

「お母さんから聞いた。」

どうやら雪路がべらべら喋つたらしい。こつなると紫のことも知つていそつだ。

「あ、あとあなたも始めましてね。たしか、優だっけ？」

今年6月に生まれた（？）優とは未来も初対面である。

「はじめまして、綾崎優です。」

こうした仲の良い友人同士の団欒が勇人を中心に行われるが、それを見ている男子生徒は怒り心頭だった。なにせ、勇人の周りに実に5人もの美少女が集まっているのだから怒れない方が無理といえるかもしれない。

そうしているうちにこの日の授業は終わり、放課後になった。勇人は映像研究部の部室へと行こうとしていたが、その途中でサエキを見つけた。

「サエキ君！」

彼は勇人の方に顔を向けた。

「ああ、君は確か同じクラスの・・・」

「綾崎勇人。」

「そう、勇人君だったね。何？」

「いや、ちょっと声を掛けてみただけ。あ、サエキって言って良かったかな？なんか朝氣にしていたみたいだけど。」

すると、サエキは笑った。

「別に良いよ、ちょっと思い出したことがあるだけだから。」

「そう。それにしても、君本当に日本語上手だね。まるで日本人みたいだね。」

「まあ、5歳までは日本で暮らしていたから。僕さ、ダブルなんだ。」

「そうなんだ。ねえ、暇してるのならうちの部活見てかない？」

すると、サエキは少し考えて言った。

「いいよ。」

編入生（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

意外な接点（前書き）

オリキャラ１７・・・渡辺夕子。サキの娘で高校１年生。白皇ではなく公立の潮見高校。

意外な接点

サエキを引き連れた勇人は画像研究部にやってきた。

「なんか、なんとえば良いのか・・・かなり奇抜な建物だね？」

サエキが部室を見た第一印象を口にした。その言葉に少しばかり苦笑しながら、勇人は彼を連れて中へ入った。

中には由希が1人だけ椅子に座って待っていた。

「あ、先輩こんにちは。あれ、その人は？」

「やあ。この人は今日うちのクラスに転入してきた留学生のサエキ・シャフルナース。」

勇人に紹介され、サエキも挨拶する。

「サエキ・シャフルナース。よろしく。ところで、ここってどんなことやる部活なんだい？」

画像研究部と言う名前では今一内容を理解できなかったらしい。

「ここはいろんな画像、写真とか映像を見たり撮ったりして楽しむ部活です。」

由希が説明する。

「ふーん。そうなんだ。」

「はい。・・・けど、サエキ先輩ってどこかで見覚えがあるような気がしますね？」

由希がそう言うと、サエキは首をかしげた。

「え！？僕ここに来たのは今日が初めてだし、君に会うのも初めてのはずだけど。」

「そうですか？けど、確かにどこかで、しかもつい最近見たような覚えがあるんですけど。どこだったかな？」

由希は必死に何かを思い出そうとする。

彼女が考えこんでしまったので、取りあえず勇人は部室内の案内をすることにした。様々な映像や写真が保管されている倉庫や、カメラなどの機材が置かれている部屋を順々に紹介していく。

そうやって紹介していく中で、勇人はサエキと雑談をした。

「ところで、留学生とはいえ白皇学院に入るのは難しかったでしょ？」

勇人はサエキにそんな質問をした。

「ええ、けど母からこの学校の事何度も聞かされていたから。」

その言葉に、勇人は彼女の母親はここで学んだ事があるのかという疑問が普通に湧き上がった。

「お母さんはここの卒業生なの？」

すると、彼は否定した。

「いいえ。母は日本の学校へは通っていません。ただ、この学校に通っていた人の中にかなり知人がいたとは聞いている。」

「そうなんだ。お母さんって今何してるの？」

勇人としてはかなり軽い気持ちで聞いたのであるが、彼は少し表情を暗くした。

（もしかしたマズイ質問だったかな？）

一瞬そんな考えが頭をよぎった。しかし、サエキはそれに構うことなく喋り始めた。

「母は一応シスターだよ。けど、家の家系元がマフィアだったから。母親も例に漏れず色々悪い事やってきたみたいで。それに体力は化け物クラスだし、おまけに博打が大好きだし。」

最後の方はかなり自嘲気味な言葉であった。

しかし、勇人には何か聞き覚えのある内容だった。

（元マフィアのシスター・・・しかも博打好き？もしかして・・・）

「あのさ、ちょっと良いかな？」

「うん？なんですか？」

「君のお母さんってもしかして、ソニアっていう名前じゃない？」

すると、サエキは飛び上がらんばかりに驚いた。

「え！？どうしてそれを知っているの！？」

「いや・・・その・・・家の親からそういうシスターがいたって聞いたから。もしかしてそうじゃないかと思って・・・けど、まさか本当にそうだったとは・・・」

2人が奇妙な縁に驚いていると、由希がやってきた。

「あ、いたいた。サエキ先輩。先輩のことどこかで見覚えがあると思っただら、こないだお母さんたちの時代の古い資料をあさっている時に見たんですよ。この写真。」

由希は2人に数枚の写真を手渡した。

勇人はその写真の日付を確認する。ちょうど両親である勇人にナギがこの学校に在籍していたころの物だ。

その写真を見て2人とも驚いた。

サエキは母親が写っている事に。勇人はその女性がサエキに似ていることに。

「母さんだ・・・」

「そっくり・・・」

そしてサエキはもう一つのことには、気付いた。

「この人は？」

サエキが指差したのは、ソニアの横に並んで立つ色黒の男である。そしてその男に、勇人は見覚えがあった。

「ああ、その人は確か氷室さんだよ。大河内家の執事長をしているひとだよ。大河内家で開かれたパーティーで会った事あるから間違いないよ。」

と、そこで勇人はある事に気付いた。

（あれ、待てよ・・・確か氷室さんの苗字って佐伯じゃなかったかな？・・・まさか？けど、そんなことあるのかな？）

彼の考えが正しかったから、あまりに上手く繋がりが過ぎている。しかし、気になった。

「ねえ、サエキさんのお父さんって何している人？」

すると、サエキはまたも顔を暗くした。

「あ、話したくないなら良いよ。」

勇人も無理して聞く気はなかった。しかし。

「いや・・・君なら話しても良いような気がするから言うよ。僕の父はわからない。母はその事について話してくれたことはあまりな

いから。ただ、僕の名前は父親から取っているだけでは聞いている。」

となると、恐らく十中八九彼は氷室の子供だろう。そこで、勇人はこんな質問を試してみた。

「ねえ、もし会えるならお父さんに会いたい？」

すると、サエキは即答した。

「会っては見たい。けど、会いたくもないという気持ちもあるんだ。だって、父は母を見捨てたんだから。」

その言葉に、勇人は黙り込んでしまった。

そんな2人を、由希は所在無さげに見守っていた。

数日後の休日、勇人の姿は大河内家にあった。

意外な接点（後書き）

御意見などをお待ちしています。

氷室の秘密 上（前書き）

オリキャラ１８・・・薫未来。雪路と京ノ助の子供。両親を反面教師にしたので、性格はすごく真面目。ただし体力は化け物クラスで手先が器用。外見は母親似。留学していたので、１年年下の勇人たちの学年に編入された。

氷室の秘密 上

勇人が大河内家を訪れると、大河が彼を出迎えてくれた。

「やあ勇人君、久しぶり。お母さんとお父さんは元気かな？」

「お久しぶりです大河さん。ええ、2人とも多分あと100年は生きそうぐらい元気ですよ。」

勇人と大河はお互い高位の資本家に生きる人間であるから、パーティーなどでこれまでに何度も会っており、面識があった。

ハヤテ達よりも一回り若く、かつてはやたら執事である氷室の面倒を見ていた彼も、今や青年に成長し、次期当主として日々がんばる毎日であった。

「それで、用件は氷室に会う事だったね？」

「はい。それで氷室さんはどこにいますか？」

さすがに大河が成人した今、彼は常に大河の側にいるなどということはない。現在彼は大河内家の執事長をしている。

「待って、すぐに呼ぶから。」

大河は側の机の上に置かれていたベルを鳴らす。

「氷室、来てくれ！！」

すると、そのコンマ5秒後には、彼が突然天井から現れた。

「お呼びでしょうか、坊ちゃん。」

多少老けてはいるが、ハヤテを圧倒した体力と運動神経は相変わらず健在であった。

「うん。けど、用事があるのは僕じゃなくて、この人。」

そう言われて、彼は顔を勇人の方へと向けた。

「これはこれは三千院家の長男である勇人君じゃないかね。ハヤテ君達は元気にしているかな？」

「ええ。それにしても、相変わらず運動神経良いですね。」

「なあに、君のお父さんの方が凄いよ。なぜなら、僕をあの白皇自由形マラソンで打ち破った人間なんだからね。」

「はあ。」

その言葉に、勇人は少しばかり苦笑いした。マリアからその時のことをしっかり聞いていたからだ。

「ところで、大河お坊ちゃんではなく、僕を訪ねてくるとはどういうことかな？言っておくが、執事としての引き抜きならお断りだよ。僕は今の地位で満足しているからね。」

「違いますよ。ちょっとお聞きしたい事がありまして。出来るなら二人で話をしたいんですが？」

そう言って、チラッと大河のほうを見る。彼はすぐに、「わかった。」と言って部屋から出て行った。

「坊ちゃんに聞かれるとマズイ話なのかね？」

「ええ。」

「まあ、座ってじっくり聞こうじゃないか。」

氷室は部屋にあるソファーに座るよう、勇人に勧めた。勇人は氷室と向かい合う形で座った。

「で、話とは何かな？」

「はい。実は先日うちの学校、つまり白皇学院に1人の転校生が来たんですけど。」

「そう。それで。」

「その子はミコノス島の出身で、お母さんはシスターをしていて、かつてこの辺りに暮らしていた事があるそうです。僕が今所属している画像研究部にも写真があっただんですけど、彼お母さんに凄く似ているんです。」

勇人の話を、氷室は表情1つ変えずに聞いていた。

「そして、その子の名前はサエキ・シャフルナース。サエキという名は、お父さんの苗字から貰った名前だそうです。・・・失礼ですが、氷室さんと同じですよ？あなたはその子について何か知りま

せんか？」

勇人は氷室が、多分彼の父親と予想してはいたが、もしそうだとしてもYesの回答が簡単に来るとは考えていなかった。第一、佐伯なんて苗字の人間は探せば結構いる。もしかしたら本当は勇人自身の考えが間違っていたのかもしれないのだ。

しかし、氷室はしばし目を瞑って何かを考えていたようだが、おもむろに口を開いた。

「その子は元気になっていたかな？」

予想外の言葉に、勇人は少し面食らったが、直ぐに我に帰って答えた。

「はい。特に何か問題があるようには見えませんでした。」

「そうか・・・なら良かった。」

「じゃあ、本当に氷室さんが彼のお父さんなんですか？」

勇人が直球の質問に出ると、直ぐに氷室は顔を縦に振った。

「ああ。彼は間違いなく僕と彼女の間に生まれた息子だよ。というか彼女からそう連絡は貰っていたしね。」

さらに驚く勇人。

「えー！じゃあ氷室さんは知っていたんですか？しかもソニアさんから連絡を貰っていたんですか！？けど、彼は何も知りませんでした

よ！」

「そりゃあまあ、彼女が日本を出る前に、子供には父親に付いて正確な情報は教えないって約束したからね。」

これには勇人も本当にビックリである。

「え！なんでそんなことしたんですか！？彼は父親であるあなたを恨んでいるんですよ。」

勇人は目を見開いて言ったが、氷室は相変わらず飄々とした姿勢を崩さない。

「別に君に話す義務は無い。」

「う……」

正論を言われ言葉に給する勇人。確かに、これは彼氷室自身のプライバシーに関わる問題である。勇人が深く突っ込んで良い問題ではない。

「そうですね……僕が必要以上のことをして良い権利はないですよね。」

その姿を見て、氷室はクスツと笑った。

「君は本当にお父さんにそっくりだね。優しすぎるというか、素直すぎるというか。まあ、僕も誰かに話して少し気を楽にしたいと思っていたところだ。君が相手なら良いだろう。」

「え！？じゃあ、話してくれるんですか？」

「ああ。まだ大河お坊ちゃんにも、そして家族の誰にも話していない話だ。ただその前に少し喉を潤そうじゃないか。」

そう言つと、彼は一端席を離れ、お茶の用意をしに出て行った。

氷室の秘密 上（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

氷室の秘密 下（前書き）

オリキャラ19・・・サエキ・シャフルナーズ。氷室とソニアの子供。外見はソニア似。白皇学院に留学中。体力は2人の血を継いで化け物クラス。

氷室の秘密 下

氷室の淹れたお茶で一服すると、2人は再び会話を始めた。

「彼女と会ったのは、君のお父さん、すなわちハヤテ君と初めて会った直ぐ後ぐらいだったかな。僕は当時、まあ今だけど麻雀が大好きでね、彼女とは雀荘で会ったのが初めてだったね。まあ、その後も雀荘と一緒に麻雀したりはして親しくはしていたけど、恋愛とは程遠い物だったね。」

（なんでそんな2人が子供を？）

勇人は内心でそんなことを考えていた。

「それで、あれは君の御両親が結婚した直ぐ後だったかな、2人で一緒にグデングデンに酔うまで飲んだ日があったんだ。お互いとも家まで帰れる状況じゃなくてね、近くのホテルに泊まったんだが、この先はちよつと言えないな。というか酔っていたから良く覚えていない。気付いたら朝になっていたからね。まあ夜に自分たちが何をしたかはわかったけどね。まあ、君にもだいたい想像出来るだろう。」

この時の勇人は、開いた口が塞がらなかった。

「え！？つまり、酔った拍子で、その・・・やつちゃったと？」

「まあ、そう言う事になるのかな。しかもそれで彼女に孕ませてしまった。3ヵ月後、彼女が妊娠証明書を持ってきたときには、こっちも驚くばかりだったよ。」

（本人が聞いたらショックだろうな・・・）

「それで、どうして2人は結婚しなかったんですか？」

「僕はどちらかというとお金に執着するエゴイストだからね。彼女もどっちかというと自由奔放に生きていく主義だった。だから結婚した所で、子供のためにならないと思ってね。結局話し合って、子供は彼女が育て、僕は密かに資金援助をすることで妥協したよ。そして彼女とはそれ以来、手紙のやり取りこそしたが、直接は会っていない。」

言い終えると、氷室は紅茶を一口飲んだ。

「そうだったんですか・・・それで、氷室さんは彼に対してどう思っていますか？」

「そうだね・・・恨みたきや満足が行くまで恨んでくれればそれで良いよ。僕が父親として出来るのはそれくらいだからね。」

表情も口調も、いつもと同じようであるが、彼の言葉に、どこか寂しさのような物を感じる勇人。

「氷室さんは彼に会って見たいですか？」

すると、氷室は自嘲した。

「今更会ってもどうしようもないよ。僕は彼女とあの子を見捨てたと言われてもおかしくない人間なんだよ。」

「けど、仕送りはしていたんでしょう？ソニアさんとも連絡を取り合っていたんでしょう？それはあなたが見捨ててはいなかった証じゃないのですか？」

「違うよ。そんな物はただの罪滅ぼしを装った言い訳だ。彼女はともかく、彼を父親として見捨てたのは間違いない。……けど、本音を言えば、会ってみたいと思う。」

すると、待っていましたとばかりに勇人が言う。

「だったら会ってみますか？」

「しかし、彼がすぐここに来られるわけでもあるまい。」

「実はいるんですよ。隣の部屋に。」

「何！？」

始めて氷室が驚いた顔をした。

「黙っていてごめんなさい。あらかじめ大河さんに連絡して頼んでおいたんです。……サエキ君！」

勇人に呼ばれ、サエキと大河が入ってきた。

「大河お坊ちゃんにも聞かれていたのか……」

すると、大河がすまなさそうに言う。

「ごめん氷室。けど、氷室も水臭いよ。僕に言ってくれば出来る

限りの事はしたのに。」

「主を頼るようでは、使用人、ひいては執事として失格です。」

そう大河に言うと、氷室は視線をサエキに向けた。サエキは、なんと云って良いか迷っていた。それは自分の出生の秘密を聞いてショックだったこともあるし、何より目の前の父親をなんと呼べば良いかわからなかったからだ。

「あの・・・その・・・。」

すると、氷室は彼の気持ちを察したらしい。

「別に父親と呼びたくなかったら呼ぶ必要はない。氷室でも、君の呼びたいように言いたまえ。」

「・・・わかりました。じゃあ氷室さんと呼ばせて頂きます。先ほどの話、俺にも凄いショックでした。まさか、俺がそんな風につくられたなんて思いもしませんでした。けど、俺は母さんのことは恨んでいません。確かに母さんハチャメチャな人だけど、俺には優しくくれました。そしてあなたがそんな母を見捨てていなかったのもわかりました。・・・けど、やっぱり俺はあなたを許す気にはなれません!!」

サエキが声を荒げた。

「さつきも言ったが・・・別に許してもらわなければならない。恨みたいなら満足するまで恨むが良い。それが今僕が君にしてあげられることだ。」

すると、サエキは拳に力を込めて言った。

「それだけじゃ不十分です。あなたを一発殴らせてください！」

「良いだろう。」

そして、サエキは全身全霊を込めて氷室の顔面にパンチを喰らわせた。

「うわああー！」

バッキンン！！

氷室の体が吹っ飛んだ。

「く・・・さすがは彼女の子供だ。力が半端じゃない。」

「あなたの息子だからかもしれませんよ。」

「そうかもしれないな・・・今更だが、もし何か助けが必要だったらいつでも来なさい。出来る限りで力になろう。」

「僕も力になるよ。氷室には一杯お世話になっているからね。」

氷室と大河に笑顔で言われ、サエキも固くしていた表情を緩めた。

「・・・ありがとうございます。」

こうして、完全ではなかったが、氷室とサエキは間に存在した厚い壁を取り払ったのだった。

勇人と大河は、そんな2人を見て、安堵の表情を浮かべるのだった。

氷室の秘密 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

生徒会長の恋 始動編

9月も2週目に入ると、白皇学院内の空気は大分騒がしい物となる。10月の1週目に行なわれる学院祭の目前であるからだ。

白皇学院は小等部、中等部、高等部とあるが、この内小等部と中等部の学院祭はやることが演劇や合唱などと固定されている。しかし、高等部からはクラス企画、部・サークル企画、有志企画など様々な企画が催される。

また、教師の手から離れて生徒独自で様々な企画を自主的に執り行っていくのも大きな違いである。

夏休み前には学院祭の実行委員会が立ち上げられ、彼らが多くの規則を決め取り仕切るが、実際の所様々な裁可を下すのはその上部組織である生徒会だ。

そう言うわけで、生徒各々が学院祭への準備や練習を行ない、胸躍らせている時、生徒会の面々は様々な場所から上げられる報告書に目を通し、裁可の印を押し、さらにそれを教師に渡すという事務仕事に追われていた。

とりわけ、会長である桂櫻は多忙の域を通り越して、完全なオーバーワーク状態だった。

「生徒会長！野球部より最終企画書が来ました。裁可お願いします！」

「生徒会長！学生担当の天下先生から、当日のタイムテーブル表の

最終案を出せと督促が来てます！」

放課後、生徒会室にある生徒会長席には、書類の提出や判を求める生徒、さらには教師からの連絡役を仰せつかった生徒らでこった返していた。

櫻は迅速にそれらの仕事をさばいていくが、1人で出来る事にはやはり限界がある。

「もう、どうにかして!!」

サービス残業のサラリーマンじゃあるまいしと思いつつも、これが非情な現実であった。

もつとも、何も彼女のみがこのような状態に置かれているわけではなかった。他の生徒会役員も似たり寄ったりの状況だった。皆自分の仕事で精一杯という状況の者ばかりだった。

ただし、努力はしているが仕事の能率が非常に悪いという生徒会役員も多かった。今年の生徒会役員は1年生の比率が比較的高かったというのがその理由だった。

去年生徒会役員をしていた2年生は、大概この学院祭での地獄を嫌ってやめていたのだ。

そういうわけで、新米生徒会役員は慣れない大量の事務仕事に悪戦苦闘し、悲鳴を上げているのが実情だった。

そんな中で、驚異的に効率の良い仕事をしているのは、勇人と紫の三千院（綾崎）兄妹と朴副会長の3人だ。

もともと勇人と紫は英才教育を受け、さらにハヤテから様々なことを学んでいたからこういうことにも対処できた。ただし、その分他人から頼りにされるので櫻を手伝う余裕はなかった。

一方、朴は数少ない2年生の生徒会経験者であるから仕事を効率よくそつなくこなす事が出来た。また、他人からも頼りにされるがそれさえも手早く彼は片付けた。

そう言うわけで、苦境に陥る生徒会長を助けられるのは朴だけだった。

「がんばるんだ生徒会長！こんな所でへばっていたら、学院祭当日なんかとても体がもたないぞ！」

手が空くと、彼は率先して櫻の仕事を手伝う。

朴に励まされ、櫻も仕事を再開する。

生徒会就任前は会長職に何度も押された朴だったが、彼自身それを辞退して副会長の職に就いている。しかも、会長は本来中3であるはずの女子が就任という状況でだ。

朴が言う所では、「俺は会長に納まるような人間じゃありませんよ。むしろ補佐役として人を支える方が好きなんです。」というこ
とらしい。

ただし、実際の所彼は副会長としてよく櫻を補佐し、生徒会を纏め上げていた。実際の所補佐役が適任というのは嘘ではなかった。

夏休み前は仕事もまだ少なく、その能力を発揮する機会がなかったが、今になってそれを如何なく朴は発揮していた。

そう言うわけで、櫻の朴を見る目は次第に変わりつつあった。最初は尊敬であったものが、あこがれや頼りにするという感じに。

そしてこの日も、地獄の事務仕事を終わらせた生徒会役員の面々は三々五々下校の途につく。

「櫻お疲れ。」

「櫻ちゃんお疲れ様。」

帰り際櫻に声を掛けてくる人間。それは大体決まっていた。

「ああ、勇人君に美沙さん、紫さん。」

この3人と一緒に帰るのが、ここの所櫻の日課となっていた。

勇人と美沙はすでにカップルとなっているから、最近是一緒にいる事が多い。最初こそ初恋が実らなかったことにショックを受けた櫻であったが、それを長く引きずるほど彼女は柔ではなかった。

「今日も大変だったね。」

美沙が労いの言葉を掛ける。

「ええ。お互いに今は大変よ。」

「けど櫻も本当によくやるよね。同じ1年生だけど、本来は中3な

のにな。」

勇人が感心の眼差しで彼女を見る。すると、謙遜とばかりに櫻は手を軽く振って答えた。

「いえいえ、これも朴先輩が私をしつかり助けてくれるからです。あの人がいなかったら今ごろ私はオーバーヒートして倒れてましたよ。」

「そういえば、その朴先輩はいつもいないけど、どうしてだろう？」

紫が辺りを見回しながら言う。下校時、いの一番で姿が見えなくなるのは朴だ。すると、勇人が軽い感じで答えた。

「朴先輩ならアルバイトだよ。」

勇人の言葉に、櫻と紫が驚く。

「「ええ!？」」

これは櫻と紫には寝耳に水のことだった。

「あれ、2人とも知らなかったっけ？」

直に話を聞いている勇人、間接的に勇人から聞いていた美沙は既に彼がアルバイトをしていることや、出生のこと、今までの生い立ちのことを知っていた。

しかし、朴はこの事を2人以外には口外していないから櫻と紫が知っているわけが無かった。一応伊豆ではアルバイトをしているの

を見たが、あくまで一時的なこととしか考えていなかった。

「ぜんぜん、知らないわよ。勇人、一体どういふことが教えてよ？」

紫の問いに、勇人は他人にはなるべく言わないという条件付で朴のことを話した。

彼が北朝鮮の出身である事。日本への移住の際、弟と妹を失った事。いじめなどを乗り越え、奨学金をもらって白皇に入学した事。今でも家計を助けるためにアルバイトをしていること。

勇人が話をし終わると、2人とも言葉なく、ただ呆然として驚いていた。

生徒会長の恋 始動編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

思いやり

「生徒会長！？会長！？」

ボーっとしていた櫻に、朴が声を掛ける。そして彼女はハッと我に帰る。

「え！あ、朴先輩。何でしょうか？」

そんな風に彼女が答えると、朴は呆れ顔で言った。

「何でしょうかって、自分が今仕事であることがわかっているのか？」

相変わらず櫻が座る生徒会長席には膨大な書類が送られてくる。ボーっとしていたためにそれを見る手が止まっていた。

「あ！すいません。」

「珍しいな、生徒会長が呆けるなんて。疲れが溜まっているんじゃないか？もし体が持たないのなら、無理せず言えよ。」

言葉はぞんざいだが、朴が気遣いの言葉を掛ける。

「いいえ、大丈夫です。ちょっと考え事をしていただけです。」

「そうか。じゃあがんばれよ。」

そう言つと、朴は自分の席に戻り仕事をする。

「ふう。」

溜息を着く櫻。ここ数日、櫻は朴に氣遣ってもらうことに氣が引けていた。原因は先日勇人から聞いた朴の身の上話だ。

櫻は、母親であるヒナギクや父親である健二、また知り合いであるハヤテの苦勞話を知っていた。3人はかつて親から見捨てられるか、先立たれたために子供でありながら生きるのに必死になった時期があった。

今でこそ裕福で幸せな生活を送っているが、3人とも大いに苦勞した人生を歩んできたのだ。櫻は母親のヒナギクから、そう言う人もいるからがんばりなさいと常に言われ続けてきた。

しかし、母親の話とはいえやはり昔の話に過ぎないという気持ちで彼女の中にあつた。

そんな彼女にとって、先日勇人から聞かされた話は充分なインパクトがあつた。常に明るく振舞い、黙々と仕事をこなしている朴が自分の母親たち以上の苦勞をしてきたとは思ひも寄らなかつた。さらに、身近にそのような人間がいることもショックであつた。

その日以降、櫻は極力朴に頼らないようにしようと心がけるようになった。自分は彼とは比べ物にならないほど幸せな生活を送っているのだ。そんな自分が彼に頼つてばかりではいけないと思つたからである。

しかし、思つたよりこれは厳しかった。いくら櫻が今まで以上に氣を引き締めたからと言って、仕事の効率が何倍も良くなるという

道理があるはずがない。

と言う訳で、彼女を自分で自分の首を占めている状態に陥っていた。しかし、そんな状況になっても、母親譲りの負けず嫌いの性格のせいか、弱音を吐く事はなかった。

だが、数日後ついに精神に体が追いつかなくなった。その日、彼女は38度を越す熱を出して学校を休んだ。

「無理するからこうなるのよ。今日一日しっかり休んでおきなさい。全く、本当に私に似て負けず嫌いなんだから。」

寝込む櫻に、お粥を持ってきた母親のヒナギクはそう声を掛けた。

櫻はその日一日悔しい思いで一杯だった。朴に迷惑を掛けないよう頑張ったつもりが、空回りして拳句の果てに、朴を始めとする生徒会役員に迷惑を掛けてしまった。

「自分が情けない・・・」

布団に潜ってひたすらそう思う櫻だった。そしてそのまま彼女は眠りについた。

次に彼女が目覚めたのは、もう大分日が陰った夕方だった。眠ったおかげで熱は下がったようで、朝感じていたダルさはなかった。

「大分寝ちゃったな・・・今日生徒会大丈夫かな？」

責任感が強い櫻はそんなことを考えていた。

そして数時間後、桂家のある人物が訪れた。

「ごめんください。」

白皇学院の制服に身を包んだ男子生徒、朴であつた。もちろん、出迎えたヒナギクは白皇の理事長であるから面識がある。

「あら、朴君。今日は櫻が迷惑掛けちゃってごめんなさいね。」

「良いんですよヒナギク理事長。風邪では仕方ありません。彼女ははどうですか？」

「もう大丈夫よ。熱も下がつたし、明日は学校へ行けると思うわ。ここで立ち話もなんだし、上がつて。なんなら、会つてく？」

「では、お邪魔します。」

そしてそのまま彼は櫻の部屋に通された。

「櫻、お客さんよ。朴君。」

「え！？」

朴が来た事に多少面食らつた櫻であつたが、別に断る理由などなかった。

「わかつた。通して。」

彼女がそう言つと扉が開き、朴が入ってきた。

「生徒会長、風邪って聞いたけど、大丈夫か？」

「ええ。もう熱も下がったし、明日は行けると思います。それと、ここは生徒会室ではないので、そんな堅苦しい言い方はやめてください。」

すると、朴は苦笑いした。

「ごめんごめん。けど、桂。あんま無理するなよ。病み上がりは危険だからな。もう1日休んだって良いんだぜ。」

これは朴の気遣いであつたが、櫻は断る。

「結構です。これ以上皆に迷惑をお掛けするわけには行きませんか。」

そこまで言つて、櫻はある事に気付いた。

「ところで先輩、今日はアルバイトないんですか？」

すると、朴が怪訝な顔をした。

「ああ、今日は丁度ない日だったけど。俺、その事お前に言っただけ？」

櫻はしまったと思った。勇人から言うなと口止めされているのを、すっかり忘れてしまった。

「さては勇人だな。まったく、言うなって言ったのに。まあ、良いか。」

朴は少し呆れた表情になりながら言った。

「とにかく、もし明日も少しでも不調があるなら出てこずに、休養に専念しろ。無理に出てきて体壊したら元も子もないからな。大丈夫、2日間ぐらいなら、俺がなんとか代行しておくから。」

「いえ、本当に大丈夫です・・・そんなに気を使って貰わなくて良いです。・・・あの、もしかして私に気を使うのは、私が亡くなつた妹さんに似ているからですか？」

櫻のセリフに、朴はしばし考え込んだ。

「そうだな・・・俺としては誰かを特別視しているつもりはないけどな・・・もしかしたら心の奥底でそうしているかもな。・・・けど、重ねて言うけど俺は特別視しているつもりはないからな。」

「そうですか。」

「ああ。じゃあな、体しっかり直しておけよ。」

朴は笑顔でそう言つと、部屋から出ていった。

思いやり（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

生徒会長の恋 休日編

風邪が治り、櫻が復帰した後も生徒会は忙しかった。学院際当日が迫るに従い、書類仕事は減ったが、反比例するように当日のタイムテーブルの確認だの、開会式の打ち合わせだのといった事柄が増えてきた。

ただし、慣れていなかった書類仕事よりも、こうした打ち合わせのほうが生徒会員にしてみれば楽だった。櫻はヒナギクに似て強い責任感とリーダーシップを持っていたから、意見や意志を統一する仕事は得意だった。

そんなある日、勇人が朴にこんな事を聞いてきた。

「先輩、こないだ櫻の家に行ったそうですね？どうでした。何か進展しましたか？」

すると、朴はジロツと勇人を睨んだ。

「あのな、夏休みの時もそうだが、何で俺が生徒会長と付き合いなきゃいけないんだ？」

「だって先輩と櫻ならお似合いだと思っただけですけどね？生徒会で仕事している時も息があつた仕事が出るし。」

「だから、それでなんで付き合う理由になるんだよ。生徒会の仕事で息があっているのは、お互いがやるべき事をしっかりわきまえているからだよ。」

朴が少し呆れながら言う。

「ふーん。そうですか。」

勇人はおもしろくなさそうな顔をする。

「それよりもこっちは、頭が痛いよ。アルバイトを変える必要が出てきたんだよ。今まで働いていた所が人件費削減でアルバイトの数を減らしたもんでさ。」

朴にとってアルバイトは奨学金と共に、白皇で学び生きていくために不可欠な生命線だった。すぐに次の働く所を見つけないとマズイ事になる。

すると、勇人が何かを閃いて言った。

「だったら先輩、僕が知っている店を紹介しましょうか？」

「なんだ？お前がそんなことを言うなんてめずらしいな。」

そう言う朴の表情が怪訝な物となった。

「まさか三千院家グループの店か？だったら御免被るぞ、お前にそこまで世話掛けちゃ割るいからな。」

自分の首を締めかねない発言であるが、意外とこう言うところは自分に厳しいのが朴だった。

「いいえ、知り合いの店ですけど、決してそういうわけじゃありませんよ。喫茶どんぐりっていう店です。学校からも近いですから行

きやすいと思いますよ。」

「ふーん、だったら良いかな？」

三千院グループでないならと思い、そこで働こうと思った朴であったが、彼はこの数日後にこれが罠である事を思い知らされることとなった。

数日後の休日。

「じゃあ朴君よろしく頼むわね。私、ボスに呼ばれて本店に顔ださなきゃいけないから。」

喫茶ドングリで働き始めた日、店長である北斗は朴に向かって言った。

「はい店長、いつてらっしゃい。」

北斗店長を送り出すと、朴は1人で黙々と仕事をし始めたのであるが、すぐに彼は首を捻り始めた。お客がとにかく少ないのだ。

「時給850円で一時間に来る客が平均1.5人。どうして経営成り立っているのかな？」

だが今更そんなことを不安視しても遅い。また店長が帰ってきてから聞いてみようと思う朴だった。

そんな感じではあったが、黙々と仕事をしていく朴であった。

そしてお昼を回った頃であった。来客を知らせる鈴が鳴った。

「いらつしゃいませ！」

挨拶はしたものの、この時朴は厨房にいて皿洗いをしていたために、お客の姿が見えなかった。取りあえず、一端皿洗いを切り上げて、店のほうへと出て行った。

「いや、すみません。お待たせ」ば、朴先輩？」

「へ！？」

朴が間拔けな声を上げ、やってきたお客を見るとそこにいたのは見慣れた少女だった。

「か、桂！？」

そこに立っていたのは櫻だった。

「どうして先輩がここにいますか？」

「いや、アルバイトだけど。お前こそ、昼間に喫茶店なんてめずらしいな？勉強でもしに来たのか？」

昼間に1人で高校生が来る理由など限られている。しかし、彼女の答えは彼の予想していた物とは大きく違っていた。

「いいえ。今日から新しいアルバイトの人が来るから様子を見に行つて欲しいと店長から頼まれて。」

「何！？お前店長と知り合いなの？」

「はい。お母さんの友人で、私もたまに手伝いに来ていますけど。」

つまり、櫻はこの店によくとは言わないまでもちよくちよく来ているようだ。だから、必然的に彼女と顔を合わせる回数は増えるわけ……

ここに至って、朴は畏に引つ掛けられたことを悟った。

「勇人の野郎!!」

朴は今回のことを仕掛けた、お節介な後輩の名前を自然と叫んでいた。そんな朴に少し引きつつ、櫻は言う。

「だ、大丈夫ですか……ところで、先輩仕事大丈夫ですか？もし上手く行っていなかったらそのまま手伝ってこいって言われてたんですけど？」

「ああ、別に困っている事はないよ。料理でも皿洗いでもだいたいの仕事は出来るから。それにお客さんも少ないし。けど、この店経営大丈夫なのかな？」

「お母さんも、昔からこんな感じでいつ潰れても可笑しくないって言っていましたけど、20年以上続いているから一応大丈夫じゃないですか？」

「そう言ってもらえれば、少しは気が楽になるよ。入った途端潰れちゃたまらないからな。」

「ですね。」

2人はそう言って、笑った。

「折角来たんだ。何か飲んでいくか？奢るよ。」

「え！？悪いですよ。自分でちゃんと払いますよ。」

「ははは、謙虚な奴だな。先輩が折角奢るって言うんだから、素直に飲めばいいのに。」

「いえ、だって先輩が苦勞してアルバイトしているのに悪いじゃないですか。あ、準備手伝います。」

さすがにこれまで断つては悪いと思ったのか、彼はその提案を受け入れた。

「そうか、悪いな。」

こんな感じで、2人とも他意はないが良い雰囲気を作り出していた。

そして数時間後。店長の北斗が戻ってきたが、店内に入って彼は大いに驚く事となった。

「ただいま・・・て、2人とも何時の間に恋人になったの？」

「「え！？」」

間拔けな声を上げる二人。

北斗が見たのは、腰掛けて恋人のように仲良くお喋りをしている2人の姿だった、ちなみに、お客さんが来た時は2人仲良く仕事をしていたそうだ。

「ふふふ・・・お似合いね。」

その言葉に、2人とも真っ赤になる。ただ何故か、2人とも積極的に反論しなかった。

生徒会長の恋 休日編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

生徒会長の恋 謀略編

学院際の数日前のこと。画像研究部の部室に勇人、紫、優、美沙、サエキ、由希、未来と言ったお馴染みのメンバーが集まっていた。

お菓子やジュースの乗った机を囲んで座って話し合う彼らの議題は、ずばり朴と櫻の恋の進展である。

「それで、実際の所どうなのよ？」（by 紫）

「喫茶どんぐりじゃ2人とも一緒に仕事する事が多いらしいよ。そう北斗店長が言ってた。どうみても、2人ともカップルにしか見えないって。」（by 勇人）

「じゃあ、それなりに進展しているわけですね？」（by 優）

「生徒会でも2人とも仲がいいもんね。」（by 美沙）

「是非とも2人が告白する瞬間はカメラにおさめたいです。」（by 由希）

「僕はお2人との付き合いはほとんどないけど、仲が良いって言うのは見ればわかります。」（by サエキ）

「叔母さんに似て恋愛には疎いと思っていただけ、あの娘にもようやく春がきたんだね。」（by 未来）

「もしかしたら、もうかなり深い仲だったりして。」（by 紫）

「かもね。」（byその他全員。）

そう言って笑う全員。もし本人たちが聞いていたら、恐らく櫻は正宗を振り回してそれこそ死天使のごとく暴れ回るだろう。また、朴は勇人を上回る体力を発揮して全員に極刑を下すかもしれない。

「けど、2人とも仲は良いのに、正式に付き合っていないみたいなんだよね。」

紫が面白くなさそうに言う。

「確かに。朴先輩も櫻も素直じゃないよな。」

「本当だよな。正直に付き合えば楽しいのに。」

そう言って、美沙は勇人に自分の腕をからめた。絡められた勇人の方も、まんざらではなさそうだ。

他のメンバーはそんなおのろけをスルーして話を進める。

「けど、見ている側としては早くくっついて欲しいですね。」

「本当だよな、見ているこっちがじれったくて仕方がないよ。」

こう言うのは優と未来だが、ある意味これは人の恋愛を玩具にしている不適當な発言である。

もつとも、優からしてみれば先ほど美沙が言った言葉と同じく、好きな人と想いが通じて付き合うことは素晴らしい事だという認識があって言ったのだ。それに対して、未来の方はかなり他人事と見

て言ったようだが、もちろん悪気はなかった。

「まあとにかく、僕たちに出来るのは2人が無事カップルになれるように祈るだけじゃないの？」

サエキが消極的な意見を言うが、直ぐにブーイングが飛ぶ。主に女性陣から。

「そんなの可哀想よ。」

「友達なんだからもつと積極的なことを考えなくちゃ。」

「うう・・・」

サエキは黙り込む意外に方法は無かった。

「まあ、取りあえずこれからはなるべく2人が一緒になれるように私たちでサポートするべきよね。」

「けど紫姉さん。サポートするって言ってもどうするの？」

紫の言葉に優が首をかしげる。

「え！？そりゃあ・・・2人の距離が近づくように、声をかけて上げるとか」

「紫。それ絶対無理。朴先輩が櫻に近づくように言葉掛けてみたけど、全然駄目だった。」

「うー」

「2人とも頑固だからね。多分本心じゃ好きでも、どっちかが言うまで言わないつもりよ。」

身内である未来が確信したように言う。

「けど、昔理事長（ヒナギクの事）は今の旦那さん（健二のこと）にチョコを渡して告白したんですよね？なら、なんとかなるんじゃないですか？」

そう言うのは由希だ。

「そりゃあそうだろうけど。」

「まあ、これは2人の問題だから。それに、露骨なサポートは2人とも通じないから、さりげなく、わからないように2人の恋愛の手伝いをするんだ。」

「具体的にどうするんですか、綾崎先輩？」

「まあ、なるべく生徒会の負担を減らしてあげるとか。さりげなく、2人が同じ場所に向かうようにしてあげるとか。とにかく、そういう風にやっていくしかないね。」

その勇人の言葉に、全員が頷いた。

そして迎えた学院際当日。生徒たちがまさに青春時代を謳歌するかのごとく燃え上がる日であるが、生徒会にとっても警備やら、なんやらで忙しい日である。

そんな中で、勇人の提案したさりげなく2人の恋をサポートする行動は始まっていた。

それに最初に気付いたのは櫻だった。彼女は学院内の見回りを行なうローテーションの書かれていた紙を見ていたが、その内容が先日貰った物と違う事に気付いた。

「あら？変更されているじゃない？どうしてなのよ？」

彼女が首をかしげていると、紫が説明した。

「部活やクラス企画の急な予定変更で、時間に空きができたり、変更したりする人が出たからそうなったの。それと、今年は生徒会のOBの人が仕事を手伝ってくれるそうで。」

「ええ！？何それ、聞いてないわよ！！」

「俺もだよ。一体どういうことだよ綾崎？」

今度は櫻のみならず、近くにいた朴も声を上げた。2人にとって寝耳に水のことだったからだ。

「あれ？おかしいな・・・あ、しまった！！そのことを書いた書類見せるの忘れてました。すいません、朴先輩。それに櫻。」

紫がぺこりと頭を下げるが、2人からは見えないその表情は満面の笑顔だった。実はこれ、意図的に行なった行動だった。

今回の生徒会OBとは、実は理事長のヒナギクに頼んで行なわせてもらった謀略であった。手伝うOBというのは、ハヤテや美希、

泉、マリア、ナギと言った親たちの事だ。

本来根が真面目なヒナギクは、こういう恋愛事に首を突っ込むことを嫌うのだが、彼女としても母親として娘の恋愛が成就するのを願っていた。そこで、悪い思いながら協力してくれたのだ。

それぞれの親たちも、久しぶりに青年時代に戻ったような気持ちでこの計画に協力してくれていた。特に、美希や泉は大いに張り切っているという。

ちなみに、櫻と朴がこの事に気付く事はついになかった。

「はあ。まあ、いいわ。もう時間もないし。」

「それもそうだ。じゃあ、俺は先にクラスの仕事があるから。」

そう言って、朴は生徒会室から出て行った。

普段ならここで、大いに怪しい所を調べる櫻であったが、今回は時間もないから深く追求しないことにした。

「けど、私の番はお昼に1回だけだけど、これで良いの?」

「うん。ちゃんと均等に割り振ったから。櫻は心配しないで。それに、櫻だって学院際楽しみみたいでしょ?」

「そう。わかったわ。じゃあ、私の番は12時から30分で良いわね?」

「うん。」

こうして、生徒会長の学院祭の1日が始まった。

生徒会長の恋 謀略編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

生徒会長の恋 足踏み編

午前中、櫻は生徒会の事を頭の隅に置きつつ、久しぶりにクラス
の活動に精を出した。ちなみに、櫻（勇人や紫たちも一緒）のクラ
スの出し物は喫茶店だ。

もともと、勇人や紫、真理奈に櫻といったメンバーがメニューや
らなんやらを色々取り仕切っているおかげで、かなり本格的になっ
てはいたが。

そして12時半前、生徒会の警備の仕事の引継ぎを行なうために、
彼女は生徒会室へと向かった。ちなみに、今回一緒に仕事する予定
なのは美沙であった。

「じゃあ、私先に言ってるね！」

美沙が何時もどおり、いやそれよりも明るいニコニコ顔で櫻に声
を掛けた。

「うん、私も直ぐに行くから。」

先に手が空いた美沙が教室から出て行き、1分ほど送れて櫻も切
りの良い所で仕事を終えて、美沙が待っているはずの生徒会室へと
向かった。しかし、そこで待っていたのは。

「あら、朴先輩？どうしてここにいるんですか？確か朴先輩の担当
は1時半からじゃ？それに、美沙が着いているはずじゃ！？」

彼女が目にしたのは、1つ前のローテーションで警備をしていた

生徒会役員から引継ぎをしていた朴であった。予定表ではこれから櫻と一緒に警備を行なうのは美沙の予定である。櫻は今ここで彼と鉢合わせするなんて夢にも思っていなかった。

「いや、瀬川が手を離せないからローションを変わって欲しいって言うてきたから。」

「えーけど、美沙は私より先に教室から出たはず・・・」

と、そこで櫻は頭を回転させた。今回の突然の警備のタイムテーブル変更は紫が伝えてきたものだったが、勇人や美沙と言ったその他の生徒会のメンバーはほとんど混乱無くそれを受け入れていた。むしろ、承知しているといった顔ばかりであった。

さらに、美沙はつい先ほどまで朴に言ったような事情があるようには見えなかった。おまけに、その笑顔がいつにも増して笑っていた気がした。つまり、これは美沙が故意に仕掛けた事だから・・・

「謀られた!!」

思わず櫻は叫んでしまった。目の前には朴がいると言うのに。

「は!？」

その事に気付いた櫻。

「あ、す、すいません。いきなり大声出して。」

櫻は朴に向かって頭を下げた。しかし、朴はいつもの表情で言う。

「いや、俺もだいたいわかったから良いよ。全く、瀬川だけじゃないな、多分勇人や紫もグルだろう。あいつらそんなに俺とお前にくっついて欲しいのか!？」

彼が呆れる相手は、大声を上げた櫻よりも、背後で色々と謀略を行なっていた生徒会の面々であつた。もつとも、実際には朴が予想している以上の人間、すなわち理事長のヒナギクや生徒会OBであるハヤテ達も大きく噛んでいたのだが。

とにかく、朴はバカなことに頭が回る後輩連中の強かさにただただ呆れるだけだった。

一方、櫻のほうは確かに少しは呆れたが、実際の所は少し嬉しさ交じりだった。彼女はそんな事を考えているのは億尾にも出さず、話題を変えた。

「まあ、もう良いじゃないですか。とにかく、仕事をしましょうよ先輩。」

「そうだな。生徒会の仕事を俺たちがサボるわけにもいかないからな。じゃあ行くか。」

「ええ。」

そうやって彼らは、腕に生徒会の腕章を巻くと、生徒会室を降りて、学院際で盛り上がっている校内を一周する形で警備の仕事に就いた。

仕事は至って簡単、というか退屈な物だった。なにせ、白皇学院には私設SPがいるのだ。万が一妨害を企ててやってくる不届きな

輩が来た所で、水際でボコにされ阻止されるのが慣例だった。だから、学院内部で起こる問題などない。良い所迷子か落し物ぐらいだ。しかし、もちろんだからといって2人が手抜きして良いわけがない。

いつもどおり真面目に仕事に就いた2人であった。ところがしばらくするとそんな2人に背後から突き刺さる視線を幾つも感じた。もちろん、母親同様剣道で五感を鍛えている櫻と、これまでに多くの困難を乗り越えて生きてきて、勇人以上の体力を持っている朴の2人は直ぐにその視線に気付いた。

「どうします？」

櫻が後ろにわからないよう、小声で朴に話し掛けた。すると、すぐに朴が返事を返した。

「相手はだいたいわかってる。次の角を曲がったら撒こう。相手の死角に入ったところで、全速でダッシュだ。いいか？」

朴が言うと、櫻が軽くウインクした。

「了解。」

5ヶ月以上生徒会で働いてきたおかげが、はたまたこの所喫茶ドングリで一緒に仕事をしているおかげかわからないが、2人はお互いのことをしっかり理解しあっていた。

2人は全く変な素振りを見せないまま角を曲がった。そしてその途端、猛然とダッシュを開始した。それはもう凄いスピードだった。

目撃者の言を借りるなら、「いきなり角を曲がった少女と少年が消えたんです！本当なんです！」というぐらい見事な逃走だった。

もつとも、追っている相手もいくらか予想していたのか。その5秒後にはその角に辿り着いた。しかし、その時には2人の姿は影も形もなかった。もちろん音も、さらには気配さえ残していなかった。

「ハア・・・ハア・・・いない。ハア・・・ハア・・・さすがにやるわね。・・・あの2人。」

いきなり走ったために息切れしてしまった由希。喋る言葉が途切れ途切れになっっている。その手には2人の恋愛を記録するためのビデオカメラが握られていた。そんな彼女の隣には、眼鏡の美少年が全力ダッシュしたというのに汗1つかかずに立っていた。

「見事に撒かれちゃったね。なるほど、母さんの言っていた通りだね、白皇学院の生徒会って言うのは。体力が半端ないや。」

笑いながら肩を軽く竦めてそう言うのは、サエキだった。彼の場合、両親譲りの化け物級の体力で充分2人を追えたのだが、母親の遺伝のせいかマラソンが不得意な由希を気遣って先走るようなことはしなかった。

「うう、甘かった。まさかああも簡単に気付かれるなんて。」

由希はがつくりと肩を落とした。そんな彼女に、サエキが慰めの声を掛ける。

「そんなに落ち込むことないよ。あの2人が異常なんだって。2人とも後ろに目がついているんじゃないかな？」（サエキ自身こんな

ことを言える立場ではない。)

「かもしれないわね。・・・それにしても、喉渴いちゃったわね。」

「だったら、近くの売店でジュースでも買っつ？」

「そうしましょう。」

2人は仲良く並んで歩き出した。

この2人、案外雰囲気良かったりする。

生徒会長の恋 足踏み編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

生徒会長の恋 本音編（前書き）

原作キャラの今 綾崎颯・・・原作ならびに前シリーズの主人公。
現在37歳。ナギと結婚して現在3人の子持ち。ナギの執事兼パ
ートナーとして三千院家を一緒に支えている。子供達には自分の辛
い経験から色々な事を教えこんでいる。

生徒会長の恋 本音編

「なんとか撒いたな。全く、こりんやつらだ。」

自分たちを尾行していた人間にボヤク朴。

「多分今のは画像研究部の由希ですね。ちらつとですけどカメラが見えましたから。」

「皆グルなんだろうな。本当に暇な奴ら。」

後輩たちの行動にほとほと呆れる朴。自然と溜息も出てしまう。

一方、櫻はそれを笑いながらたしなめる。

「まあまあ先輩。あの子達だって悪気があってやったわけじゃないでしょうし。それに、昔に比べれば随分と良いですよ。お母さんの話じゃ、昔の動画研究部なんか色々な映像をネット上に流して迷惑掛けまくっていたそうですから。」

その言葉にさらに溜息を出す朴。

「ハハハ・・・上には上がいるのか。この学院では常識を捨てなきゃいけないいつも思うよ。」

自分のことは棚に上げて、そんなセリフを吐く朴。しかしすぐに頭を切り替えた。

「ま、今は仕事しなきゃな。いくぞ桂。」

「はい。」

2人は再び警備の仕事へと戻った。

その後迷子への対応やら落し物への対応やら、危険行為をしているコーナーへの注意をしたりと本来の仕事をしっかり行ない、2人は1時間後、次の担当者に引継ぎを行なった。

「終わったな。」

「ええ。取り合えず、大きなトラブルは何も起きなくて良かったですね。」

「だな。さてと、1時半か。そういえばお昼まだだったよな。何か適当に食つか。」

普段ならこんな時間に食事を摂ることはない。何故なら既に授業が始まっている時間だからだ。もちろん、そんな時間であるから購買も学食も閉まっているのだが、今日は学院祭。出店ならそれこそ腐る程出ている。

「あ、だったら私もまだなんで、御一緒に良いですか？」

「いいのか？誰か友達と一緒に食事したいんじゃないのか？」

「ええ。どうせ皆忙しいはずですし。」

「そうか。」

その後、近くの店で弁当を買い込んだ2人であったが、今度は食

べる場所がない。休憩所はどこも人で満席だった。

「参ったな。」

と、そこで櫻が思いついた。

「だったら生徒会室で食べましょう。あそこならお茶のセットもありますし。今なら誰もいないからゆっくり出来ますよ。」

すると、朴が呆れるように言う。

「おいおい。それは公私混同だぞ。」

一応生徒会の副会長として言ったのであろうが、軽い口ぶりからしてあまり厳しく言う気はないようだ。

「大丈夫ですよ。他の人だってたまに使っていますし。私達は生徒会の人間なんだから。」

「わかったよ。じゃあ、行こうか。」

2人はそのまま生徒会室に移動した。そして少し遅い昼食をようやく食べる事が出来た。

「はあ。午前と昼は何事もなく終わったな。夕方からの後夜祭は生徒だけだし、今年も無事に終わってくれそうだな。」

「そうですね。先輩は出ますか？後夜祭。」

後夜祭は文字通り、生徒たちが学院祭の終わったあとの余韻を楽

しむお祭りだ。有志の歌やダンス等の出し物もあれば、実行委員会による多人数でやれるような企画もある。そしてこの中で一番人氣が、最後に行なわれるダンスの時間である。これは好きなペアで踊る物だがさすがに上流の子供が多い白皇学院であって、結構本格的だ。

「どうしようかな？まだ迷ってる。けど歌とかダンス見るのも興味ないし、最後のダンスもやる相手がいないしな。」

すると、櫻がこんなことを言った。

「私じゃ駄目ですか？」

「え！？」

突然の不意打ちに、朴は間抜けな声をだした。

「あの、べ、別に、好きとかそういうことじゃないんですよ！ただ、日頃お世話になっているから、その、なんて言えば良いんだろう・・・」

櫻が顔を少し赤くする。一方、復活した朴はそんな彼女を愛しそうに見る。

「そうか。レディーのお誘いを断っちゃ悪いよな。だったら、謹んでお相手させてもらおうよ。」

「あ、ありがとうございます。」

櫻はここ最近彼に惹かれる自分をすっかり感じ取っていた。だから

ら、先ほどの言葉が意識もしていないのに出てしまった。

「それにしても、お前の方から男を誘うなんて、誘われた自分が言うのもなんだけど、結構すごいことだよな。」

「せ、先輩！」

櫻が顔を真っ赤にして言うが、実際間違っではない。母親同様美人（しかも母親よりルックスが良い）である彼女に声を掛けたり、アタックしてくる男子は、月に両手で数えるには足りないほどいる。しかし、彼女がその誘いに乗ったことはない。

彼女曰く「会った事もないような男子からの誘いを受ける気なんかしない。」であった。そんな彼女が、ダンスの相手に自分から男子を誘うなんて本当に驚天動地の出来事と言って良かった。

「ごめんごめん。」

「もう。・・・あの、先輩？」

「うん、何？」

「先輩は・・・もし私が好きっていったら付き合ってくださいか？」

櫻はかなり大胆な質問である。遠まわし付き合ってくださいと言っているような物だ。

「それは仮定としての答えを言えればいいのかな？」

櫻はコクンと頷いた。

「そうだな・・・嬉しくないって言ったら嘘になるけど、俺自身がお前には釣りあわないと思うな。」

「え！？どういう意味ですか？」

朴の意外な言葉に、櫻は驚きを隠せない。

「確かに俺はお前の事を嫌いじゃない。むしろ好きだ。付き合ってみたいと考えたこともあるよ。けどさ、お前の家はお母さんが白皇の理事長で、お父さんが名門の屋敷の執事兼SP長だろ。別に差別するわけじゃないけど、どちらかというと上流だ。それに比べて、俺は北朝鮮出の難民の子供だ。今だって、ようやくギリギリの線でここに通えている始末だ。とても女の子と付き合える甲斐性なんかない男さ。」

朴はいつものような口調で言ったが、その目にはどこか哀しみが帯びているように櫻には感じられた。

「そんな・・・私はそんなこと気にしませんけど。」

「お前が良くても、そしてこの白皇学院の人間が良くても、日本も狭いようで広いからな。決して全ての人間が俺みたいな人間を受け入れてくれるわけじゃない。それに、さっきも言ったが、俺には今女の子と付き合うだけの力がないんだ。」

朴の言葉には、暗に差別的な物が未だ存在する事をほのめかしていた。これは事実だった、表面的にはなくても、人の心の中に巣づく差別は未だにたくさんあるのだ。外国人差別や部落差別がそれだった。

朴の場合はこちらに来て10年ほどしか経っていないいわゆる二
ユーカマーだ。口には出さないが、それなりの辛酸はなめてきたか
もしれない。いや、実際なめたのであろう。

「お誘いありがとな。絶対に行くからな。それじゃあ、俺はクラス
のほうに戻るから、また夕方な。」

そう言い残して、朴は1人先に出て行ってしまった。

朴とハヤテ（前書き）

原作キャラの今・・・三千院ナギ。原作ならびに前シリーズのヒロイン。34歳。ハヤテの妻で、現三千院グループの頂点に立つ人物。帝から引き継いだ三千院家をハヤテとともに支えている。現在は仕事の合間をぬってマンガを同人誌にするなどして書いている。現任ちなみに、引きこもりは完全に解消した。

朴とハヤテ

「俺ってバカだな・・・なんでああ、言っただろ・・・」

生徒会室から出て、朴は1人そうばやいた。

遠まわしにはあったが、櫻からの告白。正直嬉しかった。しかし、自分はそれを断ってしまった。一応言い訳めいたことも言ったし、その内容に嘘偽りはない。

日本にきて10年以上になるが、最初の頃はひどいいじめにもあったし、今でも外国人として差別されないということはない。そして彼自身貧乏で甲斐性がないというのは、動かし難い事態である。

しかし、本音を言えば彼は桂櫻という少女を好きだった。かつて死に別れた妹に似ているということもあるだろうが、守ってやりたいと思える女の子だった。

さつき、例え甲斐性がなくても自分ならいつか彼女に相応しくなれると言い切ることだって出来た。しかし、彼にはそれを言うだけの勇氣はなかった。

「所詮俺も心の軟弱な人間か・・・」

それ以外に考えられなかった。もし、もっと強い意志を持っていれば、彼女の告白に対してイエスと言えただろう。

「こんな俺があいつと付き合うなんて、お門違いもいい所だな。」

そうブツブツ言いながら歩いていると、突然横から声を掛けられた。

「ちょっとそこの君！」

「はい？」

朴が声のした方に顔を向けると、一人の男が立っていた。水色の髪、非常に優しい感じの顔を持つその人物に、朴は大いに心当たりがあった。

「もしかして、勇人のお父さんですか？」

これまでに、朴が直にハヤテに会った事はない。しかし、常々どんな人かは勇人と紫から聞いていたし、それに生徒会室の写真で見たことが会った。

ハヤテはニコツと笑うと、答えた。

「そう、綾崎ハヤテだ。よろしく。息子がいつもお世話になってるね。」

「いいえ、こちらこそ彼には色々と助けていただいています。」

「そう。こんな所で立ち話もなんだし、どこかで座ってゆっくり話さないかね？今忙しいかな？」

一応朴は自分のクラスの出し物を手伝おうと考えていた。しかし、もともと生徒会委員の彼には仕事は割り当てられていない。だから、教室へ行っても暇な可能性もある。そして、彼自身。この男と話を

してみたかった。

「いいえ。いいですよ。」

2人は露天で缶コーヒーを買って、近くの空いているベンチに座った。

「今日は生徒会OBでいらっしやっただんですか？」

「ああ。午前中の警備の仕事を手伝ったよ。」

「そうですか。すみませんね、後輩たちの起こした事につき合わせちゃって。」

そう言つと、ハヤテは笑った。

「ハハハ・・・まったく。勇人たちもやるならもう少し、マシなことをやるべきだったな。こつもあつさり気付かれちゃ何の意味もないね。」

「たく、そうまでして俺と櫻をくっ付けたい理由がまったくわかりませんよ。」

「そうかな？僕から見てもよくお似合いだと思つよ。」

（この人までそんな事言うのか？）

ハヤテにまでそう言われて、朴は内心うんざりしてしまった。そして、少し反抗的な事を言いたい心情になった。

「それは外見だけの話でしょ。実際の俺はそんな人間じゃありませんよ。」

「ほう・・・何故だい？」

「あなたは、俺のことをどれくらい知っていますか？」

「勇人から聞いた限りじゃ、在日韓国人の大変優秀な生徒会副会長で、後輩や先生から非常に頼られ、勉強もスポーツも優秀。櫻ちゃんとは息のピッタリあつた仕事をしているだったな。」

すると、今度は朴が笑った。

「ハハハ・・・それは美化しすぎだ。勇人にも困つたもんだな。そんなこと吹聴されちゃ。実際の俺は、そんな人間じゃありません。俺は弱い人間です。それに、女の子と素直に付き合うことも出来ない、貧乏人の男にすぎません。」

すると、ハヤテは微笑んでこう言った。

「本当にそうなのかな？」

「はい？」

「20年前の話だ。この学院には1人の男子生徒がいた。その男子生徒は親が残した借金を1億5千万円を背負っていたが、その当時仕えていた人の力でこの学校に入れた。」

「い、1億5千万・・・」

朴には想像もつかない額だった。ちなみに彼は貧乏だが、借金はない。

（どうしたらそんな借金できるんだろう？）

「そう。そして何故かその男子生徒は非常に女の子からもてた。だが男子生徒は鈍感ということもあったが、自分自身に甲斐性がないことから、女の子と付き合えないと心に決めていた。」

「・・・」

「ところが、その男子生徒はひょんなことから借金を帳消しにしたばかりか、億万長者になった。それでも、自分がかつて借金持ちだったことを理由に上げて、中々素直な気持ちになれなかった。」

話を聞いていると、今の自分に重なるところがいくつかあった。

朴はその話をジッと聞いていた。

「そして、その少年はそんな気持ちを抱えたまま死にかけた。幸い、その時は一命を取り留めたが、その時になってようやく相手と本音で喋れた。そしてお互いにわかった。自分達の間に身分とか、階級とかなんて関係ない。ただ、1人の人間としてお互いを愛し合っている。そして2人は、今も幸せだ。」

「・・・」

「もし君が、今の自分の立場で素直になれないなら、ひとつアドバイスしておこう。地位とか、身分とか、そう言うのを持っているかは、その時その時、その人その人に起こった偶然のなせる技ではないとね。重要なのは、最終的には気持ちだ。」

「そうですか・・・」

「僕から話したいのはこれだけだ。つまらない話につき合わせて悪かったね。じゃあ、生徒会の仕事がんばってね。それと、息子と娘をこれからもよろしく。」

「はい、お話ありがとうございました。また会いましょう。」

「ああ。多分、近いうちにまた会えるさ。」

こうして、2人はそのままわかれた。ハヤテは、歩いていく朴の姿をジッと眺めていた。彼の背中からは、彼が一体何を考えているのか、そして先ほどの話が彼にどんな影響を与えたかを図り知ることとは出来なかった。

その答えは、これから数時間後。後夜祭の最終場面で出される事となる。

朴とハヤテ（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

生徒会長の恋 完結編（前書き）

原作キャラの今・・・姫神マリア。現在38歳。前シリーズオリジナルキャラでハヤテの兄であった姫神勝と結婚し、娘の真理奈がいる。ハヤテから見ても義姉。20年たっても外見がほとんど変わっていないので、真理奈とならぶと姉妹同然。

生徒会長の恋 完結編

後夜祭最後のダンスの時間。櫻は時間通りに会場となっている体育館にやって来た。朴はきつちりと、あらかじめ決めていた約束の場所にいた。

「先輩。」

「おお。時間通りだな。」

「待たせちゃいましたか？」

「いいや。ワザと早く来たんだ。お前を待たせちゃ悪いと思ってな。」

その言葉に、櫻は頬を少し赤らめた。

「そ、そうですか。」

「ああ。さ、俺たちも一曲踊ろうぜ。」

すでに館内では複数のペアが音楽に合わせて踊っていた。だがその動きがぎこちないペアがやたら多い。大方付け刃でダンスを覚えただろう。このダンス会で告白してカップルになる人間も多いと櫻は聞いていた。

そして彼女はそれ対して、最近ほのかに憧れのような感情を抱いていた。

「先輩、ダンスの経験は？」

「ない。さつき勇人に頼んで少し教えてもらったただけだ。」

生憎と朴にはダンスを習うという機会に恵まれた事はこれまでの人生で一度もなかった。一方の櫻は、勇人や紫のような大金持ちではないが、資産家階級の出身者である。何度か参加した社交の場でダンスの経験があった。

「それで大丈夫ですか？」

「なんとかなるだろ。・・・お嬢さん、相手してくれますか？」

朴が笑顔で片手を差し出した。

「はい、喜んで。」

櫻は自分の手を朴の手の平に乗せた。そして2人も踊り始めた。

踊り始めると、櫻は大いに驚かされた。

「先輩、本当にダンス初めてなんですか？随分と上手い気がしますけど？」

朴は経験者である櫻に合わせて上手く踊っていた。その身のこなしはとても初心者であるようにには思えなかった。

「ああ、初めてだよ。さつき勇人に簡単に聞いただけ。それとちよこつと本を読んだだけだ。」

朴の言う言葉に嘘偽りはなかった。彼はダンスをしたのはこれが初めてだった。もっとも、本はちよこつとではなく、大分読んでいたのだが。

「本当に優秀な人ですね。あなたは。」

「お前ほどじゃないけどな。」

そう言ってお互いに笑いあう。

だが曲が中盤を過ぎたあたりから、朴の表情が強張りだした。

「先輩、どうしたんですか？」

櫻はその異変に気付くと、心配になって声をかけた。

「い、いや・・・」

どこか言いにくそうに最初は口籠っていた彼だが、まもなく覚悟を決めたように言った。

「あ、あのさ桂。お前が良かったらで良いんだ。後でまた2人だけになりたいんだけどいいかな？」

「え！？」

朴の突然の言葉に、櫻は少し考え込んでしまった。

「だめかな？」

考え込む櫻を見て、朴が不安そうに聞く。

「……わかりました。」

櫻は顔を上げるとそう言った。

30分後、2人の姿は学院内にある池のほとりにあつた。既に夜なのであたりは真っ暗とまではいかないが、闇に包まれている。空に登った月明かりと、少し離れた場所にある街灯だけが薄くその場を照らしていた。

「ここなら誰もいないな。」

朴がキョロキョロ辺りを窺いながら言う。

「けどなんでここなんですか？生徒会室とか、もっと人のこなさそうな場所は他にもあるのに。」

「屋内だとどこに隠しカメラがあるかわからないからな。」

その言葉に、櫻は笑ってしまった。

「ハハハ・・・それもそうですね。」

場が少し和んだ所で、朴は本題という名の一世一代の告白へと移った。

「それでさ桂。その、お前と2人きりになったのは他でもないんだ。実はお前に言いたい事があってさ。」

その途端、櫻の表情も神妙になった。いや、緊張した物と言った方が寄り正確であった。

「は、はい。何でしょうか？」

朴と櫻の鼓動が徐々に早くなる。朴は告白を前にして、そして櫻はもしかして彼が自分の事を・・・そんな予感を胸に抱いたために

「実はその・・・俺、昼間お前と話したとき実は嘘をついたんだ。」

「嘘？」

「そう。・・・あの時、俺はお前からもし告白されても付き合えないって言ったよな？」

「はい・・・」

「確かに感情を抜きにしたらそうなんだ。実際俺は社会的にも経済的にもお前に釣りあう人間なんかじゃない。・・・けど、本音を言えば、お前にああ言われてとても嬉しかった。」

そこで一端言葉を区切った朴。その顔は、櫻から見ると暗さで良

くわからなかったが、真っ赤であった。対する櫻も、同じく頬を真っ赤にしていた。

「あの・・・それってつまり・・・」

「つまり・・・その・・・なんだ・・・あのさ桂。」

「は、はい？」

「俺はこういう体験をしたことないから、回りくどい事はなしで、言いたい事だけ言いたいけど良いかな？」

「どうぞ。」

「その・・・俺、バク・ニール朴大一是桂櫻のことが好きです。一人の人間として。」

シーンと静まり返った池のほとりに、1人の青年の告白の言葉がほんの数秒だけ広がった。それを受け取ったただ一人の少女は、静かに立ちつくしていた。

沈黙と、夜になったことで少しかり冷めた空気が2人を包み込んでいた。櫻は朴の告白を聞いて、しばらく黙っていたが。やがて口を開くと言った。

「わ、私も先輩が好きです。」

「本当に俺みたいな人間で良いのか？俺はお前とは比べ物にならないほど貧乏だし、在日外国人だし。付き合ってもお前にしてやれる事なんてない人間だぞ？」

「それでも良いんです。例え地位や名誉がなくても、それはチャンスさえあれば手に入るかもしれない物です。それに昼も言いましたが、私はそんなこと気にしません。1人の人間として、あなたが好きなんです。」

それが櫻の本音であった。お互いの本音は、繋がっていた。

「ありがとう、桂。」

「櫻。これからはそう読んでください。」

「わかった。櫻。」

ぎこちなく朴が言うと、櫻は満面の笑みを浮かべて言った。

「これからは恋人としてもお願いしますね。」

「ああ。」

さすがにお互い気恥ずかしいのか、抱き合うとかそんなことはしなかったが、櫻が片腕を差し出してきたので、朴は自分の腕を彼女の腕と組んだ。

「好きです、先輩。」

「俺も好きだ。櫻。さ、行こうか。」

「ええ。」

2人はその場を離れて、学院祭が終わろうとしている校舎へ向けて歩き始めた。その姿を、ほんのりと照らし出す月の光は、まるで2人を祝福しているかのようにだった。

生徒会長の恋 完結編（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

クラウドス爺さん 上（前書き）

原作キャラの今・・・桂ヒナギク。現在36歳。オリキャラの大畑健二と結婚し、一人娘の桜がいる。白皇学院理事長。

クラウドス爺さん 上

残暑もゆるくなり、秋本番といえる10月下旬の日曜日。この日
勇人はマリアに頼まれて、夕飯のおかずを確保するべく、紫や優に
真理奈、丁度遊びに来ていた美沙や光たちとともに屋敷内にある湖
へとやってきていた。

「ここに来たのは久しぶりだね。」

紫が、対岸が靄っている馬鹿でかい湖を眺めながら言う。

「けど相変わらず大きいよなこの湖。」

勇人が同じように湖を眺めながら言う。勇人がお金持ちである三
千院家の人間であるにも関わらずこう言うのは、ハヤテからしっか
り世間一般の常識と呼ばれる物をしっかりと学んでいるからだ。

「けど魚釣れるの?」

後ろからやってきた美沙が言う。

「ああそれなら大丈夫ですよ瀬川先輩。この湖は先代の三千院家の
当主だった帝さんが色々な魚を放流しているので種類も豊富、しか
も外とは完全に隔離されているので水質も良好。それこそ入れ食
いのように釣れますよ。」

そう言うのは、時々遊びに来て勇人達と釣りをした経験をもつ光
だ。

「だったら大丈夫だね。けど、私魚釣りなんてしたことないから。」

「大丈夫。ちゃんと教えるから。」

不安そうな美沙に、恋人である勇人がやさしく言う。

「あ、ありがとう勇人君。」

そんなバカップルが繰り広げる光景を無視して、その他のメンバーは淡々と魚釣りの準備を進めていく。乗って来たカートから竿やリールと言った道具を降ろし、それらを組み立てて行く。

すると、真理奈がある物を見つけた。

「あら?」

「どうした真理奈?」

紫が聞く。

「あれってクラウドお爺さんですよね?」

彼女が指差す先、数百m程離れた湖岸に1人の老人が静かに腰掛けているのが見えた。

「ああ、本当だ。」

2人の会話を聞きつけた勇人が目を凝らしながら言った。

「勇人君、クラウドお爺さんって?」

事情を知らない美沙が勇人に尋ねる。

「うちの前の執事長だった人だよ。今は敷地の隅の家で隠居生活をしているはずだけど、たまに屋敷のほうにも顔を出すんだ。」

前執事長だったクラウドスは、今勇人が言ったとおりハヤテに執事の全てを託して現役を退き、現在はナギから与えられた屋敷敷地の隅にある一軒家に隠居中であった。その彼が湖の湖岸に静かに腰掛けていた。

「散歩かな？」

紫達に思い浮かぶのはそれくらいだった。と、そこで目を凝らしていた勇人が気付いた。

「あれ？何だろう・・・クラウドスさん何か手紙見たいな物をおいたけど。」

「・・・・え！？」「」「」

さらに、そのクラウドスが立ち上がり静かに空を眺めたかと思うと、突然湖へ向かって歩き始めた。

「ま、まさか・・・」

「じ、自殺！？」

勇人たちより少し遅れて会話に加わった真理奈と光が恐ろしい言葉を放った。しかし、目の前でクラウドスがやっているのはそうとし

か思えない光景だった。

次の瞬間にはメンバー全員が走り始めていた。

「て、ちょっと皆早すぎ!!」

メンバーの中で体力がない美沙が置いてきぼりを食った。もちろん他のメンバーはそんなこと気にせず走り、すぐに先ほどクラウドが座っていた場所に到達する。そして彼らはそこで一通の手紙を目にした。

そこに書かれていたのは。遺書。

それを見た瞬間、まず勇人が見ずに飛び込んでクラウドを全力で追った。

バシャバシャと音をたて、水浸しになりながら彼は進み、なんとかクラウドに追いつくことが出来た。

「クラウド爺さん、早まっちゃだめです!!」

するとようやくそこでクラウドは勇人たちに気付いた。

「あ! 勇人様! それに紫様に優様も! 止めないで下さい!! 私はこので潔く命を絶つと決めたのです!!」

そう言っつて沖合いを目指す足を速めるクラウド。

「何バカなこと言っているんですか!!」

勇人はクラウドに飛びついてなんとか彼の前進を阻む。

「自殺なんか許しませんよ!!」

「放してください!! 私にはもうこの屋敷にいる資格などないのです!!」

「何言っているんですか!? 皆も手伝って!!」

勇人に促されて、他のメンバーもすぐに追いつき、なんとかクラウドの自殺を一手前で阻止する事に成功した。

嫌がり暴れるクラウドをなんとか押さえ込み、彼らは岸に上げた。

「なんとか間に合った。けど・・・寒!!」

びしょ濡れになってしまい、美沙を除く湖に入った全員の体が冷えてしまった。しかし今から屋敷に戻っている時間は時間がかかるので、やむなく近くから適当に葉っぱやら木の枝なんかを掻き集め、その場で薪を焚いて暖を取った。

「ふう。暖かい。」

紫が炎に手を当てながら言った。

「ああ。けどクラウド爺さん、なんで自殺なんか馬鹿げたことを考えたのさ?」

勇人が遺書を薪にくべながら尋ねる。

「うう、本当に申し訳ありません。」

クラウドは力なくうな垂れて謝った。

「謝るだけじゃわからないじゃないですか？別に責めているわけじゃないんです。ただどうしてこんなことをしたのかって聞いています。」

優が名前どおり優しく聞く。

「うう、優様は優しいお人です。わかりました。理由をご説明しましょう。実は……」

クラウドの話すことに寄れば、彼はハヤテに職を譲るまでは知力、体力をつくして三千院家に奉仕してきた。職を譲った後も、執事時代の心を失わずに生きてきた。しかし最近は物忘れがひどくなり、さらに体力の衰えも激しくなったために、今までなら普通に出来た事も出来なくなってしまうた。

そんな自分に絶望し、ついには自ら死を選んだと言う。

「ええ、けどこないだ屋敷に来た時はそんな素振りは全然わかりませんでした。」

真理奈が言う。すると、クラウドが答える。

「お嬢様やハヤテ、それにマリアに無駄な心配を掛けなくなかったのです。だから……」

クラウドがシュンとなる。その姿にはかつての執事長だったころ

の面影は、微塵も残っていなかった。そして勇人たち心の中に思
い浮かんだのは。

（なんとかしないと。）

だった。取り合えず、勇人達は釣りを急遽中止して、クラウドを
連れて屋敷へと戻る事にした。

クラウドス爺さん 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

クラウドス爺さん 下（前書き）

原作キャラの今・・・瀬川泉。白皇卒業後に進学した大学で出会った男性と結婚したが、夫は交通事故で急死。現在は娘美沙と二人だけの母子家庭。職業は絵本作家をしている。

クラウド爺さん 下

自殺未遂を起こし、危うい所で助けあげられたクラウドは、勇人たちの手によつて屋敷まで連れてこられた。そしてナギたちから叱責を受けていた。

「クラウド！お前一体何を考えているのだ！」

ナギが目の前に座り込むクラウドに怒鳴る。

「痴呆がひどくなったのならそうだと何故言わない！？言ってくれば三千院グループの病院で治療させてやるのに！」

ナギの怒りは大きい。彼女としては例え隠居したとはいえ、同じ家族の一員であるという意識を持っていた。それなのに全く相談もせず、あまつさえ自分勝手に自殺しようとしたのだから、怒れて当然である。

「本当にすいませんお嬢様。しかし、お嬢様やハヤテ。それにマリアたちに余計な心配掛けたくなくて。」

クラウドが力なく言う。

「だからって自殺なんて考えないでくださいよ！！そっちの方が迷惑ですよ。」

こう言うのはハヤテだ。

「本当に水臭いですよクラウドさん。言ってくれば力になります

よ。私達はこの三千院家に住む家族じゃないですか。」

と天使が手を差し伸べるように言つのはマリアだ。

「とにかく自殺だけはやめてください。後片付けが面倒ですし、なにより皆悲しみます。」

こつ言つのはSP長の健二だ。

「皆もこつ言っているんだ。とにかく今後自殺は絶対に許さん。取りあえず病院に行つて治療を受けろ。」

「わかりました。」

まもなく、ナギが指し回した車でクラウドは三千院グループの病院へと向かつて行つた。そしてナギたちは取りあえずお客様たちに返つて頂いて家族揃つての対策会議となつた。

「どうするべきだと思う、ハヤテ？」

「やっぱり何かの仕事をしてもらつた方がよくありません。人と付き合つたほうが痴呆の防止になるって聞きますし。」

ナギの質問にハヤテが答える。

「けど仕事って何があるんでしょうかね？体力的にSPや執事の仕事をやらせるのは酷だと思いますが。」

そつ述べるのは健二だ。

「健二君の言う通りですね。クラウドさんは完全に引退しましたから。今空いているポストなんてありませんわね。」

健二に同調するようにマリアも言う。

「うーん、そうか・・・お前達はとうだ？」

ナギは子供たちにも意見を聞いてみる事にした。それに対して最初に答えたのは紫だ。

「じゃあ執事には復帰してもらって、体力関係の仕事だけはしてもらわなくて良い事にしたら？」

しかしこの案はハヤテによって即否定された。

「それはだめだよ。クラウドさんのことから、余計老いた事を意識してまた思いつめちゃうよ。」

「あ、そうか。」

「次。」

ナギが今度はとなりに座っていた優に聞く。

「ええと、そうですね。じゃあ新しく何か役職を作ってあげるとか。」

「一体どんな？」

聞き返したのはハヤテだ。

「例えば人手が足りない所を手伝う仕事とか。」

優にしてみれば、これでクラウドに仕事が行って、しかも他の使用人たちの仕事が軽減されるという目算があった。しかしこれはマリアによって否定された。

「あのそれって言うなれば雑用ですよ？ 執事長であつたクラウドさんにそんなことやらせて良いものでしょうか？」

「あ！？」

優が思わぬ指摘に声を上げる。

「そうだよな、クラウドさんは執事長であつたことを誇りにしていたもんな。雑用仕事じゃあまりにも落差が大きい気が。」

そう言うのは健二だ。

「うっ……」

「それに使用人の手が足りていたらそれこそ何の仕事もないことになっちゃうよ。やっぱり定期的に働ける仕事じゃないと。」

「……」

ハヤテの言葉に彼女は黙りこんでしまった。

「次。」

今度は勇人に番が回ってきた。

「うーん・・・何かクラウドさんにしか出来ない仕事があれば良いけど。そんな仕事あるかな？」

真里奈が頬に人差し指を当てながら考える。

その後15分ほど皆で話し合った。

その日の夕方、クラウドが病院から帰ってきた。

「ただいま戻りました。」

彼をナギが出迎えた。

「おお、クラウド。どうだった？検査の結果は？」

「はい。まだ軽い物だと言われましたが、今後悪化する可能性もあると。とにかく、一応薬は貰えましたが、いよいよ私も年貢の納め時のようです。」

そういうクラウドの表情は暗い。

「そんなこと言うな。実はハヤテたちと話し合って決めたのだが、お前に仕事をしてもらおうと思う。」

「はい？しかし私は既に70過ぎです。とても以前のように働くこ

とは出来ませんが？」

クラウドスが怪訝な表情をした。

「別に執事をやれと言っているのではない。クラウド。お前がこの屋敷に仕えて何年になる？」

「はい・・・かれこれ50年近くは経ちましたが、それが何か？」

「お前より年上の人間が今この屋敷にいるか？」

「いいえ。」

「そういうわけだ。お前はこの屋敷で一番古株だ。この屋敷は、なんだ。世間の一般から見れば少し広いらしいからな。何年も放置されている建物とか倉庫がある。だから、お前にはそれらの手入れをしてもらいたい。」

このナギの言葉に、クラウドは大いに驚いた。

「しかし、私はもう役にも立たない老人ですよ？」

「バカ者。お前はこの屋敷で執事長をしていた人間だろう？ だってそれくらいのこと出来るだろ？ 別にお前自身が片づけるわけではない。力仕事は他人任せでいい。お前は見回りと調査をやってくれば充分だ。それなら出来るだろ？・・・クラウド。これは子供たちから出た意見なんだ。」

「え！？」

「皆お前のことを心配しているんだ。だから、ぜひ引き受けてくれないか？ 私からのお願いだ。」

そしてナギは軽く頭を下げた。

「お嬢様、顔をお上げください。本当に私で宜しいのですか？」

「ああ。」

「でしたら。この倉臼征四郎。老骨に鞭打って、御奉仕させて頂きます。」

こうしてクラウドは再び現役に復帰することとなった。この言葉を扉越しに聞いていた面々は一様に安堵のため息を漏らした。

クラウドス爺さん 下（後書き）

御意見・御感想をお待ちしています。

昔話 上（前書き）

原作キャラの今・・・花菱美希。現在は大学で出会った男性と結婚して川西性を名乗っている。由希の母親。政略結婚を嫌って駆け落ちした相手との結婚だったため、今はただの庶民。

昔話 上

クラウドが三千院家の仕事に復帰してから1週間ほどすると、これまで手をつけていなかった倉庫や建物からいろいろな物が発見され、ハヤテたちの元へと持ち込まれた。役に立たないガラクタも多かったが、反面貴重な物も多数出てきた。ナギが生まれたばかりのころの写真とか、まだ三千院家が財をなしていなかったころの記録、さらにはナギの母親の紫が幼かったころの8mmフィルムなどというものも出てきた。それなどはナギが泣いて喜んだ。

そう言う古い物が出てくる一方で、ごく20年ほど前の比較的新しい物も色々出てきた。その多くはナギがハヤテと過ごした高校生時代の物ばかりだったが、それはハヤテやナギにとって大切な思い出の証人であり、また勇人ら子供たちにとっては自分たちの知らない両親の顔が見れておもしろかった。

そんな中で、勇人がそうして発見された物の中からある写真を見つけた。そこに映っていたのは、周りの人間から拍手される中で、トロフィーを持って満面の笑みを浮かべるハヤテの姿だった。ハヤテの外見から見て、高校生だった時の物のようだ。

この写真が何であるか、早速勇人は父親に聞いてみた。

「父さん、この写真は何？」

「うん？」

ハヤテは差し出された写真を見た。

「ああ、これは僕が白皇学院のイベントで優勝した時の写真だよ。懐かしいな。」

「白皇学院のイベントって、確か昔は無茶苦茶な物が一杯あったんだよね？」

現在は白皇学院理事長に就任したヒナギクのお陰で、生徒の命に関わるようなトンデモイベントは全て撤廃されている。これには多くの教師たちが胸を撫で下ろしたというが、それは別の話である。

そうした話を、勇人は生徒会の仕事やハヤテたちから聞く昔話で知っていた。

「そうそう。特にマラソン自由形なんか人が続出してさ、今考えればどうしてあんなイベントをやれたのか不思議でしょうがないよ。今だったら絶対親が黙っていないよ。ヒナギクさんが廃止したのは正解だったね。」

ハヤテが高校生時代のことを思い出しながらしみじみと言う。

「それで、これは一体なんのイベントの写真なの？」

「これはだな。当時の葛葉理事長の思いつきで行なわれた執事鬼ごっこに優勝した時のだ。」

「何それ？」

聞き覚えのないイベントである。

「具体的にはだな・・・理事長から指名された執事が鬼役となって、

学院生徒全員から逃げ切れれば勝ち、捕まれば負けっていうルールだった。ちなみに優勝賞金は100万円だったな。」

「何それ？鬼が簡単に捕まりそうじゃん。」

「うん。普通だったらな。ただしだ。あの理事長がそんな普通に終わらせてくれるはずが無かったんだ。」

そう言っ言葉を区切るハヤテ。

「それって一体どういうこと？」

「うん。実はな。」

話は約20年前、ハヤテが白皇学院高等部3年生に進学したばかりのころの話である。思いつきで場当たりの指示を乱発すること有名な葛葉キリ力理事長は、新学期早々またも身勝手な指示を出してきた。それが執事鬼ごっこの開催だった。

そのルールは、学院に所属する執事全員が鬼となり、その他の生徒が全力を持ってこれを捕まえるというシンプルなものだった。聞くだけだとやるのはごく簡単そうであったが、しかしただで終わらせないのが彼女の性格である。鬼ごっこには細かい条件がいろいろとついていた。

まず逃げるフィールドがやたら広がった。東京23区内と神奈川県と埼玉県の一部がそのフィールドであった。さらに移動手段は公共交通機関のみという、普段はそんな物使わない人たちにとっては

非常に厳しい物だった。

このあたり、当時放送されていた鉄 D S Hの缶ケリからヒントを得たとも言われているが、定かではない。ただし、逃げる執事が鬼が近づくと音が鳴るビーコンを持たされたあたり、この噂は本当であつたようだ。

ちなみに、逃げ切つた鬼には100万円が支給され、捕まえた生徒には一人捕まえるごとに10万円が支給されることになっていた。ついでに、執事を捕まえた生徒はその執事を丸1日自由に使つてよいというおまけ付きだった。

とにかく、その日の早朝ハヤテは、他の執事たちと共にスタート地点とされた白皇学院の最寄り駅である西武線の練馬駅に集まっていた。

「それでは、皆さん頑張ってください。」

3年生の学生主任であつた牧野香織の見送りを受けて、執事達は大東京に散っていった。

一方、追う側の生徒達も同時刻に白皇学院をスタートして鬼である執事たちを追った。

「ふーん・・・それにしても執事が丸1日使えるって明らかに人権無視じゃない？まあ多分母さんやヒナギクさんは燃えたんだと思うけど。でも逃げられるイールドが東京23区プラスじゃ逆に逃げる執事が一方的に有利だったんじゃないの？」

すると、ハヤテはまたも甘いなという表情をした。

「まあ人権うんぬんは別として、実際はそうじゃなかったんだ。実はさ、執事側のビーコンは鬼の接近を報せる役目もしたけど、中にはGPSが内蔵されていたんだ。そして鬼は回数制限があったけど、それを見て追うことが出来たんだ。」

「ああ、なるほど。それで、結局どうなったの？」

勇人に質問されて、ハヤテは再び語り始めた。

スタート直後は鬼と距離が開いていたこともあり、胸につけていたビーコンが鳴る事はなかった。取り敢えずハヤテは西武線でターミナル駅である新宿駅へと出ていた。そして出発して1時間後。ハヤテが新宿駅構内でどこへ逃げようか路線図を見ていると。

ピ・・・ピ・・・

ビーコンがなり始めた。

「鳴ってる!!」

ハヤテは慌てて辺りを見回した。しかし人が多いために、普段は目立つ白皇学院の制服姿の人間を見つけることは出来なかった。

「どこだ？」

ハヤテが当たりを見回している間にも。

ピ・ピ・ピ・

ビーコンの反応はどんどん強くなっていった。そして。

「いたあー!!」

背後から聞き覚えのある少女の叫ぶ声が聞こえた。見ると、驚いて振り返る人ごみの中に急接近するピンクの頭が見えた。

「ヒナギクさんだ!?!」

相手が白皇最強の少女だとわかったハヤテは全力で逃げ始めた。

「待ちなさい!!」

少女は再び叫び追ってくる。ハヤテは急いで改札の中へと入り、ホームへと走った。そしてタイミングよく発車チャイムがなっている列車があつた。

「ラッキー!!」

ハヤテは階段を飛び降りると、そのまま扉が閉まる寸前だった電車に乗り込んだ。そしてヒナギクがホームに降り立った瞬間、列車が動き始めた。

「あ、危なかった。」

ハヤテは安堵の息を吐いた。そして呟いた。

「「絶対」に心臓が悪いよ。」

昔話 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

いきなり過去の回想をしています。このネタ一度やってみたかったので。

昔話 中（前書き）

原作キャラの今・・・朝風理沙。白皇卒業後に結婚したが、交通事
故で既に他界。ほんとうにすみません。

昔話 中

「それはまたすごいね。」

ハヤテの話を聞き、勇人はその特徴的なピンクの髪を振り乱して、ヒナギクが全力を出して彼を追い掛け回す図を頭に浮かべた。ヒナギクが実際にそのようなことをしている所を勇人が見たことはない。理事長になってからの彼女が、そのような行動を採ったことなどないからだ。しかし、なぜか自然にその姿が浮かんでくる。

「本当だよ。おかげで僕以外の執事は正午までに全員捕まっちゃったんだからね。」

執事鬼ごっこが開かれた時、すでにその強さで名を馳せた野ノ原や氷室と言った執事達は卒業するか、留学するかしていなかった。だから化け物レベルの体力を保持する執事はハヤテただ1人だった。

と、そこへ。

「2人とも何を話しているのだ？」

部屋の扉が開き、ナギと紫、そして優が入ってきた。

「ああナギさん。この写真について話し合ってたんです。」

そう言っつて、ハヤテはナギに先ほどの写真を渡した。

「うん？」

手に取るナギ。すると、彼女の表情が少しばかり険しいものとなる。

「どうしたのお母さん？その写真って一体何？お父さんが写ってるけど。」

紫が写真を除きこんでいった。しかしナギはその言葉に答えようとせず、写真をジッと見たまま何かに想いを巡らせているようだった。

「それはだね……」

ハヤテが先ほど勇人にしたのと同じ説明を、紫と優にもする。

「へえ、執事鬼ごっこね。けどお父さんが優勝した大会の写真で、なんでお母さんが表情をあんな風にするのよ？」

紫の疑問に対してハヤテが言う。

「紫、ナギさんの不得意な事を思い出してごらん。」

「え！？」

ナギはハヤテと結婚して以降、それまで不得意だった事の多くを克服している。しかし、今ハヤテは現在形で聞いてきた。つまり今でも克服できていない事に関係しているということだ。

「ああ、はいはい。わかりました。」

最初に優が気付いた。まあ彼女の場合ナギの分身であるから、気

付けて当然ともいえるが。

「ええ、一体何よ？」

紫が優に尋ねる。

「ああ、わかった。そういうことね。」

勇人も気付いた。

「ええ、ちょっと、何なのよ？」

1人置いてきぼりを喰った紫が2人に聞く。そして勇人が答えた。

「公共交通機関を使うことだよ。電車とか、バスとか。」

「ああ！はいはい。わかった。」

紫もようやく納得した。

ナギの公共交通機関苦手は飛びっきりの物だ。まず13歳になるまで鉄道が存在しているということをわかっていなかった。まあそれは新幹線しか存在しないと思いついていたマリヤや、やはり鉄道など使ったこともなかった伊澄と似たり寄ったりであったが。

「というか、そんな常識も知らないで、どうしてお母さんたち飛び級できたのかしら？」

紫が正直な感想を漏らす。それによって、ナギの顔はさらに陰しさを増した。

ちなみに、現在は三千院家をはじめ、各金持ち家族の子供達はハヤテや一樹といった世間一般をわかっている人たちが父親になったおかげで、一般レベルの常識を母親たちより多くわかっている。

「まあそういうわけで、ナギさんたちにとっては凄い苦労した大会になったわけだよ。伊澄さんなんか、確か気付いたらソウルにいたからね。」

それを聞いて、3人とも苦笑した。

「じゃあ母さんは早々とリタイアしたの？」

勇人が聞く。

「まさか。勇人だってナギさんの負けず嫌いな性格は知っているだろう？」

「じゃあ母さんはどうやって参加したの？」

「強力な助っ人を呼んだんだよ。」

「『助っ人！？』」

ハヤテに遅れる事1時間、白皇学院の生徒達は学院をスタートして、それぞれ自分たちで目標に選んだ執事を追い始めた。そんな中、ナギは困っていた。

「どうすれば良いのだ!？」

はっきり言つて、ナギにはこれからどうすれば良いのかわからなかった。普段から車かヘリしか使わない彼女にとつて、鉄道とかバスという存在は、それこそUFOなみの未知の存在だった。以前数回使ったこともあつたが、その記憶は既に吹き飛んでいた。

「あの理事長め!!」

とキリ力に向かつて叫んでみるが、それでどうこう出来たら人間苦労しない。

「うう。せめて手助けが必要だ。だが・・・」

当たりを見回すが、元々引きこもり性で交友関係が限られている彼女には、パツと頼りになりそうな人間は思い浮かばなかった。

「電車やバスを使いこなせそうな人間・・・いた!けど・・・あいつに頼むのか!? 恋のライバルに借りを作る事に・・・いや、今は過去のわだかまりは捨てよう。」

ナギはある人物に電話するために携帯を取り出した。

「ある人物つて？」

ようやく復活し、話に加わったナギに向かつて勇人が聞く。

「勇人も知ってる。強いて言うならハムスターだ。」

その一言で、3人とも一体誰だかわかった。これまで両親の思い出話を散々聞かされてきたのだ。そしてナギがこれまでの生涯でハムスターと呼んだ人間は1人しかいなかった。

「それで私を呼び出しというわけね、ナギちゃん。」

呼び出されたハムスターこと西沢歩は、ナギから事の次第を聞かされて、苦笑いしながら言った。

「私だってお前などに助けてもらいたくはない。けど他に便りになる人間が思い浮かばなかったのだ。」

ナギの言葉に対して、歩は小さな溜息を漏らして言った。

「まあ良いわ。どうせ暇だったし。手伝ってあげる。」

別段理由があるわけではなかったが、この日は土曜日だった。

「悪いな。」

「ただし条件付よ。こっちだって休日呼び出されたんだから、それなりに見返りが欲しいわ。」

「何だ。言ってみる？」

「もし優勝したら、そのハヤテ君の独占権の半日を私に譲る事。」

その言葉に、ナギはしばし考え込んだが、意外にあっさりと言った。

「良いだろう。今の私にはお前以外に頼れる人間はいないしな。」

ナギはとにかくゲームに参加する方を選んだ。

その言葉を聞いて、歩はクスツと笑った。

「なにがおかしいのだ？」

「ごめんごめん。ナギちゃんが随分素直になったんだと思って。」

「・・・」

ナギはその言葉には何も答えず、ただ恥ずかしそうに顔をそむけただけだった。とにかく、ナギは歩という助っ人を加えてゲームに挑む事になった。

「それで、まずはどこへ行くのだ？」

「とにかく、一番近い地下鉄か電車の駅に行きましょう。」

「わかった。」

2人はとりあえず最寄の駅へと移動を開始した。

「それでここからどこへ移動するのだ？」

「そうね。とりあえず逃げようと思ったところか大きな駅にいきなりきやいけないから、新宿かしらね。」

歩はそう結論付けて、新宿へと移動する事にした。

「じゃあそういうわけで、まずは切符を買いましょう。」

歩は券売機で2人分の切符を買い込むと、ナギを連れて一路新宿へと向かった。

昔話 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

昔話 下

「それでどうなったのよ？」

紫がハヤテに聞く。

「まあとにかく正午過ぎからはもう凄い事になったよ。ビーコンが鳴り止まなくなったからね。皆一斉に僕の所に寄ってきたから。」

ハヤテは苦笑いしながら言った。

「TO IOには味方がいたからいいけど、こっちは孤立無援だったからね。危うく捕まりかけたことも何度かあったし。」

「それでよく逃げられたね？まあ、父さんのことだからどうせ尋常じゃない逃げ方したんだろうけど。」

勇人が呆れた様に言うと、ナギが大きく頷いた。

「その通りだ勇人。ハヤテの体力が凄い事はわかっていたが、私もあんなことするとは思わなかった。」

そう言って彼女は机に置かれていたティーセットから紅茶をカップに注ぎ、一口口に含んだ。

「一体どんなことしたんですか？」

優がハヤテに向かって尋ねる。

「いやね……」

ハヤテが語り始めた。

「とうとう追い詰めたぞハヤテ!!」

「もう逃げ場はないんじゃないかな？ハヤテ君。」

あるJRの駅で、ついにハヤテは追い詰められてしまった。しかも、いつもの面子に。厳密に言うとならば左側にはナギとその助っ人である歩が。そして右には。

「ついに追い詰めたわよハヤテ君!!」

「大人しく私たちに捕まって。」（美希）

「我が動画研究部のおもしろい画像の素材になってもらう！」（理沙）

「観念するのだハヤ太君！」（泉）

ヒナギクと生徒会3人娘。都合6人に囲まれてしまった。ホームの上であつたため、後ろは線路である。はつきり言って逃げ場がない。

「くそ……けど、生憎とここで捕まるわけにはいかないんです!!」

ハヤテとして、なんとしても勝って賞金の1000万円を獲得したかった。もちろん使い道は借金の返済だ。

「ハヤテ君、あなたが1000万円を欲しがるのはわかるけど、もう逃げ場は無いのよ。というわけで、大人しく私（ここを強調）に捕まりなさい！！」

ヒナギクとしては降伏勧告として言っただつたが、この一言がハヤテに時間的余裕を作ってしまう。

ついつい自分の感情を含ませて、自分という単語を強く言ってしまったヒナギク。もちろんそれに対してナギたちが黙っているはずが無かった。

「ちょっと待てヒナギク！ハヤテを捕まえて1日使用権をもらうのは私なのだ！！」

「ちなみに半日は私だけだね。」

ナギの言葉に歩がさりげなく言う。

すると、3人娘も会話に介入してきた。

「ちょっと待った！ハヤ太君の1日使用権を貰うのは私たちだ！」
（美希）

「そうだそうだ！」（理沙）

「もうハヤ太君に着てもらう衣装は購入済みなのだ！」（泉）

この3人娘のセリフが話をさらにややこしくした。

「ちょっと待ちなさいあんたたち！一体ハヤテ君に何させようとしてるのよ！！」

3人娘の言葉にヒナギクが反応し、いつものお説教モードになった。すると、3人娘の表情が明らかに狼狽した物になった。

「いや何って・・・」（美希）

「別に私達は何もやましい事は・・・」（理沙）

「そうそう。ちょっとハヤ太君に女装してもらって、色々なアングルから写真やビデオを撮ろうなんて考えてないから・・・」

泉が正直に言ってしまった。

「「泉！！」」

すかさず残る2人が怒鳴る。だが時既に遅し。

「あんたたち！！」

他のお客さんがいることにも構わず、すさまじい怒りの炎を巻き上げるヒナギク。

「うわー！！」

「許せヒナ！！」

「ごめんヒナちゃん!!」

もう何度繰り返されたかわからない光景に、ハヤテとナギは溜息をつく。

「まったくこの人たちは。」

「懲りん連中だ。」

そんな中1人冷静さを保てた歩はナギに言った。

「あのさナギちゃん、今の内にハヤテ君を捕まえれば良いんじゃないかな?」

「おおそうだった!というわけでハヤテ!」

「大人しく捕まりなさい。」

2人がハヤテにじわじわと近づく。しかし、ハヤテの表情は余裕そのものだった。

「お2人のことですから、大分苦労したんでしょうけど、すいませんがここは僕の勝ちです。」

不敵に笑ってそう言いきったハヤテに、ナギと歩は驚いた。

「「え!?!」」

「それでは皆さん!」

ハヤテはそう言うと、線路側に飛び上がった。

「「「「「ああ!!」「」「」「」

ハヤテの体はそのまま線路に・・・落ちはしなかった。なぜならその時ちょうど列車がそこを通っていたからだ。ハヤテはそれに飛び乗ったのだ。しかしナギ達には追うことが出来なかった。なぜなら、それは普通なら人が乗れない列車だったからだ。

「そんな・・・嘘でしょ。」

ヒナギクが絶句する。

「まさか貨物列車に飛び乗るなんて・・・」

歩もありえないという表情をした。

そうハヤテが飛び乗ったのは貨物列車だった。しかも彼があらかじめ見計らって飛び移ったのは最後尾のデッキ部分だった。つまり、ヒナギクたちが気付いた時には、列車は完全に通過しきった瞬間だった。これでは追跡できるはずが無かった。

残された6人は、齒噛みしながらハヤテの乗った貨物列車を見送るしかなかった。

「あのお父さん、それって普通に営業妨害になるんじゃない?」

紫が呆れながら言った。

「ああ、ばれなかったから大丈夫だよ。」

ハヤテが笑いながら言ったが、子供達は笑えなかった。

（（（それで良いのか！？というかなぜばれなかった！？）））

「まあそんな感じでその場はなんとか逃げ切ったよ。それから屋根に乗ったり、床下に隠れたりして、なんとか逃げ切ったよ。」

（（（あんたは忍者か！？）））

再び子供たちが心の中で突っ込みを入れた。ちなみに、三千院家の子供である彼らもそれくらいの事は出来るが。

「とにかくそんな感じで、タイムリミットまで逃げ切る事が出来て、優勝したというわけさ。それで、この写真を撮ったわけ。」

「それでハヤテは1000万を貰って借金の返済に使ったわけだ。少しくらい自分で使えば良かったのに。」

ナギがそんな事を言うと、ハヤテが笑いながら言い返した。

「借金を返しきっていないのに遊ぶ事なんて出来ませんよ。」

「まったく、お前は本当に優しい奴だな。ま、そんなところが大好きなんだが。」

「僕も大好きですよ、ナギさん。」

2人しておのろけモードに突入しそうになったため、優と紫が止めた。

「お母さん!」

「おのろけは良いから。まったく。それよりもお母さん。お父さんと勇人に言う事があるんでしょ?」

「ああそうだった。ハヤテ、勇人喜べ。実はな昨日・・・ちよつと最近気分が優れないから病院で診てもらったんだ。そしたら・・・」

「「ええ!!」」

2人の驚きの声が屋敷内に響いた。

真理奈の憂鬱

季節もそろそろ冬が近づいてきた10月下旬、その日勇人を含む三千院一家の面々は愛沢邸にいた。この日は一樹と咲夜の息子である一哉の誕生日で、その誕生日パーティーが開かれ、勇人たちも招待されていた。

三千院家を含むお金持ちの家には2つのグループがある。1つはやたらパーティーなどの社交の場を作るなど、派手な事を好むグループ。もう1つはそうしたパーティーをほとんど行わないグループだ。

愛沢家は前者のグループに入り、家族のメンバーの誕生日毎に必要なほど豪華なパーティーを行なう。今回の誕生日パーティーにしても、1人の少年のために行なわれるにしては明らかに度を越えて豪華絢爛だった。

ちなみに、対照的に庶民出身のハヤテと、もともと人付き合いが嫌いなナギの夫婦のせいで三千院家は後者のグループに属し、社交の場は滅多に開かない。家族の誕生日にしても、友人は呼ぶもののお金持ちにしてはかなり質素だ。

そんな感じの三千院家であるが、縁が深い愛沢家の招待を受けたとなればちゃんと正装して出て行く。今回も男性陣はタキシードを、女性陣はパーティー用のドレスを着こんでの出席である。

ちなみに、今回のパーティーと前後して、三千院家を含む各家庭にはそれぞれ吉報がもたらされていた。それはナギをはじめとする各家庭の妻が揃って妊娠したというものであった。

最初はそれぞれ家族内で知らされたのであるが、その後各家庭同士の付き合いで、三千院家、愛沢家、橘家、姫神家の奥さん方が揃って妊娠した事が判明し、一同を大いに驚かせた。しかもそろって2ヶ月を過ぎたばかりということから、全員がほぼ同じ時期に身籠ったことも判明したために、驚きも2倍になった。

そう言うわけで、今回のパーティーには一哉の誕生パーティーと、各奥さん方の御懐妊記念パーティーの二重の意味があった。

そんな中で、子供たちは子供たちでパーティーを楽しむ。

「……一哉誕生日おめでとう!!」「……」

三千院家をはじめ、今回のパーティーに呼ばれた家の子供たちが一斉に友人の誕生日の祝いの言葉を掛ける。

「ありがとう、みんな。」

父親似の顔を満面の笑顔にして、一哉がお礼を言う。

ちなみに、一哉は父親の一樹似であるが眼鏡は掛けていないし、髪の色も咲夜似である。

この光景は毎年彼の誕生日パーティーで見られてきた物であるが、今年のパーティーはこれまでにない光景が現れていた。

「それにしても、一哉と紫お姉ちゃんのツーショットが見れるなんて思わなかった。」

「本当、本当。」

そんな兄をバカにするセリフを言うのは、愛沢家の娘である桜花と夕貴だ。

「う、うるさいな。」

顔を赤らめながら妹たちに言うが、どうも迫力がない。これでは妹にバカにされても文句は言えない、というのがその場にいた人間の感想である。

「くす。」

そんなやり取りを見ていた少女、三千院紫は小さく笑った。彼女は今日、一哉の恋人として彼の隣に立っていた。

「な、何？」

「いや、やっぱり一哉は一哉だなと思って。」

母親譲りの顔を微笑ませ、彼女はそう言った。その言葉に、一哉は顔を少しばかり赤くした。

その瞬間を見逃さず、彼の妹たちははやしたてる。

「ああ、一哉顔赤くしてる！」

「本当だ！一哉は紫お姉ちゃんにメロメロなんだ！」

ませた小さな少女たちの言葉に、今度は2人がそろって顔を赤く

したのだった。

その光景を、他のカップルたちが微笑ましく見ていた。実は今回のパーティーでは、一哉が白皇で面識を持った友人たちのほかに招待状が送られている。そのため、勇人の隣には美沙がいるし、また朴や櫻もいた。

ここまで来ると、カップルである人間の方が多く見えた。そういうわけで、カップルじゃない人間達は、自分のおかれた現実には嘆く事となる。姫神真理奈もその1人だった。

「恋人か・・・」

彼女は一哉にお祝いの言葉を述べた直後、目の前の現実を見る（つまりは自分には恋人がいないのを認識する）のが嫌となり、1人テラスで夜空を眺めていた。

母親のマリアも中々恋愛と言う物に恵まれなかったが、そうした部分はどうも彼女に引き継がれているようだった。いや、彼女の場合勇人へのアタックが失敗しているから、よりひどい。

「あの神父さんの気持ちがなんとなくわかるかも。」

彼女がボソッとそんなことを呟いた。

真理奈の言う神父とは、ハヤテが三千院家で暮らし始めて直ぐに居着いた幽霊神父のリン・レジオスターのことだ。彼はあれから20年近く経つというのに、未だ伊澄やハヤテの言葉も聞かず、成仏しようとしなかった。ハヤテたちも実害はないからと、今じゃほっとしていた。

ちなみに、三千院家と姫神家の子供達は彼のことが見えている。だから真理奈は彼と何度も会話をしている。そして彼が「カップルなんて皆死んでしまえば良いんだ!!」と何度も言っている事を知っている。

最初は何過激な事を言っているんだこの神父は？的な感想を抱いていた真理奈だったが、1人恋人がいないという状況におかれると、その気持ちが十分理解できた。

「恋人欲しいなあ・・・」

羨ましさからか、ついついそんな言葉が口から出てしまった。

「同感です。」

いきなり後ろから返答されたために、真理奈はギョツとしてしまった。

「だ、誰ですか？・・・ああ、白瀬さん。」

「こんにちは、真理奈さん。」

真理奈の後ろから声を掛けて来たのは、1人の青年だった。南野白瀬。ハヤテの同級生である南野宗谷と、一樹の姉である西沢歩の息子で歳はハヤテや真理奈と同じである。一哉から見て従姉妹にあたる彼も、一家揃って招待されていた。もつとも、彼の家は宗谷が船の航海士である以外は、平凡な一般家庭である。付け加えるとすれば、母親の歩はテレビの大食い大会で連続優勝している。

閑話休題。

そんな彼と真理奈は深い事はないが、親同士の付き合いでそれなりに面識があった。そして彼も、未だ相手がいない身だった。

それぞれの恋愛観

真理奈と白瀬がお互い恋人のいないことを話していると、吊られるように会話に参加してきた者がいた。

「恋人がいないなら私だってそうよ。」

そう言うてきたのは、雪路と京ノ助の娘である未来だ。

「未来さんは勇人くんや紫さんたちを羨ましいと思ったことはありますか？」

真理奈が未来に尋ねてみる。

「そうだね。私の場合は両親があんな感じだったからね、そこまで恋人が欲しいと思ったことはないわ。」

未来の母親である雪路は一時期を除いて酒飲みであつたし、京ノ助はガンブラ作りという趣味に没頭していた。そしてその状況は今もあまり変わらない。2人とも決して未来をほうりっ放しということではなかったが、夫婦としてはそこまで円満な関係ではない。

そのせいか、未来の持っている恋人に対する見方は勇人や紫達とは大きく違う。彼女からしてみれば、恋人なんて持つてもあまり良いものじゃないという印象があつた。だから先ほどの様な発言になつたわけである。

「まあ勇人たち見てみると、もしかしたら恋人がいるのも良いのかなとは思うかな？けど、やっぱりすぐに欲しいとまでは思わないわ

ね。」

彼女は両親の性格を継いで、それなりに1人自由奔放に生きていくのが好きなかもしれない。真理奈はそんな彼女をある意味羨ましく想い、それとともに自分について考え直すのであった。

「そういつ真理奈ちゃんは？」

「そうですね。私は今までそれなりに恋人がいることを羨ましいと思ってきました。けど、未来さんの話を聞いているうちに、それがただのあこがれではないのかと思えてきましたね。」

「そう。白瀬君は？」

未来が白瀬に話を振る。

「そうだな・・・俺はどっちかというと未来さんに近い感じかな。まあ確かに恋人が欲しいなあなんて思ったことはあるけど、物事になるようにしかならない。俺に好きな人が出来るか出来ないかも、わかんない。そんな所かな。」

白瀬がそう言うのと、未来が感心したような表情になった。

「へえ、なかなかおもしろいこと言うじゃない。」

「そう？」

「ええ。まあ、恋人に付いてはこれくらいにして、せっかくパーティーに来ているんだから、2人とももっと楽しもう。」

「「うん。」」

こうして恋人についての議論は3人とも打ち切り、パーティーを楽しむことにした。

そんな感じで、子供たちはパーティーを楽しんでいた。余談では在るが、恋人にはあまり興味ないと言っていた未来と白瀬であったが、お互い後に恋人、そして夫婦になるとはこの時は夢にも思わなかっただろう。

さて、子供たちが楽しむ一方で、大人たちも久しぶりに顔を合わせられる時であるから、集まって色々な話をしていた。

「一哉君ももう16歳ですか・・・勇人も紫も17歳。本当に時が経つのは速いものですね。けど、学生だった頃がついこの間のように感じられます。」

「そりゃあ、あの頃は毎日色々なことがあつて濃かつたからな。」

「特にハヤテさんは命の境を彷徨ったこともあつたんですし。」

会話をしているのはハヤテ、ワタル、一樹の父親3人組である。

「けど本当にあの時は大騒動だったからな。ハヤテが撃たれて、そのすぐ後にナギと電撃的に結ばれて。あの後伊澄や咲夜たち随分と凹んでたからな。」

「僕なんか覚悟していたとは言え、ナギさんがハヤテさんを選んだのは本当にショックだった。姉さんとそろってあの時は落ち込んだな。」

子供たちを見ていたせいか、昔話に花が咲いている。

「けどあの後すぐじゃなかったか？お前が家の店に遊びに来ていた咲夜と出会ったのって？」

ワタルが微笑みながら言った。

「そう言えばそうだったな。」

「お前と咲夜の出会いには傑作だったな。なにせ普通すぎるお前の言動に、咲夜がいきなりハリセンで突っ込みを入れたんだったからな。」

ワタルがケラケラ笑いながら言った。

「ちょっとワタル、そんな笑うことないだろ？」

「ごめんごめん。けど本当にお前みたいなバカで普通な奴が咲夜と結婚するなんて、世の中わからないよな。」

別に悪気はなかったであろうが、さすがに言葉が悪かったせいで一樹が少しばかり声を荒げる。

「なんだって！？そんなこと言ったらワタルだって、サキさんやソニアさんみたいな年上の女性にフラグ立てたくせに、よく伊澄さんと結ばれたもんだね。」

これに対して、ワタルも力チンと来た。

「誰が誰にフラグ立てただって!!」

「だって真実だろ!!」

このままでは流石にマズイと見て、ハヤテが仲裁に入った。

「まあまあ2人とも、昔話に花咲かせるのはいいですけど、そんなに熱くならないで下さい。他の人にも迷惑ですよ。」

ハヤテが笑顔で言い、2人の間にあったピリピリした空気は消える。2人ともハヤテの言葉で、自分たちが大人気ないことをしていることを思い立ったらしい。

「それにしても、本当に20年は速かったですね。あの子たちがお互いに恋する年齢になったんですから。」

ハヤテが子供たちを見つめて改めて言う。

「そうですね。このまま一哉と紫さんが結婚してくれたら、僕とハヤテさんの親戚関係はより近くなりますね。」

「ハハハ・・・そうですね。」

「それを言ったら俺だってそうだろ?このまま光と優がくつついたら家も三千院家と親戚関係だぜ。」

話題が完全に子供たちに移った所で、ハヤテがある事に気付いた。

「そつえば、最近澄香ちゃんの話聞きませんね。」

「あいつは今イギリスに留学中だよ。2学期に入ってから行ってる。聞いてなかったのか？」

ワタルが不思議そうな表情をした。

「ああ、そう言えばそうでしたね。ナギさんから聞いた気がします。」

「けどさ、俺心配なんだよね。あいつ、親の知らない内に恋人でも作るんじゃないかって。」

「ああ、その気持ち僕もわかるよ。今はまだ良いけど、桜花と夕貴が恋人を作ったらきつと寂しいだろうな。」

一樹がワタルの言葉に同調した。しかし、ハヤテが異を唱える。

「けど、恋人を作るかは本人の意思ですから。あまり干渉しちゃいけませんよ。」

このセリフに、一樹とワタルは深く同じことを思った。それは。

「ハヤテ（さん）って本当に心が広いな。」

であった。

こんな感じで父親たちが会話を楽しんでいる頃、奥様方も久しぶりのお喋りを楽しんでいた。

それぞれの恋愛観（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

母親たちの想い

ハヤテとワタルと一樹の3人が父親としてのグループを作っている頃、その奥さんであるナギ、伊澄、咲夜の3人も集まって会話に花を咲かせていた。

「いやあ、それにしても全員同時に妊娠なんてホンマびっくりやな。」

相変わらずの関西弁でしゃべる咲夜。お金持ちでありながら、ボケ突っ込みには煩い関西人の典型とも言うべき彼女であるが、ごく普通の東京都民の一樹と意外に上手くやっている。

「ああ、私も最初聞いたときは本当に驚いたぞ。」

子供の頃から変わらずに結っているツインテールが特徴のナギ。ハヤテとともに三千院グループの経営を行い、辣腕を振るっている。ある経済アナリストは「一秒で一億稼ぐ女」とまで評している。その彼女も思い人であったハヤテと結ばれて18年経っている。

「今度は一体どんな子たちが生まれてきてくれるんでしょうね？」

おっとりという伊澄。長く伸ばした黒髪に、上等な和服を着こなしている。それでもって凶悪な妖怪や幽霊を鮮やかに倒してしまふ最強の霊媒師というから、世の中わからない。その彼女も、一途に自分を好きだったワタルと結婚して今や2人の子供の母親だ。

そして3人とも、外見はとても若い。20代前半と言っても通じそうである。だから産婦人科にいつもいくと、医者からなんとも言

えない複雑な表情で見られる。もともと、歳にあわず若々しいのは何も彼女らだけではない。彼女たちの夫らも同じように20代前半で通じそうなくらいの外見をしている。

そもそもこの話に出てくる子供たちの親全員が、「誰かの生き血吸っているんじゃないですか？」と言われそうなくらい若々しい。

それはさておき、奥様方の話題の中心は新たに生まれてくる我が子についてだった。

「そうやな、うちは男1人、女2人やから、今度は男が生まれてくればバランスがよくなるわ。まあ、男にしろ女にしろとりあえず元気に生まれてきてくれればええんやけどな。」

ボケ突っ込みばかりやっているように思われる彼女であるが、家庭では非常に優しいお母さんだ。もともと歳の離れた弟や妹の世話をしていたこともあって、彼女は子育てに関しては非常に高いスキルを持っていた。

「私もとにかくまず元気に生まれてきて欲しいな。まあ私みたいにはなあって欲しくはないがな。」

自嘲気味に言うナギ。昔は負けず嫌いで、自分が間違っていることは絶対に認めなかったが、今はそれも直っている。ハヤテが執事時代から足掛け22年付き合っただけある。彼女は文句なしに一人前の女性に育っていた。

「確かにそうやな。子供時代のナギみたいになったら、ハヤテの体がもたんで。」

ナギの言葉を聞いて、咲夜が笑いながら言った。

「悪かったな。」

昔だったら怒っているところだが、ナギは苦笑いしただけだった。本当に彼女も成長したものである。

「伊澄は今度生まれてくる子のことどう思っとなるんや？」

咲夜が伊澄に話を振った。

「そうね、私も咲夜やナギと同じ。とにかく元気に生まれてきて欲しいわ。ただ私みたいに、ちょっと方向音痴にはなってほしくないわね。」

その言葉に、ナギも咲夜も苦笑する。ちょっとと言ったが、彼女の方向音痴は重度である。最近はそんなに目立たないが、これは夫や子供たちがフォローしてくれているおかげだ。

「それにしても、ほんまに全員が全員、そろって身ごもるなんてな。」

咲夜が冒頭と同じことを言うが、実際今回の奥様方の妊娠はピツクリするべきことだろう。何せこの3人だけでなく、マリアまで妊娠していたのだ。しかも妊娠した時期もピッタリと一致した。それは夏休みの旅行である。

子供たちが自分たちの恋にがんばっていたころ、親たちも久しぶりに恋に燃えたらしい。何せほぼ全員がここの所仕事が忙しく、暇な時がなかったのだ。

「それだけお互い忙しかったってことだろ？家は私もハヤテも飛び回っていたからな。」

「ナギの言う通りね、私のところもワタルさんは海外出張が多かったし、私自身も仕事が多かったから。」

伊澄の言う仕事とは、もちろん鷺ノ宮家としての仕事だ。

「まあとにかく、全員無事に生まれてくれれば万々歳やな。」

その咲夜の言葉に、ナギも伊澄も頷いた。

「子供といえば、そういえば、ナギのところの紫ちゃんはずちの一哉とカップルになったんやったな。」

「そうだけど、一体何をいまさらの話だぞ。」

ナギが呆れたように言った。そのことはもはや各家族公認済みのことである。

「てことは、2人が結婚してうちの孫が生まれるのもすぐってことやな。」

その言葉に、ナギは飲んでいた水を嘔き出した。

「ゴホ、ゴホ！一体いきなり何を言い出すんだお前は！？」

「いや、そこまで驚くことないやろ？現実のことなんやから。うちらだって全員10代のうち結婚したし、あんだなんか18で子供生

んだやないか？」

確かにその通りである。ナギは結婚も出産も年齢的には一番早かった。そして娘の紫も彼女がハヤテと結婚を決めたときと同じ16を過ぎている。

「それはそうだが、孫の話はちょっと早すぎないか？」

ナギとしては頭でわかっていても、まだ30代であるのにおばあちゃんと呼ばれるのは勘弁願いたいところであつた。

「それに、紫を嫁に出すのはまだ早い！！」

父親のハヤテは比較的小児の恋には寛容であつたのに対して、ナギの方はまだ認めたくないらしい。

「ナギ、それって普通父親が言うことやろ？」

「関係ない！とにかく、私は紫が結婚するとか言い出しても許す気はない。」

自分のことは棚に上げてとはよく言つたもの。もつとも、ナギの気持ちもわからないではない。幼少のとき母親の愛を十分に受けられなかった彼女は、子供たち、特に紫にはなみなみならぬ愛情を注いで育ててきたのである。

「あのなナギ、今時そんな考えふるいで。子供たちの恋は子供たちの手にゆだねるのが筋つちゅうもんやろ？うちは一哉が紫ちゃんと結婚するつて言つたら直ぐに許したるで。」

「何！？咲夜、そんなことは絶対にゆるさんぞ！もしお前が許したらお前の家に殴りこんでやるからな。」

「ふ、やれるもんならやってみい。」

この人を小ばかにした態度はナギの感に触った。

「なんだと！？」

「なんか文句あるんかい！？」

「あの2人とも・・・」

伊澄が止めるのも聞かず、2人は言い合いを始めてしまった。もっとも、こうした言い合いは2人が会えば結構起きることだ。特に子供たちの恋が話題に上るようになった最近。つまり他の人間から見れば結構見慣れていた。

その恒例行事とも言つべき口論を、他の参加者たちは呆れながら見守っていた。

母親たちの想い（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

面倒なお客さん 上

秋からいよいよ冬本番へと向かう11月下旬、勇人はいつもメンバー（紫、一哉、優、美沙、由希、サエキ）と一緒に、画像研究部の部室でお菓子を食べながらお喋りしていた。先日のお愛沢家で行われたパーティーから既に2週間ほど経ったが、その間特に何か特別なこともなく、全員平穏な日々を送っていた。

しかしながら、そうした平穏な日々というのは得てしていきなり壊れるものだ。特にこの作品に出てくるような濃いキャラクターの日常においては。

場が和み、皆の口も大分饒舌になっていた所で、突然何の前触れもなく部室の扉が開けられた。

「こんにちは!!」

「「「!?!」」」

全員が一斉に振り向いた先には、白衣を着た30代前半と思しき女性が立っていた。

「あ、牧村さんだ。」

女性の正体に気づき、指摘したのは紫である。彼女の言ったとおり、そこに立っていたのはかつて白皇学院で教師をしていたこともあり、現在は三千院グループの企業で研究員をやっている牧村だった。彼女もハヤテたちと同じく、見た目と実年齢が大きくずれている。

「こんにちは、勇人君に紫ちゃん。ナギちゃんとハヤテ君は元気に行っている？」

「はい、おかげさまで家の親はどちらとも元気にしています。それで、なんですか、藪から棒に？」

勇人がさも嫌そうに言った。何故そんな反応をしたかというところから彼女の造ったロボットにえらい目に遭ったことを聞いたこともあるが、何より彼ら自身も彼女の噂は直に耳にしているからだ。もともと、それは彼に限らず、その場にいた全員が似たような反応をした。

彼女の場合、性格が全く変わっていない。つまりは迷惑な発明を結構作っているのだ。しかも現在進行形で。

「実はね、久しぶりに部屋を片付けていたらね、こんなものを見つけたんだよね。」

そう言つと彼女は勇人に一枚の紙切れを手渡した。

「はい？」

勇人はそれを受け取り見た。また他のメンバーも彼の周りに集まってその紙を覗き込んだ。

「何これ？」

由希が首を傾げた。

「子供の落書き？あ、けどここに部室って書いてあるね。」

勇人の彼女である美沙が紙を見ながら言った。

「もしかして、この部屋のことですか？」

紫の彼氏である一哉が指摘した。

紙切れに描かれていたのは、円形の建物を描いた駄々草な絵と、その中心部を指す矢印であった。だが良く見ると、確かにその建物はこの現在画像研究部の部室となっている部屋のようなのだ。

「実はこれ、私がここの学生の時に描いたものなんだよね。その頃ここは私が作った動画研究部の部室だったんだ。それでその地下室のどこかに、何かを隠したんだよね。」

「何かって、何です？」

サエキが尋ねる。

「それが思い出せないんだよね。何かすごく大切な物を隠したのはボンヤリ覚えているんだけど、それが何だったのかわからなくなっちゃって。」

そう言いながらも全く悪びれた様子がないのが彼女らしい。別に悪い人ではないのだが、別の意味で雪路なみに性質の悪い人である。

「けど、この部室って昔ゆ（ボコ！）これは優が勇人を殴った音・・・ゲホゲホ、ええと原因不明の爆発事故で吹きとんだんじゃない？」

勇人がその事を指摘するが、彼女は笑顔のままで言う。

「それは大丈夫。確か地下室の被害は大したことなかったはずだから。」

ここでその場にいた全員はあることを感じていた。それはこのまま行けば何かに巻き込まれるということだ。それが厄介なことかはわからないが、とにかく何かに巻き込まれると。

「まあ探したいなら探せば良いじゃないですか。邪魔はしませんよ。」

由希がそう言った途端、牧村は顔を歪めた。

「ええ！？手伝ってくれないの？」

どうやらここに入ってきた時点で、手伝ってもらえることを期待していたらしい。

「いやだって、僕たち関係ないことですし。それに牧村さんがいつも連れてくるロボットのエイト（Ver7）にでも手伝わせば良いじゃないですか？」

彼女は今でも20年前に造った介護ロボエイトを連れている。その実力は勇人たちも知っているから、そのエイトに手伝わせば良いじゃないかと思って当然だった。

だがそんなこと言った一方で、もはや何をしようとも話しの流れ的に、絶対に巻き込まれるなど、一同全員漠然と感じていた。

「それがね、エイトは今点検中で、研究所にいるんだよね。だから手伝ってくれるロボットは今日は連れていないんだよね。」

（（（やっぱり）））

「だからお願い皆、手伝ってくれない？」

牧村が両手を合わせて懇願してきた。

「「「・・・・・・」」」

全員しばし無言。

「ちゃんとお礼も出すつて。皆に一台ずつ新型の警備用ロボットをプレゼントするよ」

「「「いりません！！」」」

全員全力で否定。

「ええ！？いらないの？最新型で、粒子分解レーザー砲（当たった目標を粒子単位にバラバラにする恐ろしい兵器）付きなんだよ。これさえあれば、襲ってきた暴漢も次の瞬間には跡形もなく消えてるよ。」

営業用スマイル（？）で言う牧村だが、はつきり言って内容は冗談抜きに恐ろしい。

「「「絶対にいりません！！」」」

全員心の底から全員そう答えた。冗談抜きであまりにも危険すぎる。

そんな物をロボットに平気でつけ、それを笑顔で説明する牧村は、やはりどこかずれている。まあ上司がしっかりしているから、生産前に止められるだろう。

「まあお礼は別として、もう逃げられそうもないから、手伝って上げますよ。」

これ以上は何をしても無駄と思い、勇人が最初に手伝うことを決めた。その後他のメンバーも、なし崩し的に手伝うことを承諾した。

「ありがとう皆。けど、本当に警備用ロボットじゃないの？」

なおもしつこく聞いてくる牧村に、全員が強い口調で言い切る。

「「「い・り・ま・せ・ん！」「」」

全員の心からの叫びであった。

「まあ、とにかく探すなら早く行きましょう。」

由希が地下室の鍵を手にとって、クルクル回しながら言った。

「由希さんの言うとおりだね。それじゃあ行きましようか。」

面倒なお客さん 上（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

面倒なお客さん 中

姫神マリアは三千院家に20年以上も仕えているメイドである。

結婚した今でも白と黒のメイド服を着こなし、家事に勤しむ姿は全く変わっていない。というか、子供がいて歳ももうすぐ40に手が届こうとしているようには全く見えない。

まあ外見についてはその他のメンバーも大同小異であるから良いとして、とにかく彼女が働く姿は三千院家になくはならない光景になっていた。流石に現在は結婚して自分の家庭があるということ、他にも数人メイドが雇われているが、それでも家事の半分以上をこなしているから恐れ入る。

そんな彼女もナギたちと同じく先日妊娠が判明し、夫や娘から祝いの言葉を掛けられたばかりであった。そのためか、ナギは彼女のことを気遣って仕事を減らしていた。

だが家事こそ生きがいであるマリアにしてみれば、そんなことする必要など本当はなかった。なにせ、17年前真理奈を生んだときも、出産日前日まで仕事を続けていたのだ。

今日はナギから休むよう言われた日であったが、彼女はせっせと自分の家庭の家事に勤しんでいた。

「運命に負けて、しゃがみ込むなんて、つまらないよそれじゃ、かつこう悪いよ」

歌を歌いながら軽やかにハタキを使うその姿を見て、誰が既に38歳で子持ちと予測できるだろうか？予断であるが、彼女を含め今

回妊娠した母親たちを診察した産婦人科の医師たちは一応に目を丸くしたという。ある医師などこう言ったぐらいだ。

「うーん・・・外見も体の機能も20代前半で十分通りますよ・・・失礼ですが、本当に30代後半ですか、いや、人間ですか？」

歳を若く見られるのは嬉しかったが、人間扱いされないのは腹立たしいことである。もっとも、本人たちが反論できないのも事実であつたが。

ガンダムなみの体力を持つハヤテ、妖木刀を振るい常人はずれの動きを見せるヒナギク、鷲ノ宮家一の魔力をもつ伊澄、いざ突っ込む時は驚異的な体力を発揮する咲夜などなど彼女を含めて、彼女の周りの人々は非常識な人間ばかりであつた。

おそらく彼らの経歴を聞けば、誰だって彼らが不老不死だろうかなんだらうが信じる気になるだろう。

閑話休題。

さて、マリアは歌を歌いながら家事をこなしていき、自分の部屋の掃除をはじめたところであつた。

「おしゃべりはもう、やめにしましょう」さあ静かに見届けましょう」

事件はその時起きた。

パタン。

突然何かが倒れた。音からしてそんなに大きな物ではない。

「あら？」

彼女が音のした方を見ると、家具の上に立ててあった盾がひとつ倒れていた。白皇学院の生徒会会長に就任したことを示す3つあるその盾の内、一番右にある盾がそれであった。

「あらあら、どうして倒れたんでしょうか？」

彼女がその盾を戻そうと手にしたとき。

「！？」

突然彼女の頭の中を何かが走ったような感じがした。ありきたりな言い方をするならば、それは虫の知らせという奴だった。

「この感じ・・・以前もどこかであったような？・・・そんな気がします。」

どこかデジャヴのようなものを感じながら、マリアはその感じを以前どこで覚えたのか思い出そうとした。

「いつだったかしら？」

マリアは記憶の糸を辿っていく。人間大切なことはすぐに忘れてしまうものだが、しょうもないことは直ぐに思い出すものである。今回の場合中々思い出せなかったから、彼女からしてみれば前者であった。

考えることおよそ2分。彼女はついにその事を思い出した。

「思い出しました！！あれは確か20年ぐらい前でしたね・・・」

21年前の春。彼女は今日と同じように家事に勤しんでいた。その頃はちょうどハヤテが働き出した頃だ。まだナギも13歳の学生で、2人とも白皇学院に通っていた。彼女は2人を学院に送り出していつもどおり部屋の掃除をしていたが、あの時も同じように突然盾が倒れたのであった。

「あの時は確か・・・それが原因であのテープのことを思い出したんでしたわ。ということは、今回も牧村さんならみ・・・あ！！！」

そこでマリアはある事実を思い出した。

それは忘れもしない30年近く前のこと、まだ彼女自身が白皇学院に通っていた頃だ。その頃彼女の年上の同級生であった牧村は、動画研究部を設立して、これでもかというほどマリアの恥ずかしい映像や音声を撮りまくっていた。

もちろん、マリアにとっては他人に見せたり聞かせたりするのは憚れる部類の記録であったので、その殆どを回収した。牧村はその知恵を絞って隠していたようだが、マリアは裏をかいて見事見つけ出していた。

だが、結局見つけきれないものも何本があった。彼女は卒業するときに牧村に隠し場所を聞きだそうとしたが、なんと牧村自身隠し場所を完全に失念していた。ただ人に見つからない場所に隠したとは言っていたので、結局その時は放置したのであった。

しかしながら今回の虫の報せは、その時の不安をマリアの中に甦らせた。

「この感覚・・・間違いないですね。前回と同じです、あのテープが見つけれかけているに違いありません!？」

マリアは見たものしか信じない現実主義者であった。だから今回のような予感のような物は本来信じない類の人間であるはずなのだが、何故かこうした予感などは良く当たる。

「大変です!! なんとしても先に奪取しなくては!!」

マリアは部屋を飛び出し、S Pたちの詰め所へと向かった。

三千院家でそんなことが起きているとは露知らず、勇人たちは画像研究部の地下倉庫の中で、牧村の探し物の手伝いをしていた。

「ねえ牧村さん、その探しものって一体何なんですか？」

ビデオでいっぱいになっている棚を丁寧に探しながら、紫が尋ねた。

「うーん、さつきから必死に思い出そうとしているんだけど、なんか思い出せないんだよね・・・ただ他人に絶対に見つからないように隠したことは思い出せるんだけど。」

牧村は相変わらずの調子で言うが、そもそも探している物の正体もわからず物探しをすることが間違っている。

だが、それから小1時間ほどしたところであつた。

「うん？」

それに気づいたのは勇人だつた。彼はちょうど牧村たちがいたところに購入されたと思われるカメラの操作用の本を見ていたのであるが、その中の1冊の裏表紙に、変にめくれている物があつた。

彼はそのめくれを思い切つてはがしてみた。すると、中から一枚のCD-ROMが出てきた。その表面には、マル秘のマークが入っていた。

「あつた！！牧村さんこれですか？」

「ちよつとまつて・・・そう、これよ！！勇人君ありがとう！！」

喜ぶ牧村。他のメンバーも彼女の周りに集まつてきた。

「それで、これの中身つて結局なんなの？」

由希が指摘した。

「ええと・・・だめ、やっぱり思い出せない。ようし、だったら皆で見よう！！」

マリア危うし！？

面倒なお客さん 中（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

面倒なお客さん 下

先日ようやくカップルになった朴と櫻の2人であったが、学校での関係は特に変わっていないかった。この日もいつも通り時計塔最上階の生徒会室で仕事をしていた。もっとも、学園祭が終わったこの時期は、仕事は特に多くない。だからこの日も早い時間で切り上げる事が出来た。

「さてと、これで終わりだ。」

最後の書類を片付けながら朴が言った。

「ご苦労様でした、副会長。お茶でも飲みます？」

生徒会長席に座っていた櫻が立ち上がり、ポットを持って声を掛ける。

「ああ、頼むよ。」

仕事が少ないこともあり、今この部屋にいるのは2人だけである。

「デイル 大一さんはこの後いつも通りバイトでしたよね？」

櫻がお茶を注ぎながら言った。ちなみに彼女が朴のことをファーストネームで呼ぶということは、仕事モードからカップルモードへと変わったことを意味する。

櫻は朴にお茶の入ったカップを手渡し、彼の隣に座った。

「いや、今日は北斗店長から連絡があって臨時休業らしいから暇だよ。」

この言葉に、櫻が表情を明るくする。

「だったらカラオケでも行きませんか？私がおりますよ。」

2人がデートらしいことを出来る機会は極端に少ない。朴はいつもアルバイトをしていて忙しいからだ。一緒に喫茶どんでアルバイトすることはあるが、それは仕事であったデートとはいえない。

まあ傍から見ればラブラブであるのだが。

それはさておき、今日はまたとないチャンスであった。ちなみに櫻が自分から奢るといったのは、朴を思っていることだ。

「それくらい自分で出すよ。けど、そうだなこんな機会めったにないし、それじゃあ行くか。」

「やったー!!」

2人は青春真っ盛りの会話を楽しんでいたが、そこへ珍客が現れた。

突然エレベーターの扉が開くと、中からメイド服姿の女性が出てきた。

「あれ？」

「マリアさんだ。」

やってきたのはマリアであつた。

「あ、朴君に櫻さんこんにちは。」

彼女は生徒会長室内に2人の姿を見つけると、いつも会うように挨拶した。ちなみに彼女はちゃんと2人のことを知っている。

「こんにちは、どうしたんですか？藪から棒に？いくらOGだからって、そう勝手に生徒会室に入ってきては困るんですけど。」

櫻が嫌そうな顔をして言った。彼女は母親同様真面目な人間である。加えて、彼氏との会話を邪魔されたことに怒つたのだ。そんな彼女を、隣に座る朴がたしなめる。

「まあまあ櫻、そこまで目くじら立てることもないだろう。マリアさんもお茶飲みます？」

朴がマリアにお茶を勧めた。しかし、マリアは急いでいるので断る。

「ありがとう朴君。けど、急いでいるのでお茶はまたの機会にでも・・・ちよつと、聞きたいことがあるんですが。」

「なんですか？」

「今日牧村さんが着ていませんか？」

すると、櫻がその質問に答えた。

「牧村さん、元教師のですか？確か来ていましたよ。」

その言葉を聞いて、マリアはさらに聞いた。

「本当ですか！？今どこにいるか知りませんか。」

その質問には、再び朴が答えた。

「確か画像研究部の部室にいるって聞きましたよ。なんでも昔の忘れ物を取りに来たと聞きましたが。それにしても、なんでマリアさんもここに？」

だがマリアは最後まで聞いていなかった。

「2人とも、ありがとうございます。」

彼女はそう言うと、現れた時と同様いきなりエレベーターに乗りこんで生徒会室から出て行ってしまった。それこそあつという間にある。

「……………」

朴も櫻もしばし黙り込んでしまった。

「……………一体何なんだ？」

「さあ？」

2人はただ首を捻り、マリアが出て行ったエレベーターのほうを呆然と見つめていた。

ちょうどその頃、画像研究部の部室では、見つけ出したDVDを一番大きなサイズのテレビで再生しようとしていた。

「一体どんな内容なんだろうね、勇人君？」

美沙が隣に座った勇人に尋ねる。

「さあね、けど見ればわかることだよ。」

勇人はそう言うと、テーブルの上に置かれたクッキーを1つ口にした。いつものようにテーブルの上にはお菓子や飲み物が並べられていた。画像研究部ではこうしてお菓子を食べてジュースなどを飲みながら、昔撮られた映像を見るのが主な活動となっていた。

「けど牧村さん、本当に何が入っているのか全然思い出せないんですか？」

勇人がDVDをデッキにセットしている牧村に尋ねた。

「うん、なんかあと少しで思い出せそうんだけど、思い出せないんだよね。とにかく、すごく大事にしたい映像を残したのは記憶しているんだけどね。まあ、とにかく見てみよう。」

彼女はそう言うと、デッキにDVDをセットし終えて、リモコンを持って皆と同じように座った。

「それじゃあ行くね。」

彼女がリモコンの再生ボタンを押した。全員がテレビの画面を見つめた。

画面は最初真っ暗であったが、数秒して5、4とカウントの数字が出た。そして最後の1が画面上に映った時、全員何が映るかと期待したのであるが、その時起きたのは予想外の出来ことであった。

突然、バリーン！！というガラスの割れる音がしたかと思うと、何かが部屋の中に飛び込み、そして次の瞬間にはテレビの画面に命中した。

ガシャーン！！画面が粉々に砕け、テレビから白煙が吹き上がった。次の瞬間には勇人と紫を除く全員がパニックに陥っていた。

「うわああ！！」

「なんだ！！」

「テロリストの攻撃か！？」

誰かが叫んだその言葉に、慌てて勇人と紫が臨戦態勢を取る。子供の頃から殺し屋に狙われている経験のある2人は、反射的に防衛行動を執った。

しかしながら、事態はそういうことではなかった。間もなく割れたガラスの向こうから、2人の聞き覚えのある女性の声がしてきた。

「あらごめんなさい皆さん、大丈夫ですか？」

そう言っ て窓から入っ てきたのは、メイド姿の女性だった。

「「「マ、マリアさん!？」」」

勇人と紫を含む、彼女を知る人間全員が声を上げた。なにせテロかと身構えたのに、やってきたのがメイド服姿の、しかも顔見知りの女性では拍子抜けして当然だった。

「ごめんなさい、偶然石を拾い上げた手が滑ってしまいました。」

そう笑顔で言っ た彼女に、その場にいた全員が思った。

「「「「「怖い!」」」」」

と。

面倒なお客さん 下（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

黒メイド！？

その場にいた全員の表情が恐怖の物となるなか、マリアはそんなことにせず破壊された（破壊したというほうが妥当か？）窓から研究室の中に入り、スタスタとDVDデッキの傍にまで行き、今まさに再生されんとしていたDVDをデッキから取り出した。

「ふう、こんな所にあつたんですね。」

DVDをそばにあつたケースに戻しながら、マリアは安堵の息をつく。

その様子をただじつと周りの人間たちは見ていたが、少しばかりマリアの行動に慣れている勇人と紫が恐る恐るではあるが、マリアに尋ねる。

「あの、マリアさん？」

「何ですか勇人君、紫さん？」

いつも通り笑顔で答えてくるが、その中に明らかに恐怖の2文字が含まれているのに、全員が直感的にわかった。

（怖い！勇人君あのメイドさんと16年も付き合ってきたの！？すごいな・・・）

（あれは本当に腹黒メイドさんだね。冗談抜きにして。）

（母さんからあの人の話も聞いていたけど、そのままだな。という

か予想以上かな？)

上から美沙、由希、サエキの感想である。もちろん口に出して言ったらどんな報復を受けるかわかったものではないので、全員心の中で呟いている。しかし、マリアの実力はすごい。

「そちらの皆さん。言いたいことがあるならばつきり言ってください？」

恐怖の笑顔を浮かべて3人の方を見るマリア。

()(聞かれてた！？いや！心を読まれた！？)()

恐れおののく3人。

「いいえ、何にも思っていないせん！！」

「由希ちゃんの言うとおり！！変なことなんか考えていませんね。！」

「2人の言うとおりです。僕たち別にやましいことなんか考えていません！！いや、マジで！！神に誓って！！」

3人が慌てて否定すると、マリアは恐怖の笑顔のまま返答する。

「そうですか。なら良いです。」

()(怖い！！！)()

3人が生きた心地のしないやり取りを終えたのを確認して、勇人

はマリアとの話の続きを始める。

「それで、マリアさん。一体どうしたんですか？いきなり学校なんか来て？今日は母さんから休むように言われていた日でしょ？」

「そうですよ。いきなり現れたからビックリしちゃったじゃないですか。」

紫もハヤテとナギの娘。色々なことを体験してきたが、さすがにいきなりマリアが現れて、石を投げつけてテレビを破壊するとは思ってもいなかった。

「ごめんなさい2人とも。まあ休まなかったのは多めに見てください。私は動いていないと落ち着かないタイプなんで。」

「まあ、マリアさんが真理奈を産む前日まで働いていたとは聞いていましたけど、無理しないでくださいよ。」

「そうよ。お母さんが良く言ってたわ。お腹がこんなに大きくなつたのに、朝5時から仕事なんかするから、本当に気が気じゃなかったって。」

（人じゃない！？この人絶対に人の皮被った何かだ！！）

（噂にたがわず、すごい人ね。）

（家の母さんや父さん以上に常識から外れているんじゃないか？この人。）

またしても心の中でマリアについての評価をする3人。もちろん、

またしても、マリアはその心の声に気づいた。

「その皆さん。何か言いたいことがあるなら、はっきり口にしてください。別に怒りませんから。」

「「「何でもありません！！本当に！！！！」」」

勇人と紫はその光景を見ながらこう思った。

（マリアさん、その恐怖の笑顔を続けると間違ったイメージを持たれちゃいますよ。）

（3人とも可愛そうに。）

ちなみに、2人の心の声が読まれることはない。伊達にマリアと16年以上も付き合っていない。もはやこのエスパーですか？レベルの話だが、そんなこと気にしてはいけない。そういうキャラクターなのだ。

「あのマリアさん、話の続きをして下さい。」

「あ、ごめんなさい勇人君。ええと、どうして私がここにいるかです。それはずばり、このDVDを回収するためです。」

「へえ、それじゃあそれマリアさんに関係するDVDなんだ。」

「まあ一応そういうことになりますかね、紫さん。」

この時点において、既に勇人と紫はそれ以上の追及をしてはいけないということを得ていた。だから、後は窓ガラスとテレビの修

理費について頼むつもりだったが、事情を知らない人間が地雷を踏んでしまった。

「それ一体どういう内容なんですか？」

「うんうん、気になる。」

そんな質問をしたのはサエキと由希だ。

（あ、バカ！！）

（知らない。）

勇人と紫が2人にご愁傷様とでも言いたげな表情をした。そして、案の定2人は先ほどの言葉を後悔することとなる。

まずマリアはニコツと極上の笑顔を浮かべるが、明らかにそれには優しさとか温かさが無い。逆に怒りと恐怖、冷たさが入り混じっていた。

「「ひいいい！！」」

お互いの体をつかんで一歩引く2人。

そんな2人に、極上の恐怖の笑顔を浮かべたマリアは、これまた極上の恐怖の声で言った。

「教えても良いですけど、また手が滑りますよ。」

その目と声は、これ以上踏み込んだらこの上ない恐ろしいことが

2人に起きると教えていた。

「「あ……」」

バタ！！

2人は恐怖のあまり、ついに気絶してしまった。

（あーあ……）

（マリアさんの逆鱗に触れるなんて……かわいそうに。）

勇人と紫はマリアに見えないように手を合わせた。（ちなみに死んではいませんからご安心を。）

しかしすぐにそれを終わると、マリアに向かって言った。

「ところでマリアさん。壊した窓ガラスとテレビですけど。」

「ああ、そうでしたね。それじゃあ、これ。」

そう言っただけで彼女はゴールドカードを勇人の手に渡した。

「それで弁償しておいて下さい。終わったら返して下さいね。」

「わかっていますよ。」

「それじゃあ、まだ掃除の続きがあるので。それと、今日はちょっと寒いので、鍋にでもしようと思いますので、2人とも早めに帰ってきてくださいね。では。」

マリアは現れたときと同様、唐突に消えた。

「ふう。しかし、久しぶりに恐怖のマリアさんを見たよ。」

とりあえず安堵の息をつく勇人。その言葉に、紫も頷く。

「本当。よっぽど見られたくないDVDだったんだね。あれ？そういえばその元凶の牧村さんは？」

と、紫は机の上に置かれた置手紙を見つけた。その内容はこうだった。

「ごめんね。マリアちゃんの相手を頼むね。牧村」

一足先に逃げたらしい。

「全く。あの人にも困ったもんだね。さ、紫。とりあえず気絶したあの2人を助けなきゃね。」

「了解。」

2人はこの後、美沙とともに気絶した2人を保健室まで連れて行くことになる。

「ちょ、ちよつと着替え中にカメラ回さないでくださいよ!」

「いいじゃない、マリアちゃんの成長を記録する大事なビデオなんだから。」

「もう!」

ピ!!

マリアは映像を一通り見ると、テレビを消した。そして、一言呟いた。

「危ないところでしたわ。」

こうして彼女の長い日は終わった。そして、牧村の願い（野望？）も崩れ去った。

そしてこの一件により、マリアは名実ともに『黒いメイド』の称号を手に入れたとか入れなかったとか。

黒メイド！？（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

それからマリアさんをこんな風にしてすみません。

悪夢のクリスマス 1 (前書き)

超久しぶりの更新です。

悪夢のクリスマス 1

時の流れは速く、11月はあっという間に過ぎ去り、月日は12月となった。ハヤテたちの学生時代から20年近い年月が流れた今も、一般的に22日には学校は冬休みとなるのが通例であり、勇人や紫の通う白皇学院もその例外ではない。

そう言う訳で、翌日の23日の平成の日（この世界では平成は終わっているので天皇誕生日ではない。）からは勇人たちも冬休みに入り、そして子供たちにとって待ちに待ったクリスマスやお正月というイベントがやってくるわけである。

しかしながら、やって来るのが楽しいことばかりとは限らないというのが世の常だ。災いは忘れたところにやってくるとは良く言ったもので、勇人たちは先月の「黒メイド事件」に続いて、またも厄介ごとに巻き込まれることとなる。

本人たちがそのことを予期できたなら、「どうして僕たちばかり!?」と文句言うこと間違いなしだが、咲夜いわく「あいつの人生はお笑いそのもの」とした綾崎ハヤテの子供とその友人たちに何かが起きるのはもはやお約束、運命、英語で言うところのデイスティニーである。

とにかく、12月23日に事件が起きたわけである。しかも、今回災難に遭ったのはこのシリーズの主人公である勇人であった。

事件は彼が、朝起きた瞬間に起きた。前日の夜、楽しい楽しい冬休みのことや彼女となった美沙とのことを頭に描きながら眠りについた彼であったが、その翌朝に悪夢に見舞われることとなった。

冬休みに入ったということもあり、勇人はいつもより少しばかり遅い時間に目を覚ました。起きたばかりの時は彼も人の子であるから、眠気眼で意識もはっきりしていなかった。

そして少しずつ、意識が鮮明となり、頭が働き始める。起き上がってから10秒ほどして、彼はベッドの側に置かれていた時計をちらりと見た。

時計は朝の7時半を指していた。いつも学校へ行くときよりも30分ほど遅い時間である。

そして彼はそのままベッドから起き上がろうとした。ところが、ようやく体を動かしたことで彼はあることに気づいた。

「あら？」

着ている服の感触がどう考えても、昨日着替えたパジャマとは違うのだ。まだ頭が本調子ではなかったため気づかなかったが、とくに足回りの感じが違っていた。

この瞬間、勇人の頭は一気に眠気から醒めた。そして彼は自分の腕を顔の前に上げた。そして勇人は仰天してしまった。腕に纏われているのは、どこかで見覚えのある少しばかり暗い感じの青い生地だった。

勇人は恐る恐る、手近な場所にある鏡を見た。普段は学校に行くときに身だしなみを整えるのに使うそれは、ベッドから見える範囲にあった。

（ま、まさか！！！？）

勇人は自分の考えが間違っであって欲しいと強く願いながら鏡を見た。そして、その希望は一瞬にして打ち砕かれ、次の瞬間には屋敷中に聞こえんばかりの悲鳴を上げた。

「キヤアアアアア！！！！」

世界でも有数の企業体である三千院グループ。そのトップに立つて辣腕を振るっているハヤテ・ナギ夫妻は、その立場にある分何かと忙しい身である。しかしながら、子供たちが生まれた時の約束どおり、家族を非常に大切にしている。だから、なるべく子供たちと過ごせる時間を作っている。夏休みも1週間はまとまった休みを作るが、冬休みもクリスマス前後の2～3日、正月前後の2～3日は屋敷にいる。

だからこの日もナギとハヤテは屋敷にいた。そしてついでに言うなら2人とも起きていた。これはハヤテが元々早起きであり、ナギも結婚してからはそのハヤテに影響される形で早起きのリズムに慣れたことに起因する。

その時、2人は家族（含む姫神家）揃っての朝食前に、庭での散歩を楽しんでいた。

「明日はいよいよクリスマス・イブだなハヤテ。」

ハヤテと腕を組んで歩いていたナギが言った。クリスマス・イブは2人にとってまさに運命の日と言える。だからそれを言ったナギ、

そして答えたハヤテの声も感慨を含んだものになった。

「そうですね。早いものですね、あなたと出会ってからもう20年にもなるんですね。時が流れるのは早いな。あれから色々あったし、子供たちも大きくなっただし。」

ハヤテはナギとともに過ごした20年間を思い返した。

「本当に時が経つのは速いな。勇人も紫も16歳・・・この子も後半年で生まれるからな。」

ナギは愛おしそうに、新たな命が宿った自分のお腹をさする。既に妊娠4ヶ月、そろそろお腹も大きくなってきている。

そんなナギの行動を、ハヤテは優しく見つめる。

「僕は本当に幸せ者です。こんな素晴らしい人と家族になれたんですから。ナギさん、あなたと一緒にいながら本当に良かったです。」

「は、ハヤテ・・・ありがとう。私もお前の妻になれて、本当に嬉しく思う。」

ナギが顔を赤らめる。そして自然とお互いに、2人は見詰め合う。そのまま顔が近づき、2人は熱いキスを・・・出来なかった。なぜなら、そんな幸せ一杯の雰囲気をつぶ壊す、というか吹き飛ばす絶叫が庭にまで聞こえてきたからだ。

「キヤアアアアア!!!」

「!!!」

キスまで後少しというところで、2人は現実世界に引き戻された。

「な、何だ!？」

「さあ?ただ、声からして今の悲鳴は勇人みたいですね。何があったんだろう?」

ハヤテが首を捻る。記憶を探る限り、勇人の悲鳴など聞いたこともない。

「と、とにかく一端屋敷に戻ってみよう。」

「そうですね。それじゃあ、失礼。」

言うのと同時に、ハヤテはナギをお姫様抱っこし、屋敷へと向かって走り始めた。

不死身の執事、未だ健在であった。

それから数分後、勇人の部屋の前にはハヤテ、ナギの両親。紫と優の姉妹。そしてマリア、健二の使用人たちが集まっていた。

「勇人、さっきの悲鳴はなんだ!?!返事しろ、それから鍵を開ける!!!」

ハヤテが勇人の部屋をノックしながら言った。しかし返事はない。

「一体どうしたんでしょうね、勇人君!？」

マリアが首を傾げる。

「勇人が悲鳴を上げたんだから、きっとよっぽどのが起きたに
違いないわ!!」

そう断言するのは紫だ。

「けど、なんで返事をしないのだ? 鍵まで掛けて?」

「わかりません。けど、何かが起きているのは間違いありません。
こうなったら、力づくでこの扉を突破します。健二君!!」

「了解!!」

そして2人は気合を入れた。

「ウオリヤアアア!!」

息を合わせて、そのまま扉を蹴破った。さすがに似たもの同士だ
けはある。

扉が破られたので、一行はそのまま部屋の中へと入った。その瞬
間。

「イヤ! 来ないで!!」

甲高い声が部屋の中に響き渡った。

「「「「「へ！？」「」「」「」

今の声は明らかに勇人の物だった。しかしながら、妙に高く、しかも言葉も変だった。全員が違和感を持ちつつ、声のした方へと視線を向けた。

彼らの視線の中に入ってきたのは、部屋の隅でうずくまっている勇人の姿だった。ただし、彼の格好はどうみてもマリアの物と同じメイド服だった。

悪夢のクリスマス 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢のクリスマス 2

メイド服姿の勇人を見て、部屋に入った全員絶句してしまった。ただし、その表情は2つにわかれていた。具体的に言えば、ハヤテとナギとマリアは納得、とまでは行かないまでも一体何が起きたのか察したような表情をした。一方、紫、優、健二の3人はただ呆然とするだけだった。

「い、いや！！見ないで！！」

部屋の隅で座り込んだ勇人が叫ぶが、その口調は完全に女の子のものだ。加えて仕草も。

そんな彼を見て、優が恐る恐る言った。

「えっと、紫姉さん、これは一体どういうことでしょうか？」

「よくわからないけど、状況から見て勇人が変な道に目覚めたとは思えない。」

グサ！

この会話は勇人の心に深々と矢を刺したこと間違い無しかった。そのため彼は慌てて反論した。このまま変態扱いされては堪らないと思っていた。

しかし。

「そんなわけないでしょ！私だって着たくてこんな格好しているわ

けじゃないの!!」

またも女言葉になっていた。そこへ、健二が鋭い突込みをする。

「あの勇人君、悪いですけどその口調とその格好とその仕草でそんなこと言われても、全く説得力ないと思います。というか逆効果です。」

グサ!!!

勇人の心に二本目の矢が刺さる。そして彼の表情は虚ろな物になる。

このままだと彼の人格に与える影響が大きいと判断し、父親であり経験者であるハヤテが場の收拾をするべく彼に近寄った。

「勇人、取り合えず落ち着け。安心しろ、僕もナギさんもお前に女装癖がついたなんて思わないから。皆も説明すればわかってくれるから。だから、とにかく今は冷静になるんだ。」

勇人の肩に手を置いて、ハヤテは優しく言った。そのお陰で、勇人は少しばかり落ち着きを取り戻し、頷いた。

「うん。」

「それじゃあ、どうしてこんなことになったのか教えてくれ。」

ところが、勇人は俯いて答えようとしない。どうやら再び女言葉で喋ってしまうのを恐れているらしい。

それを察して、ハヤテは別の提案をする。

「なら、今から僕のする質問にYes、Noで答えてくれ。まず、そのメイド服はお前の知らない間に着せられていたんだな？」

すると、勇人は頷いた。

「わかった。次、その服は脱ごうとするけど、脱げないんだな？」

またも勇人は頷いた。さらに、ハヤテは続けた。

「その口調と仕草は、自分の意志でしているんじゃないんだな？」

勇人はさらに頷いた。そして、その表情が怪訝な物になっていた。どうしてハヤテがここまで知っているか、気になったのだ。

もっとも、ハヤテはそんなこと気にせず、後ろにいたナギと話始めた。

「これはやっぱり、20年前のあの呪いですね。」

「そうみたいだな。けど、あの時は確か口調や仕草までは変わってなかったぞ。」

ナギが首を傾げながら言った。

「ええ、だから直ぐにワタル君に電話してみようと思います。」

そう言うと、ハヤテはポケットから携帯電話を取り出し、ワタルの携帯にかけた。早朝だから出ないかもしれないとハヤテは思った

が、ワタルは直ぐに出た。

「よう、ハヤテ。おはよう。そろそろ掛かってくるんじゃないかと思っただぜ。」

「おはようございますワタル君。そんなこと言っつてことは、やっぱり何か起きたんですね？」

「ああ、実はさ、光の奴が夜の仕事（妖怪退治）からさつき帰って来たんだけど、その時道具を蔵の中に置こうとした時、雛人形の壇に足引つ掛けちゃったらしくてさ。」

「その雛人形って言うのは例の奴ですよね？」

「そうだよ。ということはハヤテ、またメイド服でも着せられたか？」

どこかからかうようにも聞こえたが、当事者からしてみればとても笑い事ではない。

「僕はなんともありません。今回は勇人が犠牲者です。しかも服だけじゃなくて、口調や仕草にまで影響が出ています。」

「ああ、そうか。実はさ、倒れた拍子で今回檀に並べてあつた雛人形が全部バラバラになっちゃってさ、多分それが原因で呪いが強くなったと思う。」

ハヤテは溜息をつきなくなった。そんな単純なことで前回の数倍も強い呪いになるとは、いくらなんでも予想できなかった。しかも当時の自分とほぼ同じ歳の息子に降りかかるなんて。

しかしながら、今は早いところ呪いを解く方が先決だった。

「それで、伊澄さんは？」

「伊澄は今光に説教してる。多分後30分くらいは掛かると思う。伊澄は説教始めるとクドクド長くてさ。まあ、光もちょっと天狗になつてたから良い機会とも言えるけどな。まあ、そういうわけで、伊澄が説教終わらせたならまた連絡させるよ。」

伊澄の説教は彼の言うとおりクドクド長い。しかも、そこへ横槍入れると機嫌を悪くする。そのため、ハヤテも無理に今電話に出させるのはやめた。とりあえず、原因が分かったのだから。

「わかりました。よろしくお願いしますね。失礼します。」

ハヤテは電話を切った。すかさず、ナギが尋ねる。

「やっぱり雛人形の呪いだっただか？」

「ええ、しかも今回は20年前の数倍は強力ですね。全部の人形の首もげちゃったらしいですから。」

「最悪だな。」

「しかも、伊澄さんはあと30分は無理そうです。」

「そうか。」

2人は溜息を吐いた。

一方、そんな2人の会話を全く理解できない紫と優がナギに尋ねた。

「お母さん、一体20年前に何があったの？」

「教えて下さい？」

すると、ナギは困ったような顔をした。

「あ、それはだな・・・」

彼女はチラッとハヤテを見た。なにせ、彼が人生の汚点としている出来事なのである。いくら子供たちと言えど、話してよいものか迷う。

「教えましょう。息子が同じ目にあっているのに、自分だけ言わないなんて卑怯ですから。実はだね・・・」

20年前のことを知らない紫、優、健二の3人は、ハヤテが説明し始めた20年前のひな祭りに起きた、ハヤテの呪いの女装騒動（原作9巻）の話に耳を傾けた。

「そ、そんなことがあったんですか、ハヤテさんも大変でしたね。」

同じ男として、健二は同情の言葉を掛ける。一方、対照的に2人の娘の言葉はハヤテと勇人に打撃を与えるものだった。

「けど、お父さんが女装か・・・意外と似合っていそうだな。勇人もよく見たら似合っているし。」

「確かに、言われて見ればそうですね。お父さんもお兄さんも女顔で線が細いし、声も高いから、一見すれば女の子ですね。」

グサ！グサ！

ハヤテと勇人の心に2本の矢が刺さった。

さらに、留めの一撃を与えたのはマリアだった。

「そうですね。ハヤテ君はミニスカートを履いても違和感ありませんでしたから。勇人君の場合も髪の色以外はハヤテ君と同じですから、確かに似合っていると言えば似合っていますね。」

そんな言葉を笑顔でマリアは言った。

結果。

グサ！！！！！！

2人は完膚なきまでに叩きのめされて、床に手をつけた。

「お前たち、ハヤテと勇人に精神的に取り返しのつかないダメージを与えているぞ。」

ナギが呆れ返りながら言った。

結局、2人が再起動するまでに10分掛かった。

悪夢のクリスマス 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢のクリスマス 3

娘（妹たち）とハウスメイドから言われた言葉で完膚なきまでに叩きのめされたハヤテと勇人親子は、10分後ようやく再起動した。そしてどこか暗い雰囲気のまま、朝食を摂るために食堂へと移動した。

ただし、この移動は勇人にとって良いものとはならなかった。現在三千院家では基本的に同じ敷地内に住んでいる姫神家と一緒に食事を取る。夕食の場合は仕事や部活等でバラバラになることが多くなったが、朝食は今でも皆一緒である。

だから、必然的に勇人は自分のメイド姿を他の人間にも見せることと成った。そして、母親の血をかなり濃く引いている真理奈が彼を見て何も言わない（さらにしない）わけがなく、勇人は再び精神的なダメージを負うこととなる。具体的にはほんの少し前、自分の部屋で妹やマリアにされたのと同じ光景が広がることとなった。

しかも、真理奈の場合はさらに性質が悪かった。彼女は朝食が終わると、勇人に向かって言った。

「ねえ、勇人君。ちょっとお化粧してみませんか？」

「え、ええ！？なんでそんなことしなきゃいけないんですか!？」

「いや、話の流れ的になんとなく。それに、今の勇人君の場合、お化粧でもしてさらに可愛くしないと犯罪ですよ。きつと。」

そう笑いながら言った彼女であったが、その目は不気味に光って

いた。それを見たハヤテはしみじみと思った。

（やっぱ真理奈ちゃんってマリアさんの娘だね。僕に女装させて楽しんでいた目と同じだよ、あれは・・・ガンバレ勇人！！）

そう応援しつつも、もはや止められないと分かっているだけに、息子を助けようとは一切しないハヤテであった。

「まあ、とにかく折角メイド服着ているんですから。ね（ハートマーク）」

「全然説得力ないわよ。とにかく、私はこれ以上女の子のようにはなりたくないから。」

そう言つて、真理奈の魔の手から逃れようとした勇人であったが、父親であるハヤテの時と同じく、敵は１人だけではなかった。次の瞬間、彼の腕は紫と優によってガシツと掴まれていた。

「え！？ちよつと何するのよ２人とも！！」

「いや、私たちも勇人が可愛くなるところ見たいなあとと思って。」

「な！？」

突然言われた妹の言葉に、勇人は困惑した。さらに、優も言う。

「そうですよ、折角こんなに可愛くなっちゃったんですから、こうなったらとことんやるのがお約束ですよ。」

「何それ！？そんな約束いつからあるのよ！？」

もちろん、そんなお約束はありません。しかしながら、そんなお約束があるうとなかろうともはや勇人の運命は決まっていた。

「さ、何はともあれお2人も賛成していることですし。さっそく行きましょう。」

「だったら、私の部屋を使うと良いよ。口紅とかの化粧品はちゃんと揃っているから。フッフ・・・どんな風になるのか楽しみね。」

「紫姉さん、マニキュアをつけるのも良いかもしれませんよ。あ、あと髪型も少し変えてみるとか。」

「あら、優さん。確かにその通りですね。より可愛くなると思いますわ。」

ノリノリで勇人にさせる化粧を決めていく3人を見て、勇人の顔はそりやもう可愛そうなくらいに蒼くなっていた。

「いや！・・・お父さん、助けて！！」

と勇人の方へ顔を向けて懇願するが、共闘した乙女のパワーが恐ろしいことを知っているだけに、もはやハヤテには彼を助ける手段などなく、最終的に視線を逸らしてしまった。つまりは見捨てたわけだ。

「裏切り者！！！」

自分を見捨てた父親に吐き捨てるように言うが、そんなことをした所で状況が変わるわけがなかった。

「さ、それじゃあ行きましようね。」

「やめて!!!」

3人にズルズル引きずられながら、勇人が発した叫びは空しく扉の向こうへと消えていった。父親同様、彼も女難の相を多少なりとも持っているのは間違いないようだった。

4人が食堂から出て行くのを見送ると、ハヤテは溜息をつくように言った。

「ごめん勇人。助けられない不甲斐ない父親で。」

そんな風に落胆する父親に対して、母親であるナギと、母親同然のマリアは平然としていた。むしろ楽しそうだった。

「けどまあ良いじゃないですか、勇人君もハヤテ君みたいに女装して似合っているんですから。あそこまで似合っていると、もう芸術の領域ですわ。」

「確かに、勇人の女装は初めて見たがマリアの言うとおりだ。勇人はハヤテにそっくりなんだな。」

マリアとナギが言うが、ハヤテとしては嬉しいはずがなかった。

「そんなこと言われても全然嬉しくないですよ!!お2人は人におもちゃにされたことがないからそんなこと言えるんですよ!!」

ハヤテが怒ったので、さすがにマリアもナギも大人しくなる。

「ええと、まあそれもそうですね。」

「勇人には悪いが、これも伊澄たちが来るまでの我慢と思ってもらうしかないな。」

ナギはそう言つと、出されていた食後のコーヒーを口に含んだ。

「そう言えば、伊澄さんたち遅いですね。もうあれから1時間近く経っているのに。」

「大方、伊澄がまた1人でどこか行っちゃったんじゃないか？あいつの方向音痴は死んでも直らんからな。最近はワタルが付いているから良いが、ちょっと目を離すとどこか行ってしまうそうだから伊澄の場合。」

ナギのセリフを聞いたら、伊澄は「私は犬じゃありません！」と反論するであろうが、現実はその通りになっていた。

「あれ？光、伊澄はどうした。」

「え！？ついさっきまで一緒にいたのに。」

三千院家へ向かう途上で、いつの間にか伊澄の姿が見えなくなっていた。

「おいおい、またどこか1人で行っちゃったのかよ。」

「こないだは電話したらサンディエゴだったよね？」

「ああ。いくら鷺ノ宮家最強の女だからって、迷子になるたびにどこでもドア使ったみたいに瞬間移動するか普通？」

「まあ、俺たちの周りの人間普通じゃないから、今さらそんなだね。」

ワタルの愚痴に、光が冷静に突っ込んだ。

「だよな。まあ良いや、伊澄に電話してみるか。」

夫の教育の成果もあり、機械音痴だった伊澄も携帯電話くらいは使えるようになっていた。ワタルが伊澄の番号をプッシュすると、直ぐに彼女が出た。

「おお伊澄か？どこにいたんだ？アフリカか？それとも南極か？」

これが彼女の場合冗談にならないから恐ろしい。そして今回の場合は、それ以上を行っていた。

「あ、ワタルさん。今ワシントンにいたんですが、何故かオバマ大統領の就任演説式が行われていて。」

「「ついに時空を超えたか！！」」

もはや呆れて叫ぶしかない、ワタルと光の親子だった。ちなみに、伊澄が時空を超えて戻ってきたのはそれから2時間後のことであった。つまり、その間勇人はおもちゃにされ続けること確定となったのであった。

悪夢のクリスマス 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢のクリスマス 4

お昼過ぎになって、ようやく伊澄が息子の光と旦那のワタルを伴ってやって来た。ちなみに、どうやって再び時空を越えて来たかと疑問を呈するのは愚かな行為である。そんなこと聞いたところで、絶対に常人には理解し難いか、理解したくない非科学的な理屈の内容を言われるだけだからだ。

そんなわけで、三千院家や姫神家の人間は伊澄が迷子になったかどうかは聞いても、どうして迷子になり、どのようにして戻ってきたか等聞かない。特に今回は目先の問題の方が大きいから尚更である。

「それじゃ早速、勇人君に会ってみましょうか。」

と伊澄はハヤテやナギたちに言ったのだが、どうも彼らの顔は浮かないものだった。だからワタルが彼らに訊ねた。

「ええと、何かあの後あったのか？」

「そうだな・・・何かあったと言えば何かあっただし・・・」

「関係ないと言っちゃえばそれまでですけど、とりあえずこれから何を見ても驚いたりしないでください。それから勇人の前で喋る時は言動に注意して下さい。これ以上精神的に追い詰めたくないの

」

「「「??」」」

ナギとハヤテの言葉の意味を、橘家の3人は全くその時は理解できなかった。そして彼らは驚愕の光景を目の当たりにすることとなった。

「あ！伊澄さんに光、良かった来てくれたんですね！早く私を助けて！！お願い！！」

そう言っただけで伊澄と光に駆け寄ってきたのは、どうみてもメイド服姿の美少女だった。当然橘家一行は、まさか！？と思いつつも確認を取る。

「ええと、本当に勇人か？」

恐る恐る聞いたのは光だった。そしてその途端その美少女は凄まじい衝撃を受けて地面に膝をつき、しくしくと泣き始めた。

「ひどい！！光まで！！」

その姿は可哀想だけど、どこか可愛かった。

一方既に前回の経験がある伊澄とワタルの2人は光のようにその人物を見間違えるようなへまはしなかった。ただし、それでもそれなりに驚いた。

「本当にまたメイド服とは・・・けど、勇人の顔に化粧がされていたよな？」

「ええ、ついでにとても可愛くて似合っていました。」

この伊澄の一言に、さらに勇人が衝撃を受けたことは言うまでも

ない。本当に衝撃を受けすぎて人格形成に影響を与えてしまつかもしれない。

「伊澄、ハヤテに言われた通りもう少し言葉考えると良いよ。それからハヤテ、勇人の化粧はどういうことだ？まさか勇人自身がしたとか？」

ワタルとしては気をつけていたのだが、最後の言葉はまたも勇人に衝撃を与えるに足る内容だった。ついに勇人は地面に手をつく力さえ失い、ガクンと横になった。

「お2人とも、ちょっとこちらへ。」

見かねたハヤテが2人を自分の方に来るよう言った。そして小声で2人に言う。

「気をつけて話しても無理がありますから。小声でお願いします。」

「了解。で、結局勇人の化粧はどういうことだよ？」

ワタルの言葉に、伊澄がコクコクと頷いた。

「あの娘^こたちが原因です。」

「「え!?!」」

ハヤテが目で指示した方向を見て、2人とも納得した。そこには紫、優、真理奈の3人娘がいたわけであるが、その目はまるで新しい玩具を手にいれた（事実その通り）子供そのもので、しかも手には何やら化粧道具らしきものを全員が持っていた。

「ああ、納得。」

「よく、わかりました。」

強制的に女装された少年を弄ぶことに簡単に納得出来るのも如何な物かと思えなくもないが、そんなことに一々構っていたら前に進まないで、ハヤテはスルーした。

「そういうわけでして。このままだと勇人が女性恐怖症になってしまいそうなので、ちゃっちゃと呪いを解いてあげてください。」

とハヤテは小声で言ったわけであるが、どういう地獄耳を持っているのか3人娘からブーイングが挙がる。

「ええ、もうちょっとだけ良いじゃないですか。」

「あと1時間、いや30分だけ。」

「まだ写真を撮っていませんから、もうちょっとだけ待ってもらえませんか。」

上から真理奈、紫、優のセリフであるが、これが引き金となつてついに勇人が切れた。彼は瞬間的に立ち上がると、恐ろしい目つきで3人に向けて言った。

「お黙り!!」

口調は女性のものであったが、その声にはハッキリと怒の意思が、それもかなり強く感じられた。言われた3人どころか近くにいたハ

ヤテたちまで目を仰天させた。

「人が黙っていれば調子に乗って・・・あなたたちには思いやりというものがないんですか！？私は友人として姉として恥ずかしいわ！！本当に情けない！！」

大声で怒りながら言うものだから全員驚いたが、それ以上にハヤテは彼が言った言葉の内容に驚いた。

「おい勇人、今なんて言った？」

「え！？思いやりが3人にはないのかって。」

「いや、その後。自分のことを姉って言わなかったか？」

ハヤテの指摘に勇人の顔がサーと青ざめた。

「え！？え！？」

自分の言った言葉を思い出した勇人の顔は、それこそ病人かくやという位青くなった。

「勇人、紫と優はお前からみてどういう間柄だ？」

ハヤテが念のために聞いたのだした。

「え？そんなの姉妹に決まっているじゃない・・・えええ！！
？？なんで！？なんで兄妹^{きょうだい}って言葉が出てこずに自然に・・・一体どうなっているのよ！？」

勇人はパニックに陥ってしまった。先ほどまで口調は女の子でも、自分のことを姉だの、姉妹だの言わなかった。少なくとも注意すれば言わなくて済んだはずだ。

口調に続いて内面にまで女性化が進んでいる。以前はこんなことなかったはずだ。幾ら呪いが強くなったからと言って、さすがにこれは行き過ぎである。

混乱する勇人を横目に、ハヤテが伊澄に問いかける。

「これはどういうことでしょうか？」

「とりあえず、この呪いは前回の時の物に比べてかなり性質が悪くなっていますね。」

「一体どうすれば直りますかね？まさか前回みたいに3月3日まで解かないと一生女装趣味が身につくとか、一番高いところの人間を倒さないと解けないみたいなの、たわけた内容じゃないでしょうね？」

ハヤテはそう言うが、その可能性のほうが高い。そういう小説だから。加えてワタルが言った。

「そもそも男に女装させるなんて呪い自体、たわけていると思うけどな。」

その言葉に、その場の全員が頷いた。ただし、ナギだけはそれに続いて小さな声で呟いた。

「まあこういうのもアニメとかネット小説じゃありだけだな。TS

って分野もあるし。もしかして今回はそういう展開かな？男から女になって、新たな自分を受け入れハッピーエンド・・・それなりに捨てがたい展開ではあるな。」

それを目ざとく聞いたのは勇人だった。

「それだけは絶対にダメえええ！！！」

彼の悲鳴が再び三千院家内に木霊した。果たして無敵の借金執事の息子の明日はどっちだ！？

悪夢のクリスマス 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢のクリスマス 5

このまま行くと勇人が本当に心をどこかにやってしまいかねないので、ハヤテは勇人を自室に隔離し（本人もそれを望んだ）、後は伊澄と光に全部任せることにした。

残った全員はリビングでお茶を飲みながら、結果を待っていたのであるが、その途中で勇人の部屋のほうからすさまじい破碎音と破壊音が聞こえてきた。

「何でしょうか？」

マリアが首を傾げる。

「勇人が暴れているのかな？」

紫が答える。2人ともこんな状況下にあつて至つて冷静、いや平靜なのがある意味恐ろしい。

「何で悪魔被いでもないのに勇人が暴れるんだよ？」

光が怪訝な表情で聞く。

「ほら、呪いが解けなくて腹いせに物に当たっているとか。」

「ああ、確かにありそうだね。僕もあの時（雛人形の呪いでハーマイオニーにされた時）は・・・本当に物に当たりたいぐらい、心にとす黒い物が浮かんだから。」

自身も経験者であるハヤテが紫の言葉に同調した。ただし、最後の方には何やら怨念が籠っているのを、その場にいる全員が感じ取った。だからそれについては全員聞かなかったことにした。

「まあ、とにかく何か大変なことが起きたかもしれないから、誰かが見てきたほうが良いのではないか？」

ナギがそんな提案をした直後、伊澄が光を伴って皆が待っているリビングへと戻ってきた。

「あれ、勇人は？」

勇人がいないことを指摘する紫。それに対して光が返答する。

「今は取り込み中。それからこのまま外にいと誰かと会話することになるから、しばらく1人にしてくれだって。」

「それじゃあ、結局呪いは解けなかったんですか？」

破壊音についても気になったが、ハヤテはまずそちらについて聞いた。ハヤテが伊澄の顔を見てそう言うと、彼女は頷いた。

「はい。原因は特定できたのですが、あまりにも呪いが強力で悪質なので、私と光の力でも呪いを解くまでは行きませんでした。」

「そんなに強力なんですか？だって光さんの力ってすごいじゃないですか？それに伊澄さんも・・・そのお2人が解けない呪いの原因って何なんですか？」

自身もかつて光に倒され、今は彼女という少しばかり複雑な事情

を抱えている優が伊澄に質問する。すると、された側の伊澄は何故か表情を曇らせた。そして、視線で光に「後はあなたがお願い。」と合図すると、そそくさとソファに座ってしまった。

「「「？」「」」」

その場にいる全員が、頭の上に？マークを浮かべた。そして間髪入れず光に視線を向けて、説明を促した。

「ええとだね・・・今回の呪いを仕掛けたのは、やっぱり雛人形に取り付いていた人形師のゼペットだったんだけど、母さんが言ったとおり雛人形を全部倒しちゃったせいで前回より呪いが強力になったんだね。それで結局俺たちに来たのは、言葉や仕草からの解放だけで、服は元に戻らなくて。それから・・・」

光はここで口籠った。

「それから何よ？」

「それはだな紫。実は今回の呪いゼペットさんだけじゃなくて、もう1人仕掛けた奴がいるんだ・・・そいつの影響が大きいから。」

「誰ですか？」

真理奈が指摘すると、光は伊澄をチラッと見て言った。

「神父。」

その言葉に、一瞬その場が沈黙に包まれた。

「光君、その神父ってまさかあの神父さんですか？」

ハヤテが訊ねると、光はさも当然のように言い返した。

「俺が気安く神父なんて言う神父はあいつしかいません。」

その言葉に誰もが嫌そうな顔をした。彼の言う神父とは、お屋敷に住み着いて既に20年以上にもなるリインのことだ。三千院家を始めとする子供たちは彼のことが見えているので、当然彼のことを知っている。彼と関わるとろくでもないことにしなければならないことも。

特に彼がカップルという物をそれこそ怨敵の様に扱っているので、現在では誰も自分から近付こうとはしない。

「なんであの神父が今回のことに関わっているのよ？」

紫が聞くと、光が溜息を付いて言った。

「アニメと同人誌の影響みたい。ほら女装キャラって結構出てくるじゃん。しかも可愛い男を無理やり女装させるやつ。それでちょっと興味が湧いたから、ゼペットに力を貸したとか。」

全員の視線が下向きになる。またあまりにもバカバカしい理由であるからだ。そしてハヤテらはどうして伊澄が喋りたがらないのかわかった。おそらく昔リインに騙されて色々恥ずかしい事態（ミニスカメイド服着せられる等）になったのを、未だに根に持っているからだろ。伊澄はどこかボケているようだが、自分の受けた仕打ちを決して忘れないタイプだ。

「それは神父さんが直接言っただけですか？」

バカバカしさを感じつつも、ハヤテはその気持ちを抑えて話を先に進めるべく質問した。

「嫌、俺と母さんの力でゼペットを発見して、勇人が首根っこ掴んで全て吐かせたわけ。そしたら勇人のやつ、ゼペットにあらゆる限りの報復をして・・・」

「それでさっき破壊音がしたわけか・・・じゃあ、勇人はゼペットを倒しちゃったのか？」

ナギが聞くと、光は肯定と否定が半分ずつの答えを返した。

「ええと、倒したと言えば倒したんですが、何分相手は既に死んでいますから。」

「ああ、そうか。」

死んでいては幾ら殴る蹴るの暴行を加えても、死にはしない。せいぜい相手に嫌な思いをさせる程度だ。そういう意味で、自縛霊とは便利なものだ。リンが未だに成仏を嫌がってこの屋敷に住み着いているのも、それが一因かもしれない。

「何にしろ結局勇人の呪いは解けなかったと言っわけですね、光君？」

「ええ、単刀直入に言っとそうです。」

「それじゃあ、どうしたら解けるのだ？ やっぱり時計塔の屋上で戦わなきゃいけないのか？」

ナギが聞いた。すると、光は困ったような表情で言った。

「それが・・・メイドとして1日働かないとダメだそうです。しかも明日の内に。」

「……………」

また何とたわけた呪いだろう。しかもクリスマスに。

「それはどうということだ？」

ナギが目を細めて言う。念のために質問したのだ。

「額面どおり、マリアさんみたいに本物のメイドとして朝から晩まで働けということじゃないでしょうか？お母さん。」

「その通りだ。」

優の言葉に肯定の意を示す光。

「それをしないと、やっぱり一生女装が趣味になっちゃうんですか？」

ハヤテが聞くと、光は真剣な表情で言った。

「嫌、それよりもさらに今回レベル上がってます。・・・本当に女になっちゃうそうです。」

「……ええええ！！！！？？？？」

光と伊澄を除く全員が絶叫した。

「はあああ!？」

「何なのだそれは!？」

「そんなの非科学的です。ありえるはずがありませんわ。」

「まあ別に勇人が姉になっても私は良いけど。」

「けど、勇人君がかいがいしくメイドとして働くのも見たいです。」

「私としては、どちらも魅力的だと思います。」

皆それぞれ勝手な感想を漏らす。

「ハヤテさんとナギさんの気持ちは良くわかります。マリアさん、今さら科学云々を言っても無駄です。と言うか最早愚問です。それから紫たち、本人がいないからって勝手なことを言うなよ。」

光は呆れながら、最後は3人娘たちへ向かって言った。

悪夢のクリスマス 5（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢のクリスマス 6

日付は捲られて12月24日となった。つまりはクリスマス・イブである。キリスト教にとっては厳かな日であるクリスマスを翌日に控えたこの日は、日本ではどこでどう間違つて伝わったのか、カップルが愛を語らい、子供がプレゼントを貰い、そして家族で楽しく夕飯を食べてケーキを食べる日に摩り替っている。

ちなみに余計なことであるが、日本でこの風習が始まったのは明治時代後半からで当時の新聞記事に載ったのが切欠となっている。

そしてこの日は三千院家にとってはそのような事情以上に重大な意味合いを持った日であつた。

そうこの日は現三千院家当主にして三千院グループを総括する若き姫、三千院ナギとその夫であるハヤテが運命的な出会いを果たした日であるのだ。

出会つてからしばらくは主と執事（一応現在もそうである）という関係であつたから、その仲は非常に微妙な所であつた。しかし結婚後は元々ツンデレキャラのナギがデレを爆発させ、さらにハヤテも一途にナギを愛しているから、もう言葉に出来ない程のバカップル夫婦であつた。

さすがにどこかのアニメに出てくるような女王と英雄のように人の前でキスするほどではないが、それでも非常に仲の良く、家族想いの夫婦として知られていた。

そんな訳で、三千院家ではクリスマス・イブは非常に重要な記念

日でありイベントであつた。人付き合いが苦手なナギも、今日ばかりは友人たちを呼んでパーティーを開く。今年の場合はカップルが増えた（しかも知り合い同士）から、余計熱いパーティーになるのは必定であつた。

しかしながら、その三千院家の長男である勇人にとってはまさに悪夢のクリスマスとなつてしまった。人形師（プラスバカ神父）の仕掛けた、たわけた呪いのためにメイド姿でメイドとして働くことを強要されることとなつた。しかも恋人を含む友人たちの前で。（今年のパーティーには瀬川親娘や川西親娘も呼ばれている。）

朝から勇人の心の中の天候は土砂降りの雷雨であつた。

「うう・・・何で僕がメイド服着てメイドの仕事をしなくちゃいけないんだ。別にメイドの仕事を馬鹿にする気はないけど、どうしてクリスマス・イブにこんなことしなくちゃいけないんだ。絶対にあの神父嫌がらせしてるな。」

昨日ぜべつとに報復をしたせいか、現在彼の報復対象は神父に向いていた。その神父はもちろん彼の前に姿を現していない。そしてぜべつとを殴り倒したにも関わらず勇人のメイド姿は一向に解けない。

「あの神父、見つけたらただじゃおかない。」

と口では言うものの、その勇人自身は朝からせつせと働いていた。普段からマリアがしている仕事の半分ほどである。これは元に戻してもらえる条件が、今日1日本物の（ここが重要）メイドとして働くのであるからだ。

本当にそれで元に戻してもらえるかは神父のカップル嫌いの性格からして5分5分だが、そうしないと本当に自分を女にするくらいことはやりそうだと思った（しかも昨日フルボッコにしたぜっとも姿を消している）ので、泣く泣く言われたとおりにしている勇人であつた。

そんな彼にとって、愚痴を吐くのはささやかな抵抗であつた。もちろん、どこかで自分の姿を見て楽しんでいるであろう神父らを警戒して、ほとんど独り言に近いレベルではあつた。

しかしそうは言うものの、マリアから言われた仕事である屋敷内の掃除や朝食作りも勇人は手際よく、なおかつ上手にこなしていた。

勇人をはじめ三千院家の子供たちは、ハヤテの教育方針によって万が一でも他人に頼らなくても生きていけるよう教育されている。もちろんこれはナギという分かりやすい教訓あつたればこそだ。何せナギは結婚前後からはそれなりに家事をこなせるようになったが（それでもマリアやハヤテとは雲泥の差）、それ以前は1人にするだけで屋敷内を滅茶苦茶にして、拳句の果てに命の危機に自分を陥れるような人間だつた。

そんなわけで、ハヤテとマリアは超お金持ちの子供たちである勇人と紫に家事や生きていくのに必要な術を教え込んでいた。そして教え込まれた2人もハヤテの血を受け継いでいるおかげでそれらを短期間かつ充分に吸収していた。

多分今の2人なら、100万円渡せば3ヶ月は1人東京で生きていけるだろうし、何もなくとも無人島で生活ぐらい出来るだろう。ちなみに去年から三千院家の子供になつた優は、そうした教育を受

けるのが遅れたが、両親の塊であったこともあり家事全般は短期間で覚えて、時々2人と共にマリアの手伝いをしていた。多分サバイバル術もハヤテが教えれば短期間で覚えてしまうだろう。

閑話休題。

とにかくそんなわけで、勇人は文句を言いながらもちゃんと仕事をこなしていた。実際何も事情を知らない人間が見たら、その姿は普通に屋敷勤めのメイドさんが働いているようにしか見えなかっただろう。

ただそれでも、近くにまで行けば彼が発する独り言や、時折吐く溜息が聞こえる。それが彼の今の心境を如実に物語っていた。

朝食の時間となり、家族（姫神家含む）の前で朝食の準備をしたわけであるが、その時も時折そんな姿を垣間見せた。

ただし、例えそれを見てもハヤテとナギ、そしてマリアや勝にも助けようがなかった。出来るのはとにかく、呪いについて言及しないことだけだった。

一方真理奈や紫、優たちはというと親たちとは違った感想を抱いていた。

「なあ真理奈、やっぱり昨日あんなことをしたのは不味かったかな？」

食事後3人は集まると、勇人から見えないところで話し合った。

「そうですね。つつい調子に乗っちゃいましたけど、やっぱり勇

人君つらいみたいですな。」

「無理やり女装させられて、メイドとして働かなくちゃいけませんから。しかもクリスマス・イヴに。今日の夜はパーティーもあるのに。」

昨日は散々勇人をおもちゃにした3人だったが、さすがに勇人が時折見せる辛そうな表情に後悔の念をもったらしい。

「そうだな。それに美沙も来るって言うのに。これじゃあ、ちょっとばかり不憫だ。」

「昨日のお詫びも兼ねて、何かしてあげなくちゃ悪いですよな?」

真理奈の提案に、紫と優が頷く。

「けど、何をすれば良いのでしょうか?」

優の言葉に、3人とも考え込んだ。そして考えること1分ほどして、紫が答えた。

「やっぱり、勇人の負担を少しでもかるくしてあげることじゃないかな。メイド服を脱がすのはどっちみち私たちには無理なんだから、直接手伝ってあげよう。」

「そうなりますと・・・」

「やっぱり・・・」

3人はお互いの顔を見て頷くと、素早くある場所へと動いた。

朝食が終わってから1時間程経ったところ、勇人は後片付けを全て済ませて、今度は夕方行われるパーティーの準備をしていた。

「机に椅子、人数分の食器やコップ。結構色々揃えなくちゃいけない。それにしても、マリアさんはこれを1人、父さんや勝伯父さんが手伝っても2人でやっていたのか。本当にすごいな。」

改めてマリアのすごさを感じる勇人だった。ちなみにそのマリア自身は、今身重ということで比較的軽い仕事をしていた。

もつとも、今の勇人に感傷に浸っている時間はない。

「さ、早く準備しなきゃ。すぐにお昼だし、それが終わったらパーティー用の食事も作らなきゃいけないし。はあ・・・結構あるな。く！」

別にマリアの仕事を批判するわけではないが、やっぱりメイド服着て1日中働くのは、肉体面ではともかく精神的に勇人に押し掛かるものであった。

そんな中、彼に声が掛けられた。

「勇人！」（「勇人君！」、「勇人兄さん！」）

声と喋り方で一体誰がやってきたのかは直ぐにわかった。彼は声がした方に振り向いた。

「何3人とも？・・・で、3人ともどうしたの？」

勇人は面食らってしまった。何故なら3人ともが自分と同じ格好、つまりはメイド服姿で現れたのだから。

悪夢のクリスマス 6（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢のクリスマス 7

「3人ともどうしたのさ？メイド服なんか着込んで？」

勇人はいきなり3人がメイド服姿で現れるものだから驚いてしまった。これが真理奈か優1人だけというなら彼も驚きはしなかっただろう。2人ともメイド服姿でマリアの手伝いをするのがよくあるからだ。

しかしながら3人揃ってということはこれまでになかった。だから勇人は素直に驚いた。ちなみに3人の姿はマリアとナギのメイド姿そのまま。生き写しと言ってよい。

それはさておき、3人は普段どりの表情で勇人の疑問に答える。

「見たままです。」

「勇人を手伝おうと思って。」

真理奈と紫がそう答える。

「え！？別にいいのに。そりゃあ、確かに今日は色々仕事はあるけど、なんとか1人で出来ないことはないから。」

勇人としては、折角のクリスマス・イブにわざわざ仕事を手伝う必要等ないと氣遣ったつもりで言ったのであるが、当の3人は別にそんなこと関係なかった。むしろ手伝わないと申し訳なかった。

「そんな遠慮することないですよ、勇人兄さん。それに、これは私

たちのせめてもの償いです。」

「償い？」

優の言葉に、再び首を傾げる勇人。

「昨日、私たち調子に乗って勇人君に悪いことしちゃいましたから。」

「勇人が嫌がってたのに、無理やりあんなことしちゃって。それに勇人が1人で働いている姿見ちゃったら、ほっとけなくて。本当に悪い気がして。」

「だから、せめて勇人兄さんの手伝いくらいしなきゃ悪いと思って。」

「3人とも・・・」

昨日散々な目にあったこともあり、こうして気遣ってもらえると人間より嬉しくなるものだ。自分のことを気遣ってくれる姉妹や従姉妹の存在に、勇人は何か心に感じるものがあつた。

「あ、ありがとう。それじゃあ、お言葉に甘えて。」

勇人は3人の申し出を受けることにした。

「そうそう、遠慮なんかする必要ないから。」

紫が顔に笑みを浮かべながら言う。

「それじゃあ、何を手伝いましょうか？」

「掃除？お昼の準備？それともパーティーの準備ですか？」

真理奈と紫が一齐に言うものだから、勇人としても少しばかり困ってしまふ。

「ちょ、ちょっと2人ともそんな一編に言わないでよ。とりあえず、じゃあ紫は僕の手伝いをしてここを手伝ってくれる？それから真理奈と優は今日パーティーで使う物を出しておいてくれるで良いかな？」

「わかった。」

「それで良いです。」

「早速しましょう。」

4人のメイドさんたち（1人は男だけど）は、自分たちのやるべきことをするべく動き始めた。

そんな彼女ら（1人は彼）を窓の外に生えている木の上から見つめる1人の男がいた。

「こ、これは何と言う幸運か。あの少年のみならず、他の3人がメイド服を着る姿にまでめぐり合えるなんて。始祖ブリ・・・じゃなかった。イエス・キリストにこの出会いを感謝せねば。」

とバカなことを神に感謝する人間等練馬区を探しても一人ぐらいだろう。未だに三千院家に住み着く自縛霊のラインだ。彼はしばらく目を閉じて神に感謝していたが、それを終わるとまた罰当たりなことをしようとする。

「さて、こんな光景滅多にお目に掛けないから、こないだハヤテの小遣いからくすねた金で買ったこの最新式のカメラバツチりと激写だ！！」

相当意気込んでいた。しかし、悪いことは出来ないものだ。

ビュン！！

「グハ！！？？」

突然後頭部に投げつけられた石が直撃し、悲鳴を上げた彼は木の上から真つ逆様に落ちて、地面に叩きつけられた。

「うん？」

勇人はモップを動かす手を止める。

「どうしたの？ 勇人。」

紫も手を止めると、彼に尋ねる。

「いや、なんか今外で人の悲鳴のような声と、地面に何かが落ちる音がした気が。」

「ええ！？私には何も聞こえなかったよ。単なる空耳じゃない？」

「かなあ？・・・まあ、良いか。」

勇人は気にしないことにした。

「そうそう、細かいことには気にしないでとつとここの掃除終わらせちゃおう。」

「そうだな。」

2人は再び黙々と掃除に勤しんだ。

そして再び外に目をやると、地面に叩きつけられたリインの目の前に現れた1人の男がいた。

「あんた一体何をやっているんですか？」

目を怒り一色で染め、リインの前に仁王立ちしているのは勇人や紫の父親であるハヤテであった。

「何だハヤテか。いきなり石を投げつけてくるなんて酷いじゃないか。人が至福の時を過ごしていたというのに。」

バコ！！

さらに一発蹴りを入れるハヤテ。しかしながら、これは避けられた。

「危ないじゃないか！さっきの石と良い、いきなり攻撃してくるなんて卑怯だぞ！」

奇襲攻撃を批判するリインだが、ハヤテが次に言ったセリフは重々しく暗かった。

「黙れ！！あんたにそんなこと言われる筋合いはない！！」

「何を！？神に仕える者の言葉を冒瀆するのか！？」

もう何百回と言っている言葉を言うハヤテ。もちろん、リイン（さらにソニア）がそんな言葉を言っても説得力ないことは、彼と付き合ってきた20年間でうんざりするほど理解している。

「やかましい！神に仕える人間が人形師の霊と組んで人の息子に女装させたり、人の小遣いくすねたり、その金であるうことか女の子を盗撮するカメラを買って良いんですか！？」

ビシッと正論を言うハヤテだが、これも既に何百回と繰り返されてきたことなので、リインは全く気にしない。

「人があの世に旅立つ前なんだから、少しぐらい羽目を外しても目を瞑ってくれたって良いじゃないか！」

ああ言えばこう言うとはまさにこのことだ。

「そう言ってもう20年も成仏してないじゃないですか！！家の息子と可愛い娘たちと姪を穢すような行為をして、今度という今度はもう許しません。僕からのクリスマスプレゼントとしてあの世への片道切符をプレゼントしてくれますよ！！」

ハヤテの体から、どす黒い物が沸き立つ。

すると神父もそれを買った。

「上等じゃないかね。借金塗れだったくせしてナギと結婚して、可愛い娘や可愛いメイドさんを周りにはべらせている神をも恐れぬ男に、この私が鉄槌を下してやろうじゃないか。あの世へやれるものならやってみろ！！」

この言葉に、ハヤテもカチンと来た。

「だったらやってやりますよ！！行くぞ、ハヤテのごとく！！」

クリスマス・イブというお目出度い日なのにも関わらず、ハヤテとリインは朝から血で血を争うバトルを開始したのであった。当然すさまじい音が発生し、今度こそ勇人たちは事の真相に辿り着くのであった。

一方その音は、今日のパーティー用の服を選んでいるナギとマリアの所にも聞こえていた。

「マリア、ハヤテの奴がまた神父と始めたようだぞ。」

「相変わらず懲りずにやりますね。」

2人ともあきれ返るように言った。ちなみにマリアは伊澄の力を借りて彼の姿が見えるようになっていた。これは見えないままだとリインが何をやらかわかったものではないとハヤテとナギが警戒したからだ。

そして2人の喧嘩は最近こそ少なくなったが、別に全くないものでもなかった。

「まあ、ほつといっても大丈夫だな。」

「はい。けど、庭がめちゃくちやになってないか心配です。」

そんな愚痴をつきつつも、2人は子供の頃からそうしているように、まるで姉妹のように服を決めているのであった。

ちなみに喧嘩の決着は結局つかず、ハヤテは荒らした庭の補修作業をすることとなるのだった。

悪夢のクリスマス 7（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

悪夢からの脱出

紫と優、真理奈がメイドとして勇人を手伝ってくれたり、ハヤテがリイン神父と男の面子を掛けた戦いをして庭を破壊したため、午後一杯掛かって修復したりと、予想外の事態が諸々発生したが、取り敢えず勇人はメイドとして仕事を無難にこなしていた。

お昼ごはんを食べてからは夕方から友人等を招いて行うクリスマスパーティーのために、椅子や机を出し、部屋を整理して飾りをつけ、マリアやナギ、他の3人と共に料理や飲み物の準備をした。

そんな中、勇人の隣で仕事をしていた紫が勇人に尋ねる。

「ねえ勇人。」

「何？」

「勇人はパーティーどうするの？」

すると、勇人の表情が固まった。さらに動いていた手が止まる。

「やっぱり気にしてたんだ。」

「気にするなっ方が無理だろ？」

勇人は昨日から頭の片隅に置いてきた問題を思い出し、溜息を吐いた。わかってはいたのだが、考えたくないから目を背けてきた。しかし、パーティーが始まる夕方、皆が来る時刻まで残りわずかな時間しか残されていなかった。

「で、どうするの？出るの？」

「うん。仕方がないよ、あの神父がどこから見ているか判らないし。・・・はあ、美沙はこんな格好をしているの見て、どう思うかな？」

他人に見られるのは恥ずかしいことだが、恋人に見られるのはさらに恥ずかしい。それに、それ以上に気になることもある。

「勇人君にそんな趣味があつたなんて、見損なつたわ。別れよう。」

勇人の気持ちを看透かしたかのように紫が言う。

「！！」（ガーン！！）

すさまじいショックを受け、膝を突く勇人。その予想外に大きなリアクションに、紫は慌ててしまう。

「わー！ご、ごめん勇人。い、今はちよつとした冗談だから。大丈夫、皆優しいから。特に美沙はそうじゃない。そんな心配する必要ないって。」

実際の所、勇人の友人たちは総じて皆良い人ばかりだ。非常識なことばかり周りで起きているから、ちよつとのことでは驚きはしない。特に美沙は母親の泉の遺伝子が濃いのか、素直で優しく人当たりが良い。

もつとも、万が一、億が一の可能性で言う可能性もないことはない。これまで勇人はハヤテと違って女装などしたことないからだ。まあ、逆に似合つてると言われるのもまたショックなことであろう。

が。

だから、勇人としてはいくらそう言われても不安を拭いきれなかった。

「とにかく、美沙のことを信じてあげようよ。私たちもちゃんとホローするから。」

「うん。よろしく頼むよ。」

勇人はそう返事するものの、テンションは思いつきり低くなっていた。紫はこのままではマズイと思った。そこで、勇人をちよつとばかしからかうことにした。

「あ、勇人大変！」

「え！？」

「えい！」

勇人が自分の方に顔を向けた一瞬の隙をついて、紫は勇人の口の中に作っていた料理を一口入れた。

「どう、私が作ったクッキーおいしい？」

「うん、おいしいよ。」

実際紫は料理が上手いのだから美味しくて当然だった。自然と勇人の表情も綻ぶ。

「良かった。勇人が笑ってくれて。いい勇人、そりゃあ女装させられて恥ずかしいかもしれないけど、だからって勇人は勇人でしょ。もっと自身を持ちなさい！それに美沙は今じゃあんたの恋人でしょ。絶対に大丈夫よ。さっきも言ったけど彼女を信じなさい。あと、今日はクリスマス・イブなんだから、笑って過ごさなきゃ損じゃない。勇人は笑顔が一番良いんだから。」

「あ、ありがとう紫。」

妹の気遣いに、勇人は素直に笑みを浮かべた。そして、感謝する。もちろん、先ほどのまでの重苦しい空気は吹き飛んだ。

「さ、早く他の料理も用意しなきゃ。」

「そうだな。」

2人は再びテキパキと手を動かし始めた。

そんな2人から少しばかり離れた所では、マリアとナギが皿に料理を盛り付けつつ、ヒソヒソ声で話していた。

「2人とも素晴らしい兄妹ですね。」

マリアの言葉に、ナギは顔に笑みを浮かべる。

「当たり前だ。何と言っても2人は私とハヤテの子供なんだからな。」

「そうですね。私も子供の頃からお付き合いしていますが、2人が素晴らしい人に育ってくれて本当に嬉しいです。・・・（ナギほど手も掛からなかったし）」

最後の言葉は心の中で呟いたが、ナギが首を傾げる。

「マリア、今何か言ったか？」

その言葉に一瞬体を震わせはしたが、マリアは全力で否定する。

「え！？何も言ってませんわ。きっと勘違いですよ。」

「そうか。」

ナギはそれ以上の追求はしなかった。そして話題を変えた。

「この子にもあの2人みたいな子に育って欲しいんだ。」

ナギは愛おしそうに、最近膨らんできた御腹を見て言う。

「大丈夫ですよ。だってハヤテ君とナギの子供でしょ。きっと良い子に育ちますわ。」

「ありがとう。マリアの子供もきっと真理奈見たいな良い子に決まっているな。」

「フフフ・・・そうですね。」

そう言って、マリアも自分の御腹にいる新しい命を愛おしそうに

眺めた。

そんなこんなの中に時間は過ぎ、皆がやってくる夕方となった。
最初に到着したのはワタルと伊澄、光の3人だった。彼らを出迎えたのは紫だった。

「3人ともいらっしやいませ。」

「紫、どうしたんだよその格好？」

光がメイド服姿で現れた紫の姿に驚いた。

「いや、勇人だけにやらせるのは可哀想だと思って。ついでに優もメイド服着てるよ。」

「え！本当！？」

既に一度見ていたとはいえ、彼女がメイド服を着ると言うのは少年のテンションを嫌が上にも上げる。

「嘘言つてどうするのよ。ところで光。」

「何？」

「優が可愛いし、メイド服が似合っているのも認めるわ。あんたが恋人なのもあの娘が決めたことだから文句は言わないわ。けど、だからっておかしいことするんじゃないわよ。」

直接の妹ではないとはいえ、既にこの屋敷で半年近く姉妹として暮らしているのだ。紫にとって優は大切な妹だった。だから釘を刺したのだ。この辺り、マリアを姉の用に慕っていたナギと似ている。

「するわけねえよ！！何おかしなこと言うんだよ！」

光が顔を真っ赤にして言う。

「一応念のためよ。優は私にとって可愛い妹なのよ。それにほら、男って狼って言うじゃない。」

その言葉に、ワタルが苦笑いした。彼には少ばかり思い当たる節があるからだ。

「バカ言うんじゃない！俺は絶対にそんなことしない！」

「だったら、あの娘クリスマスは今回が初めてだから、ちゃんとダンスの時にはエスコートして上げなさいよ。」

「わかってるよ。」

そう言うと、彼は屋敷の中へと入って行ってしまった。

「ありがとう紫さん。光はワタル君に似て奥手な所があるから。」

伊澄が彼女に言うと、紫は笑って返した。

「別に、私はただ可愛い妹が寂しい思いをして欲しくなかっただけです。さ、お2人も中へどうぞ。」

紫は伊澄とワタルを中へと案内した。

それから1時間もしない内に、参加者全員が屋敷へとやってきた。皆出迎える紫や優、そして勇人のメイド姿に驚くこととなった。ただし、幸か不幸か勇人が美沙を出迎えることはなく、結局彼らはパーティーのその時まで顔を会わせられなかった。

そして参加者全員が揃った所で、パーティーが始まった。

悪夢からの脱出（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

至福の時

そしていよいよクリスマスのパーティーが始まった。それまでせっせと料理を運んだりしていた勇人ら4人も、そのままの格好（つまりメイド服）でパーティーに参加した。

紫は一哉、優は光の所へ行きそれぞれ料理と飲み物に舌鼓をしつつ恋人との会話を弾ませた。また今回パーティーに呼ばれた他のメンバーも、恋人がいるいないに関わらず大いに楽しんでいた。

ちなみに、紫に釘を刺された光は優のメイド姿に喜びはしたものの、ちゃんと言われたとおり彼女をエスコートするに徹していた。

子供たちが楽しい時間を過ごす一方、それはまた親世代も同じであつた。特に今回は久しぶりに泉や美希がハヤテの招待によりやってきていた。白皇卒業後久しく会っていないメンバーの登場に、ハヤテやナギだけでなく、同様に呼ばれていたヒナギクたちも大いに盛り上がった。さらに予想外の賓客の登場にも。

そしてここで泉と美希から思いもかけないことを一同は聞かされたのだが、今回の話とは特に関係ないのでここでは省略する。

さて、そんな感じで一同が楽しんでいる中、1人ガチガチに緊張しながら恋人に近付いていく人物がいた。もちろん、それはゼペットとリインのアホな呪いのせいでメイド服を着せられている勇人だ。

この時点において、勇人は幸か不幸か恋人である美沙とは顔を会わせてはいなかった。だから本当に緊張していた。万が一彼女が自分の今の姿に失望するのではないかという疑念が消えていなかった

からだ。

ちなみに、この時点で既に会っている人物たちは彼の格好に驚きこそしたが、彼から話を聞いてちゃんと事情を理解してくれた。本来祝いで女装させられているなんて信じる方がおかしいかもしれないが、彼の周りの人たちは非日常的なことに結構出会っているので、大丈夫だった。

ついでに付け加えると、その人たちが口にした感想は「似合っている。」か「やっぱりハヤテの息子だ。」という勇人とハヤテにしてみれば精神的にダメージを食らう物ばかりだった。

まあそれはさておき、勇人はパーティー会場の中に美沙の姿を見つけると、彼女の前へと歩いていった。

「こ、こんばんは美沙。」

勇人が声をかけると、美沙が彼の方を振り返った。彼女は母親と同じくパーティードレスに身を包んでいた。基本的に彼女は母親似であるから、似合っている。

本来なら勇人はタキシードに身を包んで彼女をエスコートするはずだったのに、何が悲しくてメイド服姿で彼女を出迎えなければならなかった。だから、彼は表情こそ笑顔を作っていたが、内心ではそれはもう口に出せないくらい憂鬱だった。

しかしながら、美沙の方はそんな彼を気持ちを知ってか知らずか、母親譲りの笑みを彼に向けてきた。

「こんばんは、勇人君。」

そして彼女は、じーっと勇人の姿を見た。

「ええと・・・これはその・・・」

勇人が慌てて言い訳をしようとしたが、美沙がそれより早く口を開いた。

「勇人君も大変だね、呪いでそんな格好しなくちゃいけないなんて。」

「え!？」

「実はもう皆から聞いてるよ。」

「そ、そう。」

相変わらず美沙はニコニコして、勇人は緊張で表情を強張らせたままだ。だから、どうもギクシャクしてしまう。

「勇人君、確かにそんな格好して恥ずかしいかもしれないけど、そんな顔しないでよ。今日は折角のイヴなんだから。」

「そう言ってくれてありがとう。けど、その・・・」

すると、美沙は勇人の目の前へと立った。それこそ、背伸びすればキス出来そうな距離だ。

「美沙!？」

「勇人君。勇人君は今、メイド服を着ているよね。けど、それまでの勇人君じゃなくなるわけじゃないでしょ？」

「もちろんだよ。」

「だったらいつもどおりでいれば良いじゃない。そりゃあ、ちよつとは違和感を感じるけど。勇人君が勇人君らしくしてくれれば大丈夫だよ。」

言っていることは、昼間紫が言っていたことに似ているが、やはり本人から言われるのと妹から言われるのを比べれば、重みが違う。すなわち、勇人に訴える物も違う。

「美沙・・・ありがとう。」

「フフ。やっといつもどおりになってくれたね。さ、クリスマスイヴを楽しもう。」

「うん。」

勇人と美沙が恋愛小説顔負けの甘いシーンを演出（他のカップルも大同小異）しているのを、彼らの親たちは笑顔で見つめていた。

「勇人の相手が美沙で良かった。泉に似てあの娘はやさしいな。」

ナギがホット安堵の息を吐く。

「そう言ってくれてありがとうナギちゃん。」

ナギの言葉に、泉がいつも以上の笑みを浮かべて言った。シングルマザーとして美沙を育てている泉にとって、彼女は宝その物だった。

「それにしても、ハヤ太君の息子が泉の娘とくつつくとは意外だったな。私はてっきりヒナの娘あたりが妥当だと思ったのに。」

美希が高校時代と変わらぬ口調とテンションで言う。20年近く経って皆色々と経験しているが、核となる部分は全く変わっていないかった。

「それを言ったら花菱さんの娘さんだって、お相手は確かシスターと氷室さんの息子さんでしょ。そっちの方が意外ですよ。」

ハヤテがそんな事を言うと、美希がすかさず反撃に移る。

「言っじゃないかねハヤ太君。高校生時代は究極の天然ジゴロでヒナやナギちゃんの気持ちに全く気づけなかった君が、恋愛についてそんなことを言うなんて。世も末だな。」

「ひどいな。」

そして一同は大笑いした。

パーティーが佳境を過ぎた頃、ダンスの時間が始まった。もちろん、勇人と美沙も他のメンバーと同じく2人1組で踊る。

「勇人君、私ダンスなんかしたことないから。大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。僕の言うとおりにステップを踏めばちゃんと踊れるから。」

「うん。ちゃんとエスコートしてね。」

そして2人は踊り始める。パーティードレスとメイド服姿の取合せであるから、傍から見ればかなり奇妙な光景である。しかしながら、見ている側もやっている側もそんなことは全く気にしなかった。それどころか、むしろかなり優雅にダンスをしていた。

「そうそう。上手いよ美沙。」

「ありがとう勇人君・・・勇人君はやっぱり勇人君だね。どんな時でもやさしい。本当にどんどん好きになっちゃう。」

美沙がそんなセリフを顔を赤くして言うものだから、釣られる形で勇人も顔を赤くする。

「僕も・・・美沙のことを前よりも好きになっている気がする。」

「・・・」

2人は恥ずかしくてそれ以上何も言えなかった。しかしながら、本当に嬉しそうにダンスを続けた。

ダンスが終わると、勇人はこっそりと美沙を自分の部屋に連れ出した。

「危うく忘れる所だった。」

「一体どうしたの？」

勇人は首を傾げる美沙にお構いなく、1人クローゼットを開け、その中からラッピングされた箱を1つ取り出した。そしてそれを美沙に手渡す。

「はい、これ。クリスマスプレゼント。」

「え！？本当に？」

「嘘言ってどうするんだよ？」

「あ、ありがとう。開けても良い？」

美沙の言葉に勇人は頷く。すかさず彼女は包装を丁寧に解き、箱を開ける。中から出てきたのは手編みの手袋だった。

「これってもしかして勇人君が作ったの？」

「もちろん。こう見えてもそっちの方も得意だから。」

「嬉しい！大切に使うね。」

その瞬間、美沙は嬉しさのあまり勇人に抱きついた。そして、彼女はそのまま大胆な行動に出た。なんと勇人の唇にキスしたのだ。

「！？」

勇人は本当にビックリした。だから彼女が唇を離すと、驚きの声を上げた。

「ちょ、ちよつと美沙？」

「プレゼントのお礼だよ・・・本当にありがとう。」

彼女は再び勇人に抱きついた。抱きつかれた勇人も、笑顔とキスという2段攻撃に心臓が高鳴っていた。だから、彼の方もつつい嬉しくなつて大胆になった。

「僕のほうこそありがとう。喜んでもらえて、本当に嬉しい。」

勇人も美沙の体を抱きしめた。

そんな感じで、悪夢を至福の時へと変えることが出来た勇人であったが、もちろんそれで納まらない人もいる。

「あの小僧！見せ付けやがって！！」

「こうなつたらもつと、恥ずかしい格好をさせてやる!!」

リンとゼペッドの2人だ。2人とも勇人を監視していたわけだが、見せられるのが恋愛映画見たいなシーンばかりなので、怒り心頭である。そして逆恨みである。本当に全く懲りない人たちだ。

「フフフ・・・見ていろ小僧。神に仕える人間を怒らせることがどれほど恐ろしいことか思い知らせてやる。」

自分のやっている行為を棚に上げて、本当に進歩しない人だ。しかしながら進歩しない人間は、いつかその報いを受けるものだ。

突然彼らに襲い掛かる巫女の姿があつた。

「は!?!伊澄君!!それに光に優君!!あと、そっちの娘は誰だ?」

リンの疑問に、伊澄は素っ気無く答えた。

「頼もしい助っ人です。そして神父さん、聖なる日に、人の恋路を邪魔するなんて無粋ですよ。」

「祖母ちゃんたちに習った秘術で今日こそ成仏させてやる。」

「勇人兄さんと美沙さんにこれ以上指1本出させませんよ!!」

もう1人の新顔の娘はそんな3人の姿にあたふたするばかりで何も言わなかった。

「おのれ!!だつたら来るが良い!!」

リインの挑発に、光が叫んだ。

「行くぞ!!」

これが合図となつて三千院家の片隅で、朝まで続く地縛霊2人組VS退魔師4人組のガチンコバトルがスタートした。

至福の時（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 1

クリスマスの騒動から1週間後、年は変わりお正月となった。三千院家でも、屋敷内にいる全員が集まって朝からお祝いムードである。

「皆、明けましておめでとう。今年も皆にとって良い年となりますように。」

朝食の席上ハヤテが先頭に立って、新年の挨拶を言う。彼を見ているナギや子供たち、兄一家の誰もが新年への希望に胸を膨らませ、晴れやかな表情をしている。

「まあ、挨拶はこのあたりにして、せっかくマリアさんたちが丹精こめて作ってくれた料理を食べるとしましょう。」

庶民出らしくハヤテは長ったらしく堅苦しい挨拶などしない。簡潔に言うことだけ言うと、朝食を摂ることにした。皆の前には湯気を立てているお雑煮や、色鮮やかなおせち料理が並んでいる。メイドであるマリアや、料理を作る様になったナギ、さらに娘たちも参加して作られたものだ。

「いただきます!」「」

全員が箸を取り、料理に手をつける。そして口に運ぶと、さっそくそれぞれ感想を言い合う。

「このたつくり味付けが良いね。」

「それ私が作ったのよ、勇人兄さん。」

「真理奈と紫さんのお雑煮もおいしいですね。」

「ありがとうございます。」

そんな子供たちや義姉らの様子を見ながらハヤテは微笑みつつ、隣に座る妻であるナギとお猪口に入った日本酒を飲む。もっとも、身重となったナギは禁酒中なので水だが。

「ナギさん、今年もよろしくお願いします。」

「ハヤテの方こそ、今年１年お互いがんばろうな。」

「はい。ナギさんは特に・・・」

ハヤテはナギのお腹を見つめる。それを見て、ナギも自分のお腹を撫でる。その目は自愛で満ちている。

「そうだな。後半年か。元気に生まれてきて欲しいな。男の子とか女の子か、本当に楽しみだな。」

「そうですね。けど、僕はナギさんとの子供ならどちらでも良いです。とにかく元気に生まれて来て、すくすく育って欲しいです。」

ハヤテの方も慈愛に満ちた視線を妻と、その体内に宿るまだ見ぬ我が子に向ける。本当に仲睦まじい夫婦である。ついでに言えば、度を過ぎたほどに熱い夫婦である。もっとも、この場でそのことを気にする人間など皆無だが。

食事が進み、空のお皿が目立ち始めた頃、ハヤテは子供たちに尋ねる。

「そう言えば、皆今日は初詣に出掛けるのか？」

「うん。美沙と正午に待ち合わせてる。」

「私も一哉と１時に。」

「私も光君と１２時半に。」

皆口々に今日の（恋人との）約束を言う。

「わかった。皆楽しんできなさい。ただし、人が多いから気をつけるように。特に年末を過ぎたとはいえ、刑務所に入って食べ物と寝床にありつこうなんていう低いレベルのことを考える人もいるから。」

「そう言えばそんなこともあったな。」

昔のことを思い出して、ナギは笑った。

「あ、あとそれから。皆初詣に行くなら、是非朝風神社に行くと良いよ。」

「朝風神社？あの理恵さんがいる。」

勇人が尋ねる。理恵とは、かつてのハヤテとナギの友人であった朝風理沙の忘れ形見だ。結婚し理恵を儲けたものの、理沙は不幸にして理恵以外の家族全員とともに事故死してしまった。

その後彼女は親戚に引き取られて、ハヤテどころか母親の親友であつた泉や美希、さらには母親の母校である白皇学院とも縁の無い人生を送つていた。

そんな彼女にとつての大きな転機となつたのが、タイムカプセルの掘り出しを通じて伊澄と出会つたことだ。伊澄は彼女に会うなり、光や優と同じく、彼女に退魔師としての能力を見出した。

かつて理恵の母親である理沙は、一応巫女ではあつたが出来ることは簡単なお払いくらいで巫女として、優れているとは言いがたかつた。しかし理恵は、伊澄曰く「近年稀に見る逸材です。訓練すれば優さんと同じくらいの能力を発揮できます。」

そう言うわけで、理恵は鷺ノ宮家にヘッドハンティングされることとなつた。つまりは、伊澄が面倒見る代わりに、彼女を巫女として育てると言う訳だ。

もちろん、本人が望まなければ伊澄としても無理強いするつもりは無かつた。しかしながら、理恵は二つ返事で承諾した。母親と同じ道を辿ることに興味を持ったからだつた。

そして理恵は伊澄にあることを頼んできた。それは継ぐ者がおらず、事実上廃社状態になつていた朝風神社の再建であつた。これに関して、伊澄は快く受け入れた。

こうして双方の利害が一致する形で、書類の手続きやら引越しが終わった12月半ばから理恵は鷺ノ宮家にやって来て巫女としての修行を積んでいた。夜になると伊澄に連れられ光や優と一緒に妖怪退治の仕事に勤しむとともに、また朝風神社の再建にも動いていた。

その朝風神社は、鷲ノ宮家のバックアップのおかげで建物と土地自体は直ぐに確保できたから、後は人材の育成だけであった。今は建物があるだけの事実上無人だが、理恵は高校を卒業したら住み込みで働く予定だ。

ちなみにその理恵は1月から白皇学院に転入する予定で、これがかつての生徒会3人娘の娘が揃うことと為る。

「伊澄さんの話だと、理恵さんは今日から朝風神社で仕事しているらしいよ。だから皆も挨拶ついでに、朝風神社に初詣へ行ったらどうかなと思って。」

ハヤテの提案に、勇人たちは直ぐに了解した。

「わかった。じゃあそうするよ。」

「私も。」

「私も。」

「私もそうします。」

全員が賛成の意を示した。

その後食事を終えると、子供たちはそれぞれの部屋へ行き出掛ける準備を始める。もっとも、出掛ける準備といっても男子である勇人の場合は軽く身支度して、コートや帽子などの防寒具を身につけるくらいだ。

しかし、女子の場合はそうはいかない。特に今日と言つ日は。

「お姉さん、どうかしら？」

「すつごく可愛いよ優。さすが私の妹ね。」

紫が妹の姿を絶賛する。優が今着ているのは、振袖だ。真新しい水色を基調としたもので、落ち着いた感じが優に良く合っている。

優が人間になつての初めてのお正月ということで、ハヤテとナギが買ってくれたそれを、優は紫に手伝ってもらつて着た。その様子は2人が本当の姉妹のように見える。つい数ヶ月前、呪う側と呪われる側という関係にあつたようには思えない。

実際2人ともお互いを本当の姉妹のように感じていた。特に紫はここ数ヶ月でその想いを強くしていた。

「ありがとう、お姉さん。」

「どうも。けど、優は光にはやっぱりもったいないな。」

「ね、姉さん。」

茶化された優が顔を赤く染める。

「フフフ・・・半分は冗談よ。けど、残り半分は本気よ。いい優、あなたは人を疑うことをあまり知らないけど、もし光に何かされそうになったらグーで殴ってやりなさい。それからすぐに私に言いなさい。怒りの鉄槌を与えてあげるから。」

「う、うん。ありがとう。」

どこか困ったような表情をしながら、取り敢えず感謝の言葉を述べる優。

そこへ、ナギがやってきた。

「おお、優。中々似合っているではないか。」

「あ、お母さん。ありがとう。」

「別に感謝する必要などないぞ。お世辞でもなんでもなく、今の優は可愛いのだから・・・それから、紫の方は大丈夫か？」

「うん。もう慣れてるから。」

優の着付けが終わったので、次は紫の番である。

「そうか。じゃあ私の出番はないな。それじゃあ、また後で。」

娘の姿に満足しつつ、ナギは部屋から出て行った。

お正月も一騒動 1 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 2

「『『『それじゃあ行ってきます！』『』『』」

身支度を終えた勇人、紫、優、真理奈の4人が屋敷から出た。この後4人はそれぞれの相手と途中で合流し、朝風神社に向かう予定だった。

「いつてらっしゃい。」

「気をつけるのだぞ！」

ハヤテとナギがそれぞれ、出掛けていく子供たちに声を掛けた。

小さな子供でもあるまいと思えなくもないが、一応4人とも金持ちの子女であるから、どこで暗殺者が狙っているかわかったものではない。実際そう言うことがありえなくもないから恐ろしい。だから三千院家の場合は、見送りの言葉の中にその様な意味も込められていた。

もつとも、4人に掛ければ並みのテロリストなら相手が10人であつても、手もなく捻られること100%だが。ハヤテやマリア譲りの能力は伊達ではない。この4人を抹殺しようと思つたら、それこそ特殊部隊を連れて来る必要があるかもしれない。

「優さんの振袖は初めてですけど、とてもよく似合っていますね。」

屋敷の門を出た所で、真理奈が優に向かってそんな事を言った。彼女の言うとおり、去年生まれただばかりの優にとって、今回が初め

ての正月であり振袖である。

元がナギの分身であるだけに、優の振袖姿は中々決まっている。もちろん真理奈や紫もそうだが、2人にはない幼さによる可愛さというのが滲み出ている。

「確かに。きっと光も誉めてくれるよ。」

勇人も妹の振袖姿を誉めた。

「あ、ありがとう。真理奈さん。勇人兄さん。」

「けど気をつけろよ優。男は狼と言うからな。光がもし変な気を起こしたら直ぐに私に言え。私が代わりに鉄槌を下してやるからな。」

紫が横から真剣な表情で言う。

「ありがとう紫姉さん。けど、そこまで心配することはないと思うよ。光君優しいし。」

「いや、油断しちゃいけないぞ。一哉みたいに少しばかりヘタレな方が案外安心できるもんだ。しかし、光は意外と強気な所があるからな。」

妹を思っでの発言だが、最近かなり激しくなっている。そのため勇人が呆れたような表情で言う。

「あのさ紫。優を心配する気持ちはわからなくもないけど、そこまで来たらもうシスコンだぞ！？だいたい、そんなこと言ったら俺も同類になるじゃないか？」

しかしながら、紫は意に介さずと言った表情で答えた。

「心配して何か悪いの？それから、勇人が美沙に変なことするような人間でないことは私が一番良く知っているから安心して。伊達に17年も一緒に生きてきたわけじゃないんだからね。」

何を言っても無駄なようだった。呆れを通り越して、勇人の表情は諦めのそれになった。

そんな彼に真理奈が声を掛ける。

「紫さんは妹が出来て嬉しいんですよ。優さんは可愛くてやさしいですから。だからあんなに構ってしまうんでしょう。」

真理奈の言うとおり、優はナギの分身であるから外見は13歳の時のナギである。実際のナギはツンデレ性格で、普段はかなりきつい感じがした。しかし優は邪心が完全に消滅した良心であるから、性格は少しばかりいたずら心がある以外は100点満点の善人である。

であるからこそ、誰からも好かれずにはいられない。特に彼女にとって家族となった三千院家の人々、その中でも姉妹という身近な存在になった紫からは。既に2人の付き合いは半年以上になっているが、月日が重なる故に紫は優を心配していた。優が優しい性格ゆえ、何かに巻き込まれてしまうのではないかと。

彼女にとって、初めての年下で歳の近い姉妹というのも大きいだろう。

もつとも、勇人も紫とは双子であるからそれくらいことはわかってる。

「それはわかっているけど、あそこまで来ると優の方が迷惑じゃないかと考えちゃうよ。」

「まあ、それは確かに言えなくもないですね。」

それから間もなく、紫が優から離れて真理奈と話を始めた。そのタイミングを使って、勇人は優に話しかけてみた。

「なあ優？」

「何ですか？」

「紫が随分とお前のことを心配してるみたいだけど、迷惑になっ
てないか？言い難いとかあったらちゃんと俺に言えよ。それとなく言
っておくから。」

しかしながら、勇人のその言葉に優はクスツと笑って言い返す。

「大丈夫です。確かにちょっと紫姉さんは私に構いすぎかなあとは思
います。けど、それでも私は嬉しいんです。」

「嬉しい？」

「ええ。私ってほら、お母さんのドッペルゲンガーだったじゃない
ですか。20年前はお母さんを殺そうとして、伊澄さんに封印され
ました。そして去年も紫姉さんを殺そうとして、また封印されかけ
ました。そんな存在だから、人に心配してもらったり、氣遣っても

らうことなんてありませんでした。自分自身怨言を持つて、そしてただ憎まれて、消えさることを望まれていただけでした・・・だからこうして人間になって、人に温かく心配してもらえるのは私にとってはとっても嬉しいことなんです。」

「・・・」

「だから紫姉さんには感謝しています。もちろん、私を娘として迎え入れてくれたお母さんやお父さん、そして勇人兄さんにも。それから、私を人間にしてくれた光君にも。姉さんはああ言いますけど、光君は私にとっても優しくしてくれます。だからこそ、人間になって半年も経たない内に彼に恋したんです。」

「そうか・・・優も優で色々と考えているんだな。」

「もちろんです。」

「わかった。ただし本当に迷惑になったら、遠慮なく言ってくれよ。俺だってお前のお兄さんなんだから、もっと頼ってくれて良いんだよ。」

「ありがとう、勇人兄さん。」

優は極上の笑みを浮かべて、勇人にそう言った。

数分後、彼らはまず美沙と合流した。彼女は普段と同じく私服姿であったが、いつもと同じくその太陽の様に明るい笑顔を一同に向けていた。

「勇人君、紫ちゃん、真理奈ちゃん、優ちゃん、新年明けましてお

めでとう。」

「「おめでとう美沙。」」

「「おめでとうございます。美沙さん」」

4人全員に挨拶をし終えた彼女は、そのまま勇人の側へと回った。

「今年もよろしくお願いね、勇人君。」

「こちらこそよろしく、美沙。」

そう言っ、て、勇人は美沙に腕を差し出した。それを見た美沙は顔を綻ばせて、自分の腕を勇人の腕に絡めた。

「新年早々熱いわね。」

「公共の場でそうするのは良くないと思いますよ。」

さっそく紫と真理奈が冷やかしに入った。2人は顔を赤くすると、取り敢えず腕は解いて、代わりに手を繋いだ。これでもまだ随分とイチャイチャしている印象は受けるが、腕を組むよりはまだ目立たないと言える。

「と、とにかく行こうか。」

その場の雰囲気から一刻も早く逃げたい勇人の言葉を受けて、一行はそのまま歩き始めた。

お正月も一騒動 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 3

美沙と合流した勇人たちは、続いて一哉と、そして最後に光と合流した。その一哉と光の恋人に対する反応は、大きく違った。

もともと父親譲りのせいかな、どこか控えめな一哉は、紫に対して月並みな言葉を掛けたただけだった。これは彼の場合は彼女の振袖姿を見るのが初めてというわけではなかったからだ。

一方光の方は、紫の着物姿を見るのは当然のごとく初めてであつたし、さらに紫が恥ずかしそうに「どうかな？」などと言う物だから、顔を赤くして褒めちぎった。

「すつごく似合ってる!!」

「あ、ありがとう。」

もつとも、光が彼女を誉めていられたのはほんの30秒ほどだった。なぜなら彼の背後に、なにか黒いものを纏った紫が何時の間にか回りこんでいたからだ。

「は!?!ゆ、紫!?!」

「み・つ・る。優が可愛いのは私も認めるけど、変なことするんじゃないぞ!」

「しねえよ!というか、その眼はやめろ!」

紫の眼は、どこか恐ろしい感じがするものになっていった。絶対

零度の視線という奴だろうか。その眼からは明らかに「優に手を出したら許さない！」というメッセージが読み取れた。

それに対して、既に事情を知っている勇人ら一同は呆れと同感の表情をした。

「ね、姉さん。確かにちょっと怖いわよ。」

優に言われて、紫は表情を元に戻した。

「ま、そう言うわけだから。光！わかったわね！？」

「わかったよ。わかったから、とつととお前は一哉の所へ行けよ！」

「ふん！」

自分の恋人の隣に戻った彼女を見て、光は心の中で呟いた。

（シスコンめ！だいたいそんなことするわけないだろ！！けど・・・確かに優って可愛いから・・・て、何を考えているんだ俺は！？）

「？」

恋人が突然頭を抱えて不安げな表情をしたことに、優はただただ首を傾げるだけだった。

一方、一哉の隣へと戻った紫はと言うと。

「全く。」

「まあまあ。妹を思う気は分かるけど、そんなに心配ばかりしても仕方がないよ。」

自分自身妹を持つ一哉は、未だ不機嫌な表情を顔に残す紫に向かって、宥めるように言った。

「そうは言っけど、あの娘は生まれて1年も経ってないのよ。つまり世の中のことをわかってないのよ。もし光に言いように騙されたら・・・」

「どこかの昼ドラじゃあるまいし・・・紫だって光のことは知ってるでしょ?」

「それはそうだけど。」

「それに、あんまり心配し過ぎると今度は優さんが紫のことを変に意識して心配しちゃうんじゃないかな?」

「うーん・・・」

一哉に言われて考え込む紫。

「ま、僕たちと一緒にいる限りは大丈夫でしょ。折角の初詣なんだから、そんな心配ばかりしてたら損だよ。人生楽しく生きなくちゃ。」

「どこか釈然としないけど、まあ良いわ。そうする。それじゃあ一哉。レディをしっかりエスコートしてね。」

「もちろん。」

2人も勇人と美沙のように腕を組んだ。

そんな感じで少しばかりゴタゴタしたが、その後一行は交通事故に巻き込まれるとか、チンピラに絡まれるとか、テロリストに狙撃されるようなアクシデントにも遭わずに、無事朝風神社に着いた。

しかし。

「なんかお正月なのに閑散としているね。」

美沙が皆の気持ちを代弁するセリフを言った。

朝風神社は広い境内を持っているのだが、人の姿はまばらだった。普通お正月の神社といたら人でごった返すか、少なくともそれなりに活気があっても良いはずである。

それなのに、これは少しばかり異常である。

「まあ、仕方がないんですよ。」

少しばかり困っている一行の後ろから声が掛けられた。

「あ！理恵さん！？」

「いつの間に後ろに!？」

「僕たちが気づけないなんて!？」

上から優、紫、勇人の三千院兄妹のセリフであるが、優と紫はともかく、勇人のセリフは純粹に驚いたものだ。テロリストが500m離れた所から狙撃しても気がつける勇人が、気づけなかったのだから当然か。

もつとも、言われた理恵にしてみればどこか化け物扱いされているようで、気分の良い言葉ではない。(もつとも、ハヤテたちの子供たちは常人から見れば充分化け物だろう。)

「勇人さん、人をどこかの暗殺者みたいに言わないで下さい。」

「あ、ごめんなさい。」

勇人が反論することもなく謝る。

「それで、どうしてこれ(閑散としていること)が仕方ないの？」

紫が聞いた。

「いや、朝風神社は今年まで閉鎖されていましたが。つまりここに神社があること自体すっかり忘れ去られていて。だから、人が少ないんですよ。」

「それは、ちょっと寂しいね。」

一哉が同情の眼差しを向けた。しかし、理恵は笑みを浮かべて返

した。

「良いんですよ。まだ始めたばかりですから。それに私は嬉しいんです。死んだお母さんやお祖父ちゃんたちが大事にしてきた神社を再建できて。だから光さんのお母さんや、勇人さんたちのお父さんには本当に感謝しています。」

主を失った朝風神社を買い戻し、再建できたのは伊澄やハヤテがバックとなったおかげである。

「父さんにはまた伝えておくよ。・・・あ、肝心なこと忘れていた。明けましておめでとうございます。」

「おめでとうございます理恵さん。」

「明けましておめでとう。」

最初にするべき新年の挨拶を思い出し、皆理恵に向かってする。

「こちらこそ、よろしく願います。それから、皆さん振袖がよくお似合いですよ。」

理恵が振袖姿の3人を誉める。ちなみに美沙は勇人と同じく普段着姿である。

「ありがとうございます。理恵もその巫女服良く似合ってる。」

「ありがとうございます。巫女服なんてこれまで着たことなかったんで、少し恥ずかしかったんですけど。」

理恵が着ているのは、赤い袴の巫女服だ。彼女の場合外見は母親の理沙と瓜二つなので、もしハヤテらが見たら、理沙が生き返ったかのように見えるだろう。

もつとも、先ほどのからの会話を聞いているように彼女の場合性格は母親とは対照的だ。

「それじゃあ、とりあえず参拝しようか。」

「お願いします。それから拝殿脇でお守りやお札も売っているので、よろしかったらそちらもどうぞ。」

と言う訳で、一行は一端理恵とわかれてお参りをする。

「勇人君は一体何を願ったの？」

お参りを終えた美沙が勇人に尋ねた。

「秘密・・・美沙こそどんなことお願いしたの？」

「秘密だよ。」

母親譲りの笑顔と愛嬌ある声で可愛く答える美沙。実際には2人とも同じことをお願いしていたのだが。

他のメンバーも、お願いしたことはほとんど同じだった。今年1年が幸多き物になるようにと、恋人と上手く行くようにだ。

「ねえねえ、お守り買わない？お揃いで。」

「良いね。」

勇人と美沙の行動に、他のカップルも続いた。

「あ、僕たちも買いましょう。」

「そうね。」

「優の分も俺が買ってやるから。」

「ありがとうございます。」

まあ随分と甘いことで。ある意味朝風神社が閑散としているのは、
勇人達には好都合だったかもしれない。

拝殿脇に作られた建物で、一行はお守りを買おうとした。現在朝
風神社の正式な巫女は理恵1人なので、アルバイトが売っていた。

「すみません、お守り2つ下さい。」

「はい・・・あ、勇人。」

「て、サエキじゃないか？アルバイト？」

「そうです。」

そこにいたのは、イタリアからの留学生でソニアと氷室の息子で
あるサエキだった。さらに、彼の後ろからはひょっこりとアルバイ
トの巫女さんが姿を現したが、その顔も見覚えあるものだった。

「て、由希も一緒か!？」

サエキの後ろにいたのは、美希の娘である由希だった。またも顔見知りと出会ったことに、勇人は驚く。それと同時に、ある予感がした。

（顔見知りがこんなに集まっているなんて・・・これは何か起きる前兆かな？）

この予感は、間もなく当たることとなる。

お正月も一騒動 3 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 4（前書き）

ようやく眼鏡も出来たので、更新再開です。ただし目を悪くしたのは事実で、パソコンの時間を削っているので、更新間隔が遅くなる可能性があります。御了承下さい。

お正月も一騒動 4

友人との意外な出会いはあったものの、お揃いのお守りを買って、満面の笑みを浮かべた彼女から「勇人君ありがとう！」と言われて、2人ともちよつと顔を赤らめたりするという、お約束とも言つべき経過をたどりつつ、一行の初詣はつつがなく終わるかのように見えた。

しかしここで何もないまま終わらないのが三千院家、さらには八ヤテのごとくキャラクターの血を引く者の宿命である。

勇人・美沙ペアと同じように紫・一哉、優・光がそれぞれ甘い空気を撒き散らしながらお参りを済ませてお守りを買ったところで、騒動は発生した。

「うわあああ!!」

突如朝風神社の境内に悲鳴が響き渡った。当然その声はラブラブ初詣を楽しんでいた一同の甘い空気を吹き飛ばすに十分なものだった。

「何!？」

行き成り起きた若い女性の悲鳴に優がビックリ仰天した。

「絹を裂くような女性の悲鳴!？」

勇人が真剣な表情をする。

「と言うか、今のはどう聞いても理恵さんの悲鳴じゃないか!？」

紫が真剣半分、突っ込み半分で言う。

「社の方からしたぞ。とにかく、行ってみようぜ。」

そう言った光に促される形で、一行は社の方へと走った。

「理恵さん? どうかしたんですか?・・・て、これは一体!？」

扉を開けた勇人はそこで予想外の光景を目の当たりにした。社の中には理恵の姿はなく、先ほどまで彼女が握っていた箒と、彼女の草履の片方だけが床に転がっていた。

「これは一体どういうことだ?」

すると、光と優が前に出た。

「勇人兄さん、下がって!」

「え!?! 何?」

訳がわからないという表情をしている勇人に対して、優と光がいつになく真剣な表情をしていた。

「優にもわかるか?」

「もちろんです。これは悪霊の気配がしますね。しかも相当に性質の悪い。」

「『悪霊！？』」

2人のセリフに、全員が目を丸くした。ちなみにここにいる全員三千院家の幽霊神父を見ているので、悪霊の存在自体は信じている。また2人の力についても良く知っている。驚いているのはどうしてこんな所に悪霊が出たかということだ。

「そう、悪霊。じゃなきゃ、こんな重苦しい気配がするわけがない。それにこのかまがましい残滓から見て相当な力を持っているね。」

光が社の中に残る気配から、そう断言した。

「じゃあ理恵ちゃんは悪霊に襲われたってこと？」

美沙が先ほどの笑顔から一転して深刻そうな表情で聞く。

「おそらくは。」

優の答えに、全員の顔が強張る。

「とにかく、襲われたことは確かだけど、具体的に何が起きたかはまったくわからない。だから、とりあえず俺と優で社の中を一通り調べてみる。皆は悪いけど外に出てくれ。他の人間がいると気が散って上手く調べられないから。あと、勇人。悪いけど母さんと銀華婆ちゃんに連絡を取ってくれ。」

「わかった。」

こうして、初詣は一転して理恵の救出作業となった。靈感が強い光と優は社内の調査に入り、勇人は光に言われたとおり電話で伊澄

と銀華を呼び出した。その他のメンバーは心配するものの、自分の力ではどうにもならないので、ただ待つだけである。

15分ほどして、光と優の調査が終わり、それと同時に銀華と伊澄たちがやって来た。

「結論から言うと、理恵さんは悪霊にさらわれたと見て間違いないと思う。強烈な悪霊が残した力の残滓に加えて、彼女が姿を消したことや、空間に穴を開けたような痕跡があったから。」

「ほう、さすが光だな。」

光が結論を述べ、その内容が的確であったのか銀華が誉めた。それに後からやって来て自身も社内にも足を踏み入れた伊澄が付け加える。

「私も多分それで間違いないと思うわ。けど私にもわかりますが、この残っている霊力の感じから考えて、この霊はかなり悪質です。」

「悪質って一体どういうことですか？」

紫が伊澄に尋ねる。

「そうですね・・・簡単に言えば生前は神に仕える身だったのに、未だに成仏するのを嫌がってどこかのお屋敷に住み着いて、オタクライフを楽しんでいて、ついでに他の霊と釣るんでその屋敷の長男である美男子に女装させる・・・みたいな感じの霊でしょうか。」

「ああ、はいはい。なるほど、納得しました。」

伊澄の言葉に、紫を始めとして当の女装させられた勇人も今伊澄が言った悪質な霊と、そのイメージが良くわかった。

「けどそんな悪質な霊だと理恵さん、どんな目に遭わされるかわかったもんじゃないですね。」

真理奈のセリフに、全員の頭に悲惨な図が思い浮かぶ。特に年上になるほど、その図は当然ながら過激なものとなる。あんなことやこんなこと。具体的には・・・当然ながら文字にしては、さらに言えば口に出してはいけないようなことが頭に浮かんだ。

まあ簡単に言ってしまうえば、貞操の危機と言う奴だ。

両親を事故で亡くし、ようやくその両親が残した神社を復興したと思っただけ今回の事態の発生である。もしかしたら理恵は、このシリーズにおいてハヤテ並みの不幸な女かもしれない。

「それじゃあ、理恵さんを早く助けないと。」

「わかってるよ勇人。そのために銀華婆ちゃんに来てもらったんだから。と言う訳で婆ちゃん、手伝って欲しいんだけど。」

光の頼みに対して、銀華は不敵な表情を浮かべた。

「全く、人を頼りにしよって。まあ、可愛い玄孫のお願いじゃ。聞いてやるう。」

はちやめちや老人の銀華であるが、かつての伊澄に対してと同様に光のこともそれなりに可愛がっているのだ。

「今回の解決方法ははっきり言って1つしかない。悪霊がいる所へ直接行つて、理恵さんを連れ戻してくることだけだ。」

光の言葉に、紫が怪訝な表情をした。

「簡単に言っけど、悪霊が一体どこへ行つたのかわかるのか？」

「当たり前だ。だいたい悪霊って言つのは成仏されていない霊のことで、所謂あの世とこの世の間にある世界、例を上げれば三途の川の中州の様な中途半端な場所に集まっているんだ。時々テレビなんかで出てくる悪霊とか幽霊って言つのは、そういう世界からこの世に降りてきた気まぐれか、じゃなきゃよっぽどの怨念を持っているような奴なんだ。ああ、どこかの神父のようにこの世に留まり続けている変わった奴もいるけどな。」

「光君の言うとおりです。私もそうでしたから。」

自身も悪霊であつた優が頷いた。

「けど、それってつまり異次元に理恵さんが連れ込まれたってことでしょ？助けられるの？」

一哉の素朴な質問に、光は当然と言つ表情をした。

「もちろん。次元に穴をこじ開けて進入すれば良いんだ。ただし、母さんたちとは違って俺も優もまだそんな高度な技は使えないけどね。」

「ああ、だから銀華さんと伊澄さんと呼んだわけね。」

紫たちはどうして光と優が伊澄らを呼んだ本当の理由を悟った。

つまりは自分たちの手には負えないことを分かりきっていたわけだ。

「そう言うこと。と言う訳で、母さんに銀華婆ちゃん。よろしく頼むよ。」

「まあ、理恵さんを今回のことに巻き込んだ責任は私たちにもありますから。」

「それくらいだったら手伝ってやらんでもないがな。ただし、目の前で悪霊を見逃した責任は光にあるのだから、お前が行くんじゃぞ。」

「わかってる。」

「だったら私も行きます。」

優が言う。

「え、別に優は付いてこなくても。」

「1人より2人の方が良いでしょ？それとも私じゃ役不足ですか？」

優が少しムスツとした表情で言った。

「いいや、そんなことないよ。けど、危険だから。」

「そうだよ優。」

心配そうにそう言うのは、当然と言おうか姉の紫だ。しかし優は

そんな2人の言葉を聞こうとしない。

「大丈夫よ姉さん。私だって伊達に光君と一緒に妖怪退治しているわけじゃないですから。」

優が強い口調でそう言うので、光も紫もそれ以上反論できなかった。

「決まりですね。それじゃあ、2人を異次元の世界に送ります。」

そう言って、伊澄が懐からお札を取り出した。それを見た光と優は、伊澄と銀華の前に並んだ。

お正月も一騒動 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 5

さて、光と優が異次元の世界へと向かった時、哀れな理恵はどうしていたのであろうか？それを説明するためには少しばかり時計の針を戻さねばならない。

その時、理恵は社の中の掃除をしていた。しかしながら、突如彼女の前に黒い穴がぽっかりと開き、しかもものすごい勢いで彼女を吸い込んでしまった。

「キャアア!!」

この時の悲鳴が、外にいた勇人らの聞いた悲鳴である。そして彼女は吸い込まれた衝撃で脱げてしまった草履を残して、この世から消滅した。それと同時に彼女の意識はブラックアウトした。

次に彼女が目覚めた時、その視界内には1人の人間が立っているのが見えた。

「ようこそ。」

「ええと、あなたは一体誰ですか？」

彼女の目の前に立っていたのは、1人の男だった。特に何の変哲もない、どこにでもいそうな20前後と思しき普通の男だった。ただ特徴を上げるとするなら、地味な印象を醸し出している所だろう。

「僕は山下建。あなたをこの世界に呼んだ男だよ。」

「この世界？」

男の言葉に、理恵は辺りを見回してみる。そして今自分がいるのは明らかに先ほどまでいた神社でないことに気づいた。なにせ彼女の周りは上か下かもわからない、黒一色のよくわからない空間だった。ただし、地面に足を着いている感触だけはあった。

「ここ・・・どこですか？」

「ここはあの世とこの世の狭間だよ。」

「ええ！？ここが・・・伊澄さんから聞いていましたけど、本当に存在したんだ。」

まだ見習い退魔師とはいえ、それなりのことを教わっている理恵だった。そして彼女はあることを思い出した。

「それじゃああなたは悪霊なんですか？」

「悪が付くかは知らないけど、取り敢えずは生きてはいないよ。僕は15年前に交通事故で死んだからね。」

「とりあえず霊と言う訳なんですね？で、その山下さんの礼が私を誘拐してどうしようって言うんですか・・・まさか、私の生気を吸って殺すとか!？」

理恵は自分が何かマズイ事態に巻き込まれたことに、ようやく思い至った。

「ああ、大丈夫。命までは取らないからね。」

その言葉に理恵はホツとするとともに、もちろん問題の根本的解決に至っていないのはわかっているの、さらに質問を続ける。

「命の危険にないことはわかりましたけど、やっぱり何かする気なんでしょう？何をする気なんでしょうか？」

「フフフ・・・よくぞ聞いてくれた。実は君には僕の前でコスプレをして欲しいんだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

十数秒ほどの空白の後、理恵は訳がわからないという表情で問い直した。

「だから、君にコスプレして欲しいんだよ。わかる？色々な服を着るあのコスプレのことだよ？」

もちろんそれくらいことは理恵にもわかる。ただし、それをする意味と言うものが皆目見当が付かない。そしてそんなことのために誘拐された意味もまたわからない。

「何ですかそれは！？というかなんなんですかその理解しがたい理由は！？そんなことのために私をこの世界に誘拐したんですか！！」

理恵が人として至極全うな意見を言った。そりゃそうだろう。しかし、言われた山下の方はどこ吹く風とばかりに、全く気にしていない様子はなかった。

「そんなことのために誘拐したんだよ。実を言うとね、僕があつた世

へ行かず、この世界を彷徨っているのは、この世に未練があるからなんだよ。」

まあ未練がなければあの世へ行くのを躊躇したりしないだろう。そのまま20年近くも

この世に居ついている悪質な神父が良い例だろう。

「何ですか？その未練って？」

どうせくだらないことだろうなとは思いつつも、取り敢えず理恵は聞いておくことにした。

「それはだね、生きているうちにオタクライフを楽しめなかったことなんだよね。」

「はい！？」

また声を上げてしまう理恵。

「僕はね、高校生の頃からオタクの道に興味を持ったんだけどね、やっぱり周りの目もあるから、というか恥ずかしいから表立って楽しむことは無理だったんだよね。せいぜいこそこそ秋葉原や大須に出掛けるくらい。そしてようやく大学に入学して、1人暮らしを始めたから思う存分楽しもう・・・と思った矢先に車に轢かれちゃってね。そしてそのまま僕は死んでしまった。」

「うわああ・・・」

オタクライフ云々はともかくとして、若くして車に轢かれてしまったことには、理恵としても同情を禁じえないところである。

「と言う訳で、せめて可愛い女の子が可愛い服を着ている姿を目の前で（ここを強調）見てから成仏したいんだね。だから、人助けと思って「嫌です!!」」

遮るようにキツパリと拒否の意思を示す理恵。

「ええ！？いいじゃないか、これも人助けと思って。」

「何が人助けですか！？あなたが若くして亡くなったのには同情しますが、だいたい人を異次元に誘拐しておいて何ですかそのふざけた理由は!？」

「僕は至って真面目のつもりだけど。」

本当に真剣その物で言う山下。これについては価値観の違いであろうから、仕方がない。

「どこがですか!？とにかく、私は嫌です。」

理恵は断固拒否の姿勢を取った。まあ、年頃の娘が霊とは言え人前で無理やり色々と着せられるのは正直言って気持ちいいものではない。

それにこのままこう着状態となっても、きっと光が優が助けに来てくれるという期待もあった。

「どうしてもダメ?」

「ダメです!」

「そうか・・・ならば仕方がない。こちらとしても強行手段を採らせていただく以外にありませんな。」

すこしばかり凄みを加えた声で理恵に言う山下。当然、それは理恵の警戒心を喚起させる。

「な！？な、何をするつもりですか！？」

「そちらが着てくれないというなら、意地でも着てもらう以外にないでしょ？」

「い、嫌あああ！！」

彼から逃げ出そうとする理恵であるが、何故か体が動かない。

「ど、どうして？」

「言い忘れていましたけど、現在この空間は僕の制御下にあります。外から入ることも、中から出ることも出来ない。だから助けを呼ぶが、逃げようが無駄だよ。あなたには捕まった時点で選択肢はなかったんだよ。本当だったら穏便に進めたかったのだが、そこまで拒否されちゃ仕方がないね。」

勝ち誇ったように言う山下。当然理恵にとっては最悪だ。

「あ、ああああ・・・」

「と言う訳で、あなたには悪いが少しばかり付き合って貰いますよ。」

「うわーん！」

理恵の顔は完全に泣き顔となっていた。

そんな感じで理恵が不幸な目に遭っている頃、助けに向かった光と優は、伊澄に異次元に送り込んで貰ったところで、壁にぶつかっていた。

「うーん、この先に理恵さんと霊の気配があるのですが、何か結果みたいな物が張られていて、進めませんね。」

「こりゃ相手の力は相当なもんだぞ。参ったな、手持ちの道具じゃ突破できそうにないや。」

優と光はかなり強固な結界を前にして、四苦八苦していた。加えて、伊澄に送り込んでもらったのは良かったが、もともと初詣に来ていた2人であるから、商売道具は最低限のものしか持ち合わせていなかった。

2人は目の前の結界を破るために知恵を絞ることとなったが、当然時間を食うこととなり、理恵の救出は遅れるのであった。

お正月も一騒動 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 6

「私に一体何をするつもりですか？」

震える声で理恵は山下に言った。

「別に怖がらなくても良いよ。何もあなたに対して法を犯すようなことをするつもりは全くないからね。例え霊になっても、それくらの分別は弁えているつもりだから。」

クソ真面目でそんな事を言う彼に、理恵が突っ込む。

「人を拉致監禁した時点で既に法をおもいつきり犯していると思いますけど。」

「・・・それじゃあ、本題に戻って。」

「スルーしますか!？」

しばしの沈黙の後、山下は理恵の言葉をどこ吹く風とばかりに思いつきり無視した。

「まあ過去の細かいことは気にしないということで・・・それで、あなたにはこれから可愛い服を着て貰う。そして可愛い女の子が可愛い服を着ている姿を目の前で見るといふ僕の願いをかなえさせて貰うよ。」

その言葉に、当たり前だが理恵は物凄く嫌そうな顔をした。

「着て貰うって言われても、私は絶対に嫌ですからね。」

断固拒否を心に決め、強い口調で言う理恵。しかしながら山下は強気、と言つか余裕の表情だった。

「フフフ・・・あなたが例えば抵抗した所で無駄だよ。先ほども言ったとおりあなたが抵抗すればこちらでも強行手段を採らせてもらうだけだ。」

「そんなことしたら、また（ここを強調）法を犯すことになりますよ。嫌がる女の子の体に触るなんて明らかにわいせつ罪ですよ、それは。」

人として女として、当然のことだが男に身包み剥がされて無理やり服を着替えさせられるなど、されたくもないし考えたくもない理恵だった。

ところが、山下はそれに対してキョトンとした表情をした。

「なーんだ。そんなこと心配していたんだ。それについては安心してよ。別に君の体には指1本触れないし、むしろそんな必要ないから。」

「どういふことです?」

「さっきも言っただけど、この空間は僕の制御下にある。君が外へ出ることも、誰かが中へ入ることも出来ない。そして、僕の思い通りに動く世界でもある。」

「え!?!」

「さすがに人を殺すようなチートは出来ないけど、生きてない物を操ることくらいは出来るんだよね・・・こんな風に。」

その途端、理恵は全身に違和感を覚えた。突然着ている服の感じが変わったのだ。そして恐る恐る自分の体を見してみる。

「う、嘘!？」

理恵は自分の着ている服を見て驚いてしまった。先ほどまで来ていた巫女服は跡形もなく消失し、代わりに彼女が纏っているのはメイド服となっていた。ちなみに、千桜が着ているようなミニスカートの似非服ではなく、マリアが着ているような正統派のロングスカートのだ。

「ななな・・・」

「ね、言ったとおりでしょ。僕は君の体に指1本触れることなく、その服を変えることが出来るんだよ。うーん、それにしても可愛いね。さっきの巫女服も良いけど、メイド服も中々似合っているよ。」

「今こんな状況でそんなこと言われても全く嬉しくありません。」

理恵としては例え体に指1本触れられなくても、やっぱり着せ替え人形みたいになるのは嫌であった。当たり前のことだが。

と、そこで山下が気づいた。

「待てよ・・・これを応用すればあなたを素っ裸にすることも。」

そう言った途端、理恵が切れた。

バキーン！！（乙女の怒りの鉄槌が炸裂した音）

「殺しますよ。」

絶対零度の声で言う理沙。

「冗談です。さすがにそこまではしません。」

途端に態度が低くなった山下。と言うか何時の間にか立場が逆転している。別に山下は既に死んでいるから理恵の攻撃もどこまで効果があったかわかったものではない。それにこの空間は彼の好き勝手になるから、幾らでも報復可能だ。

しかし男の性か、女が怒り心頭に発して言う言葉に恐れ戦いたらしい。つついその場の雰囲気飲まれて低姿勢になってしまったようだ。

「とにかく、もしそんなことしたらあなたを地獄へ叩き落します。」

「はい・・・けど、それってつまり裸以外なら何でもOKでことですよね？だったら遠慮なく楽しませて貰います。」

理恵の言葉を曲解した山下が言う。もちろん、理恵は焦った。

「ちょっと！な、なんでそうなるんですか！？」

と言ってみるが、怒りの声ではなく焦りの声であるから山下は恐怖など感じるはずがない。むしろ、それによって調子に乗り始めた。

「じゃあ行きます!」

「やめて!」

理恵の悲鳴が空しく響いた。

それから先のことは、理恵にとって一生忘れられないこととなった。もちろん悪い意味でだ。それこそ彼女は文字通り着せ替え人形状態で様々な服を着せられることとなった。

黒と白を基調にレースとフリルをこれでもかと使ったゴスロリ服とか。某北高の制服であるセーラー服とか。ゼロの使いの魔学院のミニスカ＋ニーソの制服とか。中世風のドレスとか。どこの物かわからないようなブレザーとかワンピーススタイルの制服とか、とにかく色々だった。着替えさせている本人が過去の人間であるせいか、ネタが古いのが相当混じっていたが。

しかしながら、理恵はそんなこと気づきもしなかったし、気づく余裕もなかった。彼女の心の中は屈辱で満たされていた。

「うつうつ・・・ひどい、もうお嫁にいけない。」

半泣きで呟く理恵。

「まあまあ、そんな気を落さずに。別に体を穢されたわけじゃないんだし。」

「誰のせいだと思っているんですか!？」

「なんだよ。こっちだって気を使って露出の多い服は避けてあげたのに。だったらスク水とかブルマスタイルの体操服を着てもらおうかな。」

冗談めかして彼は言ったのであるが、理恵は冗談と受け取ってはくれなかった。

ゴチン! (乙女の怒りの鉄槌が炸裂した音パート2)

「悪ノリしないで下さい!」

「すいません。」

つくづく気の弱い幽霊だ。

「まあ、着せ替えさせてばかりで悪いから。お茶の時間にでもしましょう。」

そう言って山下は、どこからともなくティーセットを取り出した。

「コーヒーか紅茶かどっちにします?」

「え!?! だったら紅茶で。」

理恵がそう言うと、山下は手早く紅茶をカップに入れて彼女に差

し出した。

「どうぞ。」

「あ、ありがとう。いただきます。」

理恵は紅茶を啜った。

「あれ？何か普通の紅茶より美味しい気がします。」

「そりゃまあ、そんじょそらのインスタントじゃなくて本物だから。ああ、厳密には昔僕が飲んだ本物をイメージしたものと言った方が良かな。」

そう言って、彼自身自分の分の紅茶を入れて啜った。

「へえ、紅茶には詳しいんですか？」

「まあね。喫茶店でアルバイトしていたから。そのオーナーが随分と紅茶やコーヒーに凝っていた人でね。アルバイトの僕まで影響を受けちゃったわけ。本物だから高かったけど、店自体は流行っていてさ。随分とお給料も良かった。おかげで随分と趣味とか研究にお金も注ぎこめたし。」

「あれ？オタクなことが趣味じゃなかったんですか？」

「オタクについては、したかったけど出来なかったことだし。これから楽しもうとしたところで死んだから。だからそこまで詳しくもないよ。ちょっと齧ったくらいかな。メインの趣味は鉄道だった。」

「鉄道？」

「そう。列車に乗ってき、色々な所に旅するのが好きだったんだ。長野や銚子、広島とか本当に楽しかったな。行く先々で一杯人とも出会ったし。皆良い人だったし。まだまだ行きたい所はあったけど、まさかそれからすぐに交通事故で死ぬことになるとは思わなかったな。」

「そうですか・・・けど、同情はしませんよ。私にあんなことさせて。」

「はいはい。まあ楽しませて貰ったから。こんな性格だから生きている時、女の子にもてることなんてなかったし。誘拐でもしなきゃね。おかげで満足できたよ。」

「その誘拐される身にもなって下さいよ。」

その言葉に、山下は苦笑した。

「ごめんごめん。冷静に考えればそうだよ、バカなことをしたもんだよね。自分の欲に負けてこんなことしちゃって本当にごめん。けど、本気で言うけど色々な服を着た君は結構可愛かったよ。」

「え！？そんな風に謝って、お世辞を言っても無駄ですよ。」

「お世辞じゃないよ。本当だよ。生きてたら告白したいくらいだった。」

笑顔でそう言われた理恵の顔は、何故か少しばかり赤みがかった。

お正月も一騒動 6 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 7

「理恵さん!!」

「助けに来たぞ!!」

銀華と伊澄の助けを借りて、ようやく結界を突破した優と光の2人は理恵と山下がいる空間へと辿りついた。そしてそこで2人が見たのは思いも寄らぬ光景だった。

「あ。優さんに光さん。」

やって来た2人を見た理恵が、のほほんとした声で答えた。あまりに緊張感の無さに2人ともビックリである。

「理恵さん?」

「あの、無事なんですか?」

「ええまあ、無事と言えば無事ですし。何かされたと言えば・・・」

理恵は先ほど山下にされたことを思い出したのか、顔を赤くした。その彼女、今は元の巫女服姿に戻り、まったりと紅茶を飲んでいた所だった。

「あ、いらつしやい。」

一方理恵をこの空間に連れ込んだ悪霊である山下は、侵入してきた2人に攻撃するわけでも、どうしてここまでやって来たかを聞く

わけでもなく、理恵と同様のほほんとした雰囲気でコーヒーを啜っていた。

「ええと、これは一体？」

「何でこんなんびりしているんだ？」

緊張感MAXでやって来たのに、あまりにも場違いな光景が広がっているため、2人とも開いた口が塞がらない。

そんな彼らに、山下が声をかける。

「あの、そこで立っているのもなんですから、こっちに来て座ったらどうです。お茶入れますから。」

彼は2人にもお茶を勧める。

「あ、どうも。」

「それじゃあ遠慮なく。」

優と光もその場の雰囲気になまけて、一端は座りかけた。しかしながら、人の良い優は別として、光はそこまで甘い人間ではなかった。

「て違う!!!」

座りかけた所で立ち上がると、山下に向けて叫んだ。

「お前悪霊だろう!？」

「まあ、そうかそうじゃないか聞かれれば悪霊だね。」

澄ました顔で、お茶を飲みながら答える山下。

「しかもかなり悪質だろう!!」

「うーん・・・世間一般から見ればそうなるだろうね。」

「理恵さんを攫って、俺たちが付いて来られない様に強力な結界を張っただろう!!」

「まあね。ところで、お茶飲みます?」

光の問い詰めを他所に、山下はノホホンとしたままだ。あまりにもノホホンとしているので、光も呆れてきた。

「あんたどうしてそんなノンビリしてられるんだ?」

「ノンビリしたいから。というか、ノンビリしてたから。それで、あなたもお茶飲みますか?紅茶でもコーヒーでも私が知っているものなら一通り出せますので。」

取り敢えず、目の前の人間は無害そうだと言ったことがわかったので、光も座った。

「それじゃあミルクティーを。」

「わかりました。お嬢さんは?」

「ええと、じゃあレモンティーを。」

山下は2人が注文したお茶を入れると、そのまま2人の前に置いた。

「どうぞ。」

「いただきます。」

「……」

優は礼を言っただけのまま飲み始めたが、光の方はジーと山下の方を見ている。と言うか警戒している。

「大丈夫、毒なんか入ってないから。」

彼の言葉を証明するように、優が可愛い声上げる。

「あ、おいしい！」

彼女が屈託の無い笑みを浮かべたので、光もカップに口をつけた。

「あ、本当だ。おいしい。」

この瞬間、光も完全に毒気を抜かれてしまった。まあ、あのまま行けば問答無用で山下にお札を投げつけて、退治していたこと間違いなしだから、山下にとっては命拾いしたことになる。

お茶を飲んで一息ついたところで、先ほどに比べて遙かにトーンダウンした冷静な声で光は話し始めた。

「それで、これは一体どういうことなんでんすか、理恵さん？あな
た悪霊に攫われたんじゃないかなかったですか？」

「まあ、色々ありました。」

理恵は先ほど山下にされたことが恥ずかしいので、答えをはぐらかす。

「一体何があったらこんなノンビリとお茶なんか飲んでいられるのでしょうか？」

優も首を傾げた。

「だったら僕が説明しようか？」

と、山下が理恵に代わって説明をしようとしたが。

「ダメえええええ!!」

「はぐわ!!」

理恵が全力で突っ込んで阻止する。

「何もそんなに力を含めなくても・・・」

本気で突っ込まれた山下が理恵に対して抗議する。

「うるさい！人の恥ずかしいことを何勝手に言おうとしているんですか！！」

その遣り取りを、優と光は生温かい視線で見ていた。

「これは一体何の冗談でしょうか？」

「冗談と言うより、漫才だなこりゃ。」

人を攫った悪霊に備えてやって来てみれば、その悪霊が攫った人間に思いつきり突っ込まれ、漫才のような光景を繰り広げている。優の言うとおり、ある意味冗談と思いたい光景である。

「と言うか、本当に何があっただろう？」

光が首を傾げる。

「知りたい？」

山下が聞く。もちろん、その瞬間理恵が厳しい視線を彼に向ける。

「ああ、大丈夫。直接は言わないから。まあ、こういうことだね。」

と彼が言った途端、光は急に自分を包んでいる感覚が変わったのを感じた。

「？」

そして彼は自分の体を見回して叫んだ。

「なんじゃこりゃ!？」

「何って、メイド服。ついでに正統派の。」

そう、光の格好は何時の間にかロングスカートのメイド服に代わっていた。

「な、なんで!?!」

「だってここは僕が自由に出来る空間だから。だから僕がイメージしたように他人の格好も変えられるんだよ。」

「だからって何でメイド服!?!」

顔を真っ赤にして、光は山下に詰め寄った。

「いや、なんとなく似合いそうだったから。お2人もそう思うでしょう?」

山下が優と理恵に尋ねると、2人は顔を少しばかり赤らめて頷いた。

「「ええ、まあ。」」

実際女顔のハヤテや勇人ほどではないが、線の細い光のメイド服姿はいけていた。

「2人とも頷くな!とつとと戻せ!!!」

「はいはい。」

次の瞬間には、光の服は元に戻っていた。

「はあ、助かった。」

安堵の息を吐く光。

「けどなんとなく、今のわかりました。つまりその悪霊さんは、理恵さんを着せ替え人形にしていたと。そして思いつきり遊んで満足したから、その後は2人でお茶を飲んでいた。けどなんだかんだ言っても歳が近いので、話が盛り上がって大いに和んでいた。そこへ私たちがやってきたと。」

優が自分なりの推理を披露した。元がナギであるから頭の良い（ついでに性格も良い）彼女は、ヒナギク並の洞察力を発揮した。

「説明ありがとうございます。すばらしい洞察力です。それから僕の名前は山下です。」

「なんで、悪霊が理恵さんを着せ替え人形にするんだよ？」

「あ、それはですね。・・・」

山下は2人にも理恵と同じ説明をした。

「なるほど、生前のオタク願望を成就させるためにこんなことをしたと。」

「確かに母さんが言ったとおりだ。あの神父並に悪質だぜ。」

光が未だ目に怒りの色を込めたまま言った。

「けど、満足したと言っことは、もう理恵さんを連れ帰っても良いってことですよね？」

優の問いに、山下は頷いた。

「まあね、思いっきり楽しませてもらったから。彼女にも随分と迷惑かけちゃったし。」

理恵がホッとした表情を浮かべた。

「けど、あんたはどうするんだよ？成仏するの？」

光が聞くと、山下は渋い表情をした。

「どうしようかな・・・成仏するのは嫌だしな・・・けど、悪霊のまま彷徨うのも迷惑な話だしな。」

一応悪霊のまま彷徨うのが悪いこととわかっているようだが、成仏はしたくないらしい。

「成仏するなら今すぐにでもあの世へ送ってやるぜ。」

光が懷から出したお札を翳す。セリフの内容もあれだが、少しばかり怖い。優も理恵も少しばかり引いてしまう。

「そんな邪険にしなくてもいいのに。」

「やかましい！とつと決めろ！」

そうは言われても、山下はやっぱりあの世に行くのが嫌なようだ。

「まあまあ、光君も落ち着いて。」

「そうそう。そんなに熱くならないで。」

興奮気味の光を優と理恵が抑える。

「理恵さんは被害者なのにこいつの肩を持つのかよ？」

「それは・・・まあ、恥ずかしいこともされたけど、悪い人じゃないみたいだし。無理に今成仏させなくても。」

理恵の言葉に、ピシヤリと光が言う。

「甘い！絶対にこんな奴、また同じことをやるに決まっている。」

「こんな奴で悪かったね。まあ否定はしないけど。」

「否定しないんですか！？」

山下のやる気のない発言に、理恵が突っ込んだ。

「いやだって、あなたを攫って色々したのは事実だし。」

「あなた良い人が悪い人が全くわかりですね。」

「またも会話がどこか漫才みたいな感じになってきた。このままでは埒があかない。そこで、優が気の利いた発言をした。

「取り敢えず、一端帰りませんか？私たちの力なら、この人を現世

に連れてくるのも可能ですし。それから伊澄さんや銀華さんのアド
ヴァイスを貰ってはいかががでしょう？」

結局この案が通って、全員一端現世の朝風神社に戻ることもなっ
た。

お正月も一騒動 7 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

お正月も一騒動 8 (前書き)

2か月ぶりの更新です。

お正月も一騒動 8

何か色々あったものの、取りあえず無事（か疑問だが）に、理恵を連れて光と優は現実世界の朝風神社に帰ってきた・・・招かれざる客を連れて。

「で、その悪霊、もとい山下さんをここまで取りあえず連れてきたと？」

一通りの説明を聞き終えた勇人が、説明をしてくれた光に言う。

「そう。」

「どうもです。」

初めて顔を会わせた相手に対してであるせいか、山下はやたら低姿勢で言った。

「で、どうするのこれ？」

「いきなりこれ扱いですか!？」

勇人の言葉に反論する山下。

「だって、理恵を誘拐したような悪霊だし。」

「これで充分だよな。」

「だよな。」

他のメンバーからも賛同の声が上がる。もちろん、山下がうなだれたのは言うまでもない。

「まあそう言う訳で、俺としてはとつと成仏させたいんだけど。」

光の単刀直入の言葉に、山下が慌てる。

「そんな殺生な！ちょっと待ってくださいよ社長さん！」

「何が殺生だ！もう死んでるくせに。それと、どこかの外国人みたいな言葉で言うんじゃない！」

光がピシヤリと突っ込む。

「はいはい、漫才は良いから。取りあえず、あなたは成仏したくないわけなんですね？」

勇人が山下に尋ねる。

「はい。」

「そんなに成仏したくないんですか？」

「はい！」

先ほどよりも語気を強めて山下が言う。

「どうする？」

勇人が全員の方を向いて聞く。

「どうするって言われても・・・そもそも成仏以外の選択肢あるの？」

と至極全うな疑問を口にしたのは美沙だ。

「光や優、銀華さんの力を使えば人間として実体化できんじゃないの？」

「そりゃあ・・・」

「出来ないことはないですけど・・・」

2人は顔を見合わせた。

「しかしの三千院の坊主、死人を蘇らせるのはそれなりに厄介だぞ。」

不敵な笑みを浮かべながら、鷺ノ宮家の長老は言う。

「だよね。死者を蘇らせるなんて反則だよね。」

死者を蘇らせることは明らかに自然の摂理に反している。3人の力なら出来るであろうが、生き返らせた前例を作ると、後々問題になる可能性だったある。

「そうだろ？と言っわけで、ちゃっちゃんと成仏しちゃおうぜ・・・って待て。どこへ行く？」

雲行きが怪しくなってきたのを敏感に読み取った山下が逃げようとするのを、光が目ざとく見つけた。もちろん、すぐに術を使って拘束した。

「うわーん！」

山下が声を上げる。

「うわーんじゃない。あきらめ悪いぞ。どうせ一度死んでいるんだから、成仏なんてどうってこと無いだろ？」

「ひどい！目の前で喋ってお茶も飲んだ人を容赦なく消そうとするなんて！鬼！悪魔！人でなし！」

「人でなしはお前だろ！人を攫って色々しといて良く言っぜ。」

「堪忍や！ほんの出来心やったんや！」

「何故関西弁で言う？それから、そう言う如何にも犯罪者が言うようなセリフはやめい！」

「誰か助けてください！！！」

「だから変なネタを出すんじゃない。」

このままでは終わりそうにないので、勇人が割って入る。

「あのお2人さん？」

「「？」「」

「漫才はもう終わりにしてもらって良いかな？」

「「漫才じゃない!!」」

「「「漫才じゃなかったんだ・・・」」」

もはや皆呆れ顔である。まあ、外から見たらこの人たちの存在自体漫才に見えるかもしれないが。

「「「うるさい！余計な御世話だ（よ）（です）！！！」」」」

おっと、失礼。

「まあ、お互い落ち着いたらどうだ？」

若者同士が喧しく騒ぎ立てている中、1人老練な銀華がそう提案をした。さすがに伊達に長生きしていないという所か。1人だけ会話からのけものにされていたからではないぞ・・・多分。

まあ、何にしろやかましく漫才を続けていた一同は取りあえず彼女の貫録ある言葉で黙った。

「さて、山下とやら。お主そんなに成仏したくないのか？」

「はい。」

先ほどと同じく即答する山下。

「しかし、そうなると地縛霊として生きるくらいにしか他に選択肢

はないぞ？」

「はあ。今までそう生きて来ましたから、別にそれは構わないんですけど。」

すると、光が割って入る。

「それは絶対にダメ！また理恵さんみたいな犠牲者が出るに決まってる！あの神父っていう前例もあるし。」

「確かに、それは嫌だな。」

光の言葉に勇人も賛同する。何せ彼はついこの間、リインのお陰でトンデモナイめにあったばかりなのだ。また当のリインも「キラが被るから嫌だ。」とか言うかもしれない。

「理恵さんだってこんな奴が幽霊として徘徊するのは嫌だろ？」

光は理恵に問うた。

「ええと・・・まあ、確かに目に見えないのは嫌ですけど・・・」

と、その言葉に山下が注目した。

「それはつまり、僕が実体なら何の問題もないと？」

「こら！自分の都合の良い方に解釈するな！！」

「ハハハ・・・人間なんてそう言うものでしょ。誰が自分の都合の悪いことを言うもんか。まあ、そうすることが出来た人こそ、真に

尊敬されるような人なんだろうな。」

「幽霊のくせして、何偉そうに人間論説しているんだ？」

また話が脱線し始めた。

「これじゃあいつまで経ってもどうどう巡りだよ。それで、理恵としてはどうなの？君が今回の最大の被害者なんだから。」

「勇人の言うとおりだね。で、どうなの？」

勇人と紫の言葉に理恵はしばし考え込む。

「ええと、その・・・確かに山下さんは私を攫いましたし、色々と恥ずかしいこともされましたけど・・・根は良い人みたいですし・・・成仏させちゃうのはさすがに可哀そうかなと思います。」

この言葉に山下の顔は笑顔となり、対照的に光の顔は驚愕に染まった。

「ちょっと本気かよ？」

「そりゃ、色々着せられて恥ずかしかったですけど、人間に戻せるんだったら戻してあげても良いんじゃないでしょうか？」

理恵の慈悲深い言葉に、山下は涙を流し始めた。

「ありがとうございます！」

「光、被害者もああ言っていることだし、まあ成仏は観念してやっ

たらどうだ？」

銀華の言葉に、光としては逆らう気にはなれなかった。

「く・・・わかった。」

「ありがとうございます。」

「と言うわけで、光、優。取りあえずこいつを実体化してやれ。」

「銀華ばあちゃん、なんか急に態度でかくなっていない？けどな・・・本当に人間にするの？」

光はまだ未練ありそうだ。

「男だったら何時までもグダグダ言っな。それに隣の優だって、お前が実体化したんじゃし。」

「あれは事故だって・・・はあ、わかったよ。」

ようやく割りきったようだ。

「優、手伝ってくれ。」

「はい。」

と言うわけで、長い話し合い（と呼べるかちょっと微妙だが）の末に、優と光が術を使って彼を実体化させた。

「うう。20年ぶりに地面を直に踏めるなんて・・・生きているっ

てすばらしい！」

山下は感極まってそんなことを言った。

「で、人間になってどうするの？」

勇人が冷静な突っ込みを入れる。人間になっても戸籍とか色々と面倒なことがあるわけで。

「まあ、行政上の問題とかはワシがなんとかしておいてやろう。今回は色々と楽しませてもらったからの。」

と笑いながら言うのは銀華だ。

「て、婆ちゃん楽しんでたんだ。」

「じゃあ、働く場所は？」

「そうだな・・・どっかの喫茶店のバイトでも探すかな。」

喫茶店と言う言葉に、紫が反応した。

「あ、それだったら良い場所が。」

数日後、勇人と美沙は喫茶「どんぐり」を訪れていた。

「いらっしやい！て、勇人君に美沙さん。デートですか？」

「ええ。コーヒーお願いします。」

「私は紅茶を。」

「わかりました。」

注文を受けた彼は、手際良くコーヒーと紅茶を用意した。

「どうぞ。」

「ありがとうございます……うん、おいしい。」

一口飲んだ勇人が感想を漏らす。続いて美沙も。

「この紅茶も美味しいです。」

「そう言っただけだと、喫茶店で働いている甲斐があるって
んですよ。」

「店長は？」

「北斗店長は「ひまわり」の方へ行ってますよ。」

この店の店長である加賀北斗は色々と何故な人物である。その一
方で、ハヤテキャラとの関係は深い。だからこそ、彼の就職先とし
て簡単に斡旋出来たわけだ。

「どうです？ひさしぶりの人間としての生活は？」

「20年も経っていますから、色々と慣れないことも多いですけど、まあ楽しくやっています。」

「あれから理恵ちゃんに迷惑かけたりしてないよね？」

美沙がそんなことを尋ねると、山下は苦笑いしながら言った。なんと彼、現在は朝風神社に居候している。理恵が空いている部屋を提供したのだ。

「もちろんですよ。なにせ彼女は命の恩人ですから。いつか彼女にお詫びの意味も込めて恩返ししないと。」

「へええ・・・じゃあ、オタク趣味はやめたんですか？」

「まさか、続けてますよ。ああ、もちろん彼女に迷惑をかけない範囲で。」

その言葉に、今度は2人が苦笑した。

と、その時再び店の扉が開いた。

「いらつしゃい。ああ、今度は優さんと光さんか？」

「お前がちゃんと働いているか見張りに来たぜ・・・べ、別に顔が見たくなつたからじゃないからな。」

「オタクの前だからって、無理にそういう演技してくれなくても良いですよ。ご注文は？」

「あ、俺はコーヒーで。」

「私はミルクティーで。」

「わかりました…2人もデートですか？」

「いいや、仕事の帰り。」

「ちょっと倒すのに手間どって・・・」

と、またも扉が開いた。

「あ、理恵さん。」

優が入ってきた人物をみて言う。

「買い物の帰りに寄り道したんです。すいません、紅茶をお願いします。」

既に先客の準備をしていた山下は、ただ「ハイ」とだけ答えた。

「何か知り合いがどんどん集まってきたね。」

美沙が知り合いばかりが集まった光景を見て言う。

「まるで溜り場だね。」

勇人もそんなことを言う。

「別に皆さんのような人だったら、何人集まってもらっても良いで

すよ。
」

山下が嬉しそうに言った。久しぶりに人間としての生活を手にした彼にとって、何よりも嬉しかったのはこうした人としての交わりを持つことだったのかもしれない。

お正月も一騒動 8 (後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

最後が微妙ですいません。

いよいよ春休み 1

冬休みが終わって3学期が始まり、その3学期も期末テストが終われば残りほんのわずかだ。そしてそれさえも終われば、いよいよ春休みとなる。

短いようで長く、長いようで短く感じる1年と言う時間もいいよいよ終わることとなる。それが時間の流れに身を置いている者の宿命である。

それはまた、この物語の主人公である勇人たちにも言えることであつた。ただし、若い勇人たちが郷愁を感じることはない。彼らにあるのはただただ、未来への希望と期待だけである。

さて、勇人はテストが終わつたその日の午後、美沙・紫・一哉とともに喫茶どんぐりにいた。あの正月の事件以降、彼らはここに集まるが多くなつていた。

テストは午前中に終わり、あとは答案が帰ってくるのを待つだけである。もちろん、高校生である彼らには赤点による補習も有り得る筈であるが、少なくとも勇人や紫にしてみれば、赤点など有り得ない存在であつた。

「いよいよ春休みだけど、皆どうすごすつもり？」

勇人が集まつたメンバーに問いかける。

「家は毎年家族で旅行に行ったりするけど、今年はお母さんたちがあれだからね。」

紫が言うあれとは、ナギの妊娠のことだ。既に妊娠7ヶ月に達しているので、お腹も大分大きくなり、とてもではないが旅行など出来ない。この状況は他にマリア・伊澄・咲夜にも当てはまっている。皆さん、そろいも揃って御苦労様である。

「私はそんな余裕なかったから、だいたい家で過ごしていたよ。」

そう言うのは美沙だ。彼女の家は母親の泉と2人だけの母子家庭だ。そのため、貧しいとは言わないまでも、勇人らのようにポンポンと旅行に行く余裕はなかったようだ。

「あ、ごめん。悪いこと言っちゃったかな。」

勇人が彼女のことを思って、謝る。

「別に気にしなくて良いよ。」

美沙は母親譲りの笑顔を夏以来の彼氏に向けながら優しく言った。彼女の姿はどこか慈愛の女神のような物を感じさせる。

「私のことを気に掛けてくれてありがとう。」

母親の泉はどこか天然と言うか抜けている感じのある娘であったが、美沙はそんな彼女に似ているようで似ていない部分があった。

「あ・・・」

勇人はそんな彼女の姿に見とれてしまう。しかし、その時間は短

かった。

「お2人さん。仲が宜しいことは結構ですが、店の中でそんなあからさまな光景見せびらかさないで下さい。」

何時の間にか彼らの机の前には、目の前で繰り広げられているピンク色の光景に呆れている山下が立っていた。

正月の事件で理恵を誘拐して、その後紆余曲折の末地縛霊から人間へと戻った彼は、今この店の従業員をしている。本人曰く、紅茶やコーヒ―を淹れる自信があったが、実際その腕前は中々のものだ。現在彼が「店長代理」に指名されたことからわかる。

「わ！？山下さん。何時の間に？」

「今の今です。注文の品を持ってきたんですよ。まあ、それはともかく、店の中であまりイチャイチャしないで下さい。周りのお客様さんの迷惑です。」

彼の言うとおり、周りにいる他のお客様さんは若い者の色恋沙汰に生暖かい視線を向けている。少しはなれたところで原稿を書き上げていた漫画家に至っては、涙をながしていた。おそらく羨ましいのだろう。

「「御免なさい。」」

勇人と美沙が頭を下げる。どこことなく滑稽な光景である。

「お願いしますね。さ、どうぞ。」

彼は全員の前に注文された品を置いた。

「いただきます・・・うん、おいしい。」

注文したコーヒーに口を付けた勇人が感想を口に出す。

「本当。けど、ちょっと何時ものと違うような。」

紫が首を傾げる。

「ええ。豆の分量を少しばかり変えましたから。さすがは三千院家のお嬢様だ。」

「こう言う所でそれは言わないで下さい・・・そう言えば、山下さんは春休みをどんな感じで過ごしたんです？やっぱ1日中家に引きこもってゲームとか。」

「バカ言っちゃいけませんよ。僕は隠れオタクですよ。そう言うことは、おおっぴらには出来ませんでしたよ。春休みだと、旅行をしてましたね。」

「家族ですか？」

一哉が尋ねると、彼は首を振った。

「違います。一人ですよ。僕は生きていた頃、人と付き合うのが苦手でしたから。大人数で旅をするのは馴染まなくて。他人と一緒に旅行したこともありましたが、それも本当に仲の良い先輩とかだけでしたね。」

「それで寂しく無かったんですか？」

勇人の質問に、彼は苦笑いする。

「別段そんなことは感じなかったです。僕は僕ですから。それで満足していましたから。まあ、君たちは一緒にいてこそだから、僕の考えを押し付ける気はありませんよ。まあ、どっちにしろ旅は良いですよ。最初の一人旅は怖かったけど、色々な人と出会えて楽しかったな・・・で、いけない。話し過ぎました。それじゃあごゆるりどうぞ。」

そう言っていると、彼はカウンターへと戻って行った。

「旅か・・・ねえ、だったら私たちもどこかへ行かない？」

「「「え？」」」

紫の言葉に、3人がハツとする。

「考えてみれば、私たち自分たちだけで遠出したことなかったじゃない。」

「ああ、そう言えばそうだね。」

「確かにそれ良いかも。」

「良いですね。」

3人も賛同した。

「他の皆も誘おうよ。」

「そうだね。」

「そうになると、色々決めなくちゃいけないね。何処へ行くかもそうだし、泊まるなら自分たちで探して予約しなくちゃいけないし。」

話し始めると、皆楽しくなってドンドン中身が膨らんでいく。何処へ行こうか。どのように行こうか。自分たちだけでどこかへ出かけるという嬉しさが、彼らを突き動かす。

それから程なくして、他のメンバーも集まってきた。生徒会の仕事を終えた朴と櫻が店の扉を開けて入ってきた。

「よう勇人、何やってんだ？」

「あ、先輩に櫻。実は・・・」

勇人は今自分たちが話していたことを彼らにも話した。

「良いね。けど、俺はパスだな。ここも含めてアルバイトがあるから。」

忘れられているかもしれないが、朴は奨学金を得て白皇学院へ入った苦学生である。そのためアルバイトをしてがんばっている。

「そんな。是非先輩にも来て欲しいのに。」

「悪いな。俺の分まで楽しんでこいよ。」

本心では彼も行きたいのであろうが、決して口にも顔にも出さないのが彼の立派なところである。

そんな彼だからこそ、連れて行って上げたいのが後輩として、人としての情というものである。しかしながら、朴は非常に真面目でズルとか情けを受けることはあまり好まない。

例えば勇人が休む分のアルバイト代を工面すると言っても、絶対に許さないであろう。

そんな彼に助け舟を出したのは、あの山下であつた。彼は朴に注文の品を届けるなり言った。

「朴君。後輩からの思いやりを無下にするもんじゃないですよ。2く3日空けるくらいなら罰はあたりませんよ。むしろ、日頃から真面目に働いている君にはそれくらいの御褒美を上げるのが筋というものですよ。」

「店長代理・・・けど、他のバイトもありますから。」

「大丈夫。多分、他の雇い主も僕と同じ気持ちだと思えますよ。そうならないのは、よっぽど心の狭い人ですよ。」

「はあ。」

「そんな人がいたら言いなさい。ボスと一緒に労働基準法違反で訴えてやりますよ。」

「いや、そこまでする必要は・・・」

「とにかく。君もまだ若いんだから（ついでに山下も死んだ時の年齢で生き返ったので外見は若い）、もっと楽しまなくちゃね。」

「そうですよ先輩。先輩は、皆と一緒に旅行するのが嫌なんですか？」

櫻が意地悪な質問をした。ここまで言われては、朴としても断れない。断ったら彼の方が薄情者である。

「はあ・・・わかったよ。俺もその計画に混ぜてくれ。いい思い出を作ろうじゃないか。」

「「「「「やった！！」「」「」」」」

こうして朴も正式に加わって旅行の計画作りが始まった。もちろん、たった1日で決まることではない。参加者も増えるであろうし、行き先や日時が大まかに決まっても、細かい点をしっかりと詰めて行かないといけない。

この日は大まかなことを決めただけであつた。

その後、勇人らは具体的な計画を立てるために動き始めた。翌日の登校後から、勇人や紫たちは親しい友達を誘い始めた。優や光、真理奈たちと言った者に声をかけた。

この内、真理奈については本人が部活の大会に出ることと、その練習のために駄目であつた。

「私は夏休みの旅行で思いっきり楽しみましたから。又の機会まで我慢しますわ。」

彼女も母親譲りの笑顔でそう返したのであった。さすがに大会の日程を変えることなど、勇人たちには出来なかった。

真理奈の不参加は残念であつたが、全員の親からも許可が取れて行き先も沖縄と決まつた頃、思いも掛けない事態が彼らを襲つた。

「そ、そんなあ!!」

テストが帰つてきた時、美沙は思わず声を上げてしまった。まさかの数学で赤点を取ってしまったのであった。

いよいよ春休み 1（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

いよいよ春休み 2

「うわーん！！何で！？何でよ！？しかも1点足りないだけなのに！！」

赤点の答案を持った美沙がそう叫びながら泣いていた。当然である。赤点ということは春休みに補習授業となるからだ。すなわち、勇人たちと練っていた旅行にいけなくなるということだ。

たとえそれが1点足りないだけという現実でも。可哀想なことである。しかしながらテストの点が悪いのは本人の努力も多分に関わるのであるから、皆もただ単に同情するわけにはいかない。

「旅行に行けなくなるのは可哀想だけど、こればかりはね。」

「テストの点数が悪いのはどうしようもありませんから。」

紫と優の三千院姉妹が他人の気持ちを代弁するセリフを言った。実際皆そう思っていたし、泣いている美沙自身も責任は自分にあることくらい判っていた。

「うつ・・・皆、私の分まで楽しんできてね。」

と、もう完全に諦めモードであった。そんな中で、1人は勇人だけが彼女に同情する姿勢を見せた。彼女が恋人であると言う理由もあるが、それ以上に勇人としては納得行かない点があったのだ。

「けどどうしてだ？あれだけ一緒に勉強したのに・・・特に数学は。」

美沙は並み居るライバルを蹴落として（という表現が妥当かどうかは別として）勇人のハートを射止めた少女。つまり、勇人の恋人であるわけだ。

元々女の子には優しいという性を父親から受け継いだ勇人は、もちろんテスト前に美沙に対してミツチリと不得意な部分を教えていた。美沙は以前から数学が不得意と言っていたので、特に数学は重点的にやり、勇人としては平均点以上は出せるはずだと太鼓判を押していた。

それなのに、その半分にも届かないなんておかしいと思っていた。そしてこの疑念は当たることとなる。

「ねえ美沙、ちょっとその答案見せてよ。もしかしたら先生の方が何か間違えているのかもしれない。」

「うん。」

「勇人君、幾ら彼女だからってね・・・」

櫻や紫が呆れて見つめていたが、それを気にすることなく勇人は美沙から答案を受け取った。すると。

「随分とケアレスミスが多いな。これなんか正解をわざわざ書き直している。」

ある問題を見た勇人が言った。その部分には鉛筆の消し残りが薄っすらと残っていたが、その数字は正解の数字であった。ところが、美沙はそれを消してわざわざ間違った数字に書き直している。答案

の隅にある計算式もあっている。

そうした問題がいくつもあった。緊張のせいだと言ってしまえばお終いだが、彼女も初めてテストを受けた高校1年生ではない。

「だって・・・桂先生が・・・」

桂先生という単語に、全員が反応した。

「伯母さんがどうかしたの？」

「お母さんが何かしたの？」

櫻と未来が尋ねる。彼女の母親はヒナギク。そしてその姉が現在
勇人らのクラスの担任である雪路だ。また未来は薫と雪路の娘だ。
すなわち雪路は彼女の母親だ。

血縁者であるだけに、雪路の性格（特に金に対する執着と酒飲み）
は熟知していた。

ちなみに、本人の名誉のために言っておくと、未来は母親と父親
が反面教師になっているので、至って性格は真面目である。むしろ、
手本とした叔母であるヒナギクや従姉妹の櫻に近い。

「桂先生が見回りで来た時、私の方をジッと見てくるんだもん。そ
れで、数字を直したらそれを止めるから。」

「・・・ちよつと待った！！」

それって明らかに妨害じゃないのかと全員思った。そしてグッド

タイミングと言おうかバッドタイミングと言おうか、その本人である桂雪路がやってきた。

既に40代だというのに、旦那さん（薫）は教頭になっていると言うのに、未だに昇進出来ないダメダメ教師だ。どうしてこれで離婚とかクビという話題が出ないのか不思議な人間である。

「あらあ、皆お揃いで何やってるの？」

そして彼女は、美沙の答案に視線をやると一瞬を口元を緩ませた。明らかに怪しい。ただし、勇人らは何も言わなかった。

「いやあ、瀬川さん今回は残念だったわね。たった1点だけ足りなくて赤だなんて。けど安心しなさい、ちゃんと私が補習授業してあげるから。それで進級は出来るから。」

笑顔で美沙に向かって言う彼女に、姪の櫻が言う。

「へえ、伯母さんが美沙さんの補習授業してあげるんだ？」

「そうよ。」

続いて未来が発言する。

「それじゃあ、その分の手当てもしっかりと出るって訳よね？」

最初優や美沙は櫻たちが何を言っているのかわからなかった。

「もちろんよ。ちゃんと上乘せされるはずよ。だって余分に働くんだからね。」

嬉々と言う彼女の姿に、櫻と未来は何かを確信したようだった。

「へええ・・・その手当て欲しさに瀬川さんのテストを邪魔したのね？」

「そして赤点を採らせたのね？」

櫻と未来が申し合わせたように言った。すると、明らかに雪路は「ギクツ！！」とした表情をした。

「な、ななな、何のことかしら櫻に未来？」

「明らかに今ギクツて言ってたわよね？」

櫻がさらに追求すると、雪路の顔色が明らかに青くなっていった。しかしながら、もちろんそんなことを認める彼女ではなかった。

「な、何よ！？ま、まさかあんたたち私が本当にそんなことしたと思っているんじゃないでしょうね？私が春休みの出勤手当て欲しさに、数学が不得意な瀬川さんに見回りの振りして圧力を掛けて、赤点を採らせたとも言つの。そんなに私が金に執着した人間だと思っっているの！？」

「思う！」（勇人）

「可能性は否定しません。」（紫）

「充分に考えられるわ。」（櫻）

「別にそう言う事実があつたとしても、私は驚きませんね。」（優）

「お母さんならやりかねないわね・・・というか明らかにやりましてたつて言ってるし。」（未来）

「・・・（苦笑い）」（美沙）

生徒（プラス親族2人）の白い視線に一瞬うろたえるものの、雪路はすぐに怒って反撃を開始した。

「うるさいうるさい！だいたい証拠がないじゃない！証拠もないのに先生に罪を着せようとするなんて、人間として失格だわ！」

さっきあれだけ言っておいてよく言う。どっちが人間として失格なんやら。

「証拠ならありますよ。ちゃんとさっきの言葉録音しておきましたから。」

すると、勇人がどこに隠し持っていたのか小型の録音機を取り出した。彼が再生ボタンを押すと、さきほどの彼女のセリフが流れ始めた。

「い、何時の間に！！」

「僕たち三千院家の人間は、どんな犯罪にでも対処できる能力がデフォルメで備わっているんですよ。」

なんだそれは！？と三千院家以外の人間が目をむく。

しかしながら、もはやこのような奇妙奇天烈な光景に驚かない（驚けない）雪路はサツと体を構える。明らかに戦闘態勢だ。

「ク！こうなったら仕方がないわね。春休みの手当で分でドンペリを飲むために、その録音機を実力行使で奪い取らせていただくわ。」

「……で、結局それが動機！？」

一同が呆れ帰る。それに構わず、雪路は続けた。

「ついでに、日頃からいちゃいちゃしているカップルへの宛てつけね。」

「何よそれ！？」

「中年女性のひがみですね。」

紫がさらに呆れ返り、もはや呆れを通り越した優がズバツと言った。

「しかしそうになったら、なおのことあなたの罪を暴かなければなりませんね。学校の中で暴れるのは気が引けますが、全力で迎撃させてもらいます。」

勇人も身構える。愛する人を守るため、目の前の人の道を外れた教師に懲罰を加えるために、戦おうとする意気は中々のものだ。しかしながら、学校の中では止める。確実に校舎を破壊する。

「待つて勇人君。」

と彼を制するのは櫻だ。どうやらこの争いを止めるようだ。

「櫻!？」

「今回のことは私の伯母が起こしたこと。同じ血を分けた者として、私がきつちりと落とし前をつけるわ。」

訂正。止めるわけではないようだ。

「だったら私も加勢するわ。母親と戦うのは不本意だけど、さすがに今回のことは許せないから。」

未来も櫻に並んで身構えた。このまま行くと、被害は更に大きくなりそうである。既に彼女らの気迫に恐れをなしたのか、他の生徒たちの姿は消えている。

「むうう!娘と姪のくせして私に齒向かおうなんて。いいわ、やれるものならやってみなさい!」

雪路の挑発に、櫻が動いた。

「正宗!」

母親と共同使用している木刀の名を叫んだ。鷺ノ宮家より譲って貰ったこの剣を、母親譲りの体力を持つ彼女に持たせれば鬼に金棒だ。

しかし、一向に正宗が現れる様子がない。

「ちょっと、何で来ないのよ?」

「ふふふ・・・櫻、あんたの人望もその程度のようね。」

「お母（伯母）さんが言うな！！」

「母親と伯母に逆らうことがどれほど恐ろしい事が、その身をもつて思い知るがいいわ。」

教師として如何なものかと思える発言であるが、何にしろ櫻と未来のピンチである。慌てて美沙を避難させつつ、少しばかり距離を離れていた三千院兄妹が参戦しようとする。

その時であつた。

「いい加減にしなさい！！」

「へぶ！！」

突如雪路の頭が木刀でぶん殴られた。（普通だつたら大怪我なので止めましょう。）

「だ、誰よ私の邪魔をするのは・・・て、ヒナアアア！！！！？
???」

雪路が絶叫した。彼女の視線の先には、正宗を持って腰に手を当て仁王立ちするヒナギクの姿であつた。もちろん、彼女の周りには何やらどす黒い炎のようなものが見える。

「騒がしいから見に来てみれば。お姉ちゃん・・・まさかお金欲しさにそんなことするなんて・・・ハヤテ君の入試の時から一向に成

長していないみたいね。」

その声には、何ともいえぬ冷たさが混じっていた。明らかに怒っている。

「ヒイイ！！許してヒナ！！いえ、理事長！！」

ヒナギクは現在白皇学院の理事長だ。すなわち、雪路の上司だ。生殺与奪権を持っていると言っても良い。

「ちよつとこつちに来なさい。」

「やめてええええ！！！！」

ヒナギクは雪路を引きずって教室から出て行った。そしてそれから間もなく「うぎゃああ！！！！」という女性の悲鳴が遠くから聞こえてきた。何が起きたか書くまでもないだろう。

「「「「「.....」」」」」

勇人らはもはや何も言えず、ひたすら沈黙していた。

それから間もなくして、ヒナギクが帰ってきた。そして彼女は美沙に向かっていった。

「御免なさいね瀬川さん。お姉ちゃんが御迷惑をかけて。ちゃんと言い聞かせておいたから、安心して。」

「は、はい。」

先ほどの声を聞いたせいか、どこか緊張している美沙。

「そんな怖がらなくてもいいのに。とにかく、あなたの赤点は取り
敢えず私の権限で取り消しておくわ。後日ちゃんと追試をやるから
安心して。」

「ほ、本当ですか？ありがとうございます。」

「けどちゃんと勉強してくるのよ。」

さすがヒナギク。ちゃんと念を押しておいた。

「はい！」

「良かったな美沙！」

「うん。けど、もう1回テストを受けなくちゃいけないから、勇人
君。また勉強よろしくね。」

彼女が時々見せる最高の笑顔でそう言われ、勇人は顔を赤らめた。

「え？・・・うん。」

その光景に紫たちはあきれ返り、ヒナギクは「青春って良いわね。
」と言って笑った。

その後勇人らの助けがあったこともあり、追試で美沙は見事合格
ラインを大きく上回る70点をマークし、無事に皆と旅行に行ける
こととなった。

ちなみに雪路は、ヒナギクの私的制裁に加えて、3ヶ月の減俸処分となった。

いよいよ春休み 2（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

久しぶりに雪路と未来親娘が登場しましたが、雪路が完璧に悪役になりました。

いよいよ春休み 3

雪路の野望を跳ね除けて、めでたく美沙も春休みに出かけれることとなった。後は行き先や経路、宿泊先などを決めるだけであった。

勇人ら三千院家の関係者であるなら、海外どこか宇宙にだって行けるだろうか、生憎朴や櫻、美沙と言った面々はそんな金銭的余裕は無い。もちろん勇人らが彼らの分の費用を持つという手もあるが、それは本人たちが良しとしないことであった。

そう言うわけで、行き先は国内に決まった。そして東京から手軽に行けると言うことで、勇人たちは行き先を山梨県の河口湖に決めた。有名な遊園地もあるし、温泉など宿泊施設もある。

東京から電車で2時間あまり。直通電車も出ているので非常に便利。近いから日帰りだって出来る場所である。つまり万が一何か起きて直ぐに帰ってこられる場所だ。もっと遠い場所でも良かったのだが朴に配慮して1泊2日の短い旅行にしたので、結果的にこれで決まった。

最終的に行くことになったメンバーは勇人ら三千院家の3人、美沙、理恵、由希に朴と櫻。それから光と一哉にサエキの3人である。これ以外のメンバーは部活などと予定が被ったため今回はキャンセルである。

そして美沙の追試から数日後、いよいよ白皇学院は春休みへと突入した。

「うーん良い天気！」

天気に恵まれた旅行当日早朝。三千院家の玄関に、紫の元気な声が響く。

「絶好の旅行日和だな。これなら絶対に良い旅になるな。」

母親のナギが紫と優、そして勇人を見る。その彼女、既に妊娠7ヶ月に差し掛かっており、お腹が大分膨らんでいる。

「いいか勇人。くれぐれも気をつけるんだぞ。最近は少なくなっただけど、三千院家の財産を狙ったり、恨みを抱いている人間は多いからな。いづどこに刺客が現れるかわからない。いざと言う時はちゃんと皆を守るんだぞ。」

父親の勇人が何やら物騒な見送りの言葉を息子に向けて言っていた。ただし、あながち的外れな内容ではない。実際練馬区の半分以上の土地を所有していると言われる三千院家の財産はそりゃもう凄まじい。多分日本に軽くもう二つぐらい自衛隊を造れる程だ。

そのためハヤテやナギのみならず、子供たちや同居しているマリアや真理奈たちだって命を狙われたことがある。

ただし、ハヤテもナギも人ではない・・・ではなくて人とは思えないような人間だから、これまで暗殺の類は全て跳ね返してきた。多分今のハヤテなら、某13の数字が付く狙撃者だって簡単に返り討ちに出来るだろう。

そんな彼らの血を引いている勇人と紫、そして元がナギのドッペ

ルゲンガーであり、鷲宮家も認める所の霊力を持つ優のコンビなら、よっぽどのが無い限り大丈夫だろう。

「父さんも心配性だな。大丈夫だよ。」

勇人は楽観的な言葉を吐くが、ハヤテは楽観できなかった。

「勇人・・・僕がナギさんを守るために命の危機に瀕したのはお前と同じ位の時だった。油断していると、後でとんでもないことになるぞ。」

実際に体験した人間の証言は重い。

「わかったよ。」

「よし。それじゃあ気をつけて。そして楽しんでこいよ。くれぐれも美沙さんたちに迷惑を掛けないように。紫と優もだぞ。」

「うん。」

3人に念を押し終え、ハヤテとナギは子供たちを見送る。

「いつてらっしゃい！」

「じゃあ、行ってきます。」

3人は集合場所とした屋敷に近い私鉄線の駅へ向かって出発していった。その3人の姿が見えなくなると、ハヤテとナギは先ほど子供たちの前では出来なかった会話を始める。

「なあハヤテ、子供たちで大丈夫かな？」

「大丈夫ですよナギさん。あの子達だってもう子供じゃないんですから。」

「けどお前も言っただろ。もしどこかで誰かに狙われたらどうするのだ？今回は伊豆の時の様に誰かを付けたわけではないのだろ？」

夏の伊豆旅行の時は、子供たちの移動中の見張り兼護衛としてサキの息子にそれを頼んだが、今回は付いていない。

しかしながら、ハヤテは笑顔で言う。

「そう言うと思って、実はこちらで内々に手配しておきました。」

「ほう。ハヤテがそんなことをするなんて珍しいな。」

護衛を雇うなど、あまりハヤテがやりそうにないことだけに、ナギは首を傾げた。

「ナギさんには適わないな。実はそれを提案したのはクラウドさんなんですよ。この間相談したら、教えてくれて。」

「クラウドの紹介か・・・逆にちよつと心配だぞ。」

ナギがクラウドが聞いたなら泣きそうな発言をする。もっとも、実際クラウドの場合エイトの件や咲夜の船が沈められた時などどこか抜けていると言えるのは咎められない。

「幾らなんでも、それは言い過ぎでは？」

「だってハヤテ、クラウドはあのエイトを優秀なロボットとして連れてきたり、咲夜の船を爪の甘さで沈めてしまったのだぞ？」

「……」

そう言われると、ハヤテも少しばかり不安になってきた。しかしながら、今さらそんな事を言っても遅いわけで、なんとか安心できる材料を思い出す。

「そう言えば、今回雇った人はあの座堂家にも時々雇われている凄腕らしいですよ。」

すると、ナギは安心して言った。

「だったら安心だな。座堂家と言えば我が三千院や愛沢家には負けるが、それなりの資産家だ。その座堂家が雇うような人間なら大丈夫だろう。」

「何でも数代に渡ってのプロだそうですよ。」

と、ハヤテはナギを安心させるために言ったが、やはりクラウドが勧めてきた人間ということ、どうしても少しばかり心配になったのであった。

そんな事も露知らず、勇人たちは他のメンバーと合流すると、私鉄で最寄のＪＲの駅まで行き、そこから河口湖へ向かう直通列車に

乗り込んだ。

もちろん彼らは青春真っ盛りな訳で、列車に乗って椅子を回転させると向き合ってそれぞれゲームを始めた。電車の椅子というのは通常2人がけで、向かい合っても4人で一組にしかない。だから今回は勇人・美沙・朴・櫻と紫・一哉・優・光、そして理恵・由希・サエキの3グループにわかれた。

今回の場合、理恵だけが彼氏無しの仲間はずれ状態である。彼女とフラグが立ったか微妙な所となっている元地縛霊の山下は、この日は仕事のため来られなかったのだ。

それでも、彼女も仲間たちと一緒に旅行できるということで思いっきり旅を楽しんでいた。

「はい上がり！」

列車内でやるゲームの定番である大富豪で、美沙が一番に抜けたので喜びの声を上げた。

「美沙強いね。これで4連勝だ。」

勇人が恋人が喜ぶ姿を見て微笑む。

「ああ、どうして一番に慣れないのかしら!？」

母親譲りの負けず嫌いな性格である櫻が、中々一番に成れないことに苛立ちの声を上げる。そんな彼女を、朴が苦笑しながら窘める。

「櫻、そこまで一番になることにこだわらなくても。」

「何事も一番にならなきゃ気がすまないんです。瀬川さん、もう一度よ！」

「うーん・・・別に成りたくて一番になっているんじゃないんだけど。楽しいからもう1回やろう！」

「じゃあ、カードを切るね。」

再度大富豪をやるために、勇人がトランプを切り始めた。

他の7人も、ほぼこんな感じで旅を楽しんでいた。このようにしていると、時間の経過も早い。列車は東京を完全に離れ、段々と山の中に入っていく。そして山梨県の大月からは富士急行線に入り、単線の如何にも田舎という線路を走っていく。勾配も急になる。

そして30分もしない内に、富士山が綺麗に見えるようになった。

「うわあ、富士山で近くで見ても綺麗だね。」

「むしろ近くで見た方が綺麗だな。」

美沙の眩きを受けて、朴もそう言う。旅は始まったばかりだが、全員のテンションは高かった。

しかしながら、まもなくそんな一行に水を指す事態が発生した。それはトイレへ行った紫が戻ってきたことから始まった。

「ねえ勇人。」

「うん？」

「隣の車両にちょっと怪しい人がいるんだけど。」

「怪しい？」

「そう。あまりにも怪しすぎて、私もちょっと驚いたくらいよ。」

「それは気になるな。」

「見に行ってみようか？」

朴と美沙が興味を示した。そんな2人に勇人が言う。

「たくさんで見に行ったら失礼だよ。それに他のお客さんに迷惑だよ。けど気になるから紫、相手に気づかれないように携帯で写真を撮ってきて。」

「オーケー。」

何も関係のない相手なら失礼な行為であるが、勇人はどうしても気になったので、紫に偵察をするよう言った。彼女も気になっているから、言われたとおりにした。

2分後、紫が戻ってきた。

「はい。この人だよ。」

紫が差し出した携帯の画面を、4人は除いた。

「え!？」

「うわあ・・・」

「確かに怪しさの塊だな。」

「何これ？」

上から櫻、朴、勇人、美沙のコメントである。

実際のところどんな人物が写っていたのかといえば、真っ黒なコートに真っ黒な防寒用帽子、そしてサングラスと黒いマフラーで顔を覆った男の姿であった。

いよいよ春休み 3（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今回の作品では、作者が最近読んでいるラノベネタが混じっています。なんのラノベかはいずれ発表します。

昨日、テレビを見ていたら「ツンデレカルタ」なるものの紹介をやっていました。実に17000セットを売り上げた商品で、声優さんのCD付きという贅沢なしろものでした。そして、案の定というべきか声優さんというのは釘宮理恵さんでした。さすがツンデレ声優。

ちなみに、この作品のキャラの声は基本的に原作キャラを除けば読者の皆様の想像にお任せしています。

いよいよ春休み 4（前書き）

明けましておめでとございます。今年初めての更新です。1か月も掛ってしまいました。遅くなっています。

いよいよ春休み 4

「これはまた、怪しさの塊だな。」

勇人の言葉に、他のメンバーもウンウンと頷いている。

「でしょ？どうして電車に乗っていられるんだろう？」

紫が本気で首を捻っている。こんなに怪しいと車掌につまみ出されないのなかと誰でも思ってしまう。

「まあ取り敢えず、関わらないほうが良さそうだな。」

朴がもつともな意見を良い、その場にいた全員が頷いた。

しかしながらそんな言葉とは裏腹に、勇人たちはこの謎の怪しい男と深く関わることになるのである。もつとも、彼らがそんなことを知る由もなかったが。

電車は途中の駅で一回スイッチバックをして折り返し、進行方向が逆転した。そして間もなく、一行が下車する富士ハランドに到着した。

「着いた！」

「富士山が近い！」

「うわあ！あれがフジマですか。早く乗りたいなあ！」

ハイ　ンド駅のホームで、美紗や櫻たちがキャピキャピとはしゃいでいる。ちなみに最後の台詞は優のものだ。以外にも彼女は絶叫系が好きなようだ。ちなみに、この富　急ハイ　ンドには強力な絶叫マシンが沢山ある。それから有名な巨大お化け屋敷もある。

そんなはしゃいでいる一行を他所に、朴が後ろの方をチラッと見たあと勇人に話しかけた。

「おい綾崎。」

「何ですか？」

「あの男・・・列車から降りたぞ。」

「え？」

勇人がチラッと後ろを見ると、確かにさっきの黒いコートの男が電車から降りて立っていた。その怪しさ故に、周りの人が引きまわっている。

「まさかとは思うが、お前たちの誰かを狙っている暗殺者とかじゃないよな？」

勇人と紫と優の3人は、学校では綾崎性を使っているが三千院家の子供であることには代わりはない。いつ、どこから暗殺者が襲いかかってきても不思議ではない。

「さあ？けど、そう言うのなら必ず感じる殺気とかは感じませんよ。」

勇人は真面目にそう言った。もちろん、朴が驚かない筈がない。

「お前そんな物を感知出来るのか？」

「まあ。」

また一つ勇人の驚くべき能力に、朴は感心してしまった。

「ねえ、勇人君も朴先輩も何コソコソ2人だけで喋っているの？」

コソコソと話している2人を不審に思ったのか、美紗が声をかけた。

「え？何でもないよ。」

「そうそう。別に何もない。」

2人は誤魔化した。余計な心配を掛けなくなかったからだ。

「ふーん・・・」

美紗は腑に落ちはしなかったものの、それ以上追求はしなかった。

勇人と朴も出来る限り気にしないことにした。気にしすぎると折角の旅行が楽しくなくなってしまう。勇人と朴は皆に合わせて空気を読むことにした。ただし、全く警戒になったということではないが。

「それじゃあ行こう！」

勇人と朴の不安を他所に、紫がチケット片手に言った。

そんな一行を遠くから監視する視線があった。

「目標発見！今ハイ　ンドに入った。」

「まだバレていないか？」

「多分・・・今やるか？」

「今は周りに余計なのが多すぎる。少人数になったところで個別に討ち取るぞ。」

「了解！」

「！！！」

遊園地内に入ったところで、勇人は殺気を感じた。

「どうしたの勇人君？」

「え！？いや、なんでもない。」

「？」

まさか、殺意に満ちた視線を感じましたなんて恐ろしいことを、恋人に言えるわけがなかった。

「それよりも、早く行こうよ！」

「ああ、わかったからそんなに強く引っ張らないでよ。」

ちなみに、今美沙は勇人の右腕に自分の両腕を絡ませている。つまり、ものすごく密着しているわけで、如何にも「私たち恋人です。」ということを周りにアピールしていた。

美沙は外見だけ見れば、母親の泉そっくりである。母親の泉は性格や能力こそアレであったが、外見やスタイルは良かった。とどのつまり、外見だけ見れば美人なわけだ。だからその娘の美沙も美少女と言っわけである。彼女の場合、カワイイ系である。

そんなカワイイ系の美少女を、父親譲りの女顔（本人の前では禁句）である勇人が相手としているのだから、周りにいる男（特に彼女がいない人たち）どもの嫉妬を招かない筈がなかった。

「ちくしょう！あの野郎女みたいな顔してあんなカワイイ娘をはべらせやがって！」

「地獄に落ちやがれ！」

などと物騒な声が聞こえてくるが、勇人と美沙の耳には全く届い

ていなかった。ちなみに、同じような光景はその他のカップルの周りでも起きていた。

園内に入った一行は、それぞれカップル単位で園内を回ることにした。お互いのことには干渉しないということである。ただし、昼食の時は一緒に集まって食べることにしたが。

それぞれバラバラにわかれて行動することになったわけだが、その内優と光のカップルは早速絶叫マシンのドド　パやフジ　マの乗り潰しに入っていた。これは優の希望によるものだが、光は乗る前から蒼い顔をしていた。

他に紫と一樹、そして櫻と一樹のカップルは絶叫マシンとは無縁な乗り物を回っていた。由希とサエキのカップルは相手がいない理恵を連れてはいたが、彼らなりにこの富士山が綺麗に見える遊園地を楽しんでいた。

話を勇人と美沙に戻す。2人が最初に向かったのは、全国的にも有名なお化け屋敷であった。このお化け屋敷、時々中身は変わるがとにかくデカくて長い。本物の小学校や病院を再現できるだけの広さがある。

ちなみに、地元では近隣にある大学のアルバイト掲示板にお化け役のアルバイト募集を行うのでも知られている。

まあお化け屋敷なんてそんなものであろう。それでも、怖い人には怖い。例えば勇人の母親のナギのように。彼女は現在暗がりに対する恐怖心を多少克服したとはいえ、未だにこうした物は駄目である。勇人が子供のころ、家族で遊園地のお化け屋敷に行った時も、彼女はずっと悲鳴を上げっ放しであった。

そして美沙の場合は、やっぱり怖い派である。ただし、その怖いを楽しむ派でもある。

「一体どんな幽霊とかお化けが出てくるのかな？」

「うーん・・・まあ、みんな作り物だろうけど。」

「もう、そう言うこと言わないでよ。」

美沙が不機嫌な表情をする。

「ご、ごめんごめん。」

彼女の機嫌を直そうと勇人が謝ると、途端に彼女の表情は先ほどまでの笑顔に戻る。

「クス、可笑しい。けど、そんな風にやさしいのが勇人君の良い所だね。」

「あ、ありがとう。」

入る前から2人の周りの空気はピンク色である。当然ながら、付近の人の嫉妬を買うわけで・・・そしてそうした人とは明らかに別の人間の嫉妬も買っていた。

（見せ付けやがって・・・）

お化け屋敷の内部で、アルバイトに紛れた暗殺者が裏手から2人の様子を伺っていた。その手元には、暗視装置付の大型拳銃が握られていた。

（子供を殺すことに少しばかり同情していた俺がバカだった・・・あいつは男の敵だ。全国3千万（実際にそんなにいるか知りません）の持てない男を代表して天誅を下してやる。）

微妙に目的が変わっているが、取り敢えずその暗殺者は勇人を抹殺しようとしていた。そしてまだこの男の影に勇人は気づいていなかった。

勇人ピンチである。

しかし、そこで思いもよらぬことを起こすのが「ハヤテのごとく！」キャラクターの血を引く者のクオリティーである。

突然その暗殺者の後ろに現れる影があった。

「何!？」

「ワアア!!」

「キヤアアア!!」

お化け屋敷内に、おどかすお化けとそれに驚く美沙の悲鳴が響く。

「そんなに驚かなくても。」

勇人が美沙のワザとらしい驚きかたに苦笑していた。ちなみに、驚く度に彼女が抱きついてくるので、これはこれで中々うれしいシチュエーションである。

もつとも、2人とも少しくらいは自重しなさいと言いたくなるが。

しかし2人はお構いなしだ。周りが暗くて見られていないからだろうか。ところが、間もなく2人が予想もしていなかった事態が起きる。

パ!!

突然お化け屋敷内が明るくなった。

「え!?!」

「何?」

いきなりの事態に慌てる二人。そんな2人の後ろから、お化け屋敷のスタッフが血相を変えて担架を持って走ってきた。

「こつちだ!」

「早くしろ!」

ただ事ではなさそうであつた。2人からは先ほどまでの甘い空気が一気に吹き飛んだ。こう言う所はさすがである。

「あの、何か起きたんですか？」

勇人がスタッフの一人を引き止めて尋ねた。

「おどかし役のアルバイトが倒れたんですよ。」

「大変じゃないですか！大丈夫なんですか？」

「ええ。ただケガをしたので、間もなく救急車が来ます。そう言うわけで、お客様には申し訳ありませんが、一旦出ていただかないといけません。」

2人は言われるままにお化け屋敷から出た。救急作業を邪魔する程、2人は子供ではない。

「一体何があつたんだろう？」

「さあ？」

後に勇人は、この時倒れたアルバイトが自分の命を狙っていた暗殺者だと知ることとなるのだが、この時はそんなこと夢にも思わなかった。

まあ、世の中知らないほうが良いこともあるのだ。

「仕方がないから、どこか別のところ回ろうか。」

「そうだね。じゃあ、折角だし観覧車でも乗ろうよ。」

「いいね、そうしよう。」

再び仲良く歩き出した2人。

そんな2人を、あのサングラスに黒コートの男が遠くからジッと見ていた。

いよいよ春休み 4（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

今後更新が遅くなると思いますが、悪しからず。

いよいよ春休み 5 (前書き)

3か月ぶりになってしまいました。申し訳ありません。

いよいよ春休み 5

お化け屋敷でのトラブルを皮切りに、その後も勇人と美沙の周りでは不可思議な事態が連続した。例えば近寄ってきたイメージキャラクターの着ぐるみを来たアルバイトが勇人の側までやってきた所で、突然倒れて眠りこけたり。清掃員のアルバイトが突如意識不明になって担架で運ばれたり。アトラクションの整備のために呼ばれた業者の人間が行方不明になったり等々。

実はこれ、皆勇人らを狙った暗殺者の末路であつた。彼らは油断しきりの勇人を暗殺できるチャンスにできないまま、次々と倒されていたのだ。

しかしながら、勇人と愉快な仲間たちはそのことに全く気づいていない。彼らが気づく前に、全て終わっていたからだ。

これらの騒動で、アトラクションが止まったりして多少の影響は出たものの、勇人たちを不審に思わせる程ではなかった。

そして正午、勇人たちは各々遊園地内にあるレストランや売店で昼食を摂っていた。勇人と美沙のカップルは、レストランで食事を摂っていた。もちろん、ここでもバカップルぶりを爆発させて、周囲から羨望と嫉妬の眼差しで見られていたが、2人はそんな物どこ吹く風であつた。

食事は最初、メンバー全員が連絡して摂るはずであつた。しかしながら、結局各々遊ぶことに夢中になっていたり、絶叫マシンの乗りすぎで現在グロッキー状態などの理由により集まれず、2人だけの食事となった。もつとも、2人にしてみれば2人きりの時間

が増えるのだから悪い話でもなかった。

2人仲良く食事。そんな2人を冷酷に見つめる目が彼らの真上に合った。

「幸せな時間もここまでだぜ、三千院勇人。さすがにこんな所から攻撃を受けるとは思えない。」

勇人と美沙が座った席の真上に位置する屋根裏に、1人の暗殺者がいた。これで既に7人目だ。どうやら暗殺者と言うの物は、1人見つけたら近くに30人はいそうであった。

その暗殺者Aのいる屋根裏には極小さな穴が開けられ、下を覗けるようになっていた。暗殺者Aはそこから勇人の位置を確認し、暗殺を実行しようとしていた。もっとも、その穴からは銃は愚か人を殺傷するに足るような道具を通すなど不可能であった。

だが。

「人間には知恵があるんだぜ。」

そう言つて暗殺者が取り出したのは一本の糸、そして先端には小さな、BB弾よりも小さな金属の弾がつけられていた。実はこれ、弾に猛毒が仕込まれているのだ。暗殺者Aは、それを空中から糸を通して垂らして勇人の飲み物の中にいれ、彼を毒殺する腹積もりであった。糸自体も極細で、注意しなければ見えない。

そんな物で殺せるの？と思えなくもないが、例えば旧ソ連のスパイは暗殺対象に傘を改造したステッキ銃で直系3mm程の金属球を打ち込み、仕込まれた毒で相手の体内を破壊して殺していたと言う。

小さいからとか、少ないからと言うのは通用しない。

「同業者は銃殺とか刺殺とかに拘ったようだが、相手はあれな三千院家の人間だぞ。そんな当たり前の方法で殺せるものか。ここを使わなくちゃな。」

そう言っただけ暗殺者Aは、誰に見せるわけでもなく頭を指差す。それにしても、既にあれ扱いされている三千院家（具体的にはハヤテの血を継ぐ人間）で一体・・・それはともかくとして、暗殺者は成功を確信していた。

「今奴は油断しきっている。やるなら今だな。」

暗殺者は毒殺用の仕掛けを手にする。勇人は美沙と2人きりの食事中で、警戒心ゼロであった。2人きりになったことが、思わぬ隙を彼に作っていた。危うし勇人。

「さよならだ。三千院勇人。怨むなら自分の生まれを怨むが良い。」

あと5分もあれば勇人を暗殺できると踏んでいた。しかし。

「そこまでダー。」

「!？」

暗殺者Aが振り向くと、そこにはサングラスにコート姿の人間がいた。

「うん？」

「どうしたの勇人君？」

食事中、突然箸を止め辺りを窺い始めた勇人に、美沙が怪訝な表情をする。

「いや、何か変な物音がしたような・・・」

「ええ、私には聞こえなかったよ。空耳じゃない？」

まさか彼女は、自分たちの頭上に暗殺者が隠れているなど予想出来なかった。

「かなあ？」

「勇人君は用心深すぎるんだよ。もっとリラックスしようよ。せっかく遊園地に来てるんだから。」

母親譲りの笑顔でそう言う美沙。そんな彼女を見ると、変に警戒してしまう自分自身が愚かに思えてしまう勇人だった。

「それもそうだね・・・あ！？」

「どうしたの？」

「動かないで。」

そう言うと、勇人は美沙に近づく。

「え？」

勇人の思わぬ動きに、美沙の顔が赤みを帯びる。

（まさか勇人君・・・こんな所じゃ恥ずかしいよ・・・あ、けど少し嬉しいかも。）

と、美沙は脳内で甘い光景を妄想してしまう。そんな彼女に構うことなく、彼は腕を彼女の頬の方へと伸ばした。そして、そのまま彼女の方を手で軽く拭った。

「はい、ごはんつぶが付いていたよ。」

「え？」

美沙は一瞬固まってしまった。勇人が急に顔を近づけたのは、別に彼女が妄想したことは全く関係なく、彼女の顔に付いていたご飯粒を取るためだった。

「あ、そう言うことだったの？」

美沙はお礼を言いつつも、その心中は安心半分、落胆半分であった。

「そう言うことって・・・じゃあ何だと思ったの？」

その質問に、美沙の顔が再び赤くなる。まさか、脳内でラブシーンを妄想していたなどとは言えない。

「え！？あ、いや、その。何でもないよ。」

「本当に？顔が赤いよ？」

勇人が意地悪そうに聞いてくる。

「もう、止めてよ！」

「あはは・・・ごめんごめ。美沙は可愛いから、つい弄りたくなっちゃって。」

「ひどいよ、勇人君。お母さんもそう言うキャラだって聞いてたけど・・・あ？でも、可愛いて言うのは本当？」

「もちろんだよ。心の底からそう思ってるよ。さっき顔を近づけた時も、本当に可愛かった。その・・・本当、にこの人を恋人にして良かったなって・・・」

今度は勇人の顔が真っ赤になっていた。もちろん、美沙の顔も再び真っ赤である。

「あ、ありがとう。」

消え入りそうな位小さな声で、美沙は答えた。そして2人を奇妙な沈黙が包んだ。

「・・・」

「・・・」

2人は黙ったまま、3分ほどの間見詰め合っていた。そしてようやく勇人が口を開いた。

「ええと・・・ああ、早く食べちゃおうよ。午後もまた色々回りたいだろ？」

「え？そ、そうだね。午後もまた楽しめると良いね。」

2人は本当に良いカップルだった。

そんな2人の頭上の見えない所では、静かに戦いが終わっていた。勇人を毒殺するべくレストランの屋根裏に潜伏していた暗殺者Aは、後から現れた謎の男の前に敗れていた。

「ZZZZZ・・・」

暗殺者Aは盛大ないびきをかいて眠っていた。

「また詰まらない人間を1人倒したダー。」

謎のコートの男は、眠らせてロープでグルグル巻きにした暗殺者を背に、その場を静かに離れた。

勇人と美沙は、2人きりで午後の間も遊園地を楽しんだ。時間はあつと言う間に過ぎ、日も傾いて夕方となる。

「あーあ、時間が経つのはあつと言う間だね。」

美沙が口惜しそうに言う。

「仕方がないよ。」

「もつと勇人君と一緒に遊びたかったな。」

「また来ればいいんだよ。さ、そろそろ出ようか。ホテルに行かないと。」

一行が泊まるホテルは一つお隣の河口湖駅の近くであった。勇人たちは、そこで改めて他のメンバーと合流し、全員集まった所で一緒にチェックインする予定だった。

再び遊園地に隣接する駅に向かい、そこでやって来た電車に乗り込んだ。行きと違い、2両編成のローカル電車であった。扉が開き、乗り込んだ2人は隣の駅までの席には座らず立ったままだった。

勇人は何気なく車内を見回した。すると。

（いた・・・）

朝の列車内、そして駅で見かけた怪しさ爆発のサングラスにコー
トの男が、隣の車両に乗ってくるのが見えた。

（つけられているのか・・・それとも単に偶然なのかな？）

偶然だったら偶然で、それも怖い話である。だが勇人は、恋人の
手前不安とかそういう気持ちは表情に一切出さず、心の中にしまい
込んだ。

3分後、列車は終点の河口湖駅に何事もなく到着し、乗客は全員
降りる。改札口で駅員に切符を手渡した2人は、約束の時間が迫っ
ていることもあり、そのままホテルに直行した。

ホテルに着くと既に紫と一哉を除く全員が揃っていた。

「遅かったですね2人とも。」

優が2人の姿を見つけると、声を掛けて来た。

「ごめんごめん。後は紫と一哉だけか。2人から連絡は？」

「はい。先ほど電車に乗り遅れたので、30分ほど遅れるって連絡
がありました。」

田舎であるため、1回電車やバスに乗り過ぎと偉いことになる。

「乗り遅れると大変だからな。」

「どうやら愛沢の奴、絶叫マシンの乗りすぎで調子が悪いみたいだ

ったぞ。お前の妹に付き合わされたせいらしい。」

朴がやって来て話に加わる。

「ああ、あいつ意外とそう言っの好きだから。」

母親のナギとは大違いで、勇人と紫、そして優の三千院兄妹は全員絶叫マシン大好きだ。ただし、勇人の場合は美沙を気遣い、彼女が乗りたいと言わない限り乗らなかった。

そんな感じでお喋りしながら待つこと40分。ようやく2人が現れた……が。

「ほら、一哉しっかり。」

「う、うん。」

一哉は足取りが覚束ず、父親譲りの顔を真つ青にしながら、紫に方を支えられての登場いう、なんともしまらない姿での登場となった。

この騒ぎのせいで、勇人はあのサングラスにコートの男のことを完全に失念してしまっていた。

いよいよ春休み 5 (後書き)

御意見・御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7790c/>

想いの続き

2010年10月9日15時59分発行